
術師たち

二月三月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

術師たち

【Nコード】

N7660I

【作者名】

二月三月

【あらすじ】

術師とは、現世と常世の狭間にうごめく異形を、秘術をつくしておさめることを生業にする者たちの総称である。現世のみで暮らしつつける普通の人々とは、指一本分のすき間をずらした世界に彼らは生きている。 - - 第八話完結しました。第九話は舞台をフランスに移して欧州編の予定。近日連載開始に向けて鋭意努力中。

第一話 死者に会う呪術（1）

最初は人違いだと思ったのだ。

「アキバさんですね」と問われて、ハイと答えた「本当は明葉あきはですけど」と告げようとして振り返る。

驚いた。

三つ揃えに青のネクタイを締めた銀縁眼鏡の男。

あまりに普通の風体である。

男は、柔和な笑みをたたえつつ深々とお辞儀をした。

「よろしくお願いします。あまり時間ありませんし、急ぎましよう」

そして、ずんずんと歩いていくその男の背中をほんの瞬き見つめていたが、我に返って駆け寄った。

「あ、あの、近衛さん？」

ハイと返事はあったが、こちらを向くでもない、男は歩みをゆるめず先へ先へと進む。

この稼業を始めて2年になる。正直、駆け出しだが、この業界の

人間とは何度も一緒に仕事をした。別に衣冠束帯で来いなどと言う気はないが、いくらなんでもこんな一般人丸出しといった感じの人と組むのは初めてだ。

厚手のブリーフケースを右手に持ち淡々と歩む様は、弁護士というのがいちばんシツクリくる、百歩譲ってもサラリーマン、表の陽の当たる職業の人にしか見えない。

「あ、あの、ちょっと」

踏み出した足が、ぐにやり、と沈む。ローヒールの靴底がアスファルトに減り込み、饅えたタールの臭いが鼻腔を突く。

「兎歩で。もう現場も近いですから、止めが入ってます」

理解するより先にその声に応じた。呼気を収め足を抜く、滑らすように左足につけて回しながら道をなぞる。

ようやくそろそろ進みだして先を見れば、あの男はすたすた先へと進んでいく。あんな兎歩があるか。見間違いではない、私の知っているどの歩法ともまったく違う。だってまるつきり普通に歩いてるんだもの。

ねっとりと周りの空気がまとわりつく、兎歩だけでもきついのに体全体がゼリーの中に押し込まれたように身動きがとれない。だるい。先導者を追おうにも一步一步が重過ぎて男との距離はどんどん離れていく。駆け出しとは言え、こんなところで遅れをとることの不甲斐なさにもがきはするものの体がいうことをきかない。

不意に束縛が消えた。

思わず前のめりに突っ込んだ私のからだを、いつの間に近づいたのか、あの男が両の手で支えていた。

「ずいぶん、きつそうですね。大丈夫ですか？」

「は、はあ」

返事もそこそこによろよると立ち上がる。噴出した汗で背中へばりついたブラウスが気持ち悪い。冷たい汗。

「なるべく私の傍を歩いてください。そうすれば影響は少ないはずです」

「ありがとうございます」

とりあえず礼は述べたが、不信感はぬぐえなかった。

第一話 死者に会う呪術（1）（後書き）

術師たち（表）シリーズ第一作目です。

最近のにくらべると文章が少し硬いそうです。自分でも確かにそうかなとも思います。

第一話 死者に会う呪術（2）

依頼人は初老の男性だった。

手塚と名乗ったその人と、私たちはリビングテーブルをはさんで向かい合った。

目の前のテーブルには古めかしい寄木の箱。連れの男の加護を十二分に受けているのを感じながらも、なおそれを圧倒するほどの呪がその箱から滲み出してくる。もし一人で対峙していたら、蓋を閉めたままでも悲鳴をあげかねない。恐怖をむきだしにした何かがある。ここにはあった。

「開けてもよろしいですか？」

私は連れの男を睨みつけたのだと思う。依頼人の顔に困惑の色が浮かんだが、男はお構いなしに古箱をとり、蓋を開けた。

目を背けたが間に合わなかった。

黒い毛のかたまり。

少し長い。土から掘り出したばかりの人参に毛を巻きつけたように見えた。

「指かな？」男が言う。

「5本あります」依頼人が答えた。

「つまり、手ですね」

蓋が閉められテーブル古箱が戻される。とにかく、ほっとした。

「それで、やはり願いを叶えたいと？」

男の問いに依頼人はリビングの隣の和室を見やった。

真新しい仏壇に、ほがらかに笑む初老の婦人の遺影があった。遺影に目をむけ、依頼人は再び自分の膝に目を落とすと、小さく「はい」と答えた。

男は困ったようにため息をつく。それはそうだろう、私だって困っている。ソニコさんから概要は聞いていたのだが、ここまで来て改めてこの仕事を引き受けたことを後悔した。

「たいへん申し上げにくいのですが…」

心底すまなそうに、男は切り出した。

「この呪物はいけません。おそらく手に入れられるのにかなりのご苦労があったとは思いますが、なんと申しますか、その、少々誤解があったようで…」

「誤解と言いますと?」

「はい、残念ですが、私どもではご依頼主様のご希望に沿うことはできません」

「そうですか…」

依頼主はそれほど落胆した様子には見えなかった。どちらかと言えば否定の言葉を期待していたようにすら見えた。この場で依頼を断ったことで私は近衛氏を少し見直した。依頼主には申し訳なかったが、もうすぐこの禍々しいモノから離れられると思い、正直うれしかった。

「ただし、この猿の手を使わずとも良い、ということでしたら話は別です」

驚いた。それは依頼主も同じだったろう。二人とも目を剥いて発言の主を見つめる。思いはまったく異なる二人であったが。

「ご依頼主様のご希望は、もう一目だけ亡くなった奥様にお会いしたいということ、それ自体は承ることにやぶさかではありません。しかし、それにはこの猿の手が邪魔なのです」

第一話 死者に会う呪術（3）

「ああ、ソソコさん？…そう、僕。

…どこなの？社務所？ 事務所じゃなくて、社、務、所、ね。…
ああ、じゃあ、しばらく話せるね。

…そうだよお。もう、困っちゃって。…だって、本物だなんて思
わないでしょお、普通。

…え？ 何？ 持ち帰れないか、って？ …そりゃ、僕はかまわ
ないですけど…」

携帯を右手に構えたまま、男はチラと探るようにこちらを見た。

依頼人をリビングに置き去りにして廊下に出て電話している。一
軒家とはいえ、壁一つ挟んだだけの業務連絡にしては声が大きすぎ
る。傍で立っているこっちの身にもなってほしい。

「…結構キツいんじゃない？ …あの子も…、そうそう、アキハさ
ん。…アキハさんも、僕抜きだと立って歩けないくらいだし。…あ
んなもの困いもしないで動かしたら、…その、…イロイロあるん
でしょ？ …僕はいいいけどサ

…で、和歌山の方はなんて言ってるの？ ……じゃあ、京
都は？

…

…

…僕のせいじゃないでしょう。

…いくら何でも言い掛かりですよ。…そもそも、こんな所にあつていいものじゃないんだし。…そんなの本来なら京都の方の管轄でしょう？

…でしょう？

…なくなつたって、…そんな、ほつといていいもんじゃ…

…うん、

…うん、

…うん、わかりました。

…

…じゃあね。アレお願いしますよ。

…そう、シロムクとセンゴで、

…センゴで、

…無理でしょ？ それぐらいしないと、…そりゃ、使わないにこしたことはないですけど…

…念のためです…

…

…それは、こちらで説明しますから…

…

…大丈夫です、

…なんとかします、

…

…あ、電話はいいです。そっちからかけても、僕に取る気が無ければ、たぶん通じないから。…こっちからかけます。…はい、じゃあ、一時間後に、

…よろしくお願いします」

携帯を胸ポケットにした男は、長いため息をついた。

それからチラと再び私に視線を送ると、話しかけてきた。

「あの、アキハ、さん？」

「…はい？」

「ちょっと、その、… ちょっとだけ、困ったことになりました…」
嘘だ。

この男は嘘をついている。

自分に向けられた、あからさまな不信感に、どうやら男は観念したらしい。おずおずと話し出した。

「うーん。よく考えると、ちょっと、ということはないですね。…
そう、… そうですね。… それなり、… そうだ、… それなりに困った
ことになってます。」

コイツは大嘘吐きだ。

確信した。

しかも悲しいほどに嘘が下手だ。

私は泣いてしまいたかった。コイツの嘘が悲しかったのではない。
こんな嘘を聞かなければならない己の不遇に泣きたかった。

第一話 死者に会う呪術（4）

「やつほー」

ソンコさんが門の前に横付けした軽のマドから手を降っている。

軽から降りる気はなさそうだ。

アイツが窓越しにボストンバッグを二個受け取っている。チラチラこちらに視線を送るが、手伝う気などない。

荷物を降ろしたところで、依頼主の手塚さんも乗るらしい。どこでどう話をつけたものか、安全確保ということだろう。

助手席に入ろうとしたら何故か押し戻される。

「アキちゃんは、だ〜メ」

「どうしてですか？」

あんな訳のわからない手のミイラと一緒にいるわけにはいかない。帰らせてもらう。後のことはアイツにやらせればいい。

しかし、ソンコさんは私を押し出してドアを閉めてしまった。

「アキちゃんが帰ったら、キョージユが困るでしょ。あの子、見えないんだから」

キョージユというのはアイツのことか？

ソンコさんは窓越しにアイツを呼ぶと耳許で何か囁いている。

「え？ ダメ？ 京都も？ 和歌山も？」

ソンコさんは口に人差し指を当て、しかめっ顔をする。もう遅いよ。

「忙しいんだってさ」

「じゃあ、どうしろと？」

「勝手にしろってことじゃないの？ じゃ、あとはヨロシクね」

軽にはありえないスタートダッシュで、ソンコさんは行ってしまった。最初の四辻を曲がったのは、たぶん、わざとだ。

「やっと二人きりになりましたねえ」

「警察呼びますよ」

鳩が豆鉄砲の顔をそのまま続けているので、無言で振り向き門を出る。

がくん、と膝が落ち、たまらずにしゃがみこんだ。

地面に両手を着いても頭を支えるがやっとだ。嫌な汗が全身からふき出る。ここに来る前に喰らった波動の比ではない。当たり前だ。それだけモノが近いのだ。

忘れていた。

いままではアイツが私を守っていたのだ。手を抜かれたらこのザマだ。

アイツの顔が目の前に来た。道のと真中で膝を抱えこんで座り、私の顔を覗き込んでいる。顔を背けようとしたが、それすらままならない。

「あなたの力が必要なので、出来れば手を貸していただきたいんですが」

「イヤです」

返事に動じる風もなくアイツは淡々と話しつつづける。

「どうする気なんです?」

「カエシテ」

「お送りしたいのは山々なんですけど、アレを残したままこの場を離れる訳にもいかないし、応援が来るまででいいですから、一緒に願えませんか?」

「ヒキヨウモノ」

いまだかつて経験したことのない巨大な重力に屈し、頭がかくと落ちた。

それを肯定と受け取ったのか、その瞬間、全ての枷から解き放たれた。

肩で息をする私に差し延べられた手を拒んだ。たとえそれしか方法がなくても絶対に嫌だ。

「あなた一人でやれば？　こんなに力があるんだから。私なんか足手まといじゃない」

「そうはいかないんですよ」男は本当に困っているらしかった。「ソノコさんも言ってたでしょう。僕、見えないんです」

「見えないって、何が」

「あなたの見えてるモノがです。見えないし、聞こえないし、感じない」

驚いて顔を上げた。私の目の前いる男は、本当に途方に暮れている。

そんなバカな。

これだけの霊障を眉ひとつ動かさずに中和しているのに、そんな力があるのに、何も見えてない？

まさか、あの箱の中身にもまったく感じない？　だから、あれほど頓着無く蓋を開けた？

ありえない。

「目をつぶって耳を塞いだままピストル撃つ訳にはいかないんです。だから、僕が仕事するときには見える人の助けがいるんです

立ち上がろうとしない私の傍によって、男はなおも懇願する。

「お願いします。…とりあえずは、と言ったら失礼かもしれませんが… アキハさんしかいないんです。本当に、お願いします」

あるいは、この人もそれほど悪い人では無いのかもしれない。おそらく不器用そうではあるけれど。

「あの…、往來の真中ではなんですから、家に入りましょう。ちゃんと説明しますから、ね。大丈夫です。恐いことはありませんから」

気がついたら、子供のように泣きじゃくっていた。キョージユに促され、私は家に入った。

第一話 死者に会う呪術（5）

「アキハさん、もし良かったら、シャワーどうぞ。何故かガスがダメみたいで水しか出ないんですけど。今日は暑いから水だけでもけっこうすつきりすると思いますよ」

「…」

「あ、覗いたりしないから大丈夫ですよ」

「いいですよ、別に。覗いても」

「…え？」

「命の保証はしませんけど」

「…」

「冗談です。せっかくだから、いただきます」

これ寝間着代りにどうぞ、とキョージユから浴衣を受け取った。ソソコさん、こんなものまで持ってきてたのか。手回しのいいことだ。

念のため、洗面所のドアを内側から掛け、浴室に入る。

滴る水を背中に感じながら、さっきのキョージユの説明を頭の中で反芻した。

あれは、人間の手なんです、と、キョージユは言った。

猿の手というのは隠語で、実際には中国のとある高僧の手なのだそうだ。

弟子が自分より先んじて戒壇を受けたことに嫉妬した修行僧。暫くその嫉妬心を隠して修行に勤しんでいたが、遂にそれが凝って獣の手となった。僧は己の心弱きことを恥じて即座にその手を切り落としたところ、師がそれを認めて戒壇を授けたという。

依頼主の手塚さんは猿の手が反魂に使えると誰かに聞いたのだろう。しかし手に入れたものは人間の手のミイラ、それも得度の際の煩惱落としては、使者の魂を呼び戻すのにはあまり向いていない。呪物としてみれば一級品なのがおさら始末に悪い。とうとう手に負えなくなって、こちらに話が回ってきたということだろう。

そもそもそんなものを「猿の手」などという隠語で呼ぶのが間違ではないか？

ふと、そんなことを考えたが、何故だかひどく気になる。当面、猿の手以外に気になるモノなどないはずなのだが。

シャワーを止めた。

水だけでもそれなりの爽快感は得られるものだ。特にいまのような状況では、ちよつとした心のくつろぎがうれしい。

バスタオルで体を拭き、浴衣に袖を通す。無地の帯を占め。鍵を開けて廊下に…

待てよ。

気がついたときには悲鳴を上げていた。

そして頭の奥のほうで、ぷちつと何かが小さく音を立てて切れた。

「どうしました？ アキハさん？」

駆けつけたキョージユは私の形相を見るなり、たじろいで一步引いた。そのすきに勝手口から外に出て重要なことを確認する。

「貴様ああ」屋内にとつて返してキョージユの首を締め上げる「どういうつもりだああ。わざわざガスの元栓締めて、シャワーだと騙して水ごりさせた挙句に、こんなもん着せやがってえええ」

浴衣と言って渡されたのは木綿無地の一反作り、帯も併せて抜けるように白く、そして念入りに清められていた。

明らさまな死装束である。

「ち、ちが、誤解、誤解です」

「誤解、って、どの口が言う？ この口か？ この口かあ？」

キョージユのほっぺたをつまんで、思い切り左右に引っ張った。

「ひはう、おひふいて、あひひゃあん、ひはう」

「何が違うだ。こんな怪しいミイラ鎮めるために贅になんかされて

たまるか」

贅？

自分で叫んだ言葉に触発され、和室に視線が動く。

ボストンバッグ。

鬼神のごとくに一飛びし、バッグの中身を畳の上にぶちまけた。

衣類に紛れ、修学旅行の土産物屋に並ぶ一本千円の木刀に似た物。

「何だこれは？」

白木鞘の一振りの懐剣を握りしめ、キョージユの眼前に突き出して迫った。

「これは何だ？」

今度はキョージユのほうが速かった。懐剣をもぎとると懷に抱えて部屋の隅に逃げる。

「待て、待つんだ。話せば判る」

「判らんつ。この大嘘つき」

「嘘なんかついてません。ほら、これだって形ばかりだから」

言いながらキョージユは懐剣を抜いてみせた。

怪しく刀身が光を映す。その迫力におもわず唾を飲んだ。

「ね、ぜんぜん、なんでもないでしょ。模造、そう、模造刀です。刃だっついてないんですよ。格好だけ、格好だけなんですよ。あなたの浴衣もそう。白装束だと思うから気味悪いと思うんです。無地の浴衣だと思えばなんでも…、あ…」

あせったのか、キョウジユが刀を取り落とす。鈍い音がして一尺ほどの刀身が半分畳にめり込む。

二人は見つめあった。

「あれえ、おかしいなあ。この畳腐ってますね」

「やかましいい。間違っこと無き真剣じゃ、このアホたれ」

突然、

本当に突然に閃いた。

今日の昼、キョウジユの電話、シロムクとセンゴ。

シロムクとセンゴ

そして、センゴでないと無理。

シロムクは白無垢。私がいま着ている。

ならばセンゴは、この刀？

刀、センゴ、戦国？ 違う。銘だ。銘でセンゴ…

「千子村正」

「ピンポーン、ご名答」

おもいつきり首を絞めた。殺す気で絞めた。

「ぐ、ぐえ、だめ。首ナシ。締めるのナシ」

「村正つて、これ以上にならない妖刀じゃないか、このやろう」

「別に何だっでもいいじゃないですか、本当に切る訳じゃないんだから、村正だろうが何だろうが」

「いいわけないだろがあ」

妖刀村正。切れ味はとまかく徳川家にまつわるその怨念が恐ろしい。

霊を断つのであれば物理的な刃ではなく、その怨念で断ち切るべし。聖剣、邪険の違いこそあれ、対峙する霊障とのバランスで使う

刀は吟味すべし。

だとすれば村正で切らねばならぬ呪物もまた、

「吐け、本当のことを言え、本気だぞ」

「ホントだってば、全部本当」

「誰だ？」

「え？」

「あの手は誰の手？」

「知らない」

キョージユはブンブン首を振る。かまわず締める手に力を入れる。

「嘘をつけえ、知らなきゃ、わざわざ村正なんか持ち出すかあ。言え、言ってしまええ」

「知らないよお。昔の中国の坊さんの名前なんか。話も本当だってば、嘘じゃないですう」

「嘘吐き、嘘吐き、嘘吐きい」

「嘘じゃないい、弟弟子の名前が空海っていうだけだよ」

力が抜けた。

「空海？」

「空海」

「弘法大師の？」

「そう」

「弘法大師の兄弟子？」

「弘法大師の兄弟子の…」

視線がリビングに、

テーブルの上の箱に、

「手」

涙がこぼれた。

顔を両手で覆い静かに泣く私に、男は戸惑っているようだった。

「あ、あの…、…アキハ、さん？」

「空海なら、密教なら、戒壇じゃなくて灌頂でしょう」

「灌頂なんて言ったら、それこそ、すぐバレちゃうじゃないですか」

「どうして、ちゃんとやってくれなかったんですか？」

「え？ あの…、その…」

「私だって、最初からきちんと説明してくれれば…、どうして…」

「だって、本当のこと言ったら、アキハさん逃げちゃうでしょう？」

左脚を半歩踏み込み、腰を落とした。

男から見れば、私の体が頭一つ分低くなったように見えたと思う。

一息浅く吸って、丹田に気を練る。

胸の前で手を組み、右肘を一旦下げ、添え足を伸ばすと同時に前方に繰り出す。

狙いは相手の水月。

コイツは殺しちゃってもいいかな、みたいなことを頭で考えていた。

入ったと思った瞬間、私の前で鶴が両翼を広げた。

翼ではなかった。

私の意識は、男の両の一本抜き手が首筋の双点穴に当たった音で、
消え失せた。

第一話 死者に会う呪術（6）

「大丈夫？　大丈夫ですか？　アキハさん」

ぴたぴたと頬を叩く感触。

目を開けて、最初に映ったものは、銀斑眼鏡をかけた顔。

「ひっ…」

「良かった。目を覚ましてくれて、一時はもう間に合わないかと」

間に合わない、だと？

起き上がるとしたが、体が動かない。

辛うじて動かすことのできる頭を横に向けると、例の箱。

「けひゃっ」上ずっておかしな声が出た。

畳の上に寝かされている。私も箱も。しかも、その箱は…

「いいですか、アキハさん」アイツが左手で箱を指しながら話掛けてくる。そしてアイツの右手には抜き身の村正。

「いまからね、光りますから、この箱。それで、するするする、
つと何かが出てくるんで」身振り手振りを交えて説明している。コ
イツは小学生か？「出てきたところをコレでバツサリです」手にし

た村正をちゃんと振った「ね？　簡単でしょ」

「違う、違う、違う」

「え？　何？　わからない？　僕の言ってることわかります？」

「光ってる、光ってるう、もう、光ってるのぉ」

青白い光は既に箱から50センチほど立ちのぼり、蛇が鎌首をもたげて獲物を探すように揺らめいていた。

「光ってるって、こんな感じに、ぼわぁ、っと？」

箱のそばによって二まわりほど外側を手で囲う仕草をする。

「違う、上、もっと上、上から回り込むように、来る、わぁ、来る」

「上って、こうですか？」

箱の上から放物線を描くような仕草で寝ている私の胸の上に手をまわす。箱の中の何かがその仕草に乗ってこちらに来そう。

「来てない、そこまでは、来てない、まだ途中う」

「途中って、このへん？」

「まだ、まだまだ」

「じゃ、このへん？」

「そ、そう、そのへん、そのへん、早く、早くしてえ」

「まだ、だめ」にべもない「箱から中身が抜けきらないと逃しちゃいますから」

光は次第に膨潤しつつ、ゆっくりと、しかし確実にこちらに向かつて進んでくる。

「ね、お願い。近衛さん。お願い。さっきみたいに動けるようにして、ちゃんと手伝うから、でも、ここはイヤ、寝てるのはイヤなの、ね、お願い」

「いや、僕が何かしてるわけじゃなくて、アレがしてるんです箱のアレが、一種の金縛りみたいなものですから、僕の方では何ともできません」

「お願いいい。もう肘とか使わないから。来てるの、そこに来てるの、ほらソコ。逃げない、絶対、約束する。後生だから、何でもするから、お願い。許して」

「本当に何でもする？」

「する、するする、何でも言う通りにする。いや、来る、来ないで、だめえ」

「じゃ、質問に答えてください。いま何色ですか？」

「え？ 何色って？ 何？ イヤあ、来る」

光と私の体はもう握り拳ひとつ分くらいのすき間しかない。キョ

ージユは村正を青眼にかまえて微動だにしない。眼前の光とキョー
ジユの顔を交互に目まぐるしく視線だけで追い、泣き、叫び、懇願
し、それでもかろうじて意識だけは保っていた。

「色です。光ってるんでしょ。何色に光ってますか？」

「青よ、ああ、ああ、ああ」

実際、それは空の青ほどの深みを持ち出していた。最初はほのか
に青白かったものが、迫るにつれ、近づくにつれ、どんどん青さを
増していく。

「赤くなったら教えてください、そうしたら切ります」

「なった、赤くなった」

キョージユはピクリとも動かない。

「嘘はダメ」

「嘘じゃないよぉ」

キョージユはチツと舌打ちした「タイミング間違えたら、死ぬよ
りヒドイことになりますよ」

「…死ぬよりヒドイ…？」

「あ、違う、いまのなし」キョージユも気づいたらしく、あわてて
否定する「大丈夫、絶対、大丈夫だから、僕を信じて、がんばって」

「いやああ」もう限界だった「殺してえ。その刀で殺して、アタシを殺してえ。死ぬほうがマシなら、いますぐ死なせてえ」

「だから、死んじゃだめです。色は？ 色はどうなんです？」

「赤いよお、もう赤いモン…。早くう、もうコレでもアタシでもどつちでもいいから切れえ。きつてえ、殺してえ、え？ イヤ、何？ だめ、入る、入っちゃだめ」

「入る？」キョージユの目に戸惑いが浮かんた「入るって、何で？」

「入るのよ、胸のトコから。いや、ダメえ。来るなあ。入るなあ」

ソレの先端はわずかではあるが胸の中にめり込んでいた。白無垢が胸の真ん中が、そこだけが青い。

「入るって、手なんだから引くだけのはずなのに、何で入る…、何で…、あ」

キョージユが青眼を崩し、村正を握った手をだらんと下に降ろした。

「…ごめん」

絶叫というのが人の声ではなく、ただの耳障りな音だということを初めて知った。それは私の発している声ではなかった。魂が喉の

奥で鳴っていた。

「あ、なし、いまのものナシ。大丈夫だから、もう少しがんばろう」

「死ぬ。死んでしまえ。このインチキ野郎。アタシも死ぬけどお前が先に死ぬ。死ねえええ。いや、むしろ生きる。生きたママ地獄に堕ちろ。地獄の犬に腸雑喰らわれて泣けえ」

「一時的な錯乱です。いまが踏ん張り所です。僕を信じて、もうすぐだから」

「錯乱してるのは、オマエじゃああ。誰がオマエのことなんか信じるか。もし、世界が…、いやあ、来るなあ、入るな、黒いの、イヤ。…黒い、ダメ、だめええ」

閃光が二筋走った。

空気、いや空間そのものを切り裂いたかのような気迫は一瞬にして溶けた。キョージユは白木鞘を投げ出してその場に座り込み、それでも私に向けて声を掛けた。

「アキハさん、よくがんばりました。お疲れさまでした」

涙と鼻水で顔がぐちゃぐちゃだった。キョウジユの声は聞こえたが、顔を見るのは嫌だった。

「…また、嘘付いた。…赤くなったら切るって言ったのに、…黒くなったら切った、…ヒグ…、…嘔吐き…」

「だって、そうでも言わないと…、実際、赤だってずっと言い張ってたじゃないですか…」

「…体動かない、だめだ。…失敗したんだ。…アタシ死ぬ。…違うの、毛むくじやら、ミイラになる、…箱に詰められる。…もうだめ」

キョージユが優しく抱き起こしてくれた。畳に半身を起こしたところで、キョージユの手が首筋に触る。チクリと鈍い痛みがあった。

「…手、動いた。…足も」

「動けなかったのは、コレのせい」キョージユの手には2センチほどの長さの細い針「金縛りじゃないんです。下手に動かれたら困るので、目を覚ます前に予め一本打たせて貰いました」

がすつ。

目の前の顔に正拳を叩き込んだ。

人を殴ってスッキリしたのは生まれて初めての経験だった。

第一話 死者に会う呪術（7）

「アキちゃん、お手柄だったみたいだね」詰所に出たらソンコさんがニヤニヤしていた「キョージユの鼻、折ったって？」

ああ、そっちのほうか。

「ソンコさん、酷いですよ。私を置き去りにして」とりあえず、恨みを並べてみた。

「だって、しょうがないじゃない。キョージユは一人じゃ仕事にならないんだから」

「ソンコさんが組めばいいじゃないですか」

「キョージユと？ 御免だね」

そう吐き捨てて笑う。取り付くシマもない。

「私だって嫌です」

「嫌でも何でも、いちおう仕事にはなったじゃないか」ソンコさんが真顔で言う「それに五体満足つてのは、アンタが初めてだもの」

「は？」

「あれだけのタマだもの。使わないって手はないからね。今まで何人も組ませたのさ。いや、何十人か…」ソンコさんは、はは、とソ

ツケなく笑う「仕事の方は、うまくいったのも失敗したのもあったけど、相方は、まあ、良くて廃人だったからねえ」

良くて廃人って、アナタ…。

「悪いと…、死んだ人もいたってこと？」

「死んだのもいたけどさ、それはどっちかって言うと、良いほうだよね」

間違えたら、死ぬよりヒドイことになりますよ。

あれは冗談じゃなかったのか。

ソンコさんは上機嫌だ。

「本部のほうの色めきたってさ、キョージユが使いモノになりそうだって。あ、たぶん、これから仕事増えると思うんで、ヨロシク」

「お断りします」

「何か言った？」

「おことわりです」

ソンコさんは毛ほどもたじろがない。

「そういうの、何だっけ、アキちゃんの意味、とかいうんだっけ。そういうの、ウチ、あんまり関係ないから」

「関係あるとか、ないとか、そんなんじゃない」

そして小一時間、これはセクハラでパワハラでモラハラであることを現場の具体例を挙げて説明した。もちろん認められなければ、懲戒委員会なり、出るところに出ると。

ソンコさんはニコニコしながら黙って話を聞いていた。そして、私が喋り疲れて一息ついたところで、言った。

「まあ、言いたいことはわからないでもないんだけどね。出るところつつたって、所詮は他人を呪い殺すような稼業やってる連中だからねえ。期待しないほうがいいんじゃない？」

私がおも口を開けて反論しようすると、ドアのほうを指して言う。

「ほら、無駄口叩いてないで、お呼びがかかってるよ」そして、ペロっと舌を出して可笑しそうに笑った「それにしても、本当にアレの気配、わからないんだ」

顔の真ん中に絆創膏を貼った男が、詰所の入り口でオイデオイデしている。もちろん嫌だったが、しぶしぶ歩みよった。

「何の用です？」

キョージユは事務的に答えた。

「手塚さんとの約束の時間がもうすぐなんです」

「それで？」

「車出してください」

「何で、私が？」

「アキハさんは、僕の専属アシスタントになったと聞きました」

「その件は、お断りしました」

キョージユは顔の真ん中を指差して言う。

「これのせいで眼鏡がかけられないんです。眼鏡がないと運転できません」キョージユは少しだけ高飛車だ「誰のせいでこうなったと思うてるんですか？」

「アナタのせいです」

「あ…、まあ…、そういう見かたもあるとは思いますが…」

「タクシー呼びましょうか？」

キョージユの虚勢もそこまでで、捨てられた子犬のような目でこちを見つめる。

「手塚さんを奥さんに会わせてあげなければいけないんです。僕だけじゃ、奥さんが来たかどうか、わからないから…。お願いします。」

一緒に連れてって下さい」

これ以上拒んだら私が悪者みたいだ。

ソノコさんのほうを見ると、シッシツ、と追い払うように片手を振る。

もうヤケだ。

「今度だけですよ。後のことは知りません」

「ありがとう」キョージユはうれしそうに私の後からついて来る。キョージユが詰所のドアを閉めた途端、部屋の中から、けたたましい笑い声が湧き上がった。

ババア死ね。

第一話 死者に会う呪術（8）

一週間経って訪れた手塚邸は一変していた。

門をくぐってすぐから庭へと続く中道一斉に、白バラが咲き誇っている。

暫しその様に見とれていると、キョージユがなにやら理由をつけて、依頼人の手塚氏を庭のほうに引っ張ってきたようだ。

一息大きく吸い込んで、バラの香を堪能した後、キョージユが言った。

「たいへんよく手入れされたバラですね。もうアレの影響も無くなりましたし、これが本来のお庭です」

なるほど猿の手があるうちは蕾も付けられなかったということか。この前に来たときはこれがバラであることすらわからなかった。

手塚さんも目を細めてバラを眺めていた。思うところがあったのだろう。こころなしか目頭が潤んでいるようにも見えた。

「これは妻のバラです」手塚さんは言った「妻は庭いじりが好きでした。生前は、暇さえあれば庭に出ていました」

「いや、そんなことはありませんよ」

「は？」

キョージュは何を言っているのだろう。手塚さんも私も狐につままれたような顔でキョージュを見た。

「奥様は、別に庭いじりが好きだったわけではありません」

「でも、妻は…」

「奥様は、このバラが好きだったのです」それまでじつとバラだけを見つめていたキョージュは、不意に振り返って手塚さんに尋ねた「このバラは、どんなバラなのですか？」

「いや、私は花には詳しくないので、これがバラだということしか…」

キョージュと手塚さんはいまひとつかみ合っていないかった。キョージュはいつものとおりだが、手塚さんは戸惑っていた。

「質問の仕方が悪かったようです」キョージュは詫びた「このバラはだいぶ年数を経たバラとお見受けしました。こちらのお宅を建てられた時に植えられたものですか？」

「いや、その前だと思えます…。この家を建てる前はアパート暮らしで、その頃は確か…、鉢植えで」

「あるいは？」キョージュは意味ありげに微笑んだ「ご結婚の記念とかではないですか？」

「いや、違う」手塚さんの声が急に大きくなった。その表情から何かを思い出しつつあるのがわかる「結婚前です。あれはプロポーズ

する少し前に」

「結婚前でしたら、まだ奥様ではありませんね」こまかいヤツだ。そんなことはどうでもいい。

「あ、はい。…その恋人というか、告白もしていなかったから彼女とも言えない。…良子が入院して、見舞いに行っただけです。まあその頃は常識もない若造でしたら、病人の見舞いに鉢植えなんて、とみんなに笑われて…」

手塚氏は大きく目を見開いて、眼前の白いバラをまじまじと見つめた。

「まさか…、あのバラなのか？　これが？」

妻を亡くした初老の男が見つめていたのは、正確にはバラの花ではなかった。嫣然と咲き誇る白いバラ、そのバラの上にかぶる、

白い影。

「…良子。そうなのか？　これが、あのバラなのか？」

キョージユが二の腕を掴んでつつんする。耳元に小声で囁く「来てるんですか？」

あわてて、二度三度と頷く。確認したキョージユは強引に手を引っ張って私を門の外に連れ出した。

「痛、痛い。そんな引つ張らないで」いちおう配慮して小声で不満を告げる。

「あ、ごめんなさい」

もう門の陰で二人？は見えない。キョージユは手を離れた。

「どうということ？」

「どうって、あなたが見たとおりですよ」キョージユが答えた「奥さんは、バラが好きだったんじゃないかって、ご主人に貰ったあのバラが好きだっただけです」

「それはわかるけど。そうじゃなくて、どうやって奥さん呼び出したのよ」

「ああ、そのことですか」さして興味もなさそうな口振りでキョージユが言う「呼んだのは手塚さんです。それと、あのバラ。僕は手助けしただけ」

顔が真っ赤になった。言われて気づくとは、こんな当たり前な、恥ずかしい。

「近しい人が亡くなるというのは、一般の人にはかなりのショックらしいですからね。うっかりやり方を間違えるくらいは、よくあることなんじゃないですかね」

僕にはよくわかりませんが、とでも言いたげに、キョージユは堀からこぼれる白いバラ、その向こうを見つめていた。

<死者に会う呪術 - 了>

第二話 恋が叶う呪文(1)

「アキちゃん」 呼ばれて詰所に出たのだが、ドアを開けるなり、ソンコさんが寄ってきた。右手に紙袋を持っている。「これこれ、これ着てみてよ」

紙袋から出されたブラウスと上着。

「何ですか？ これ？」

「いいから、いいから、ね、ちょっとでいいから、ね」

「ちょ…、何するん…、やめてください」

ソンコさんは、「いいから」を連発して私のシャツを脱がす。白のブラウスを着せられた。

「これ娘のなの。アキちゃん、娘と背格好似てるからと思って…。あら、ボタンかかるわ。いいじゃない。アキちゃんて意外と胸ないのね。あたしは無理だったわ」

ソンコさん。アナタに較べれば大抵の女性は貧乳です。て言うか、着たのかよ。コレ。

「娘さんて、おいくつですか？」

「来栖野女子中の二年よ。ほんと、生意気盛りで親の言うことなんか、聞きゃしない。あ、動かないで」

襟にリボンを結んで上着を着せられる。

「あのね、ソンコさん…」

「うーん、やっぱ上だけじゃよくわかんないわー。下いこつ。下。アキちゃん、脚あげて」

紙袋から出したスカートに私の脚を通し、腰までずりあげる。何ちゅうミニだ、これは…。ホックを止めてスーツのスカートを思い切り下げる。

「こら、まで…、ソンコ…、アナタ人の話を…、やめ…」

足からタイトスカートを抜き去ったソンコさんは、二歩下がって私の頭のとっぺんからつま先までジロジロ眺める。

「ストッキングだな…、おかしいのは。パンスト履いてる中学生いないもんな。よし、それだ」

「やめ、やめい、来んな。脱ぐ、脱ぐ。自分で脱ぐ」

あわててソンコさんを押しとどめる。なんか、もうどうでもよくなって、早くこのなんだかわからない状況を終わらせたい。それだけだった。

おずおずとストッキングを丸める。素足にヒールが気持ち悪い。

うーん、うーん、ソンコさんは腕組みをして私の周りをぐるぐる、立ったりしゃがんだりしている。最後に私の顔を見つめて言った。

「もうちょつと童顔だったらねえ」

そこか？ 問題はそこなのか？ 違っだろう？

「あの…、どういふことなのか説明してもらえます？」

「栗栖野女子の理事長さんからの依頼なんですよ。学園内で謎の熱病が流行っているということで、もちろん医者には相談済みなのですが、原因がわからなくて、それで我々の…」

背後からの声は非常に聞き覚えのあるものだった。抑揚のない事務的な、それでいて人なつっこさを感じさせる声。

「いつだ？ いつからそこにいる？」

とりあえずキョージユの首を絞めてみた。

「…いま、いまキタトコ、…ホント」

「嘘つけえ」

キョージユは首を絞められると少しだけ本当のことを言う。力いっぱい絞めないといけないのが問題だ。

「ホント、嘘じゃない。…レディの着替え中に入るの失礼だと思ったから、廊下で待ってて…」

「着替え中って、何でドアの外から中の様子がわかるんだ？」手に込める力を増す。思いつきりやってるつもりだが、まだ足りないら

しい「アンタそういうのわかんないハズでしょ？」

「違う、…違うんだって。だいたい、ソンコさんが邪魔でほとんど見えなかったんだから…、実質的に覗いてないのと同じ…」

「何だとお？」

「いいかげんに痴話喧嘩やめてくれる？」ソンコさんが言った「話ぜんぜん進まないじゃないの」

オバサン、言うておくが、それはキミのセリフではないよ。

気が抜けて、キョージユを放り出し、ソファに身を投げ出した。

キョージユはげぼげぼやってるが、あんなヤツ知らん。

「サイズはぴったりだったんだけどねえ」惜しそうにソンコさんが言う。

「すみませんね。フケ顔で」

「いや問題はそこじゃないと思います」珍しくキョージユがまともなことを言う「見た目は大変けっこうだと思っんですが」

気に障ったのでギロリと睨む。

「…いや、…大変お似合いで、…少なくとも、僕は素敵だと思いませんけど…、そうではなくてですね。その格好でアキ八さんが女子校で聞き込みをするとして…」

「ようするに何が言いたいんですか？」

突っ込まれてキョージユはますますシドロモドロになった。

「聞き込みつて難しいんですよ。いきなり具合が悪くなった子の話尋ねられたら変に思うでしょう？　いくら自分の学校の制服着ててもね。最初は当たり障りのない話から初めて、好きなアーティストの話とか、コスメの話とか…」

「だから何？」

キョージユはオドオドした目つきで続けた「だってアキハさん、そついうの苦手でしょ」

「失礼なッ」無然として切り返した「そのぐらい私だってできます。最悪、ティーンズ雑誌でも買って読めば、最近の流行ぐらい…」

「好きな歌手は？」

「八代亜紀」しまった、いきなり振られたので、つい本音が「違う、だって、最近はがんばって福山雅治とか聞いているし」

「…がんばって…」

「…がんばって…、聞くもんなの？　福山雅治…」

「…」

八代亜紀好きで何が悪いんだよう。舟唄、最高じゃん。

このままでは趣味のヘンな女と誤解されてしまつ。とりあえず話題を変えねば。

「ソンコさん、お嬢さん、栗栖野なんでしょう？　お嬢さんに聞いてみては？」

「一週間口利いてないんだよね。最後に話したのが、金くれ。いくら？　五千円」ソンコさんは遠い目をしている「ママ、ママ、って後追いがすごくて、ちっちゃくてかわいかった…。なんで、あんな小憎らしく育っちゃったんだか」

まずい方に振ってしまつたらしい。この方向はとりあえずナシだ。

「お二人の意見はちよつと実現性に乏しいようなので」いきなりキョージユがまじめに入っている「私の知り合いに女子中学生に詳しい男がいるので、まず彼に聞いてみますよ」

キョージユの知り合いで女子中学生に詳しい男？

それって、むちゃくちゃ危なくないか？

「アクセサリーショップの店長なんですけど。栗栖野女子の子も常連らしい、これから彼の店に行ってみます」

そしてキョージユは私のほうに顔を向ける。

「アキハさん、お願いなんですけど、一緒に行つていただけます？」

「いいですよ。それぐらいなら」素っ気なく答えたが、キョージユはまだ何か言いたそうにモジモジしている。

「何か？」

「無理にとは言わないんですけど」本当にキョージユはすまなそう
だ「できれば、その…、着替えてもらえますか？ 普通の格好に」

第二話 恋が叶う呪文（1）（後書き）

術師たち（表）シリーズ第二作目です。

一作ごとに新キャラが出ますので大変です。まあ、書いてるほうも最初は楽しくてよいんですが。

第二話 恋が叶う呪文(2)

アクセサリーショップと呼ぶには、あまり相応しくない店だった。

ファントム・ショップ・サンタという店名はともかくとして、店の中の商品がヤバイ。

威力はまちまち、値段相応ではあるが、そのほとんどすべてが何かの力を秘めている。マジで。

真物のみを販売しているオカルトショップって、いまの時代に、こんなんありか？

呪物を掻き分けて店の奥に向かうキョージュは店主と思しき人物に声をかけた。

「お久しぶりです」

「こんにちは、キョージュ…って、あれっ？」

揉み上げを胸まで垂らした茶髪の兄ちゃんは、キョージュの後ろにいる私に微笑みかけた。

「アキ姉さんじゃない…すると？」

目配せを向けられたキョージュは軽く頷く。

へえ、と愉快そうに目をくるくるさせて、彼は一人納得したよ

うだ。

「あんたが、こんなところで、こんな怪しげな店やってるとは知らなかった」私はサンタに言った「昔よりは少しマシになったみたいで何よりね」

サンタとはもう一年近く会っていない。同い年だし、経歴では向こうの方が先輩のはずだが、何故だか私を「アキ姉さん」と呼ぶ。

「ま、その話は後にしてもらって」キョージユはサンタに尋ねた「どのくらい話せそうかな？」

「うーん、5分ぐらいかな」サンタが言う「最近、俺、ちょっぴりセンチティブだから、それくらいで話まとりそう？」

「無理だと思います。仕方ないですね」ここでキョージユがこっちを見る「じゃ、アキ八さん。あとはよろしくお願いします」

問い返す暇もない。キョージユはすたすた店の外に出て行ってしまった。

「またね」。キョージユ

サンタは屈託のない笑みでキョージユを見送った。

「どういうことよ？」

「どうって？ 俺もうキョージユとは長時間一緒にはいられないんだよ」立ち話もなんだしね、とサンタに丸イスを薦められる「アキ姉さんの前の前になるのか、キョージユと仕事して壊れちゃったの」

良くて廃人だよ、とソソコさんは言っていた。

「ま、壊されなくても、キョージユにはあまり近づきたくないんじゃないの、この業界の人間なら。アキ姉さんは別だろうけどさ」

「私が別ってどういうことよ？」

「だって見えないんだろう？ キョージユのこと」

そう聞いたよ、とサソタは言う。誰に聞いたのさ、と問うと、みんなそう言っている、と。

みんなって誰だよ。

みんなはみんなだよ、とサソタは笑う。

「それにしても、アキ姉さんが、いま話題の『キョージユの女』だったなんて、びっくりだよ」

何だとお？

立ち上がってカウンターを思い切り叩いたが、サソタはヘラヘラしている。そう言えばこんなやつだった。ぜんぜんビビらない。キョージユと違って可愛げがない。

「ま、そういう話はおいおいね。暇なときにでも聞きに来るといいよ。俺も暇だしね」

そもそも、今日は別の用事で来たんでしょ、と言われてやっと用

件を思い出した。よくわからないがキョージユは直接サンタと話せないみたいだし、代わりに聞くしかない。

来栖野女子のことではサンタも困っているのだという。

「うちのお得意さんも何人かやられてるんだ。始まってすぐくらいに位の高い護符に切り替えたんで被害は軽いんだけどね。それがまたムコウの癪に障ったらしい」

「ムコウって？」

「呪詛者だよ」

「何でほつとくのよ？ 潰せばいいじゃない。相手がわかってるんなら」

「だって、相手は素人だもん。逆に手出しできないよ」

「素人がなんだって何十人も呪えるのよ。無茶言わないで」

「ホントだもん」

「うまいこと言って、あんたが呪いかけてるんじゃないでしょうね。それでこの店の売り上げアップとか」

「ご冗談」サンタは手をヒラヒラさせて否定する「この店のブツ見たでしょ。女子中学生に買えるようなもんじゃない。だから普段は一番位の低いの売ってるの、彼女たち相手には。それでもそこその値段だから金工面するのはそれなりに大変かもね」

金の出所は気にしないんだ。と、サンタはヘラヘラ笑う。

「でも、お得意さんだしね。今回だけは出血大サービス。常連の子には効く方を配った」

「常連じゃない子には？」念のため聞いてみる。

「何もしてないよ」

やっぱり。

「でも、ムコウが躍起になって、こっちのお得意さんばかり狙うようになったから、間接的には助けになってるのかな」

「でも相手が素人なら、これ以上ひどくなるってことないんでしょ」

「さあ？」サンタは首を振った「なんかムコウの力が上がってきてるみたいだし、あまりもたないかも」

「マジで？」

「マジで」

これは、どう考えてもおかしい。サンタが本気で作った護符が素人の呪いを返せない、なんてことがあるはずがないのだ。

「裏があるの？」

「さあ？」サンタは首を傾げた。ただ、そういうポーズをとったからといってサンタが何かを考えてると思っただけ大間違いだ。コイツ

はそういう男だ。

「結局は俺もまた聞きだからさ」サンタはカウンターに頬杖をついた。なにやら頭が重そうだ「常連の子、呼んどいたんで直接話聞いてみれば？」

「へ？」

「来栖野女子のコ。占いのオバサンが来るから相談してみな、って言っというた」

オバサン、ってアンタ。

思わず言葉を飲み込んだ私に向かって、サンタはだるそうに欠伸した。

第二話 恋が叶う呪文(3)

サンタの店では狭くて話もできない。

やってきた中学生三人を連れて、近くのファミレスに入った。キョージユは前もって席取りしている。

「こんにちは」

女子中学生たちは何故かキョージユに興味津々だ。

この人は？ と、問われて、キョージユが答える。

「陰陽師です」

まあ、そういう風に自己紹介するのも悪くないかもしれない。厳密にはちよつと違うが、一般人にそんなことを言っても始まらない。

ホンモノ？ という感じで女の子達はこそこそ話している。キョージユは黙ってナプキンを取ると、折紙をはじめた。

二十秒ほどで小さな犬を折り上げるとテーブルの上に置いた。

彼女たちは息を殺して紙の犬を見つめている。

「そんな一生懸命見ても、吠えたりしませんよ」

なあんだ、と彼女らが失望を顔に浮かべた時。

犬に羽が生えた。

ばさつ、と二、三度羽ばたくと、犬は飛び上がって女の子たちの間を三度巡り、ひらりと自らを解くとナプキン入れに収まった。

「すごい」左の子が声を上げた。

「本物だ」右の子が何かのこもった瞳でキョージユを見つめる。

なるほど、こういうのが一般受けするわけだ。いつか使うときもあるかもしれないし覚えておこう。

「水干とか着るの？」右の子が尋ねる。

「着ませんね。最近」キョージユが答える「もともと陰陽師というのは実用を重んじるので。水干というのは昔の背広みたいなものですよ」

「じゃあ、水干に魔力があるわけじゃないの？」右の子がつぶやいた。

「はい」キョージユは微笑んで頷く「そうですね。お医者さんの白衣みたいなものだと思っていただいて結構です」

水干を魔導着か何かと勘違いしているらしい。

「ほかにどんなことできるの？」今度は左の子だ「たとえば…恋人ができるおまじないみたいなのとか…」

「もちろん、できますよ」

キョージユの言葉に左右の子の瞳が輝いた。おい、そんなこと言っちゃって大丈夫なのか？

「古代、権力者の寵愛を受けるとするのは、権力への一番の近道だったのです。我々、陰陽師がもっとも活動していた頃の仕事は主に二つです。敵を呪い殺すことと…」

左右の女の子は固唾を飲んでキョージユの言葉を待っている。

「自分の近親の娘を王の后にすることです」

女の子たちは顔を見合わせる。そして一斉にキョージユを向いて。

「じゃあ…」

「できるのね」

「命がけですけどね」キョージユはさりりと言ったのけた。

「呪法としてはもっとも研究されつくしたもののひとつですから、そりゃ、威力は凄まじいものです。ただ、失敗したときの反動はただ事じゃない。まあ、対象者の命はもちろんですが、施術した陰陽師の方も危ない」

「でも、そういうスゴいのじゃなくて、簡単なもの…」

「効きませんよ。簡単なのは」キョージユには情けとか容赦とかいうものはないらしい。

「あの、効き目はあまりなくても…」

放っておくと止まりそうにないので、私のほうから話を切りだした。

「あなたたちの学校で、呪いをかけられた子がいるらしいんだけど、詳しい話聞かせてくれる？」

左右の子たちは、真ん中の女の子を見た。彼女が目で促すと、二人はいつぺんに話し出した。

「エリなの…」

「エリは気に入らないコを呪うの」

「エリはスドウ先生が好きなの。だからスドウ先生がかわいって言ったコは呪われるの」

「でも、そうでなくても呪うの」

「みんな呪う。毎日呪う」

「でも、シヨミは呪われても平気」

そう言って真ん中の子を見る。彼女が何も言わないので、またしゃべり出す。

「あたしたちはシヨミに守られてるから大丈夫。サンちゃんにも」

サンちゃんというのはサンタのことかな。

「でも、シヨミもみんなを守るわけじゃないの」

「やつつけちゃえ、ってシヨミに言ったんだけど、そういうことはしないんだって」

「シヨミも大変なんだって、サンちゃんが言ってた」

「だいたい判ったわ」実はあまりよくは判らないのだが、そう言わないと止まる感じがしない。このままでは埒が開かないので真ん中の子に聞いてみた「シヨミちゃん、だっけ？ あなたはどう思う。…その、エリちゃんて子についてだけど…」

問いには答えず、シヨミはキョージュに向かって言った。

「その権力者の寵愛を得る、とかいうのアタシにやってくれない？」

何だコイツは？

「その必要があるとは思えませんが？」訝しげに、キョージュは答えた「アナタなら素で迫れば大抵の男はイチコロですよ」

確かにキョージュの言うことも一理ある。腰にとどきそうに長い髪を二つに分け、大きく出した富士額に宿る意志の力は、切れ長の目と大理石のように白く緻密な肌と相まって、中学生とは思えない妖艶と言っていいほどの魅力を醸し出している。

「一応はやってみてるんだけど、アタシはスドウの好みじゃないみたい」

まだ見ぬスドウ先生には、全くもって同情を禁じ得ない。しかし、シヨミの目的はそうではないらしい。

「スドウがアタシにゾッコンてことになれば、呪いはアタシにだけ集まる」

「ダメだよ。そんなことしたら、本当に死んじゃうよ」

右の子がシヨミを諫める。彼女は本当に泣き出しそうだ。

「そうだよ。エリの魔力が強くなってる、って言ってたのシヨミじゃない。そんな危ないことしちゃダメ」

あー、こほん、とキョージュがわざとらしく咳払いをした「スドウ先生をどうにかするのはお断りしますが、エリという子の件は引き受けますよ」

ほらね、とシヨミが二人に目配せした。

「エリはどうやって相手を呪うんですか？」キョージュが尋ねた。

「エリはラ・ムーの生まれ変わりだって言ってる。ラ・ムーはムー大陸の女神官で女王、それで誰でも呪い殺せるんだって」

「真夜中の二時に、七化け地蔵の前で、黒いケープを着たエリが生け贄を捧げるの」

ムー大陸と地蔵…、頭が痛い。

「場所知ってるよ」シヨミが言った「案内しようか？」

左右の二人が同時に、ぎゅっ、とシヨミの腕を握りしめる。その肩が小刻みに揺れ、彼女たちの唇は紫色に変わった。

「アンタたちはお帰り」シヨミは優しく二人に言った「アタシは大丈夫だから、この人と、このオバサンがいるんだから、なんとかするハズ…。そうだよな」

オバサンは余計だろ。オバサンは。

第二話 恋が叶う呪文（4）

「アンタ、術師でしょ？」

七化け地蔵への道すがら、唐突にシヨミがキョージユに尋ねた。

「よくご存知で」

シヨミは顎で私のほうを指す「このオバサンも？」

「あのね、シヨミちゃん」一応、年上ということで、すぐには噛み付きはしない「私、アキハっていう名前なの」

「あ、そう」今度は直接聞いてきた「アキハも術師？」

「そうです」

いきなりタメ口かよ、この小娘。

「ふうん」面白そうに口の端をちよつとだけ歪める「こっちの人からは何かがビリビリ来るもんね。アキハは薄ぼんやりしてる」

へえへえ、左様でございますか。薄ぼんやりで悪うございましたわね。

「ずいぶん人望があるようだけど、学校では何かしてるのかな？」

今度はキョージユがシヨミに尋ねた。意味がわからないらしく、

シヨミはきょとんとしている。私もキョージュが何を聞きたいのか、わからない。

「ああ、また言い方が悪かったな」キョージュはぶつぶつ言っている。「じゃあ、そのものズバリで聞きましょう。アナタの能力は？」

シヨミは突然、笑い出した。「アンタやっぱリタダモノじゃないね」そして何かを探るようにキョージュの顔を伺いながら言った「失せ物探し、よ」

ひゅー、とガラにもなくキョージュが口笛を吹く「それは、また、物騒な」

シヨミは淡々と話し出した。

「クラスメートの失くした物を見つけてあげてたんだ。で、探し物って、半分くらいは持ち主が失くしちゃうんだけど。残り半分は…」

「誰かが隠してる」キョージュが言う。

「そう」シヨミは寂しく笑う「でも、最初はそんなこと判らないから、頼まれるままに、失せ物探ししてた。そしたら…、いつのまにかアタシは虐められっ子を守る代表、みたいな感じになっちゃって…」

「娑婆では正義の味方っていうのは、あまり褒めては貰えませんか
らね」

「ん、まあ。アタシが何でも見つけちゃうから、そのうち隠すほう
は誰もやらなくなったんだ。それだけ…、それで、そっちは済んだ

んだけど…」

「それだけ、っていうわけにはいきませんね」知った風な口振りでキョージユが言う「人に良いことをしてやると、もっとやってみせろ、と言われます」

「それぞれ」シヨミは大きさに手を振って笑う「だから、エリも…」

「恋する乙女はやかいですね」

キョージユの言葉に、シヨミは小さく頷いた。

地蔵がいたのは古い荒寺で、門の傍の小さなお堂にちんまり仲良く入っている。一、二…、…六。六体、普通の地蔵だ。

「どこが七化けなのかな？」

「エリのオリジナルなんだ」シヨミは言った「七つめの地蔵、七化け地蔵が現れたときに願をかければ願いが叶う」

「現れますか？」

「まさか」シヨミは頭を振った「現れないから…」

「自分で地蔵の格好をして立つ…」と

「知ってたの？」

「いや」キョージユは気まずそうにこめかみを掻いた「よくあるパターンなんで」

「そう、そうだよな。よくある話なんだ」シヨミは地蔵の頭を撫でている「あの子、こわがりだから丑三つ時なんて無理。いつも夕方ここに来てた。地蔵のフリっていつでも赤い小さな前掛けを首につけるだけ。でもエリは一年がんばったよ」

「どうして、それが歪がってしまったのかな？」

「わからない」シヨミは自分に呪いをかけている相手とは思えないほど、親しげにエリのことを語る「…もともと、エリは、スドウのことそんなに好きだったわけじゃない、と思う。エリはここで願い事をするのが好きだったんだ。だから、スドウのことだけを思っ一年も通いつめたんじゃないんだと思う。エリもちよつと虐められやすいところあったから、恨み言もあったんじゃないかな…、ある時、たまたま何故かそれが効いてしまった…」

「まったくの偶然？」

「わからない、わからないけど…」シヨミはキョージユの顔を真つ直ぐに見つめる「とにかく、あの子の呪いは効いてしまった。理由はわからない。まったく突然に…。それで有頂天になって」

「ま、後はだいたい想像つきます」キョージユが言った「得てしてそんなものです。いつものパターンです」

呪詛の痕跡を追おうとしていたのだが、どうもあまりうまくいかない。いままで聞いてきた話を総合すると、かなり威力のある呪詛のハズなのだが、この地蔵のあたりの場は弱すぎてどうしようもな

いのだ。シヨミのほうをチラと覗く、この子、場所間違えたんじゃないのかなあ。

それでも在るか無しかの痕跡を追おうと、必死になって手繰っている、突然、場がマツサラになってしまった。

「何するんですか？ いきなり」キョージュにくっつかかる「浄化するんなら一声かけてください。後追えなくなったじゃないですか」

「え？ あ？ ごめん、ごめん」キョージュは慌てて謝った「そんなことしてると思わなかったんで…、つい…」

そんなことって、じゃあ、お前は何しにココに来たんだよ？

「じゃあ、エリって子の家に行こう。よし、そうしよう。シヨミさん」キョージュはシヨミに言う「家知ってます？」

シヨミは無言で手を上げ指差した。その方向にキョージュが目を向けた時、小さく一言。

「あっち」

何故いままで気がつかなかったのだろう。

シヨミの指差したずっと先、小高い丘の中腹にある分譲住宅地の中の一軒。ここからだとか芥子粒くらいに小さく見える。

その家が、まるごと、炎でない炎にゆらゆらと包まれて真っ赤に燃えている。

「アキハには見える？」

私の視線とその驚きの表情に、安堵したかのようにシヨミは手を下ろした。キョージユは何だかわからずオロオロしている。

「そう、あれがエリの家」

そして寂しそうにシヨミは呟いた。

「もう、エリは駄目かもしれないね」

第二話 恋が叶う呪文(5)

見つけたよ、そう言いながらソンコさんはブラウザ画面のプリントアウトをテーブルの上に投げ出した。

「ネットオークションでもう200万超えてるんで、ちょっとした話題になってるみたい。締め切りが延長されてるんでまだ落札には至ってない」

それは白い石だった。中心部がほんのりと朱に輝いている。写真の取り方が悪く、ぱつと見、印象はあまりよくない。アンティークアクセサリーで出品しているところを見ると、たぶん、出品者はこれが何なのかよくわかっていない。

「で？　どういう事情でこんなことに？」

キョージユの問いにソンコさんが答える。

「エリの母親つてのが、ちょっと手癖が悪くてね。まあ、遊びに行った先でチヨコチヨコ失敬しては、ネットで売りさばくなんてことをしてるわけ……。もうPTAの中じゃ有名なんで、普通は家に入れたりしないんだけど。転校してきたばかりでそのヘンの事情知らないお母さんが……」

「転校つて海外から？」

「いや、国内。でも、お母さんは外国人。国際結婚で旦那が日本人」

「お母さん、どこから来たんです？」

「インドネシア共和国マルク州アンボン」

あいたあ、キョージュが額を叩いて天井を仰ぐ「セラム島の隣の島じゃないですか…、てことは」

「アルフル族だろうね」

「寄りによつて…、死者の石、ですか」

三人は揃ってテーブルの上の印刷物に目を落とす。ただの写真が、邪悪な炎を揺らしたように見えた。

「そりゃ、血眼になって落札しようとするわけだ」

「どうして買い取ろうとするのかな？」ちょっと推移が飲み込めないのでキョージュに尋ねた「コレ落札しようとしてる、ろくでもない奴らつて、コレがどこにあるか知ってるんですよね？」

「ええ、そうですよ」

「もともと、その…あまりお行儀の良くない人たちだと思っただけど、何で盗りにいかないんですか？」

「ああ、そのことですか」キョージュは何を今更、という感じで話し出す「これだけの呪物ですからね。所有権の移譲にはそれなりの対価が必要なんです。金払う程度ではダメなことが多いですが、それでも払わないよりはマシです」

「でも、エリの母親は対価払ってませんよね。その…黙って持つてきちゃったんだし」

「エリの母親とエリは対価を払ってますよ」キョージユの目は真剣だった「いや、正確には、対価を払いつつある、というところですかね。他のご家族はまったくのばつちりですが、まあ、仕方のないトコでしょう」

迂闊にもそのことにまったく思い至らなかった。まだ私は術師としては半人前なのだろう。

「つまり…死ぬ、ってこと」

「ただ死ぬより、かなり状況は悪いみたいだけどね」ソンコさんが代わりに答えた。

「なんとかならないんですか」

「うーん、まあ」眉間に皺を寄せて、眼鏡の上からキョージユは右手で目を覆った「多分に偶然が重なったとはいえ、これだけ強烈な呪術を敢行してしまったとなると…」

「知らなかったで済ませられる話でもないのよ」ソンコさんが沈んだ声で続ける「せめて呪いが効き出す前なら手の打ち様もあったけど」

「でも、それでも、何かあるハズです」あまり良くわからないが、とにかく、その時はなんとかしなきゃ、と思ったのだ「そりゃあ、他人のもの黙ってくすねるのは良くないことだし、誰かを呪うのも悪いことだとは思う。でも、それって生きながら地獄に引きずりこ

まれるほどのことなんですか？　どうなんですか？　ソソコさん、キョージユ？」

二人は頂垂れて白い石の写真を見つめるばかり。

「善悪の問題じゃないんです。この世のしきたり、というヤツです」

「一度縁ってしまった因果はね。並大抵のことじゃ……」

「しきたりが何だって言うんです」立ち上がった。これ以上、萎れた二人を見続けるのは、とても嫌だ「しきたりは変えればいい。私たちにできることがあるはずですよ。何とかしましょうよ。ね」

シヨミの声が頭の中にこだまする。

――もう、エリは駄目かもしれないね

そんなの絶対嫌だ。

「私らで変えるっただって、そんな都合の良いこと……」ソソコさんがゆっくりと顔を上げ、私のほうを真っ直ぐに見る。

ソソコさんは、ニマツと笑った。

「……実は、あるのよ。アキちゃん」

へ？

「実はあるんですよ、アキハさん」キョージユも顔を上げてニヤリと笑う「とびきりのヤツが、ね」

「あるもん、ね」

え？ え？ え？ え？

ええええええ？

キョージユとソソコさんは、手に手を取っておちやらかしている。

「本部からは、良い機会だから思いきり行けっ、て言われたけど、アキちゃんになんて言おうか迷ってたのよ」

「まさか、アキハさんが、これほどヤル気とは…。もう障害はありません、思いっきり行きましょう」

「本部からアレの使用許可が出た時から、キョージユやる気まんまん、だったもんね」

「アレは確かに魅力的だけど、アキハさんいないんじゃないじゃ威力半減どころか十分の一でもませんから…。ほんと、アキハさんがやる気になっってくれて、これほど嬉しいことはありません」

がんばろうね、と二人は私に向かって言った。

な、

な、

なんじゃこりゃ。

「アンタたち、私をハメたのか」

「そんなハメるだなんてハシタナイ」と、ソンコさん「アキちゃん、ソンコお姉さんはそんなこと言うアキちゃんはツンツンよ」

「あ、今度の潔斎はちゃんとやってくださいね」キョージユは事務口調に戻った「今度のはこの間の猿の手の比じゃありませんから、きちんと楔いで貰わないと」

じりっ、じりっ、と後ずさる、私の両手を二人が同時に捕まえた。

「だゝめ」

「逃がしませんから」

ダレカ、タスケテ。

第二話 恋が叶う呪文(6)

狭い車内でキョージユと差し向かい。ただでさえ気分の悪いシチュエーションなのに、キョージユが上機嫌なのがなお癪に障る。

「これは何ですか？」キョージユに問うた。

「ああ、この救急車ですか」キョージユが答える。ファンファンとサイレンがうるさい。いま乗ってるヤツのほかにもう一台、併走している「便利なんですよ、色々。面識の無いお宅に大勢で押し掛けるときとか、他の車両だと目立つでしょ。パトカーとか。その点、救急車なら、ご近所の方もそれほど騒ぎませんし。何かあったときは、そのまま病院に搬送しても自然ですからね」

思いつきり不自然だろ。救急車に患者でも家族でも救急救命士でもないのが乗ってたら。

「あ、もちろん借りてきただけです。ウチで持つてる訳じゃないです」

「どこから借りたの？」

「やだなあ、アキハさん」キョージユは屈託無く笑う「消防署から決まってるじゃないですか。他にどこから借りてくるんですか？」

「…そうじゃなくて」なおもキョージユに問う「これは何ですか？」

「ああ、コレのこと？」キョージユは錦紗の袋に包まれた1メートル

ルちよつとの棒状の物を少し持ち上げた。救急車に乗る前からキョージユがずっと両手で抱えている。

「天叢雲剣です」

「あまのむらくも…って、三種の神器じゃない？」

「そうですよ」キョージユは、しれっ、としている。

「何でアンタが持つてるの？」

「僕のじゃないですよ。本部が借りてくれたんです」

本部から使用許可が出た、と言ってたのはこいつのことか。いたい本部は何を考えてるんだ。

「…そうじゃなくて、何で一般人がそんなもの使えるのよ」

「僕、一般人じゃないですよ」

「…」

コイツと話していると、ほんつとにイライラしてくる。

「そうじゃない」立ち上がろうとしたが、頭が天井につかえて中腰になる。キョージユに向けて頭を突き出すような格好になった「これは…、いま私が着せられてるモノは何だ、って聞いてんのっ」

頭を指さした。

「これは何？」

「アルフル族のかんむり」

胸を指さした。

「これは？」

「アルフル族の胸飾り」

臍から2センチ下を指さした。

「じゃあ、これは？」

「アルフル族の腰ミノ」

「だから、何で私は、無理矢理こんなもの着せられてるんだああ」

「あの石のもとの持ち主にお借りしたんです」キョージユは救急車の壁にへばりついて言う「こうなつては、取り戻すことは不可能だろうし、これ使って何とか治めてくれ、って言われて」

「だからって、何で私がビキニの上にこんなもん羽織らなけりゃいかんのだ」

「本当はビキニなんか着ないんです」キョージユが言った「アルフル族の死者の正装は肌の上に直接です。アキ八さんが恥ずかしがると思って、まあ、ビキニくらいはしかたないかなと…」

「あたりまえじゃあああ」言うが早いかキョージユにつかみかかっ

た。

「わ、まで、…だめ、首はやめなさいってば」

「貴様と二人つきりで、すっぽんぽんにこんなもの着けてるだけなんてハメになったら、舌噛み切って自決するわ」

「落ち着いて、話し合いましょう。短気はいけません」

「キサマはそうやって、いつもいつも…」

何か重要なことを聞き漏らしたような気がする。

「いま、何て言った？」

「…アキ八さんが恥ずかしがると思ってビキニを…」

「その前っ」

「石の持ち主から…」

「借りたのは何？」

「アルフル族の…、…正装」

「何か抜いただろ？」

「死者？」

コイツ、わざとやってるな。

車が止まった。

この車の運転手と、併走している救急車から人が降りる音がする。

「お膳立ては庶務班がやってくれるから」キョージユは私の手をふりほどこいて、聞きもしないのに説明しだした「僕らは、呼ばれてから行けばいいんです。とにかく、落ち着きましょう」

サイレンは鳴りっぱなしだ。もしかして、音を聞かれないようにワザと止めずにいるのだろうか。

いったいどんなお膳立てとやらをしているのか。もう、想像すらしたくない。

「それじゃ、キョージユ、アキハさんお願いします」

後部ドアが観音開きに開いて、そこは玄関の真ん前だった。

おそるおそる外に出ると。

その家は紅蓮の炎の中にあつた。

熱さをまったく感じない、霊的焔であるために、より一層の近寄りがたさを以って眼前にある。

後込みする私の手をキョージユは掴んで離さない。

アスファルトがひんやりと裸足に冷たい。

「…あ、あはは、…あははは」

冷たく燃え上がる朱で透明な炎の前に、無意識のうちに笑い声を上げていた。自分の声だという自覚はなかった。

その声に反応したキョージユが訝しげに見る。

「アキハ、さん？」

キョージユの手を振り払うと同時に、きびすを返した。

こんな人間の手に負えるモノじゃない。

キョージユが、否、他の誰が何といおうと、こんなものは、絶対に、お断りだ。

右足を前に繰り出そうとして腰ミノに目がいった。誰かに会ったら仮装行列の練習とでも言おう。いや、いつそキチガイだとも思われたほうがマシかもしれない。

そんな思いがよぎって、反応が遅れたのが、命取りになった。

ちくり、と鈍い痛みが首筋に走り、四肢が力を失った。

針だ、ちくしょう。

道路に倒れ込む私を抱えると、そのままキョージユは担ぎ上げた。

「逃げちゃだめだ、って言ったじゃないですか」

紅い炎が蛇のようにまとわりつく。声も出せない私を担いだまま、キョージュはエリの家にはずかすかと入り込む。

第二話 恋が叶う呪文（7）

炎の龍が舞い、赤蛇がのたうつ。

熱のない灼光だけの溶鉱炉の中を荷駄として担がれて廊下を進んでいく。

あの短時間でどうやって片づけたものか、リビングは家具もなくまっさらで、真ん中に何故か木製の十字架が立っている。かなり大きなもので、先端が天井に届きそうだ。

アンボン島はイスラム教とキリスト教が反目しあっているが、アルフル族はそのどちらにも属さないハズ。

何故、十字架が？

十字架の周りを囲むように男性と男の子、そして朱の光の帯でぐるぐる巻きにされた繭としか呼びよつものないモノが二つ。中身はあまり考えたくない。彼らは深く寝入っているかのようにピクリとも動かない。

何かやられたんだろうな。薬かな。

他人のことは、どうでもいい。とりあえず自分のほうをどうにかしないと、状況は限りなくヤバイ。

「ねえ、キョージユ」いまだかつて使ったことのないほどの猫なで声を出してみた「もう、針とかやめにしない？ さっき逃げよう

としたのは、反省してる。悪かったと思う。でも、動転してたの…、わかるでしょ？」

「そうですよね」肩から降ろされて、十字架を背にして立たされる。台か何かがあるようで床よりちよつと高い「針は、アキ八さんを落着かせるためですから。すぐ抜いてあげますよ」

「本当？ うれしいわ」我ながらヘドが出そうだ。寒イボが出る。動けるようになったら、コイツどうしてくれよう。そもそも先に逃げ出したのがマズかった。タコ殴りにして行動不能にしてから逃げれば良かった。

キョージユは私の体を支えたまま、右手を真つ直ぐ横にあげさせる。

「何してるのかな？」

「あ、ちよつと、待つてください。すぐ済みますから」右手首を縄で十字架に結わえる。左も同じ。

「おい、こら待て…、何する気だ？」

「だいじょうぶですよ、などと言いながらキョージユはしゃがんで私の足のほうで何かしている。

「だいじょうぶじゃないだろ、コラ、オマエ、何でこんな柱に縛り付けるんだ。ヤメロ」

また首筋に鈍い痛みがあり、四肢の感覚が戻ってきた。予想通り両足首もがっちり固定されている。

「ほらあ、針抜きましたよ」

「針抜いたって動けなきゃ同じだろうが」噛みつくとしたがかわされた。くそつ、あと少して右耳が噛み切れたのに「こら、縄を解け、ここから降ろせ、卑怯者」

「じゃじゃ〜ん」

ヘンな擬音を奏でつつ、キョージュが例の石を取り出した。

「いひゃ」

かつて白かったと思われる石は、もはや血の滴と言って良いほど朱に染まっていた。部屋中の霊焰が呼応し、渦を巻いて何筋もの赤蛇を招きながら輝く。

キョージュは無造作に胸飾りの中心に石を持つてくる。

「…うわ、やめ、…それだけは、ダメ。いやあああ。死んじゃうう」

だいじょうぶ、だいじょうぶ、と唱えながらキョージュは石を私の胸にくくりつけてしまった。

胸を中心に皮膚の下を何かの幼虫が這いずり回る感触。死者の石は私を品定めするかのように瞬いた。

「あ、あああ、ああああ、あああああ」

もうダメだ。何をしても無駄だ。そう思った。

「はい、アキハさん、準備ができたので、そろそろ行きますよ」
イラたつことこの上ないしゃべり口でそう言ったキョージユは、
いつの間に錦紗の袋から出したものか、一振りの長剣を右手に握っ
ていた。

天叢雲剣。

別名を草薙の剣。

八岐大蛇の尾から取り出されたと謂われるその剣の周りだけが、
紅い炎を排している。いや、剣の周りだけではない。実際には、そ
れを持つキョージユ本人が、炎を退けている。イヤ、イヤイヤ、例
えそうであってもキョージユに頼るのはイヤだ。たぶん、剣がスゴ
イのだ。

「えつとですね」キョージユがアホみたいな顔で言う「どんな感
じですかあ？」

「どんなもこんなもない。オマエの周り以外は、マツカツ力だあ
ああ」

「あゝ、判りやすい説明ありがとう。マツカツ力ですかあ」

神よ。いま、この男をぶち殺せる力を私にお与えくだされば地獄
に堕ちてもかまいません。

っていうか、なんで、こんなヤツをこの世に蔓延らせておくんだ。

神のクソツタレ。

「この家の皆さんはどんな感じですか？」

「…皆さん、つて、…みな、わああ、ダメ、こつち来んなあ」

「…よく判らないんですけど。アキハさん…、大変なのは想像できますが、もう少しがんばってくれませんかあ？」

「だからあ、みなさん、つてなんだよ。早く助けるよ。オマエだけ涼しい顔してんじゃないよ」

「何人見えますか？」キョージュの口調が変わった。

「二人、ふたり、…ふたりいい。人で見えるのは二人。あとは繭がふたつううう」

「繭？ ああ、繭つて、ココと、ココ？」

剣の切っ先で無造作に突いた。灼朱光を纏った繭が僅かに膨潤して振るえる。

「そう、そう、それぞれええ、イヤ、クル、ワタシのほうにクルウ」

キョージュが剣で撫でた繭から、ぶつぎりにされた蚯蚓のように朱い光が割れて、胸元の石に飛び込んでくる。

「くる、くる、クルウ。いやあああ、きちや、だめええ」

「ああ、先にこつち片付けちゃいますんで」キョージュはそろそろ

と剣を引く「アキハさん、もうちよつと頑張ってくださいね。すぐですからね。だいじょうぶですよ」

ぜんぜん、だいじょうぶ、じゃないんだよ。そもそもオマエの存在がダイジョウブじゃないんだよ。ワタシもダイジョウブなわけないよ。そもそもソレ国宝かなんかじゃないのかよ。そんなゾンザイに扱っていいのかよ。何でもいいから、ここからオロセ。

「いやああああ」たつぷり二個分の繭を解いた残光がゼンブこつちに来た。

もう、死にたい。

いつそ殺して。

「よしよし」キョージユが勝手に納得している「じゃあ、そろそろ本気だしますんで、よろしく」

何だつて？

ホンキ出すって？

じゃあ、いままでの何だ？

「はい、ここから本番」キョージユが大上段に剣を振りかぶる「いつきますよ」

キョージユの動きが止まった。

いや、違う。

じりじりと剣の先端が振り下ろされてくる。

部屋の空気が一変した。

それまでバラバラにのたうっていた部屋中の光がうねりを持って一点に集中してくる。

もちろん、私の胸にある石に向かって。

もはや嫌悪とか恐怖とか、一切の人間的な感情を超えて、絶句するばかり。

光は増す。しかし、キョージユの放つ何かがその光を圧倒して、じわじわと胸の石に押し込めていく。

キョージユの剣は、もう中断まで下がっている。こんなにゆっくりと剣を振り下ろすなどということができるのだろうか？ 太極拳のあの優美で緩慢な動きよりもゆるやかに、しかも決して淀むことなく剣は降ろされてゆく。

「きょーじゅ」

「何ですかあ？」

「がんばって……」

「はい、がんばります」

何故、そんな声をかけたのか。

いまだにもって判らない。

剣の切っ先が下がる。炎はみるみる押されていく。

部屋のすべての朱が石の中に入ったと見えたその刹那。

「あ」

「え？」

「ああ……」

周りが青になった。

石が、ぴしっ、と啼いた気がした。

チツ、と舌打ちが聞こえたと思った瞬間。キョージュが剣を切り返す。

一瞬でもとの大上段に戻ったキョージュ。

部屋は当たり前の景色に戻った。

エリ、

たぶん、エリの母親、

たぶん、エリの父、

そして、たぶん、エリの弟、

みんな見える。

たぶん…、おわった。

キョージユが剣を振りかぶったまま、どう、と倒れた。

何だかよくわからずに呆けていた。

しばらくして、手首や足首が痛く感じられてきた。

おーい、とキョージユを呼んでみた。おわったよ。おわったみた
いだよ。

返事がない。

まわりの家族を呼んでみた。

おーい。

もう心配いらないよ。

縄がちよつと痛いんだ。誰か解いてくれないかな。

誰も起きてはくれなかった。疲れているのかもしれない。

私だつて疲れている。でも、我慢した。

庶務班というのがいるのを思い出した。

少し大きめの声で呼んでみた。

おーい。

みんな、おわったよ。

誰もこなかった。

もう一度、キョージユを呼んでみた。

おーい。

考えてみたら、コイツほど当てにならないヤツもいないのだった。

急に心細くなってきた。

おーーい。

おーい。

おーい。

第二話 恋が叶う呪文(8)

結局、磔のまま1時間放置された。助けが来たとき、キョージユはまだ気絶していたので、そのまま救急車で運ばれた。なるほど、救急車が便利なものだというのは良くわかった。

「ごめんねえ」とソンコさんが言った「まさか、キョージユがぶっ倒れてるなんて思わなかったから…、ワザとじゃないのよ」

ワザとじゃなくても、十字架に1時間縛り付けられたら、人を恨むには十分すぎる時間だと思う。

「何で庶務班は誰も待機してなかったんですか？」

「ああ」何をいまさらと言った風でソンコさんが言う「キョージユの仕事場に近寄りたいヤツなんていないってば。とぼっちり喰ったらいやなもの。いつも仕事中は4キロ以上離れてる。アキちゃんは特別なの」

「私も4キロ離れたいです」

「え？ 何か言った？」

「…べつに」

はい、着替え、と渡されたジーンズとTシャツをひったくる。

「で、どんな感じだったのよ？ 実際のトコロ」

問われるままに、ダラダラと話した。ソソコさんはただ肯いて聞いていたが、部屋が青くなっただけで、ぴつ、と眉が上がった。

「青くなつた？」

「…はい」何かマズいこと言ったか？

「それで？」

「石が砕けたような…」

「…砕けた？ ああ、確かに」ソソコさんは私の胸元をしげしげと見つめる「ヒビ入ってる、へえ…。それで？」

「…それで、キョージユが急に剣を引き上げたから…」

「え？」ソソコさんは目を真ん丸にした「急に、って…、一気に戻したの？ キョージユが？」

「はい」

それだけ聞くと、ソソコさんは、へー、だの、ほー、だの、あの男がねえ、だのという意味のない言葉を羅列しながら、一人で納得していた。

「あの…」思い切って尋ねてみた「キョージユ大丈夫なんですか？」

「え？ あ、何？」ソソコさんはなぜか面食らっている「ああ、キョージユ？ ダイジョウブ、ダイジョウブ、あれは殺したって死な

ないから」

「でも、力使い果たしちゃったんでしょう？」

「違う、違う」ソンコさんは顔の前でちぎれんばかりに手を振る。「むしろ逆、閉めすぎたの、あれは」

「え？」

「いい？ こうよ」ソンコさんは無刀で大上段に振りかぶりながら言った「これがキョージユの一の太刀、これで力を解放するの。わかる？」

ソンコさんは構えた手を垂直に降ろす。

「これで解放、一瞬で切ればほんの少し力を出すことになるし、振り下ろす時間が長ければ長いほど放つ力は大きくなる」

見えない切っ先を手首で返し、切り上げる。

「これが二の太刀、返す刀で自分の力を封じる。これがキョージユの虎尾返し。つばめ返しのほうが通りがいいかな。佐々木巖流小次郎の秘剣よ」

「つまり、蛇口開けたり閉めたりするようなモンですか？」

「そうそう、それぞれ」ソンコさんはキャハキャハ笑う「旨いこと言うわね。アキちゃん。それでね。今回はかなり大きく蛇口を開けたのね。それをいきなり閉じてしまった。普通は同じ速度で返すのよ。というよりは、それしか出来ないってキョージユ言ってたのよ」

ね。やれば出来るくせにねえ。それとも急に出来るようになったのかな？　んなわけないか」

「もし、いつもどおり、ゆっくり返してたら、どうなったんです？」

「え？　どうって言っても」ソンコさんは腕組して、しばし考える
「キョージユの力がダダ漏れになるだけ。周囲に術師でもいれば、再起不能になるだろうけど。一般の人には関係ないし…」

「私、もしかして再起不能？」

「ああ、アキちゃんとは別」また私を特別扱いだ「そもそも、アキちゃん、キョージユの力には影響受けないじゃないの。何故かは知らないけどさ」

「じゃあ、どうしてキョージユは急に閉めちゃったんです？　その…」問う声が少し小さくなった「あんな風になるの判っててやったんですよね？」

「さあ？」ソンコさんは首を傾げた。キョージユが何考えてるかなんてわからないもの、と、のたまう。それについては同意見だが…。

「でも、あの子、助かるかもね」

「え？」

「最後、青かったんでしょ？」

「あ、はい、そうですけど」

石が力を失う寸前、そこに見えたのは、淡い青だった。

「青は思慕の念」ソンコさんが言う「怨み辛みだけなら青くはならない。怨みも愛も根っこは同じだけど最後に残ったのが愛情なら、穴は掘らずにすむもの」

「はあ、そんなもんですか」いちおう頷いてはみたものの、あまりしつくりはこない。あの家族が助かるのは素直にうれしいのだが、何かひっかかる。

…あ、

「あのお」ソンコさんに問うてみた「この間の猿の手も青かったんですけど…、しかも真っ青」

「え？」ソンコさんが一瞬怯んだように見えた「じゃあ、伝え聞いてたのと、ちょっと違うような。嫉妬じゃないね…」

「あの…、それって」私もちよつと言い淀んだ「男性同士のアレ？」

「坊主は多かったみたいね、昔は。空海はイイ男だったらしいし、しかも異国からの留学僧ともなれば…」

「はあ」

そういうことなら、腕の一本も切り落とさないと解脱できんか。

一段落着いた帰りしな、改まった口調でソンコさんが話しかけてきた。

「あのね、アキちゃん…。お願いがあるんだけど」

「何ですか？」思わず身構えた。最近、ソンコさんのお願いはロクなことがない。

「うん、キョージユのことなんだけど」ソンコさんは深刻な顔だ「今度会ったら、ウチの娘にちよっかい出すのやめるように言ってくれない？」

「へ？」なんじゃ、そりゃ？ 娘って、突然、何？

「シヨミよ。シヨミのこと」

あー、あの子。

そう言われれば、確かに、似ていなくもないが、それにしたって

「そういうことは、自分で娘さんに言われたほうが？」

「さんざん言ったわよ」ソンコさんは急にむくれた「ぜんっぜんっ、親の言うことなんか聞きやしない。サンタぐらいなら大目に見ないこともないけど、よりによってキョージユだなんて、絶対許さない」

「だから、娘さんが無理なら、直接、キョージユに言ってください」

「キョージユが人の言うことなんか聞くとと思う？」

「いや、ぜんぜん」

「でしょう？　だから、アキちゃんから言っで、ね。お願いだから
目の前で拝まれてしまったが、はっきり言っで、すごく困る。

そもそも、キョージユが私の願いを聞き入れてくれたことなど、
一度もないよ。

第二話 恋が叶う呪文(9)

野暮用でサンタの店に行ったら、シヨミがいた。

「あ、アキハだあ」あわてて外に出ようとしたが遅かった。

シヨミはちよつとアレな趣味のアンティーク品の間を、すすすと抜けてくる。

何か怪しくニマニマしている。やはりあの人の娘だというのは本当みたいだ。よく似ている。

「アキハってホントはスゴい人だったんだね。サンタに聞いたよ」

何をどうサンタが語ったものか、とつちめてやろうと思うより早くシヨミが言った。

「生贄のスペシャリストだったなんて、びっくりした」

それは褒めてくれているのかしら？ シヨミちゃん？ お姉さん、全然うれしくないんだけど。

シヨミは瞳に星でも入ったのかと思うほどキラキラさせている。この間会った時とは別人のようだ。

「あの…、何か用かしら？ シヨミちゃん？」

「うん、用あるよ」シヨミが言った「キョージュ呼んで」

「え？ キョージユ」

「そう、キョージユ。サンタってば、キョージユ呼ぶの嫌がるんだよ。だから、アキハ、お願い」

相変わらず唐突な子だ。

一瞬、私を拝み倒すソンコさんの姿が浮かんた。

が、しかし、

よく考えてみれば、ソンコさんにはいつもひどい目にあわされているような気がする。彼女の願いを私が聞かねばならない理由がどうしても思いつかない。というより、あの女は少し痛い目をみたほうがいいんじゃないかと思う。

それに、

この小娘がキョージユにまわりついてくれるのなら、相対的に私の不幸は幾ばかりか減る方向に向かうのではないか？

そうだ。そうしよう。

携帯を取り出しボタンを押す。

「いま、呼んであげるよ」

「わーい」

これは意外といい考えかもしれない。無邪気にはしゃぐシヨミを見ながら、キョージユを呼び出した。

またファミレスにする？ と問うと、シヨミはその公園でいいと言う。

二人で待っていたら、何をどうしたものから分でキョージユが来た。

「アキハさん、何か用ですか？」コイツはいつたいどこにいたんだろう？「おや、シヨミさん、こんにちは」

「こんにちは、キョージユ」この小娘、物怖じとかいう言葉とは無縁らしい「アタシが、アキハに頼んで呼んでもらったんだよ」

「おや、それは、また」キョージユはちょっと怪訝な顔をした「何の用です？」

「このまえ言ってた、アレ、教えてよ」

「アレ？ と言いますと？」

「オトコをメロメロにする呪文」

やはり、よくわからないヤツだ。でも、キョージユが手を焼いているようなのでヨシとする。

「アレはアナタにはちょっと難しすぎと思いますが」

「それはアタシが決めるからいいよ」

「非常に危険だと言ったはずですけど？」

「そうというのは、いつだって命懸けでしょ？」

「わかりました」意外にもキョージユはあっさり陥落した「ちょっと耳貸してもらえますか」

大丈夫なのか？　おい。軽そうなキョージユの行動にこっちが心配になってくる。

キョージユがシヨミの耳許でぼしよぼしよと囁いている。最初のウチこそニコニコ聞いていたシヨミだが、やがて眉間に皺がより、あからさまに片眉を上げた。

「それって、アンタ、自分でやったことあるの？」

「まさか」キョージユは首を振る「こんなこと、恐くてできませんよ」

「アンタ、聞きしに勝るヒドイ男だね」シヨミはキョージユを睨みつけた「サンタの言う通りだわ」

シヨミはいきなりキョージユの向こう脛を蹴りとばして逃げた。突然の攻撃にキョージユは声も出せずにうずくまる。

公園の入口まで駆けていったシヨミは、振り向くと口に手を当てて叫んだ。

「アキハ、キョージユ」それはよく通る声だった。「エリを助けてくれて、ありがとう」

母親より、だいぶ可愛げがある。

弁慶の泣き所をさするキョージユは、うずくまったままだ。そんなキョージユが見られるだけでも、かなり気分が良い。

しゃがんでいるキョージユを覗き込んで問うてみた。

「いったいシヨミちゃんに何いったんですか？」

「だから、恋が叶う呪文、です」キョージユは泣きそうな顔で言った。「自分で聞いておいて、こんなことするなんてヒドイ」

なんだか急に、その呪文が知りたくなった。

「それ、どんな呪文なんです？」

あなたもですか？ とキョージユが言う。すごく嫌そうだ。キョージユの嫌がることなら、聞いてみたい。

「ケチらないで教えてください」

「いいですよ」キョージユはふてくされて立ち上がった。「ものすごく強力ですから、使用は慎重に」

「わかってます」やけにもったいぶるな、コイツ。

キョージユは私に向き合って立った。

「まず、相手の目を見ます」

「はい」

「真剣に、じっと見つめるんですよ。それから…」

キョージユは大きく深呼吸した。

「あなたを愛しています」

頭の中が真っ白になって、なんだかわからなくなった。

ぼーっと立ち尽くす私の顔を一瞥し、キョージユが付け足した。

「って、言っんですよ。わかりました？」

右手が一閃してキョージユの頬をしたたかに張った。キョージユがもんどりうって宙を飛ぶ。

「何、するんですかつ」キョージユが悲鳴をあげる「女の人、って、どうして、そう同じようなコトばかりするんですっ」

「生命の危機を感じたから」心地よい痛みに痺れる右掌を見つめながら答えた「単なる自己防衛の反射行動です」

確かに最強の呪文ではある。キョージユの言っていることは正しい。

正しいからといって、受け入れられる類のものではないのも、また確かなことだ。

<恋が叶う呪文 - 了>

第三話 純潔を守る秘宝（1）

「…えーつとね、じゃ、もう一回、最初から説明するから、ちゃんと聞いてね」

「…はい、どうぞ」

「まず、先方のお宅に着いたら、玄関の呼び鈴を鳴らす」

「はい」

「そうすると、たぶん、どなたですか？ って聞かれるから、ソンの友人です、って答えるのよ。わかった？」

「はあ」

「そしたら、むこうが、よくおいでくださいました、お入りください、とか何とか言うから、そこで、この鍵で玄関を開けて…」

「わかりません」

「はあ、とソンコさんはため息をついた。しかし、あきらめる気はさらさらなさそうだ。

「じゃあ、もう一回、説明するからね。まず、むこうに着いたら…」

「どなたですか、って聞かれたら、ソンコさんの友人と答え、お入りください、と言われてから、鍵を開けて中に入る」

「なんだ。ちゃんとわかってるんじゃない」ソンコさんは、ニッコリ微笑んだ「じゃ、頼んだわよ。後はヨロシク」

「まだ聞いてないことがあるんですが？」

「何よ。全部説明したでしょうが？」

デスクの上に置かれた鍵を見つめる。なんの変哲もない部屋の鍵だ。その鍵をはさんでソンコさんと私はにらみ合っている。

「どうして家の中に依頼人がいるのに、私が家の鍵を開けるんですか？」

ソンコさんは椅子から立ち上がった。デスクを廻り、私の傍らに寄ると、顔を目の前三十センチに持ってきて言う。

「いい？ アキちゃん。わからないようだから、もう一回だけ説明してあげる。まず、先方に着いたら玄関の呼び鈴を鳴らすの、そうすると、どなたですか？って聞かれるから、あたしの友人です、って答えて、それから…」

「…わかりました。もう…、いいです」

「まあ、アキちゃん」ソンコさんは破顔一笑、私の肩をポンポンと叩いて鍵を上着のポケットにねじ込んだ「絶対アキちゃんなら引き受けてくれると思ってたんだあ。じゃ、がんばってね」

無然としてデスクの前から動こうとしない私に、ソンコさんがさらに追い討ちをかける。

「あ、キョージユも連れてってね」

「何で？」一転して語気が荒くなる。キョージユと聞いたら当然だ。

「だって、鬱陶しいんだもの」ソンコさんは当然のように言う「最近、用もないのに詰所に現れては、その来客用のソファに座って週刊誌読んだりしてんのよ。ちらちら入り口のほう眺めながら。アキちゃんが、ちゃんと面倒見てあげないから」

「何で、私がキョージユの面倒見るんですか？」

「今月から危険手当上乘せになってるでしょうが、貰うものだけ貰って、仕事しないっていうのは、お姉さん関心しないなあ」

給与明細なんかよく見てなかった。本来赤字のハズのカードの引き落としがすんなり通ってしまったのは、単なるラッキーだと思っていたが、そういうことだったのか。

「あの、いまからお金返しますから、それは無かったことに……」

「だめ」ソンコさんはニコニコ顔でちぎれんばかりに両手を振った。「じゃあね。キョージユには連絡つけといたから、途中で合流すると思うよ」

ソンコさん……、最初から押し付ける気まんまんじゃないですか。

第三話 純潔を守る秘宝（1）（後書き）

術師たち（表）シリーズ第三作目です。

キャラクター人気の噂も高いレイカ様が初登場します。ソニコさんも今回はがんばっているのですが、あまり評判が良くありません。いつも不幸なアキハさんですが、この話では少しだけいいことがあったようです。

第三話 純潔を守る秘宝（2）

「あ、違いますよ。最初に呼び鈴を押すんです」

バッグから鍵を取り出した私にキョージユが言うので、睨みつけた。

「わかってます」

本当に来やがった。コイツもソンコさんも大嫌いだ。

あらためて呼び鈴を鳴らす。

「どなたですか？」

声はインターホンからではなく、玄関のドア越しに聞こえた。

「あの、駿河さんの友人のアキハと申しますが」

「まあ」声は急に華やかに響いた「お待ちしておりました。どうぞ、お入りください」

手に握った鍵と玄関扉の鍵穴を見つめる。玄関が開く気配はなく、やはりこの鍵で開けるようだ。

キョージユが肘でつつんするので、もう一度睨みつける「わかってますから」

鍵を差し込んで廻すと、がちゃり、と重い音がした。

「どうぞ、こちらへ。廊下をまっすぐ」玄関を開けてすぐに、声は奥のほうから呼びかけてきた。呼ばれるままに靴を脱いでスリッパに履き替え廊下を進む。

豪華な、とは言いすぎかもしれないが間口の広いゆったりとした家だ。調度も持ち主の趣味の良さが出るようで、落ち着いた雰囲気を感じさせる。

「わざわざ、お出向きいただいてありがとうございます」

リビングで待ち受けていたのは感じの良いご婦人だった。軽く一礼する仕草にも優美さがともなう。セレブってこういう人のことかなどという雑念が頭をよぎる。

勧められるままソファに腰を降ろした。キョージュも隣に座ったが、まあ、これは仕方がない。嫌だけど。

「お飲み物は何がよろしいでしょうか？」

「あ、あの…、お構いなく」

「ダーズリン・オレンジペコが好きです」

キョージュをぎっと睨みつける。夫人は小さく、ほほ、と笑い、お嬢さんもそれで？ と尋ねてくる。顔を真っ赤にして声もなく頷く。

夫人が紅茶を煎れに行っている間に、キョージュをつねる。

「何であんなこと言うんですか？」

「好み聞かれたんでしょ？ 間違いました？」

「それはそうだけど、あんなずけずけ言うことないでしょ」

「遠慮したんですよ。昼間からブランデーくださいとか言えないでしょう？」

もうコイツには何も言うまい。

ほどなく夫人が盆を持って現れたが、ティーカップの隣にブランデーの小瓶を認めた時は、顔から火が出るかと思った。

キサマは声が大きすぎるんじゃない、内緒話も満足にできんのか。

紅茶を口に含んだが、頭に血が上って味も香りもわからない。

「お一人でお住まいなんですか？」

「ええ」キョージユの問いに夫人は軽く頷く「夫は単身赴任で外国の方に」

外国ですか？ と私が問うと、夫人は、フランスです、と返した。

いいなあ。フランスか。一度行ってみたい。

「実は、相談というのは、その…、夫のことなんです」

「はあ」頼りなさげに相槌を打ちながら、キョージユのほうを盗み見る。キョージユは、そのまま続けて、という風に目線で合図する。気乗りはしないが、キョージユが聞くよりは私のほうがマシかもしれない。

「ご主人が、どうかされましたか？」

「はい、夫の書斎で不思議なものを見つけてしまいました」

「不思議な、もの、ですか？」

はい、と頷いた夫人は、どうぞこちらに、と促しながら先に立てリビングを出て行く。

奇妙な感じは拭えなかったが、他にどうしようもない。夫人に従いこの家の主人の書斎へと向かった。

第三話 純潔を守る秘宝（3）

よろしく願います、と夫人に頭を下げられ邸を辞した。

「あ、アキ八さん、駄目ですよ。ちゃんと鍵かけないと」

あゝ、こつるさいヤツだ。はいはい、わかりました、かけますよ。

がちやり、と重い音。玄関を閉める。

それにしても、おかしな物を押し付けられてしまった。いちおう、調べてみますと言って受け取ってはみたものの、どうしたものか。

いまバッグの中に入っている。夫人の言う不思議なものとは、金属製の下着だった。丁寧に宝石で飾られている上に、左右には対の錠前。

差し出した時の夫人の微妙な表情も無理もない。

いわゆる貞操帯である。

アンティークとしてそこその価値はありそうだが、それにしても、何故？

何故？　ウチなんか相談するのだ？

まあ、ソニコさんの知り合いらしいから、ソニコさんに相談するのは百歩譲るとしても、何故こつちに持つてくる？

わかつている。あの夫人のせいではない。

悪いのはソンコさんだ。

「どうでしょうか？」

「うーん」キョージユは腕組みしている「こういうのは僕のほうからはなんとも言えませんねえ」

正直、キョージユにはまったく期待していなかったが、いざ、こう言われると心細い。

「サンタくんにも見せてみたらどうですか？」

なるほど、サンタがいたか。おかしな店をやっているから、おかしな物には詳しいかもしれない。

「あと、おせっかいかもかもしれませんが、アキハさん」珍しく神妙な物言いのキョージユである「あちこちで名乗るの控えたほうがいいですよ」

「は？」

「さっきも、ソンコさんの友人って言えって言われてたのに。アキハです、って言うっちゃうし」

「だから、ソンコさんの友人のアキハです、って、ちゃんと言いました」

「そうじゃなくて」キョージユは何か困っているようだ「我々、術師はですね。基本的に名乗ったりしないんです、ってば」

「何で？」

「だって、呪われたら困るでしょ」何をいまさら、という顔のキョージユ「最近では、流行らない呪法だから、あまり気を使う必要はないといえませんが」

「でも、私、キョージユの名前知ってますよ。近衛公人さんでしょ？」

「偽名のうちのひとつです。一般の人には、我々の慣習は奇異に映りますから」

何ですとお、

「どーして、そんな大事なことをいまになって言うんだ、オマエは。いや、オマエらは。」

「じゃ、駿河、って」

「まあ、それは旧姓なんで偽名とは言えないけど、ある意味、昔の知り合いみたいだし…。それにしたって、駿河ソノコ、なんておかしな名前の人、いるわけないじゃないですか」

常識で考えてください、ジョーシキで。と、ことさらキョージユは常識を強調する。

オマエに言われる筋合いはないぞ。だいたいそのどこが常識な

んだ。

「サンタの店に行ってきます」

キョージユはサンタの店に寄り付かない。どちらが嫌がつているのかは、いまのところ微妙だが、あそこならキョージユの顔を見ないですむ。

代わりにサンタ、というのもアレだが、いまはそんなこと言っていられない。

「あと、わかってると思いますけど」キョージユの声が私の背中に飛んだ「さっきのお宅に一人で行ったりしたらいけませんよ」

そんなこと知ったことか、ボケッ。

第三話 純潔を守る秘宝（4）

ファントム・ショップ・サンタの店主は昼寝していた。

自分の店で何をしていようが、店主の勝手、といえば勝手だが、むやみに腹が立つ。

「こら、起きろ」

カウンターに突っ伏していた上半身が、もぞり、と上がる。

「おや、こんちは」

サンタは大きくノビをした「何か用？」

「これ、どう思う？」例のブツをカウンターに置く。

サンタは手に取って、裏返したりと一通り調べてから言った「ウチじゃ扱えないなあ」

そういうことを聞いてるんじゃない。

「何かこもってる、とかそういうのなの？ 因縁とか何か見てわからない」

「そういうモンのは確かでしょ」この男、明らかにやる気がない「アキ姉さんに見えるんだから、ヤバいモンには違いないよ」

「どついつ意味？」

問いには答えず、サンタはソッポを向いて言う「キョージュはどう言ってるの？」

「あ、え？ キョージュ？」いきなりキョージュの話が出てきたので、少しまごついた「サンタに見せろって、そう言われて来たの」

「ああ」サンタは納得したように頷いた「そりゃ、キョージュにしたら、そう言うしかないよねえ」

何が何だかわからない。

埒があかないので、事の来歴を話してみる。サンタは聞いているのかどうかさえわからない。フワフワしている。

「ちょっと、アンタ、聞いてんの？」

「んー、聞いてないけどさ」サンタはどこ吹く風だ「で、アキ姉さんは、どうしたいのよ。これ着きたいの？」

思いつきり、首を左右に振る。何でそういう話になるんだ？

「そうだよな。あまり必要なさそうだしね」

もしもし？ それどついつ意味かな？

「ま、もともと身に着けるモンでもないしさ」

「へ？ 何で？ 貞操帯って身に着けなかったら意味ないでしょ？」

またまたあ、サンタは右手をヒラヒラ振った。「着けないよ。昔の恋人同士がさ、送ったり送られたりしたんだよね、コレ。俺のために綺麗な体でいて、とか、あなたに操を守ります、とかさ。実際は、そういう連中に限って浮気し放題なんだけど」

「だって、本当に着けた人だっているかもしれないじゃない」

「無理だよ」サンタは鼻を摘む仕草をした「だって臭いもの」

「は？」

「外人って体臭きついんだよ。こんなもの着けてたら、三日でたいへんなことになって百年の恋も冷めちゃうよ」

「はあ」

なるほど、そんなことは、ついぞ思いいたらなかった。

「信じてたのはルイ16世くらいじゃないの？」

「フランス王の？」

「そ」サンタは貞操帯の錠を開ける仕草をした「王なのにモテなかったらしいからね。地下室にこもってずっと開錠の研究してた。貞操帯の錠が開きさえすれば女の人とイイコトできるって思ってたらしいよ」

仏ブルボン最後の王に多少の憐憫は感じたものの、当面、いまの仕事にはまるで関係がない。

「じゃ、ご主人は、奥さんにこれを着けさせたかったわけではないんだ」

「旦那のことは知らないよ」またサンタはわからないことを言う「これ奥さんのだもん」

「だって…、さっき言ったでしょう？ これは旦那さんの書斎から出てきたのよ」

「どこから出てきたって、奥さんのものは奥さんのもの」ここでサンタはちよつとだけ言葉を切った「あ、奥さんじゃないや。奥さんに見えるような奥さんじゃないモノのモノ」

ぜんぜん、意味わかんないんだけど…。

「それじゃ、これは単なる装飾品で、念がこもってるとか呪物とかそういうシロモノではないのね？」

「呪物だよ」サンタはぼけつとした顔になった「アキ姉さんに見えるんだから、普通のものなわけないじゃない」

「だから、それ、どういう意味よ？」

あゝ、わかった、わかった、説明するから。そう言ってサンタは店の奥に入って行った。何かごそごそやっていたが、目当てのモノを探し当てらしく、カウンターの上に持ってきた。

黒い箱だった。

「これ何色に見える？」

いま運んできた箱は無視して、サンタは傍らのペンダントを取って差し出した。翡翠の透かし彫りだが、たぶん見た目の色を尋ねているわけではない。

「赤」それは鬼灯のように薄ぼんやりと揺らめいている。

「じゃ、これは？」

柘のかんざしで、うつとりするほど見事な菊が彫りこまれていた。

「青」

「これは？」

短剣、柄の部分に宝珠がはめ込まれている。

「緑…かな」

「ふーん、じゃあ、これは？」

サンタが思わせぶりに箱を開けて見せたのは、一見何の変哲もないとんぼ玉だった。細工も甘いし色もそれほど鮮やかではない。なにより、他のモノと違って何の光も見えなかった。

「よくわからない…」

「やっぱりね」サンタはボタンと箱を閉じた。

「何がやっぱりなのよ」

「アキ姉さんは、普通のものも普通でないものも見えるけど、キョージユは見えない」

サンタは、すつ、と黒い箱を前に押し出した「これあげる。我ながら、良いデキだったみたい」

「え？ 貰えないよ。こんなの」

サンタの護符は仲間内でも一級品で通っている。本人がデキが良いと言ってるのだからかなりのものはずだ。そんな簡単に貰うわけにはいかない。

と言うより、デザインがダサすぎてヤダよ、こんなの。

「まあ、そう言わずにさ」サンタはしつこく薦めてくる「たぶん、アキ姉さんにしか持てないし、効かない。作ったのはいいけど、俺には強すぎてこの箱に閉じ込めて置くしかない。アキ姉さんに引き取ってもらうしかないんだ」

大事にしてね。とサンタは言った。

何だか、

へんなの。

第三話 純潔を守る秘宝（5）

いろいろあつて、疲れた。

もう、このまま家に帰ろうかとも思ったのだが、帰り道だし、なんとなく詰所に寄ってしまった。

ソンコさんがいた。

しまった、と思った。疲れのせいで思考力まで低下しているらしい。

「調子どお？」

逃げる気力も失せていたので、ぼそぼそと報告する。

ソンコさんはニコニコしながら聞いている、私がバッグから取り出したものを摘んで目の前でしげしげと見ている。

「へえ、これが、貞操帯かあ、あたしには小ちゃくて無理だな」

着けんでいいです。ヘンな想像しそうなので、そういうこと言うのやめて下さい。疲れてるんです。

やっぱり鍵なのかな、とか、ソンコさんはぶつぶつ言っている。

「何が何だか、ぜんぜん、わかりません」そう言って報告を締めた「キョージユもサントも役に立ちません。終わり」

「ご苦労さま」ソンコさんは上機嫌だ「だいぶ進んでるみたいで安心した」

何がですか？ いったい、どこがどう進んでいるんですか？ 何か思うところあるんなら教えてください。

目力のありったけを注いで、ソンコさんを見つめたが、ニコニコしているだけで反応はなかった。

来客用ソファに身を投げ出す。このソファに客が座っていたのをついぞ見たためしがない。

「キョージユって、どんな人なんですか？」

特に意味があって聞いたわけではない。たぶん、疲れていたからだと思う。

「どうって言われてもねえ」

ソンコさんは天井を向いて指折数えだした。

「まず、傍若無人で天下無敵だわよね」

それは知ってる。

「あと、他人の話は聞かない」

それも知ってる。

「それと嘘つき。しかも性質の悪いほう」

性質の良い嘘つきと性質の悪い嘘つき、ってどこが違うのか問うてみた。

「んー、性質が良い、っていうより普通の嘘つきはね、嘘ばかり言うんだよね。だから無視していいんだけど、キョージユは違う」

「…と言うと？」

「ときどき本当のこと言うんだ、アレは。それで無視すると、コトが起こってから、ちゃんと言ったじゃないですか、と、こう来る訳」

「…ああ」確かにそれは性質が悪いな。

「何でそんなこと聞くの？」ソンコさんがニマニマしながら逆に聞いてくる「少しはキョージユのこと気になる？」

「そんなんじゃないですけど…」なんとなくバツが悪い「サンタにキョージユの話聞いてもよくわからないことが多いんで」

「ああ、サンタじゃ、わかんないだろうね」

「誰か、キョージユのこと知ってる人で、壊れてないの、っていいんですか？」

「ああ？ えー？」ソンコさんは困っている風だ。「…親がいるな」

「いきなり、親御さんは、ちょっと…」

「そお？ ま、アレも壊れてる部類に入りそうな感じだし、壊れてないのねえ……」

キョージユ知ってる人間が全部壊れてる、って実際どうよ？

しきりに首をひねるソンコさんだったが、最後に控えめに尋ねてきた。

「性格的にはアレなんだけど、キョージユが壊したわけじゃないの
が一人いるよ。会ってみる？」

「どういう感じにアレなんですか？」

「傍若無人で天下無敵、他人の話を聞かないんだ」

「キョージユと一緒にすること？」

「いや、彼女は嘘つきではないから」

「彼女、って女性ですか」ちょっと興味がわいてきた「どうやって
ら会えるんです」

「呼べば来るよ。たぶん……」

「ここに来るんですか？」

「うん、霊峰友愛の関東支部長だし、支部はすぐそばだから、呼べ
ば来るよ」

「ちょっと待て」電話の子機を握るソンコさんの手をつかむ「霊峰友愛、ってウチとドンパチやってる術師集団じゃないですか…、その支部長、…ここに呼ぶって」

何考えてんだ、アンタ。

「…あ、もしもし、ソンコです。…あら、レイカ様、ご本人？ ちょうど良かった」

ソンコさんは子機を両手で押さえながら話し、取り上げようとするこちらの腹を右足でぐいぐい押してくる。なんて足癖の悪い女だ。

「…そ、ソンコよ、レイカ様。ちょっとこっち来ない？ あんたのダーリンの新しい…、いや、あんたのダーリンが呼んでるんじゃないやなくて、あんたのダーリンの相方を…、って、切っちゃったよ、あゝあ」

ソンコさんは子機を置いた「相変わらず、人の話を聞かないな、あの女は。絶対、勘違いしてる」そして私のほうを向いて言った「来るって。まあ、とりあえず見るだけでも見とけば？ 面白いよ」

傍若無人で天下無敵、他人の話を聞かない、性質の悪い嘘つき、もう一人いましたね。いまごろ気づく私も馬鹿ですが。

もう、敵対勢力の支部長でもなんでも連れてくればいいじゃん。少なくともソンコさんの言うことが本当なら嘘つきではないそうだし、それだけでも私の周りの人間たちに較べれば限りない美点だ。

第三話 純潔を守る秘宝（6）

「マイダーリン。あなたのレイカが参りましたわよ」

一瞬、詰所の入り口が観音開きに開いたのかと思った。もう一度見直すと、ただの横開きの普通のドアだ。

レイカ様、は、一種独特な方だった。

「ダーリン。どちらにいらっしゃいますの」

純白のチャイナドレスは胸に真つ赤な大輪のバラを咲かせている。確かに美人と言って差し支えない容姿だが、小首をかしげるたびに揺れる縦ロールは、コケティッシュというより、ロココ調の重厚さを思わせる。

「ダーリン。お隠れあそばして、レイカをいじめるなんて、なんて酷い方なの」

三度目のダーリンを聞いて、もしかして、キョージユのことか？
と思い至った。これは…

ある種の期待と興奮を禁じえない。

「ちょっと、ソンコ、アタクシのダーリン、どこやったのよ？」

遂に4度目で、レイカ様は、ソンコさんに怒りを爆発させた。というよりは、いままでソンコさんが目に入っていなかったというほ

うが正しいようだ。

「うん、ちよつと電話が遠かったみたいだね」いつになく丁寧なソ
ンコさんである「レイカ様にさ、ちよつと会わせたい人がいたんで
ね」

「アタクシは、ダーリン以外に逢いたい人なんていなくてよ」

「まあ、そう、つんけんしなさんなつてば、幼馴染なんだし、も少
し人あたりよくしてくれないかな」

ソンコさんと幼馴染。レイカ様、推定四十路、いわゆるアラフォ
ーでよろしいでしょうか？ それで、真紅のバラ入り純白チャイナ
に縦ロール、その風体で中華街でもない街並を闊歩できるとは、半
端ないです、レイカ様。

「アタクシはいつだって、人には優しく接しているわ」嫣然と微笑
む、レイカ様。雌豹がトムソングゼルを前にすると、たぶんこんな
風に笑うんだろうな。

「あんたのダーリンの新しい相方」ソンコさんは私を紹介した「レ
イカ様も噂くらいは聞いているでしょ」

成り行き上、しかたないので頭を下げる。

レイカ様は、ここでようやく私に気づいたらしい。大きく腕組み
をし、冷たい目で私を見下ろしている。と、ほどなくレイカ様の片
眉がぴくりと上がった。

「何よ。この子。数奇屋稀介の娘じゃないの」

いきなり父の名前を言われて驚いた。レイカ様は、今度は品定めでもするかのように私を視線でねめる。

ふーん、ほー、へー、など擬音を駆使しながら、レイカ様は私の中の何かを読んでいるようだ。

「ソンコにしては面白いこと考えたようね」言いつつ、レイカ様はソンコさんを睨む「けど、この程度でアタクシからダーリンを奪えると思ったら大間違いよ」

いや、奪う気ないし、あなたのものでしたら、そもそも手をつける気なんぞまったくございません。どうぞ、末永くお幸せに。心の底からそう思ってます。

「こっちも苦肉の策だね」ソンコさんが答える「この子の親については、まあ、関係あるような、ないような、ってトコ」

「ごまかしたって無駄よ」レイカ様の声は氷のようだ「数奇屋稀介の娘とは知らずに偶然ダーリンにあてがいました、なんて誰が信じられると思うの？」

「あの…、父をご存知なんですか？」割って入るのもどうかと思っただが、好奇心が勝る。

「知らないわけないでしょう？ 数奇屋稀介よ。アンタも娘だったら、そのぐらいわきまえてるでしょうに」

「あ、すみません。そんなにコケシが好きとは見えなかったもので」

レイカ様が絶句し、そしてソンコさんが堪えきれずにふきだした。

「ちょ、アンタ、娘のくせに数奇屋稀介が、何者か知らないの？」

「娘の私が言うのも何ですが」レイカ様が何を興奮しているのかわからない「立派なコケシ職人でした」

「そりゃ、コケシも作ってはいたけど…、ちょ…、アンタ。ソンコ、何なのよ、この子」

ソンコさんはお腹を押さえて笑い続け、息も絶え絶えだ。レイカ様の怒りに答えるのもままならないよう。あおりをくらって、こっちがレイカ様に怒鳴られる始末だ。

わけがわからない。

「ごめ…、ゴメン」ソンコさんはそれだけ言うのがやっとのようだ
「もうだめ、お腹痛い」

バカにしてえ、おぼえてらっしゃい、ぜったい後悔するわよ、と絶叫を残し、レイカ様はお帰りになった。

後には笑いの止まらないへんなオバサンが残った。

こうなると使い物にならない。

携帯のコールが鳴った。笑い声がやかましいので、ここでは電話は取れないと判断し、廊下に出た。

「はい、アキハです」

電話の主は依頼人の夫人だった。やっとまともな人と話ができてホッとした。

「急かすように申し訳ありませんが」夫人は言う「何かわかりましたでしょうか？」

「成果と言つほどのものはまだ…」

お気になさらずに、と夫人は言う。半日もたっていないのだから、何かわかるかなど期待していたわけではないが、ひとりであれこれ考えていると、良くないことばかり頭に浮かんでくるのだという。それで迷惑とは思いつつ電話してしまつた、と。

二言、三言、会話を交わすうちに、なぜかもう一度お宅にお邪魔することになってしまつた。

まだ午後3時を少し回ったばかりなので時間的に余裕はあるが、何の話をしたものか、そちらのほうが気が重い。

約束してしまったので、出向くしかないと思うが。

部屋の中では、まだソンコさんが笑っている。

第三話 純潔を守る秘宝（7）

呼び鈴を押す。

「どなたですか？」

「さきほどお電話いただきました。アキハです」

「まあ、お待ちしております。どうぞ、おはいりください」

やっぱり、この鍵で開けるんだよなあ。

鍵を、がちやり、と廻した。

夫人は玄関先で待っていた。どうぞ、こちらへ、と促されるまま、奥へと進む。

「ダージリンでよろしいんですね」

「はあ、あのお、お構いなく」

私が紅茶を口に含むのを夫人はうれしそうに眺めている。どうも気恥ずかしい。

「ご依頼の件なんですが…」

「ああ、それでしたらまた後にでも」

え？　それで呼ばれたんではなかったですか？

「ブリオツシュ、焼いてみたのだけど、召しあがる？」

「あ、でも…」

「遠慮なさないで、あ、もしかしたら、ブリオツシュはお嫌い？
あとお出しできるのは…、あ、テリーヌがあったわ。あれなら…」

「…好きです。ブリオツシュ、大好きですから。いただきます」

夫人は嬉々としてキッチンのほうへ、なんか汗が出てきた。

返ってきた盆の上にはブリオツシュだけでなく、テリーヌと、メ
ロンに生ハムがのっている。

もしかして、冷蔵庫を空にするまで帰してもらえないのでは？
と不安がよぎる。

ブリオツシュを一口噛んで、紅茶を含む。

「料理は嫌いではないんですけど」夫人が言う「どうしても作りす
ぎてしまうので、困ってしまうんです」

「あ、わかります、一人分つくって訳にはなかなかいかないから、
私もそれで、つつい外食に」

「あら、アキハさんお一人でお住いな？」

「はあ、ワンルームで、変形なんで7畳ちょっとくらい、狭いんで

す」

「あら、それなら」夫人はちょっと不思議な表情をした「この家、どう思われます？」

突然だったので、質問の意味をはかりかね、ちよつと沈黙してしまつた。

「ほら、この家、一人では広すぎますでしょう。アキ八さんさえよろしければ。下宿？ そんな感じでここにいていただければと思つて」

「あ、あの、それって……」

「このテリー又いける。シャンパンが欲しくなるな」

誰？ この人？

ぴたりと体に張りつく丸首の黒いサマーセーター、これまたどうやって履いたのか不思議に思えるほど細い黒のスラックス。

黒のマネキンに両手と首だけをつけたような男が、左隣にいた。

「ね、お嬢ちゃん、キミもそう思わない？」

いや、まだ、そのテリー又いただいてないもんで。

この家の人かな、と思つて夫人のほうをチラと見る。さきほどまでのにこやかな表情は消え、冷たい陶器のような顔がそこにあった。

「シャンパンの用意はございますけど、その前にお名前を伺ってよろしいかしら？」

「名乗るような名前の持ち合わせはないんでね」男は顔の皮だけで笑ってみせた「それに俺が用があるのは、こっちのお嬢さんのほうなんだ。アンタじゃない」

え？ 私？

あらためて男の顔を見た。日本人ばなれした掘りの深い顔であるが、見覚えはない。そもそも、どこからわいて出たんだ、コイツは？

「レイカ様が、拐ってこいつて言うもんでね」男は嫌味なくさらりと言つてのけた「不本意ながら上司には逆らえないんだ」

「レイカ様…、上司、って、アナタ…、霊峰友愛の人？」

「お、話が早いね。じゃあ、行こうか」

「行かせないよ」

今度は右隣だ。この声には聞き覚えがあるが…。

「おお、サンタじゃないか、久し振りだな。元気かい？」

「あまり元気じゃないよ。カゲ」

突如として現れた男二人が私を挟んで睨み合っている。状況によつては喜ぶべきことかもしれないが、これは…。

そもそも、オマエら、どこから出て来たんだよ？

サンタがカゲと呼んだ男がため息をついた「レイカ様、お嬢ちゃんのは誰もいないって言ったから、喜んで来たのにな……」

「実際、誰もいないだろ」サンタが挑発するように言う。

「…ア、ハン、なるほど…」男はニヤリと笑んだ「それじゃ、サンタ。オマエ何もできないんだな？」

「何もできないよ」サンタは欠伸した。わざとらしく両腕を目一杯に伸ばす「カゲ、それはアンタも同じだろ」

「そりゃ、そうだ」男は笑った。本当に愉快そうに「イヤな感じだな。俺の嫌いなキョージユの気配までするし」

「俺が何もできなくても」サンタは相変わらず薄ぼんやりしている「俺の護符はイロイロできるよ」

「キョージユ臭いのはそのせいか」男の顔から笑みが消えた「出直したほうが良さそうだな」

「アンタのそういう見切りの良いところはクライじゃないな、カゲ」

男はフン、とサンタに一瞥をくれると、夫人に向き直って言った「テリー又うまかったよ。シャンパンは惜しかった。邪魔してすまかった」

そして、現れた時と同様、唐突に消えてしまった。

「アキハさんのお友達なの？」

「いや、いなくなったほうは違うと思うんですけど」夫人の問に答えるのは正直辛い「残ったほうは、それに近いという何と言つか…」

「アキハさんのお友達なら歓迎です」夫人はサンタに言った「あなたもお茶召しあがる？」

「いない」サンタは素っ気なく答えた「俺、この人迎えに来たんだ。仕事なの」

「あら」

え？ そうなの？

サンタは立ち上がった。私の腕を引っ張りながら「帰るよ。アキ姉さん」

夫人とサンタの顔を交互に見くらべる。

「帰られるの？ アキハさん」夫人が問うた。

しばし躊躇したが、よく考えたら今日初めて来たばかりのお宅に長居するのも、確かにどうかと思う。

「…はい、…その、いろいろご迷惑おかけしまして…、その…、帰ります」

「そう」夫人は失望を隠さなかった「残念だね。本当に、残念だね」

第三話 純潔を守る秘宝（8）

「アキ八さん、また、いらしてね」

閉められた扉の向こうの声に軽く会釈し、邸を辞した。

「ちゃんと鍵しめて」

あゝ、うつさいな。

「一人であの家行っちゃダメだって、キョージユ、言わなかった？」

鍵をかけ終わったとたんにサンタが減らず口を叩く。

「言われたけど…、まさか、あんなの出てるなんて思わないじゃない、普通。霊峰友愛、って、どんだけ暇なのよ？」

「そういう意味じゃないんだけどさ」なぜかサンタはため息をつく
「ま、なんにせよ。あげたものがこんなに早く役立ってうれしいよ」

「え？ さっきの、とんぼ玉？」

「そ、そいつの御陰で来れた」

あらためて、サンタをまじまじと見つめる。

「じゃ、アンタ、もしかして…」

うん、とサンタが肯く「実体じゃないよ」

「へええ、そんなこと出来るようになったんだ」

めずらしくサンタを褒めてみた。

これだけはつきりとした像が飛ばせるというのは、術師としてかなりの力量を要する。サンタの実力を疑っていたわけではないが、こんなことまで出来るとは思ってもいなかった。

ふと、さっきの邸内での会話を思い出す。

「じゃあ、あの力ゲって人も？」

サンタは肯く「ムコウの方が、年季入ってるから、いろいろヤラしたらヤバいけど、こっちは護符の実体があるから、まあ、五分五分かな」

言うこともいちいちそれっぽく聞こえる。何か弟分が成長したような感じで、素直にうれしい。

「それにしても、立派になったねえ。ボロいとはいえ、店も持って一国一城の主だし、ヒモやってた頃とは大違いだね」

「え？ 何が？」

「何が、って…」私の顔から笑みがずっと引いた「アンタ、まさか……」

こちらの意図を読みとったものかどうか、サンタはまた欠伸する。

「ちょっと金回り良くなっただくらいで、女捨てるほどヒドくないよ、俺」

「あ、そ、そう…、じゃあ、今度はサンタが彼女の面倒みる番になっただ…」

「何で？ ムコウのほうに金あるし」

「あの…、もしかして、お小遣いとか…」

「うん、いろいろ貰ってるよ」

ダメだ、こりゃ。

「そう言えば」サンタが急に思い出したように聞いてきた「あの石、どうなったの？」

「あの石？」突然そんなこと言われてもわからない。

「死者の石、アルフル族の」

ああ、アレ。壊れちゃったよ、と言うと、それでも構わないとサンタは言う。

「破片でもいいんだ」

「キョージュが、まっさらにしちゃったよ」

「別のモノ入れるからいいよ」

サンタが言うには、たとえ浄化されたものでも、かつて強力な呪物だった器は、様々な力を封じるのに都合がいいんだそうだ。

キョージュにも聞いという、と言うので、覚えてたらね、と返事した。

「疲れたから帰る」

そう言い残して、サンタは黄昏の光の中に溶けていった。

第三話 純潔を守る秘宝（9）

黄昏時はもの悲しい。

サンタがいなくなつて急に寂しくなつた。あんなものでもいなくなるかと心細いが、術の負担を考えれば、無理は言えない。

今日は疲れたなあ。こんなに疲れたのは何年ぶりだろう。

いろいろ有り過ぎだし。

そんなことを考えながら歩いていたら、いきなり地面が無くなつた。

おおお、落とし穴？

極太のナイロンネットに絡まれる。真つ暗な穴の中、天から円形に射し込む光。驚いている暇もなく、網の上部が絞られ、なんと、じわじわと網ごと体が上昇していく。

「ほーっ、ほっ、ほっ、不様ね、不様すぎるわ、アナタ」

うん、この声は聞き覚えがあるぞ。

ナイロンネットを引き上げているのは小型クレーンだった。そしてクレーンを操縦していたのは、

レイカ様。

純白のチャイナドレスに縦ロールの出で立ちは、昼会ったときと変わらないが、黄色の安全ヘルメットが夕日に燦然と輝いている。

御髪の乱れは大丈夫でしょうか？ レイカ様。

「どう？ アタクシの恐ろしさが身にしみて？」

レイカ様はクレーンの運転席から地面に降りた。ナイロンネットに捕らわれて釣り下げられる私を見上げて、また、お笑いになる。

「予知したのよ」

「は？」

「予知したの」飲み込みの悪い私にイラつくかのように、レイカ様の語尾がキツくなる「アナタが不様にマンホールに落ちるところをね。だから、こっやって待ち伏せしたのよ」

「はあ」

「アタクシの能力は完全予知」とレイカ様がおっしゃる「その能力を持ってしても、まさかマンホールに落ちるような女がいるとは…、驚いたわよ。でも、アタクシはアタクシの能力を信じたわ。そして予知したとおり、アナタは落ちたの」

釣り下げられて身動きは取りづらかったが、なんとかバッグを開けて、アセチレンミニトーチを取り出す。すぐさま着火、ぐるりと一週してナイロン網を焼き切る。

トン、とレイカ様の前に降りたつた。

さて、どうするか。

逃げるというのも手だが、さすがにレイカ様に失礼だろう。

いちおうヘルメット被ってるみたいだし、頭で行くか。

一歩前に踏み出して、レイカ様の前で前転する。

胴廻し回転蹴り。

素直に当たるとは思わなかったが、真正面から止められたのには驚いた。

「夕暮れとは言え、往来でスカート履いた女の子が胴廻し回転蹴りとはね」

見事な十字受けでレイカ様との間に割り込んだ、黒衣の男。

「いやあ、大和撫子もまだまだ捨てたもんじゃない」

カゲ、さん、だったっけかな。これは実体のほうだな。

止められた脚を軸にバク転して間合いを取る。

二対一か。

正直、ヤバいな。

睨み合いは、ほんの数秒。唐突なレイカ様の言葉が対峙を終結させた。

「帰るわよ」

「まさか、俺がこのお嬢ちゃんに負けるとでも？」カゲさん、顔は笑っているが、明らかに不服そうだ。

「ダーリンが来るわ」

「キョージユが？ キョージユだって仲間がいる所で本気…あつ」カゲさんも何かに気づいたようだ「そういうことか、このお嬢ちゃんとは特別だったな」

サツと身を翻して小型クレーンに飛び乗るレイカ様、カゲさんはエンジンカバーの上によじ登って手を振っている。

「またね、お嬢ちゃん」

レイカ様たちは、きゅらきゅらきゅら、とキャタピラの音を響かせて行ってしまった。レイカ様のヘルメットが夕日に朱く染まっていた。走って追いかければ、追いつきそうな気はしたが、そんなことをするのはいけないことだと思った。

背後から声を掛ける者がいた。

「行っちゃいましたね」

振り向くと、そこに居たのは。

キョージユ？

「いつから居たの？」

「胴廻し回転蹴りを止められたあたりから」

「それで何、ボケーツと見てたわけ？」

さすがに頭にきて、首を締めてやろうと突き出した腕に、後込みしながらキョージユが言う。

「いや、アキハさん、楽しそうだったんで…、その…、邪魔しちゃ悪いかな、と、つい声を掛けそびれちゃって…」

今日一番の脱力感に襲われ、その場にへなへなと崩れ落ちた。

第三話 純潔を守る秘宝（10）

キョージユに無理やり詰所に引っ張ってこられた。腹が立ったので、ムスツとしている。

「あの家の持ち主について聞きたいんですが」

「うん、そろそろ聞かれる頃だな、って思ってた」

ソンコさんはキョージユの問いに答えてはいるものの、どこか上の空だ。

「いま、どこにいるんですか？」

フランスだって、奥さん言ってたじゃない。頭悪いな、キョージユ。

「アメリカ」ソンコさんが言う「ボストンの近く。夫婦二人で」

何？

「旦那さん単身赴任じゃないんですか？」驚いて声をあげる「それにアメリカって…」

「あたしの知り合いは嫁の方なんだけど」ソンコさんは珍しく齒切れが悪い「もともとの家は知り合いの生家なの。両親は子供の頃から海外飛び回ってたんで、昔はあの子とばあやしかいなかったんだ。結婚してしばらく旦那と住んでただけど、旦那の転勤で家空

けることになったんで、その間、あたしが管理してるという…」

「で、キョージユが事務的にソンコさんを問いつめる「いまあの家にいるらしいモノについて、心当たりは？」

「ま、有るような、無いような…」

「名前は？」

「ヨシコ、ちゃん、で、いいんじゃないかな。少なくとも、あたし達はそう呼んでたし」

「お友達がいたハズですが。名前は？」

「ユカリ」

「ソンコさんのお友達じゃありません」キョージユはきっぱり言い切った「ヨシコちゃんのお友達です」

ソンコさんの眉がひくつと動いた「やけに詳しいようだけど、誰に探させたの？」

「企業秘密です」

ソンコさんの眉間にシワが寄る「シヨミにちよっかい出すな、つて言っただよね？」

「ちよっかいなんて出してません」とキョージユ「メアド交換しただけですから」

うお、いつの間に。

女子中学生とメアド交換、って、それ犯罪レベルだろ、キョージユ。

ソンコさんは見たこともないほど不機嫌になったが、あまり同情はしない。

「うちの娘、巻き込まないでよ」

「巻き込むつもりはありませんが」キョージユは動じる気配もない
「だいたいソンコさんのお宅にあったんですよ、押入の奥に。シヨミさんでなければ探し出せません」

「あたし片づけ苦手なもの」

「で？」お構いなしにキョージユが問う「名前は？」

「トオルくん」ソンコさんは完全にふてくされている「それで、どうにかなりそうなの？」

「トオルくん次第でしょうね」キョージユが言う「説得はしてみますが、こればかりは、こちらの都合だけではなんとも…」

ソンコさんの娘、シヨミの能力は、失せ物探し、だが。いったいキョージユはシヨミに何を探させたのだろう。それより気になるのはあの家の夫人のことだが…

バッグの中で携帯が鳴った。

取りだそうと身を浮かしたとき…

「それ、取らないほうがいいですよ」

キョージユが言った。

「でも…」キョージユとバッグを交互に見くらべる。携帯の呼び出し音は止まる気配もない。

「僕には、その音、聞こえませんか」キョージユが重ねて言う「あの家にいるモノは僕には見えません。声も聞こえていなかった。適当に話は合わせてましたけどね。もちろん、あの家からアキハさんが持ち出したものも見えません」

鳴り続ける携帯の呼び出し音を聞きながら、キョージユの言う意味を心の中で反芻する。

…キョージユにしたら、そう言うしかないよねえ

…アキ姉さんは、普通のものも普通でないものも見えるけど

…お嬢ちゃんの他は誰もいないって言ったから、喜んで来たのに

…実際、誰もいないだろ

「そうは言っても、その携帯鳴り続けたら、アキちゃん、まいっちやうね」

それはいつものソンコさんだった。そしてソンコさんはキョージ

ユに問う。

「トオルくんの説得、どれくらいかかる？」

「1時間ください」

「わかった」

ソンコさんは立ち上がった。

「あまり良い考えとは思えませんが」キョージユは座ったまま、言葉だけでソンコさんを制した「因はアキハさんよりソンコさんのほうがまだ強いですよ」

「時間稼ぎなら同じことよ」

キョージユはため息をついた「いちおう努力はしますが、間に合わなくても恨まないでくださいね」

「それは出来ない相談だわ」ソンコさんは笑った「めいっばい恨むから」

ソンコさんは私のバッグを見据え、言った。

「あたしが行くから」

音が止んだ。

第三話 純潔を守る秘宝（11）

「何で来たのよ」

ソニコさんは私の顔を見るなり、邪険に言う。握った右手を突き出して、ソニコさんの顔の前で開けた。

鍵。

「ああ」ソニコさんはゆっくりと玄関の方を向いた。顎でしゃくつて前方を示す。

あの家の玄関、端がわずかに開いている。

「見ててごらん」ソニコさんに言われずとも、徐々に扉が開いていくのがわかる。音もなく。そして誰が触れるでもなく、その扉は開いていく。

「だから、鍵はもう、いらないんだけど……」ソニコさんは、やっと笑んだ「まあ、来ちゃったモンはしょうがないよね」

「で、どうすんの？」

「私も行きます」

「ま、こうなったら、帰るより、むしろそっちのほうが安全かもね」

扉は完全に開き、私とソニコさんを誘うように小さく揺れている。

辺りはすっかり暮れて街灯の灯りが頼りだが、扉の中は午後の光のままで。

ソニコさんは一歩踏み出す。後ろに従った。

「あ、靴脱がなくていいから」

「え？」

「逃げるときはそのほうが楽だし、後で掃除すればいいから」

家の中は照明は灯いていない。外からの光で十分な明るさがある。

外は夜だけど。

「おままごとは、夜にやるわけにはいかないから」

誰に言つでもなく、ひとりごち、ソニコさんは歩を進める。

庭に面した6畳ほどの部屋。

その部屋にソレはいた。

「こんにちは、でいいのかな？ ヨシコちゃん」

「いらっしやい、おひさしぶりね」

若くなってる。

昼はソンコさんと同年くらいに見えたのに、今は私より若いくらいだ。

何で？ 夜は若くなるの？

ずるい気がする。

「ごめんなさい、アキハさん、昼はあなたに合わせてみたのよ」

こちらを見透かしてか、そう言われても釈然としない。

「うれしいわ、二人も遊びにきてくださるなんて、本当に何年ぶりかしら」

遊びに来たわけではないんですが。

ちょこなんと、座蒲団に座る彼女はレースのワンピースを着ている。燃えるような真紅のワンピース。突き出た2本の腕はあくまで白く。卵のように白く滑らかな頬。

腰まで伸びる髪を解いた彼女は、中原淳一のさし絵、そのものだった。

「何して遊ぶのか」ソンコさんは言ったが、顔は笑っていない。

「おままごとよ」彼女は答える。

「いつまで遊ぶの？」

「日が暮れるまで」彼女は微笑んだ「夕ご飯までは帰らないといけ

ないのでしょうか？」

夜なのに、庭から穏やかな陽射しが差し込むこの部屋は、つまり、いつまでたっても日が暮れない以上、帰す気はないということだろう。

遠くでかすかに、パタンと扉の閉まる音がした。

第三話 純潔を守る秘宝（12）

遊びましょう、と言われたものの、どうしたらいいのかわからない。

かなり状況はヤバそうではあるが、彼女は見た目怖そうではないので、いまひとつ危機感がわかない。

美人は得だということだろうか？

それに、夕ご飯まで帰す、と言っているのだから、お腹がすいたと言えば、帰してくれるのかもしれない。

「遊ぶのはいいけど、お仕事はどうするの？」ソソコさんが問うた？

「お仕事？」

「頼まれたことがあるんじゃない？」

「お留守番」彼女は頬を膨らませた「でも、もう飽きちゃった。ユカリ、帰ってこないし」

「じゃあ、ユカリのところに行きましょう」ソソコさんが言う「この家には鍵をかけていけばいいわ」

「だめ」彼女は首を振る「待ってるもの、待ってるんだもの」

「ここにいなきゃだめなの」いつのまに、金髪碧眼に変わった少女

は怒りに燃える青い目でソソコさんと私を睨む「だから、ここで遊ぶの、みんなで遊ぶの」

「待ってる、って、誰を待ってるの？」そう言うソソコさんの髪も亜麻色に、瞳も紺碧に変わっている。

7、8才と見える二人の少女が、座蒲団の上で問答している。もしやと思い、自分の髪を手繰って、それが金色に輝いているのに気付いた。上げそうになった悲鳴を辛うじて飲み込む。

「待ってるの。ここで、待ってるの」なおも少女は主張する「だから、みんなで遊びましょう」

もう一方の少女がその身にまとわりつく群青の焰を上げた「わがままはいけないわ。ヨシコちゃん」

ソソコさん、何かやる気だな。

「イヤ」少女は金色の髪を逆立て、頑強に首を振る「ここで遊ぶの、絶対、帰さないから」

対峙する二人の少女？に気を取られていたが、庭に何かいる。

お揃いの紺のチョッキと半ズボンを着た、外人の男の子が笑いながら立っている。

・・・ヨシコちゃん、あゝそゝびましょ

女の子は庭に出る窓を開け放ち、男の子に飛びついた。

「トオルくん」

「ヨシコちゃん」

「トオルくん」

「ヨシコちゃん」

「遊びましょう」

「遊びましょう」

二人は抱きあったまま、くるくるとまわり、金紗を散らしながら登っていった。

真つ暗に戻った庭には、ビスクドールが二体。

「こつちがヨシコちゃん、こつちがトオルくん」ソンコさんが人形を抱き上げて説明する「ヨシコちゃんはユカリの人形で、トオルくんがあたしの。この部屋でよく遊んだんだ」

「ジュモーで男の子っていうのは珍しいですね」玄関先からキョージユが庭に入ってきた「思ったより説得は楽でした。トオルくんもヨシコちゃんのこと、憎からず思ってたようなんです」

「で、どうします？」キョージユが問うた。

「両方ともユカリのところに送るわよ」ソンコさんが答えた「もう

悪さはしないだろうけど、離れたらどうなるか分からないし、ユカリもオメデタらしいから、トオルくんは出産祝いつてことにしておく」

「じゃあ、結局、今回の件はそのユカリさんの依頼ってことですか？」

「うーん」私の間にソンコさんが首を振る「ユカリは何にも知らないしなあ。強いて言うならあたしが依頼人てことになるけど…」

「え？　じゃあ、もしかして、私、今回タダ働き？」

がつくりと肩を落とす私に、ソンコさんが控えめに声を掛けた。

「まあ、タダつてのも気の毒だから、あたしが出すわよ。本部通さないで、直接で」

「え？」

「50万でいい？」

「え？　え？　え？」ソンコさんの肩を両手で掴んで顔を間近にもつていく「ほんとに50万くれるの？　ほんと？」

「え？　あ、う、うん」

ソンコさんが肯くのを確認して、部屋の中に置いたバッグに飛びつく、携帯を取り出してアクセス。やた、まだ締切前だ。

呆然と見守るソンコさんとキョージユをほったらかしに、世話し

なく携帯のキーを乱打する。

確認。

待つこと10秒、メールが届いて。

「よっしゃああ」夜空に拳を降り上げる「昭和の歌姫八代亜紀コンプリートDVDゲットオオオオ」

「すっかり買いそびれてたんですよ、初回限定版」頼まれもしないのに嬉々として二人に説明する「オークションに出ただけど、即決価格が元の販売価格の3倍で、もうカードの枠もいっぱいだったから、ダメだと諦めてたんです…」

「代金引換で落としたので、明後日に届くんです」一杯に見開いた目で、ソンコさんにたたみかける「だから、それまでに50万円お願いします。あ、無理なら47万2500円でいいです」

第三話 純潔を守る秘宝（13）

「ラタトゥーユと仔羊の香草パン粉焼き、ブイヤベース、ズッキーニのサラダ、あと、ガーリックトーストを」

自分の分を注文して、メニューをキョージュに渡す。

「ああ、僕は…、あ、E s t ! E s t ! E s t ! があるな、グラスだと煩わしいので、ボトルで」

「食欲ないんですか？」

「いや、そういうわけでは…」キョージュは言葉をにぎす「そのうち思いついたら、頼もうと思って」

「私が頼んだのは分けたりしませんから、自分で頼んでくださいね」

「…はい」

ソンコさんは疲れたそうで、帰ってしまった。アキちゃんに晩ご飯でもごちそうしてあげなさい、とキョージュに言い残して。

私はDVDが落札できたので、ほくほくだが、キョージュも何が楽しいのかニコニコしている。家に帰ったら昨日の残りのカレーを片付けねばならなかったのだが、まあ、火を通せばもう一日くらいはなんとかなるだろう。

こちらの皿が進んでも、キョージュはワインを飲むばかりだ。な

なんとなくおいしそうに見えたので、ラムチョップ一本とグラス一杯を交換した。

「アキハさんもワイン好きですか？」

「嫌いじゃないです。いつもは焼酎ですけど」

「あ、焼酎もいいですよ。なかなか通ですね」

「安いから」

「…あ、もちろん、それも重要です」

ブイヤベースのスープにガーリックトーストを浸して口に運ぶ。
飲み下して、ふと思いついたことがある。

「数奇屋稀介、ってご存じですか？」キョージユに問うてみた。

「知ってますよ。こけしですよ」キョージユが答える「僕も大好きで、持ってますよ」

「え？　ほんとですか？」

ほら、と言ってキョージユはカフスから一本の針を抜いた「よく見てください、頭のところ」

「わあ、こけしだあ」針の先端部が球になっていて金彫で小さく顔がついている「父さん、こんなのも作ってたんだ」

「数奇屋希介さん、アキハさんのお父さん、だっただんですか」キョ

「ジユはちよつと驚いているようだ」「稀介のこけし針って言ったら有名で、その筋では…」

「いいなあ、これ、かわいい」考えてみれば、家には父のこけしはない。急に欲しくなった「これ、貰っていい？」

「え？」

キョージユは明らかに戸惑っていたが、何か意を決したらしく、小声で答えた「…いいです、よ」

「わーい」ハンカチに刺し、たたんでバッグに仕舞い込む。メニューを取り上げた「キッシュ頼んでいいですか？」

「あ、…ああ、どうぞ」

ワインを喉に流し込んで、ここでサンタの言伝を思い出した。

「死者の石、って、どうなりました？ ヒビ入ったのまでは見たんだけど」

「あれなら、持ち主に返しましたよ」

「返したんですか？」

「はい、お借りしていた民族衣装と一緒に」キョージユはボトルを逆さにしてグラスに雫をこぼした

「憑物がなくなったので、これからは普通の形身として身に着けられる、と言っていましたよ」

「ふーん、良かったですね」

「はい」

うれしそうに笑うキョージユに、もしかしてあの石が完全に砕けないように急に力を堰き止めたのかな、と思った。

でも、コイツがそんなことするはずないな、とすぐに思い直した。

キツシュはおいしかった。

上機嫌のキョージユはもう一本ワインを開け、私も半分手伝ってあげた。

<純潔を守る秘宝 - 了>

第四話 眞実を映す魔鏡（1）

「鏡よ、鏡。世界でいちばん、私を愛しているのは、だあれ？」

鏡を探すのが、今度の仕事、とソンコさんは言った。

そんな漠然とした話では進めようがない。

「どんな鏡かもわからないんじゃない、探しようがありませんが」

「詳しくは、依頼人に聞いて」ソンコさんが言う。

「依頼人、て誰？」

「阿波瀬加賀美」

「ああ」

その駄洒落みたいな名は知っている。人気の占い師だ。しかも御丁寧に鏡占いである。

「占い師なら自分で探させればいいじゃないですか」

「無理だよ」

「何で？」

「インチキ占いだもん」ソンコさんはもう手を振っている「じゃ、アキちゃん、がんばってね」。あ、それと「ソンコさんはキョージユの方を向いた。瞳がスツと小さくなり、三白眼でキョージユを睨む「わかつてると思うけど、仕事を探し物だからって、ウチの娘にちよっかい出さないように」

「そうはいきませんね」キョージユはひるむ気配すらない「この仕事、本部通ってるんでしょう？　そうしたら僕の師匠の目に止まらないハズはないし、わざわざこの詰所に話を持ってきたんだから、シヨミさんのことは暗黙の了解だと思ってましたけど？」

「あの人のことは言わないで」ソンコさんは金切り声を上げた「それとこれとは話が別です」

「それなら、僕が直接、タモンさんに確認しますから」

「そんなことしないでいい」絶叫したソンコさんは目の焦点があつていない「…あの人はあの子に甘すぎるのよ。いくらあたしが厳しく躰けてもすぐに甘やかすし、…だいたい、最近、本部にこもりつきりで詰所にも顔を出さないし、たまに本部に顔出してもすれ違いで…、ああ、こんなんじや同じところで仕事してる意味が…、もしかして、あたしに飽きたのかしら、ううん、家ではいつも優しいし…、…本部の…あの女？…」

なんかお終いのほうはぶつぶつ独り言になってるし、更年期か？
この女。

キョージユが袖を引っ張るので、ソンコさんを残して詰所を出る。

「タモンさん、て、会頭の？」

私の問いにキョージユが肯く。

「タモンさんがキョージユの師匠だったんですか？」それならキョージユのこと聞きに行けば良かった。何でソンコさん教えてくれなかったんだろう。

「タモンさんに、どんなこと教わったんですか？」キョージユに問うてみる。

「別に何にも」キョージユは首を振った。

「でも、師匠なんでしょ？」

「この間、本部に行ったとき、今日からボク、キミの師匠になるから、って言われたんで」

「？」

「ああ、そうですか、って答えたんです」

「……」

深く考えると頭がヘンになりそうなので、考えるのをやめた。

「でも、タモンさんはいい人ですよ」キョージユが言う「師匠を見る目はないですけどね」

「師匠の師匠？」オウム返しに問うた「タモンさんの師匠ってこと？」

「そうです。最低の男です」

「そんなヒドインですか？」

「僕の父ですから」

「…」

いろいろ複雑なようである。

「でも、どうしてタモンさんとシヨミちゃんが関係あるんですか？」
さっきのソンコさんを思い出して問うてみた。

「タモンさんはシヨミさんのお父さんですからね」キョージユは当然のように言った「もっとも知ったのはつい最近で…。ソンコさんの夫がタモンさんなのは前から知ってましたけど」

術師会というのは、どうやら会頭以下、家族経営で成り立っているらしい。血統を考えれば当然なのかもしれないが。そのうち叔父、叔母、従兄弟なんてのが出てくる前に、転職を考えるべきなのかもしれない。

「それにしても」話を仕事に戻す「エセ占い師の依頼に本部が首突っ込むって、どういうことなんですか？」

「うーん、まあ、本部も半信半疑なんでしょうけど」キョージユも首をひねっている「たとえ嘘でも、ザラスシュトラの鏡、って言わ

れたら、放っておくわけにもいかないんだと思いますよ」

「ツアラトウストラ？」

「それはニーチエ」

「ゾロアスター教の開祖ですよ」

「微妙に違いますが、そんなものです」

「ここ日本ですよね？」

「そうですよ」

熱が出そうだ。

第四話 眞実を映す魔鏡（1）（後書き）

術師たち（表）シリーズ第四作目です。

ラストがかなり不評でした。尻切れトンボと言われてしまった。作者的には、ちゃんと終わってるハズなんですけどねえ。

サンタのちょっとした秘密が暴露されています。サンタはわりと作者好みです。

第四話 眞実を映す魔鏡（2）

「わーい、アキハだ。アキハだ。なまアキハだ。すごい」

何がすごいんだか。シヨミはぺたぺた頭を触ってくる。アンタとの間会ったときとキャラ変わってないか？

本来、同じくらいの背の高さだと思うのだが、今日は私服で向こうがヒール履いているので不利だ。目の高さが5センチ違う。最近物騒だからと格闘用に平底シューズにしたのが悔やまれる。

ふふふ、と意味もなくシヨミが微笑みかけてくる「ケーキバイキング久し振りだあ。めいっぱい食べよう」

ニューオータニのケーキバイキングは私も好きだ。何より食べ放題というのが良い。キョージュ持ちなので払いも気にしなくてよいのが爽快である。

まずは小手調べと、ミルフィューとガトーフロマージュを取った。シヨミはフルーツタルトを中心にトレイに堆く積んでいく。シヨミは紅茶、私はコーヒーを注いで席についた。

「アキハ、ブラックなの？」

「そっだよ」

「オトナ？」

「いや、このほうがたくさん食べられるから、甘味消し」

「おお」

シヨミはおかしなところで感心している。もっともシヨミの場合、かばかばと口の中にケーキが入っていくので、紅茶はどちらかというと添え物だろう。

若いっていいな、と思う。

ふと傍らを見ると、キョージュがブランデーグラスを静かにまわしている。

「コニヤックですか」

「はい、ケーキ苦手なので」

「ここ、飲み放題じゃないですよ」

「ま、適当に口を湿らす程度にしておきますよ」

キョージュはニコニコしながらグラスを傾ける。ケーキバイキングに来てケーキ食べないで何がうれしいんだか。よくわからないヤツだ。

気がつくと、もうシヨミはおかわりで次のケーキを物色している。いかん、あんな小娘に負けてなるものか。ガトーフロマージュ三分の一を口に放りこんで始末すると、席を立った。

シヨミと私は食べつづけ、キョージュはブランデーの香りを楽し

んでいる。席を立つこと三度ずつ、ようやく人心地ついたのか、シヨミがキョージュに問うた。

「鏡を探せばいいの？」

「そうです」キョージュが答える。

シヨミは少し上目使いに思案する表情を見せた。

「見つかりそうですか？」

「なんとか、なるかな？」

失物探しの現場を見るのは初めてだ。シヨミはぼーっと思いをめぐらしているようだ。意外と簡単そうに見える。

「家にあるよ」シヨミはそう言ってから、レアチーズケーキを口に押し込み紅茶を飲んだ。

「家？」

「うん、その、アワセカガミ、とかいう人の家」

キョージュと私は互いに顔を見合わせた。どうしたものか。キョージュが目配せするので、とりあえず私のほうで問うてみた。

「あのね、シヨミちゃん…。そのアワセさん、って人から鏡を探すように頼まれたんだけど…」

「そのアワセが何考えてるかなんて知らないよ」シヨミはてんで相

手にしない」「でも、鏡は家の中にある。窓がなくてでっかいテーブルのある部屋の中」

もう一度、キョージュと顔を見合わせる。失物探しの能力の詳細はわからないが、シヨミが言う以上、鏡は阿波瀬加賀美の自宅にあるのだろう。そして、それ以上のことはシヨミにもわからないのだ。

「ま、何にせよ」キョージュがグラスを置いた「探し物が見つかった何よりです」

「役に立った？」

「そりゃあ、もう」

「良かった」シヨミは笑んだ。フォークをナポレオンに突き刺そうとして、ふと思いついたように、キョージュに問う「他のものは探さなくていいの？」

「いまのところは、特に…」

ふーん、とシヨミは軽く鼻を鳴らす。不審気に重ねて問う「本当に他に探すものは無い？」

「どういう意味なの？ シヨミちゃん？」

思わせぶりなシヨミの態度にいちおう誘い水を差してみる。

「鏡は見つかったんだけどさ」納得していないのはシヨミのほうだったらしい「そのアワセって人？ ソイツいないみたいなんだけど、そっちは探さなくていいの？」

「いないって、どこに？」

「どこにも」そう言ってシヨミは首を振った「何なら、もう少し探してみるけど、こっちはちょっと自信がないなあ」

第四話 眞実を映す魔鏡（3）

どうしようか、と問うと、もちろん行きますよ、とキヨージは返事した。

シヨミを帰した後のニューオータニのロビーでの会話である。ケーバイキングの時間をフルに使った後だったので、お茶しながらという訳にはいかなかったのだ。ケーキは私が二個多く食べた。

「でも、行ったとしても、アワセさん、いないんですね」

「いないでしょうね」

この点では二人の意見は一致している。失物探しの詳細は不明だが、シヨミがいないと言い、また彼女ですら探すのがかなり困難だというのであれば、我々が出向いたところでアワセさんに会える可能性は限りなくゼロに近い。

「依頼人に会えないのなら、行っても仕方無いのでは？」

「うーん、そうは言っても、アワセさんがいないのを知っているのは僕らとシヨミさんだけですし、約束しているに行かないのはかえって変ですよ」

「まあ、そりゃ、そうですね」

「それに鏡がそこにあるのは確かなんですから、行ってみましょう」

そんなわけで、キョージユと私は、いま、アワセさんの屋敷の前にいる。

インターフォンの前で軽く呼吸を整えているスキに、キョージユがドアを開けて入ってしまった。

「チャイムぐらい鳴らしましょうよ」

「どうせ誰もいないんだし、時間の無駄です」

「家族の人とかいたら、どうするんですか」

「アワセさんは、一人暮らしです」

「それにしても、鍵かけてないなんて不用心だな」

「鍵はいま僕が外しました」

「……」

いまさらながら……、この男は……。

たぶん、セコムとか入ってもみんな黙らしちゃうんだろうな。

キョージユは片っ端からドアを開けて部屋の中を覗き込む。階段から地下に降り、突き当たりのドアを開けたところで足を止めた。

手招きするキョージユに従って、部屋の中に入る。

部屋に入るなり、むせかえるようなタバコの煙、しかも普通のタ

バコではなさそうだ。部屋の真ん中に大きなテーブルがあり、たらいのように大きな灰皿が置いてあった。壁一面にはタペストリーが飾られており、地下室ということもあって、当然、窓は無い。

シヨミの言っていたのはこの部屋のようなのだ。

「アキハさん、鏡はどこにありますか？」

「知りませんよ。私はシヨミちゃんじゃありませんから」

「ああ、そうか」キョージユはこちらに振り向いた「じゃあ、いまから力抜くので、探してみてください」

「え？ 力抜くって、何？ ……ひあ、いやああああ」

全てが遅かった。キョージユの意図を悟ったときには、目に見えぬ巨大な手に捕われた後だった。骨がきしみ、途方もない圧迫と地を這う悪寒が襲ってくる。

「ひ、ひゅあ、キサマ、また、いきなり、なんてこと、外道、人非人、悪魔、クズマヌケええ」

たったいままでキョージユが中和していた場が解き放たれ、行き場を失った力が、私めがけて殺到した。

「アキハさん、気をしっかり、鏡を探すんです」

「なにが鏡だあ…、そ、その前に、し、しんじゃううう」

「死なない、死なない、大丈夫だから」

「うるさいい、オマエがだいじょうぶ、っていつて、だいじょうぶ、だったことが…、い、ひいやあ、くる、くるう」

最初は強烈な重圧としてしか感じられなかったソレが、黒い光を帯びながら、ゆらゆらと床を這いつつ近寄ってくる。

「どこから来てますかあ？」

「どこつて、…いや、だめ、ダメなの、ホント、許して、おねがいいいい。あっちいけえ、かえれえ」

「あっちつて、どっち？」

「てーぶる、てえぶるう…」

テーブルの上、と叫んだ瞬間に凶つモノは霧散した。体を縛り付けていた力が消え、そのまま床に崩れ落ちた。跪き、肩で息をしながら、目頭に滲んだ涙を右手でぬぐう。

「なるほど、これが…、ぐあ」

テーブルに向かって歩くキョージユに飛びついて、背後から思いつきり首を締めた。

「わ、アキハさん、首は…、ダメ…」

「うるさい、この悪魔、いつも、いつも、いつも」思いのたけを両手の握力に托して絞り上げる「なんで、こーゆーことするんだ、死ぬだろ、死んじゃうだろお」

「いや、ゴメン、…ホント、…悪かった。あやまる、だから…、落ち着いて」

「やだあ、ゆるすもんか、しんじやえ、キョージユなんか、しんじやえ」

指も折れよと締めた。絶対に、ここで殺さなきゃ、次は殺される。

「…いや、…おちつ…いて、…ね、…ばんごはん、おこる…、から…」

「え？」

一瞬、手の力が緩んだすきにキョージユが抜け出した。喉を抑えて屈み込んでいる。

キョージユの方に諸手を突き出し、一步踏み出す。

「え、…えび」キョージユが絞り出すように言った。

「…えび？」

「海老…、伊勢海老の…、おいしい店知ってますから、連れてきますから、ほんとごめんなさい」

「海老？ 晩ご飯？」

「そつ、海老…」

「ほんとに？ 海老？」

「ほんとに、海老」

殺意が急速に萎んでいく。とりあえず、コイツを殺すのは海老食べ
てからでも良いかな、と思った。

第四話 眞実を映す魔鏡（4）

たらいのように巨大な黒曜石の灰皿をキョージュは鏡と呼んだ。水を張って水鏡として使うんだそうだ。サンタの店に持つていくというのでキョージュに運ばせた。こんな重そうなものを持つのは私の仕事ではない。

「そういうの世間では泥棒って言うんですよ」

「爆発物処理班が未処理の爆弾を持ち帰っても泥棒にはなりません」

このクラスの呪物は放置すると危険だから安全な場所に保管するんです、とキョージュは言うのだが、どう考えても胡散臭い。

だいたい、サンタの店が安全かどうか、という点だけとつても、はなはだ疑問だと思う。

キョージュは、カウンターの奥、金庫みたいなキャビネットに水盤を納めると、サンタによろしく、と言い残して帰ってしまった。

よろしく、と言うまで私は帰れないらしい。

サンタはキョージュがいなくなつて一分もたたずに現れた。この二人、どこかで連絡取ってるんじゃないかと勘ぐりたくなりほどのタイミングだ。

よろしく、と言って帰ろうとしたのだが、どうせヒマなんだから、と引き留められた。

「ザラスシュトラの鏡ねえ」サンタは呆れ顔だ「よりによって、
んでもないモノ持ち込んでくるなあ」

「知ってるの？」

「知らないわけないでしょ。実物見たのは初めてだけどサ。キョー
ジユ何て言ってた？」

「だから、サンタによろしく、って」

あいかわらずだなあ、キョージユ、とサンタがぼやく。サンタは
いつだってこんなモノだが、それにしたってかなり不満げだ。

「そんなにヤバイモンなの？」

「モノはそこそただけど、付録がね」問われたサンタが答える。

「付録？」

「ヴァチカンに長いことあったから、むこうの持ち物だっと思って
る奴らがいてしつこい」

「何でヴァチカンなのよ？ キリスト教じゃなくてゾロアスター教
でしょ」

「知らないよ。十字軍が誰かがかつぱらってきたんじゃないの？」
サンタはぶつくさ言う「キョージユ…、いくら昔ヴァチカンと悶着
起こしたからって、こっちに押し付けられても困るんだけどなあ」

「悶着、って、キョージユ何やったのよ」「すっかり問うてしまった。

「別に…、たいしたことじゃないけど、昔、ヴァチカンに留学してたところに」

「留学、って？ キョージユが？」

「そう、その留学当時、いろいろあって、ヴァチカンのエクソシストグループ、半壊させちゃった」

「はあ…」

「キョージユの仕事の最中に、エクソシスト退避させなかった向こうが悪いんだけどさ。まあ、間近で見るまで信じられなかった、ってのはあるんだろうけどね」

「あのさ…」前々から疑問に思っていたのだが、いい機会なので問うてみた「キョージユ、ってそんなにスゴいの？」

「まあ、凄いつていうのかなんていうのか」サンタは少し躊躇しているようだったが、カウンターに片肘について話した「魂魄は知ってる？」

「うん」

「魂は天に魄は地に、ってヤツね。で、キョージユの能力ってのは実は至極単純で、圧倒的な魂の力で魄を消すだけなんだ」

「ああ、それで呪物や場の魄を消しちゃうのね」

「そうそう、で、呪物や場ならいいんだけどさ。人の場合はちょっと困る」

「人の魄も消しちゃう？」

「そ、でも普通の人は魄なんかなくなっても平気なわけ、別に何に使う訳でもないし、生きてればそのうち回復するしね。でも術師の能力は魄に大きく依存してるので」

「あ、わかった。キョージユが力を開放するとそばにいる能力者は能力無くなつて、普通の人になるんだ」

「それぐらいですめばいいけどね」サンタはフツと小さく笑った「魂と魄は絡み合ってるから。もともと能力者つてのは不自然に魄を肥大させてるんだ。それが力の源でもあるけど。バランスが歪なところこそその魄が突然無くなつたら…」

意味ありげに言葉を止めたサンタに、それで？ と続きをうながした。

「運が良ければ精神に異常をきたす程度ですむし、普通は死んじやうよねえ。術師の能力が高いほどダメージはでかい。運が悪ければ、俺みたいになるのもいるだろうし」

「俺みたいに、って、サンタ、どうか悪いの？」

この問いに、サンタはきょとした顔で私を見返す。ちよつと笑つて、アキ姉さんらしいね、と言つた。

「ま、隠すほどのことでもないしなあ」サンタはカウンターを出て、

ふらふらと歩きだす。店の入口で振り返り、私に言った「説明するから、ついで」

第四話 眞実を映す魔鏡（5）

サンタはふらふら歩いている。歩いているというか、ふわふわ漂っている。

どこまで行く気だろう、と渋々ついていったが、道路を挟んだ店の裏手、総合病院にひょこひょこ入っていく。

やっぱり、どっか悪いのかなあ。

受付も待合室も素通りで、ふらふら病棟のほうにむかうサンタ。

「あ、そうだ」サンタは廊下の途中で振り向いた「病院の中だから話しかけないでね。変に思われたら嫌だし」

ちゃんと静かにしてるじゃないか。

エレベーターは使わず、階段を登っていく。近い階かと思ったら、5階まで昇りやがった。

ひいひい、息を切らしてたどり着いた先、サンタはとある病室の前にぼんやりつつ立っていた。

「ここ、入ればいいの？」

問うた私に、サンタは首を振る。

「ここから見えるよ。ほら入口右のベッド」

鼻と口に管を繋がれた男が寝ていた。

いや、点滴とかモニターのプロープ、導尿管とか、有りとあらゆる医療器具を付けた男が寝ている。

寝てはいないのかもしれない。男の目は半眼だった。

傍らに女が一人。男を見守るでもなく、何かをするでもなく、黙ってパイプ椅子に腰かけている。女性の目にも生氣はなかった。

なぜだろう。彼女にはどことなく見覚えがあるような気がした。

「誰よ？」

「俺」

「へ？」

サンタはベッドに横たわる男を指さして、あれ俺、と、もう一度言った。

「どういふことよ？」

「どうもこうも」サンタは頭を掻いた「簡単に言つと、生き霊、つてヤツ」

サンタは廊下の隅っこにある姿見の所まで私を引っ張っていった。見るまでもなかったが、いちおう鏡を覗いてみた。

鏡の中には、私だけがいる。

隣のサンタは映らない。

「どうやら、俺、いつペン死んだらしいんだよね」鏡にいないサンタが語りかける「キョージユに引き戻されて、まあ、今はこんな感じ」

「キョージユが？」

隣を見る。サンタが頷いた。

「普通、キョージユは俺みたいなのは見えないんだけど、自分で引き戻したから、少し見えるみたい。ただ、この状態だとキョージユとサシで会うのはツライんだ。文字どおり吹きとばされちゃう」

「もとに戻れないの？」

うーん、とサンタは唸ってみせた「キョージユに言わせれば、俺にやる気がないんだ、って言うんだけど…」

その点だけはキョージユに同意したい。

「ま、それほど不自由もないし、入院費は本部持ちだし」

「そんな…、モン、なの？」

「そんな…、モン、でしょ？」

…なんとなく、気まずい。

「それでサ、アキ姉さん」サンタの口調が変わった「頼みがあるんだけど」

「何よ？」

「前に言ってたじゃん、アキ姉さん、ヒモやめろって」

「私だけじゃないでしょ」

「いや、だからサ」サンタは何故かうすら笑いを浮かべている「別れる、って言うてくれない。あそこ座ってる女に」

「え？」サンタの顔をマジに見返した。

思い出した。病室のパイプ椅子に座っていたのはサンタの彼女だ。

「見えないんだよね。あの女」サンタが言う「霊的にはえらい鈍感でさ。枕元に立ってみたりもしたんだけど、てんで気づかないの。笑っちゃうよね」

「他の人に頼んでよ。そういうの苦手だし」

「みんな嫌がるんだよ」

なんでだろ、と、サンタは腕組みしながら言った。

「他はともかく、私が話したらもつとややこしくなるでしょが」

「何で？」

「いちおう女だし、アンタが何も言えないのに、横からしゃしゃり出て、別れるなんて言ったら誤解されるでしょ」

「俺はかまわないけど」

「私がかまうの」

サンタが、しっ、と人差し指を唇にあてる。いつの間にか声が大きくなっていった。

「あんまり、大声ださないで」サンタは言った「たぶん、この病院にいる人たちも、俺のこと見えないし、俺の声も聞こえないから。アキ姉さん、ひとりでブツブツ言ってるアレな人に思われるよ」

第四話 眞実を映す魔鏡（6）

晩ご飯は海老だ。

変更は許さない。

「シヨミさんにはまだ手伝わってもらわないといけないので」キョー
ジュが言う。

「うふふふふ」

シヨミは嬉しそうだ。ケーキのときよりずっと嬉しそうである。

まあ、アワセカガミが行方不明なのだし、これはある意味、まだ
納得できる。

「うふふふふ」

ソンコさんも嬉しそうだ。

これについては理解し難い。

「何しに来たんですか？」

「海老なの」目尻が通常より1センチ下がって、まるで別人にな
っている「海老大好きなの」

ああ、そうとも。

海老だよ。海老だとも。

だから何でアンタがいるんだよッ？

「シヨミちゃんが絡むの反対してたんじゃないやありませんでした？」

「反対よ」ソンコさんは口許も閉まりが無い「でも、あの人の言うこと聞かない訳にはいかないし、だから親同伴つてことにしたの」

「はあ？」

「心配性なのよ、ママは」

「違います。母親が娘の心配するのはあたりまえです。だから一緒に来たの。それに……」

「それに……」

「海老だし」

「海老だし」

異口同音に唱えた母娘は、まったく同じ表情で、手を胸の前であわせていただきますのポーズをした。

「あのねえ……」

イラッとして立ち上がろうと腰を浮かした瞬間、襖が開いて仲居さんが盆を運びこんだ。

うわああ。

いっぱい氷を張った巨大な桶に、十匹以上の伊勢海老が、殻を割られて背を剥き出しに、鬚がせわしく動く。

もう、どうでもいいや。どうせ払いはキョージュだし、ソンコさんが私の海老を奪るわけじゃない。私は私の分食べればいいのだ。

小皿の山葵醤油にさっとつけ、かぶりつく。むきつとした歯ごたえがあつて、じゅわつ、と来た。

背筋を電流みたいに何かが走る。噛んだ海老が口腔で、きゅうと縮む。

シヨミと私とソンコさんは、もう一音も発しなかった。

一心不乱に顎を動かして、三桶目の海老が運ばれる頃、ようやく人心地ついてキョージュのほうを見た。

ちみちみ、と杯を傾けている。殻入れに何も入ってないところを見ると、どうやら飲んでるだけらしい。あいかわらず変なヤツだ。

「それ何ですか？」

「あ、え？」キョージュは少し戸惑いつつ、冷酒の徳利を右手で上げた「これのこと？」

「そ、それ。何？」

「浦霞ですけど」

「おいしい？」

「え、ええ、まあ…」

「じゃ、私も、それひとつ」

「あ、あたしも」

「アタシも」

あんたは、だめ、ソンコさんがシヨミのうなじにピシャツと平手を入れる。えゝ、とシヨミは不満気だが、逆らう気はないらしく新しい海老の桶に手を伸ばす。

ずっと冷酒を一口入れると、暫しあって、ほわゝん、と来た。

うゝん、伊勢海老と日本酒は、やっぱ、あうわあ。

こんがり焼いた海老の頭に酒を注いで、また一杯。海老味噌の風味が堪らない。ソンコさんも海老頭酒。シヨミは羨ましそうに見ていたが、諦めたらしく、海老頭に唇をつけて啜っている。

「で、シヨミさん。アワセさんなんですけど…」キョージユが言った。

シヨミはふるふると首を横に振る。

「だめですか？」

箸で海老を口に放りこんで、シヨミはごくごくと頷く。

「どのくらいの範囲でいい？」この問いはさすがにジェスチャーだけでは答えきれなかったようで、シヨミはようやく口を開けた。

「少なくとも、地球上にはいなさそう」

地球上とは、また大きく出たな。

キョージュは、はあ、とため息をついたが、それほど落胆しているようにも見えない。杯を少し傾けた。

「鏡の近くに行けば、わかるかもしれないけど」

「鏡の中？」

「鏡にはありませんよ」私の問いにキョージュが答えた「鏡のむこうの世界です」

「鏡はいまどこにあるの？」ソンコさんがキョージュに問うた。

「サンタくんのところですよ」

「ああ」ソンコさんは頷いた「じゃあ、もう遅いし明日のほうが良いネ」

ネ、と、ソンコさんとシヨミは顔を見合わせ、目くばせした「

「え？ 遅いって…、まだ7時半ですけど」

「だって…」

「だって…」

「鬼瓦焼きもまだ食べてないし」

「鬼瓦焼きもまだ食べてないし」

確かにそのとおりだ。サンタの店なんていつだっていけるが、鬼瓦焼きが次にいつ食べられるかなんてわかったものじゃない。

三人の視線に射貫かれたキョージユは、くしゅん、と小さくクシヤミした。

大丈夫です、もう頼んでありますから、その言葉に安心した我々は視線を桶に戻した。三匹の伊勢海老が尻尾をうねらせている。

もう一度、三人はキョージユに眼差しを送る。

キョージユは冷酒の徳利を傾け空にすると、もう一本、と頼んだ。

何も障害は無いようだった。数は合っている、たぶん。

第四話 眞実を映す魔鏡（7）

「あ」

「あ」

「占いのおばさん」

「おばさん」

シヨミの友達だ。こっちは学校にシヨミを迎えに来ただけなのに、いきなりおばさん呼ばわり、ヒドイ仕打ちだ。

「あの…、私には…」

「むやみに名乗るもんじゃないよ」シヨミが現れた。誰かにも言われたな、それ。誰から言われても何故かムカツク「あ、それとアンタたち、今日はアタシ、このおばさんと用があるから」

「あのね…、シヨミちゃん…」

女の子たちは、こくこくと頷く。期待と畏敬の混ざった眼差しがこそばゆい。

シヨミは大腿で歩き、四辻を曲がって生徒がまばらになったところで、言った。

「海老おいしかったね、また行こうね」

いや、私の都合で行くわけにはいかないので、そういうことはキョージユに言ってくれ。

気がつくと、シヨミは歩きながらじつと私を見つめていた「アキハ、サンタに会ったね」

「あ、え？ あ…、ああ」シヨミの言っていることを理解するのに少しかかった。彼女はサンタの実体に会っただろう、と言っているのだ。

「やっぱり」シヨミは眉根を上げた「あの女の人に別れるって言え、って言われたでしょ？」

「う、うん」

「あゝあ、しょうがないなあ」シヨミはあきれ顔だ「アイツ誰にでも頼むんだよね。ホント、テメエの女の始末くらいテメエでつけるっての」

シヨミの言っていることはもつともだが、それについては多少同情の余地もあるのでは？ と思うのだが。

「あ、少しかわいそうだ、とか思ってない？」

「い、いや…」

「だめだよ、アキハ」シヨミは諭すような口ぶりで私に言う「あれ、サンタの手口なんだから、ああやって同情引いてナンパしようとするんだよ。アキハはウブだし、騙されやすいから…」

「ナンパ、って、生霊がナンパなんかして、何かいいことあるの？」
そんなの知らないよ、とシヨミは言う。ナンパ好きの生霊なんじゃないの？ とのことだ。

そついう話をしているうちにナンパ好きの生霊の店についた。

なるほど、言われて気づいたが、ファントム・ショップ・サンタは文字どおり幽霊が店主の店なわけだ。

「おや、これはお揃いで」自分への悪態を知ってか知らずか。サンタはいつもどおり欠伸をして出迎えた。

「ザラスシュトラの鏡のことなんだけど」

「ああ、アレね。なんか聞きたいことあるの？」

別に何にも、と言おうとしたら、シヨミが口をはさんできた。

「ゾロアスター教、って拝火教でしょ？ 何で鏡が関係あるの？」

「ゾロアスター教って、あんまりよくわからないんだよ。もともと信仰されてた地域が今はイスラム圏になってるし。ザラスシュトラ教典があつたのは確からしいけど…」

「何だ、わからないのか」

「拝火教って言っても、火を信仰したというよりは、アフラマズダは光の神なんだよね。で、アンラマンユは闇、と。ただ火と水で対

比させている場合もあつてさ、そちらを主にとると拝火教になる。
でも、ちょっとおかしいんだ」

「おかしいって、何が？」

「光と闇の対立ってのは近代の宗教観なんだよね。あと火と水って
いうのも原始的な五行思想というか、ちょっとあわない気がする。
だから…」

「だから？」

「もともとのガラスシュトラの教えっていうのは、光と水じゃない
かつて考え方があつて…」

「光と水…、そっちのほうがちくはくじゃないの？」

「だから、ガラスシュトラ教典ほじくり返したキリスト教徒もそう
考えちゃった。光と闇とか、火と水とか、対立がわかりやすい譬え
に流されたんだよ」

「で、光と水だとどうなるの？」

「光と水鏡なんでしょ」シヨミが言った。

「そ、そういうこと」サンタが引き継ぐ「古代で鏡といえば普通に
水鏡なんだよ。もともとアフラマズダは唯一絶対神であつてアンラ
マンユとの絡みで成長して完成する。光が鏡を持って通ずるとい
う…」

「もう能書はそのへんにして」だんだん面倒臭くなってきた「シヨ

「ミちゃんに鏡見せたいんだけど」

「ないよ」

「何？」

シヨミと顔を見合わせる。

「昨日、あずけたのにどうしたのよ？」

「あずかってないよ。勝手に置いていっただけだろ」

ま、それはそうだけど。

「だからって、ことわりもなく売っちゃうことないでしょ？」

「売ってないよ」サンタは左手を上げて伸びをする「持っていかけたの」

「誰に？」

「レイカ」

「レイカ様ああ？」何でここでレイカ様が出てくる？「あんな重たい物どうやって？」

「店の裏口にフォークリフトつけて持ってた」

フォークも運転できるのか、ま、クレーン使ってたくらいだしな。

「少しは抵抗したんでしょうね?」

「何で? だってアレ、俺のじゃないよ」

「それはそうだけど…」

「いいよ、アキハ」シヨミが横から割って入った「レイカって、霊峰友愛の人でしょ。近くだから、行こ」

「行こ、って、シヨミちゃん、ちよつと…」

シヨミはすたすた店から出て行ってしまった。

あゝ、もゝ、わけわかんない。

第四話 眞実を映す魔鏡（8）

「こんにちは、おばさん」

こやつ、レイカ様に向かってなんてことを。

フン、とシヨミに一瞥をくれるレイカ様。裾に銀糸で蘭をあしらったアオザイにいつもの縦ロール。レイカ様は、何故か、右手にこてを左手にこて板を取って壁塗りをしておいでだ。ソソコのトコの娘、と呟き、さして興味もなさそうにまた壁に目を戻す。

「鏡、見に来た」この娘、恐いモノとかあるんだろうか「どこにある？」

「奥にあつてよ。詳しい場所はカゲに聞きなさい」

「アリガト、おばさん」シヨミは物怖じせず奥へと入っていく。

「あのお」おそろおそろ問うてみた「何してらっしゃるんですか？」

「アナタ、馬鹿なの？」レイカ様の視線がいきなりキツイ「見てわからないのかしら？」

いや、わかりますけど。

レイカ様は滑らかに整えた壁面に、器用にこて絵を描いていく「馬鹿が来たのよ」

「は？」

「昨晚、ここに馬鹿が来たの」

状況が飲み込めない。

「ガラスシュトラの鏡を盗みだそうとした馬鹿がいたの」

「大丈夫だったんですか？」

「大丈夫なわけないでしょう」こんどはこちらを見もしない「アナタの目って、それただの窪みなの？ 大丈夫じゃないから、いま、壁を直してるのじゃなくて？」

おっしやるとおりです。

最後に顔の左右に鬚を描いて、眠り猫は完成した「アナタも鏡見にきたのじゃなくて？」

「あ…、あ、はい。…すいません、おじゃまします」

よく考えたら、持ち出したのはレイカ様だと思うのだが、どうも強気に出れない。もともとキョージュだってアワセさん家から黙って持ってきてるしなあ。

「お、来た、来た。遅いぞ、お嬢ちゃん」玄関入ってすぐの廊下にかゲさんが待っていた。シヨミもいる「早くしないと、置いてっちゃうぞ」

カゲさん、ご機嫌である「この支部は若い女の子とかめったに来

ないからなあ」

「オヤジくさい、とシヨミに言われて、オヤジだからしょうがないさ、と、うそぶくカゲさんである」

「キミのお父さんより少し若いだけだからね」

「確かこの間、この人に拐われそうになったハズだが。どうにも緊張感がない。」

「あ、ここでいいや」廊下の途中でシヨミが立ち止まった。

鏡はもつと奥の部屋だよ、カゲさんにそう言われてもシヨミは首を振って動こうとしない。

「ここまでくればアタシのほうは十分だから。下手にこれ以上行ったらヤバイよ。これ以上はキョージュ来てからだね」

「えー、キョージュ来るのかよ」カゲさんは露骨に嫌な顔をする。駄々っ子のようなのだ。

「キョージュ来るの？」キョージュのことは私も聞いてなかったの、で、シヨミに問うた。

「来るよ。キョージュってそういう人だから。たぶん、ママも来る」

「そうそう、アイツ、来るんだよ。こういうときは」カゲさんが尻馬に乗る「そういうとこ嫌いなんだよなー、どうもアイツは虫が好かない」

「まあ、曲がりなりにも術師会会頭の娘、っていうことかしらね」
左官道具を片付けたらしいレイカ様が後ろからやってきた。「昨日来たヴァチカンの馬鹿よりはマシなようで安心したわ」

どうもこの辺のやりとりがよくわからない。シヨミの耳許で、どうなってるの、と囁いた。

「これだけ近づけば、失物探しのほうは大丈夫だから」シヨミははつきりとした声で答えた。内緒話をする気がないらしい。

「あと、これ以上近づくと……」シヨミはまずカゲを指さす「このおじさんと、それからあのおばさん、鏡を封じ込めてる力を外しちゃうから」

シヨミは私のほうを向いてにつこり笑った「アタシ、あんまりそういうの得意じゃないんだよ。アキハも下手糞なんですよ」

アワセ邸でキョージュにやられたことを思い出した。ようするにアレをやるうとしてたのか、この二人。

「それで、鏡の様子はどうかしら？」レイカ様は当たり前のようにシヨミに尋ねた。

「ずいぶん、向こう側に逝ってるのが多いね」シヨミもまた当然とといった顔で答える「アワセもいるみたいだけど、外人が多いな。あとちょっと長居してるのと、その他もろもろ」

「その他もろもろは、どうでもよろしくてよ」レイカ様はそれらについては本当にどうでもよさそうな口ぶりだ「アワセと最近の外人もね。でも、その古株には興味があるわ。何者？」

「知らない」シヨミは言う「十年よりは長くいるけど百年よりは短い」

「じゃあ、生きているのね」レイカ様の目が怪しく光った。

「アレを生きている、っていうかどうかは知らないよ。死んではないけど。鏡が不安定な理由のほとんどは、たぶん、ソイツのせい」

カゲさんが、ククク、と笑う「面白くなってきたな」

「何が面白いんですか？」カゲさんに問うた。

「キョージユ絡みなのさ」カゲさんは言う「俺はキョージユが面倒に巻き込まれるのは、いつだってうれしいんだ」

「そろそろ出かけたほうが良さそうね」レイカ様がカゲさんに言った「ダーリンにお会いできないのは悲しいけれど、物が物だけに本気なんか出されたら、とてもじゃないけれど、こちらがもたないわ」

「そうだな」カゲさんも同意した「キョージユがてこずるのを見たことは思うけど、リスクが大きすぎる。事の顛末は、あとでお嬢ちゃんに聞かさ」

二人の気配が、ふつ、と消えた。それと同時に廊下の奥から、ヒタヒタと何かが近づいてくるのが感じられた。獲物に触手を伸ばすかのように、周囲に探りを入れながら拡散するソレからは、純粹な悪意以外の何者も感じとることはできなかった。

「大丈夫だよ。アキハ」シヨミが言った「ここまでは本体は来れな

い。こっちが近づかないかぎり」

イヤ、シヨミちゃん。そうじゃないんだよ。

私は最近、誰かに、大丈夫、って言われると途端に落ち着かなくなるんだ。

前はそんなことなかったのに、最近、本当にそうなんだ。

それに…

シヨミは真剣な眼差しで、廊下の奥を凝視している。

本当は、あんまり大丈夫じゃないんじゃないの？　ねえ？　シヨミちゃん。

もちろん、声に出して問いかけたりはしなかった。

答えを聞くのが恐かったから。

第四話 眞実を映す魔鏡（9）

「はあい、アキ八さん、元気ですかあ」

廊下の奥のモノは、ぴたり、と気配を閉じた。

振り向かなくてもわかる、この声。現れただけでアレを黙らせるのは、さすがと言つべきなんだろうが…。

ホント、死ねばいいのに。

「元気です」さっきまでの緊張感が抜けた勢いを、そのまま怒りにしてキョージユにぶつけてみる。

「それは、なによりです」全然、効かないみたいだ。私は悲しい。

「ソンコさんが、悪いんですよ。出掛けにグチグチいうから」尋ねもしないのに、キョージユは言い訳をはじめ「センゴ出して、って頼んでるのに渋るから」

「あたりまえでしょ」ソンコさんは、ムツツリ顔だ「言つとくけど、あれはウチの家宝なんだからね」

悪い予感がする「せんご…、って、あの…、村正？」

キョージユがこれ見よがしに白木鞘の懐剣を振る。

「わあ、築山殿だ」うれしそうに声をあげたのはシヨミだ。「使う

の？」

「もちろん」キョージユが答える「そうでなければ、わざわざ持つてきません」

猿の手を封じたときに使った妖刀ではないか。しかも、使ったと？

「築山…、殿？」

「家康の正妻だよ」ソンコさんが言う「織田家に押し切られて、まあ、家臣に殺されることになったんだけどね。その築山殿を刺したのがこの刀。曰く付き過ぎだったことで、いったんは廃刀にされたんだけど、折った刀の切先五寸だけ打ち直したのが、この築山殿」

「なんで、そんなものが…、家宝？」

「ご先祖がさ、徳川係累なのよ。いろいろあつて冷や飯食わされたんで本家筋を恨むようになって…、まあ、同族嫌悪ってヤツかも？」

「あのおゝ」ソンコさんとシヨミ、二人の顔を見比べる「ご先祖様、つて…、誰？」

「駿河大納言忠長卿」

「それって、徳川三代…」

「そ、家光の弟」

何…、この母娘、世が世ならホンモノのお姫様なの？

「いくら家宝だつて言つても、折れた刀リサイクルしてるだけでしよう」キョージユは不満気である「もう十分元は取れてると思うし、みみっちいこと言わないでください」

「これ壊したら、あたしが親戚中からやいのやいの言われるの」ソ
ンコさんも仏頂面で返す「年寄り連中から嫌味いわれるあたしの身
にもなつてよ」

「だから、天叢雲剣でいい、って最初に言つたのに」

「あんなもの折つたら、あたしの親戚どころの話じゃないでしょう
が」

「あのね。キョージユ」スゴく嫌だつたが、背に腹は変えられない。
恐る恐る問うてみた「この間、天叢雲剣を使ったときはすんなり許
可がおりましたよね？」

「あ、はあ、まあ…」キョージユの顔色が明らかに変わった。ソ
ンコさんでもある。

「今回、使えないのはどういう理由なんですか？」

「…」

「…」

答えは意外なところから返ってきた。

「ようするに」そう発したのはシヨミだ「エリの件より、ヤバい。
そついうことじゃないの？」

エリの件、死者の石のときは霊的炎の逆巻く中に半裸で梁つけにされたのだ。

あの時、天叢雲剣は、石は砕けても剣自体はビクともしなかった。それが折れることを案じなければならないということは…。

「失礼します」

きびすを返して、外に走り出ようとした瞬間に両腕を捕まれた。

「いやいや、いやいや」

「イヤイヤ、イヤイヤ」

母と娘、二人はそれぞれ私の左右の手を握って離さない。

「刀だけじゃ、どうしようもないの、わかってるでしょ、ね、アキちゃん」

「アタシ、前からアキハの仕事するところ見たいと思ってたんだ」

「離してください」見た目華奢な母娘のどこにこんな力が…、必死にもがいても振りほどけない「私は、まだ死にたくないんだあ」

「死んだりしないって、大丈夫だってば」

「そうそう、この前も無事だったし、その前も…、だから…、ね。今度も大丈夫」

私に、大丈夫、っていうヤツは、みんなダイツクライだ。

「とりあえず奥の部屋に入りましょう」キョージユは他人事みたいに言う「アワセさん、放っておくわけにもいかないし、他にもいろいろ入ってるわけでしょう？」

「そうだよ、アキハ、助けなきゃ」シヨミが言った「あの鏡には、たくさんの人たちが囚われているんだ」

「そうよ、アキちゃん」ソソコさんも言う「その人たちを助けられないなんて、そんなの、全然、アキちゃんらしくない」

らしくなくて、いい。嫌なものは、嫌なんだああ。

恐ろしい力で両手を引っ張られ、意志に反して引きずられてゆく。廊下の奥へ。

これなら、さっきの得体の知れないモノのほうが、まだマシだ。

「あ、そうだ」不意に思い出したようにキョージユが問うた「ソソコさんと、シヨミさんは、大丈夫なんですか？」

「パパに巻いてもらってる」

「一回半くらいは保つ、らしいよ」

「一回半かあ」キョージユはひとりごちた「師匠らしいな」

どーん、と背中を打つ感触と圧倒的な圧迫感。私はがくりと頭を垂れる。

「あ、急に軽くなった」

「何かした？」

「いや、何も」キョージユが頭を振る「むしろ、やめただけです」

体中を悪寒が這いずり回る。吐き気をかみ殺して、悲鳴もあげられぬままに、部屋の中に引きずり込まれた。

第四話 眞実を映す魔鏡（10）

悪寒が全身を貫く。

一瞬、気を失いかけてよろめいた私をキョージユが支える。

体躯が瘡のように震え、歯の根があわない。

時代がかつた木製の椅子に座らされた。

「大丈夫ですか？ アキハさん」

大丈夫じゃねえよ。

「なぜ、…しばる」

「え？」キョージユは照れ隠しのように笑んだが、細紐をまく手は素早さを増した。ほどなく私の足と胴体は椅子にがっちり固定された。

「なんのマネだ…。…こるああ」

瘡気に当てられたかのような私の呻きに、キョージユはたじろんでいる。

「い、いや…、なんか具合悪そうだし、椅子から、ずり落ちないよ
うにと…」

「…んだとおお…」

「ま…、まて…、すぐだから、すぐ終わるから…、ね」

何が、ね、だ。このやろう。

「ソンコさん、水う」キョージユはそそくさと私から離れ、水盤の載ったテーブルに向かう。ソンコさんが水のはいったバケツをキョージユに手渡す。

「えーと、ですねえ。いまから水盤に水を張るのでえ」何でコイツは説明のときにこんな阿呆みたいなんだろう「そしたら、いろいろぼこぼこ出てくると思っのでえ」

何がぼこぼこ出てくるんだよ。何が？

「術師か、それに準ずる人は、まあ動けないと思うんだけどお。ヴァチカンのエクソシストの中には格闘術系の人もいるのでえ」ここでキョージユは、ソンコさんとシヨミをチラ見する「そういうのは、お二人にお任せしまゝす」

「はいよ」

「ほーい」

ソンコさんとシヨミ、さつと上着を撫でたと思ったら、両手指の間に左右4本つつの棒手裏剣。鈍く銀色に光る16本の刺が、ヤマアラシのようにジャツと哭いた。

「ママあ」

「なあに？」

「ドコ狙えばいいの？」

「殺すわけじゃないからね。急所以外なら、そうそう死ぬもんじゃないし適当に打てば？」

「急所って、ドコ？」

「目とか首とか」

「わかった、目と首狙えばいいんだね」

「…ま、狙って当たるもんでもないし…、それで、いいんじゃない」

「いつきまーす」おかしな掛け声と同時にキョージュが水盤に水をそそぐ。

ザラスシュトラの鏡。

いままでは漏れ出る余波だった漆黒の不安の塊が、一気に八方に黒の気を散らし、部屋の中を踊り狂う。

白刃が舞った。

キョージュの白木鞘、築山殿は赤く焰にうち震え、ピタリと切先を水鏡に落とす。

前回の死者の石で気づいたが、キョージュが力を開放すると、こ

こちらの身体的負荷は少し減る。おぞましさが増して精神的負荷で釣りがくる。

「どわあああ、て、て、ててて、て」

「どーしましたあ？」

「手え、きた、手、手、何本もきたー」

「あー、来ましたかあ」

「あああああ、あ、あ、あ、あ」

「こんどはあ？」

「あし、あし、あし、足」

幾本もの手足が折り重なって湧いてくる。なんで、こつち来るんだ。キョージユのほうに行って、オネガイ。

「あう、あう、あう」

「まだ人型にならない？」

「え？」

「人です。人はまだ？」

「ひとあ？」

手足だんごが空中でこねられ、飴細工のようにだらりとひしゃげる。これが人だというのなら、私は人間なんかやめたい。

「ぜんぜん、まだ、だんごお」

「団子、か」キョージユが白刃の切先をじりじり下げる。

漆黒のだんごは次第に形を変える。四肢と思しき突起が伸び、やがて、…頭？

「きたー、ヒト、きたー」

「よし、オツケー」

一本釣りのカツオのように、一人床に転がった。

そこからはもう一気だ。

黒の気炎をあげる水鏡から、幾重にも折り重なって、人が、吐き出されて来る。

第四話 眞実を映す魔鏡（11）

カツオだかマグロだか。

ザラスシュトラの鏡から投げ出された人が、私の回りに山と積まれていく。

ほとんどは外国人で、大抵は正気を失っている。運悪く立ち上がるものがときどき出てくるが、有無をいわず、左右の母娘の棒手裏剣でサボテンにされる。おい、目入っちゃってるぞ。急所外すんじゃないかったの？

両目をつぶされたものがないのは、これでも手加減しているのか。

よく見ると、ソソコさんとシヨミは淡い青のベールに包まれている。巻いてもらったっていうのは、このことかな？

ジャックポットさながらの大当たりが、ピタリと止み。ザラスシュトラの鏡は再び不気味な沈黙に堕ちた。

「あひゃ」

キョージユが切先を下方45度に下げた時、それは来た。

紫の咆哮。

ゆっくりと螺旋をまきながら上へ。

上で良かった。

「何か来てます？」

「むらさき、上に登ってる」

「オッケー」

紫光が渦を巻いて左右に揺れる。すごおく、嫌な予感がする。

「…るな、くるな、来るな…、うわああああ」

八股の蛇、あるいは蜘蛛、八本の突起を持つ光の咆哮がうねり、私に向かって殺到する。

ちょうど正面、目のまん前で2つに引き裂かれ、それぞれ左右に、どう、と落ちた。

右に落ちたのは初老の婦人、左は壮年の外国人だ。左がふらふらと立ち上がる。途端にハリネズミ状態に。

「シモーネ・マツツアリーノ」キョージユが手裏剣に打たれた外人に声を掛けた。その後、二言、三言、なにか喋っていたが、日本語ではなかったので良くわからない。外人は唸り声をあげるだけで、身動きは取れないようだ。

閃光が炸裂した。

圧倒的な量の光に目が眩む。眼球の内部がハレーションを起こし

て、光以外の全ての像を奪っていく。

「いやあ、…だめえ」

「大丈夫、大丈夫だから…」

「だいじょうぶじゃないよ…、二人が…、もう…」

さっきの閃光で、ソソコさんとシヨミを覆う藍色の衣はほとんど剥がれ落ちている。

「何？」

キョージユが一瞬、こちらを向いた。私の表情を見るなり、状況を悟ったようだ。

キョージユの瞳の底の色が変わったように見えた。

「アキハさん…、ちょっとだけ、我慢してね」

「え？」

空間を埋めつくしていた光が、真つ二つに裂けた。

「ぎよええええええ」

裂けた光が太い縄のように束ねられ、二つの切先を揃えて私を襲う。

「だあああああ」

切先が眼前で交差し、互いを付け狙うように二重螺旋で私を椅子ごと巻いていく。

「うぎええええ、や、や、いやああああ」

「ねえ、ママ」

「いひ、ひ、や、やめえ」

「何？」

「くるな、くるな、くるなああああ」

「アキハ、って、いつもこんなことやってんの？」

「ひぐ、…うぐ、いええええ、やあ」

「うーん、今日はいつもよりちょっとビドいんじゃないかな。見る初めてだから、よくわからないけど」

「…お…ねがい、…もう、いやっ、イヤ、いやああああ」

「へえ…、アタシだったら、殺されてもこんなの嫌だな」

「ああああああああああああ」

「ほんとだねえ」

地獄に堕ちろ、この腐れ母娘。

光の二重螺旋は舐めるように私を取り巻いて上昇する。先端が水盤の上に降り、光の玉となって膨れあがった。

光が人の形を取る。後光の中に、その顔にあたる部分がわずかに微笑んだように見えた。

「パードレ……」外人がそう呟いて、がつくりと膝を落とした。頭を垂れてうずくまるその格好は、見ようによっては祈りを捧げるようにも見えた。

光は霧散し、部屋は静けさを取り戻した。最後の人は実体化しなかった。理由はわからない。

キョージユは懐剣の切先を天に掲げ、仁王立ちのまま動かなかった。また気絶しているのかも知れない。

よく見ると白刃の中ほどに小さくヒビが入っている。

駿河家の家宝は四百有余年の天寿をまっとうし、深い眠りについたのだった。

第四話 眞実を映す魔鏡（12）

ヴァチカンの人たちは帰っていった。

あの、最後の人を助け出すのが彼らの使命だったらしい。

あの人が鏡の中に入ったのが、例のキョージュのエクソシストグループ半壊事件の時で、キョージュとあの人のおかげで半壊ですんだのだそうだ。

と、いうようなことをサンタに聞いた。サンタの説明はまわりくどいので、実際に聞いたときは、もっと長かった。

「じゃ、キョージュがヴァチカンにいなかったら、全壊だったの？」
サンタに問うてみた。

「うーん、どうかな。流石にそうだったら、もっと大騒ぎになるし、たいへんなんじゃないの」

「半壊も全壊も大差ないんじゃないの？」

「ヴァチカンまるごとなくなったら、さすがにニュースくらいにはなるだろ」

「へ？」

「最悪、そのくらいヤバかったらしいよ。だから、あの人、いろいろすっ飛ばして聖人に予約入ってるハズ、本当は有り得ないんだけど

どね」

「キョージユも？」

「ああ、あれは別モノ」サンタはヘラヘラ手を振る「埒外の枠の外だから」

あ、そうだ、と言ってサンタが問うてきた「この間の死者の石、どうなったか聞いてくれた？」

「持ち主に返したって」

「ええ」めずらしくサンタが頭を抱えている「ひどいなあ、それじゃ、手の出しようがないや。キョージユらしい、って言えばキョージユらしいけど」

「ザラスシュトラの鏡でも貰えば？ あれももう、破器されたわけだし」

「ああいう、でかいのは好みじゃない。どっちかというとあの懐剣のほうがいいな」

「いちおう家宝らしいから、払い下げはないんじゃないの」

サンタが顎をしゃくって玄関のほうを差すので、振り向いたらキョージユがいた。

じゃ、またね、とサンタに送り出されて店を出る。

「やっぱり行かないとマズインでしょうか？」いちおうキョージユ

に問うてみる。

「うーん」キョージユは歩きながら腕組みをした「依頼人ですしね。ことの起こりはあの人の依頼からだし、そもそもなんであんな所にザラスシュトラの鏡があつたのかも聞かなければならないですし」

「はあ」

アワセカガミの意識が戻った、と連絡があつたのである。アワセさんは例のサンタの本体が入院している病院にいる。ようするにあの病院、術師会の手が入っているということだが、それにしても…。

「何かもうグダグダになってるし、依頼自体も有効かどうかわかりませんよね」

「もう本部扱いになってますから、依頼うんぬんはどうでも良くなってます」

やっぱり。

本部扱いっていちばん割りにあわない、ボーナスもほとんど出ないし。

がつくりと肩を落とす私を見て、慌ててキョージユが付け加える「あの、…そのお、言い難いんだけど、ボーナスの方はタモンさんが色つけてくれるそうなので、心配しなくていいです」

「ほんと?」

キョージユを見上げる私の瞳は、たぶん、キラキラしていたと思

う。

「ほんとです。でも、内緒にしてくださいよ」

「うんうん、絶対、誰にも言わない」

病室に着いた時、アワセさんは眠っていた。

いろいろな配慮の結果だろうが、アワセさんの病室は個室で、看護師さんが二人、専属で付き添っている。

意識は戻りましたが、まだ不安定なので、と年配の方の看護師さんが説明してくれた。あまり興奮させないでくださいね、と注意を受けた。

「アワセさん、アワセさん」看護師さんが寝ている病人の頬を軽くたたく「お見舞いの方ですよ。アワセさん。起きて」

アワセカガミはうつすらと目を開けた。看護師に支えられて半身を起こす。しばらく病室の中を彷徨っていた彼女の視線が私に向いた時、その目が大きく見開かれた。

「おじょうさま」

え？

「おじょうさま、なぜここに？ まれすけ様は…」

看護師を振りほどいて私ににじり寄ろうとする。こちらもわけがわからず、声も出せずにあとずさりした。

「おじょうさま、私を、私をお忘れになったのですか？ 私は…、私は…」

アワセカガミは急にぐったりとベッドの上につつぶした。年配の看護師が首に鎮静剤を打ったのだ。

乱暴な病院だなあ。怪我してもここにはこないようにしよう。

それにしても、

私、この人に会ったことあったっけ？

<真実を映す魔鏡 - 了>

第五話 精霊が降る聖夜（1）

「そういうことで」と、ソンコさんは言う「カガミの件はこれでおしまい」

本当におしまいでいいんですか？ と問うて見たところ、だってしょうがないじゃない、と返された。

「ザラスシュトラの鏡は破器完了だし、アワセカガミも壊れちゃったし」

「ザラスシュトラはともかく、アワセさんのほうはもう少ししたらなんとかなるんじゃないですか？」

「無理でしょ」と、ソンコさんはそっけない「キョージュの仕事場において、無事ですむわけないもの」

「アワセさん、一般人でしょ？ キョージュの力って普通の人に影響ないのでは？」

「普通じゃないもの。アワセカガミは、術師くずれ」

「インチキ占い、って言ってたじゃないですか」

「占いはインチキだよ」ソンコさんが口をとがらす「アワセの能力は、操神、だもの」

「へ？」

「操神、精神をあやつるの、マインドコントロール。だから占いはインチキでも、占ってもらった人はお金ガバガバだすわけ。もつとも、そんなことしてたから力はどんどん失われてたわけで、最近ほとんど無能力者に近かったんじゃないかな。それに鏡にもだいたい吸われただろうし。だから逆にあの程度ですんだとも言えるけど」

「じゃあ、ザラスシュトラの鏡を調べてみたらどうです？」

「もう、破器されてるしなあ」このオバサン、まるでやる気が感じられない「ウチの仕事としては終わってるんだよね。調べようにも手元にないし」

「ヴァチカンが持って帰ったんですか？」

「まさか。むこうでも用済みでしょ。霊峰友愛にあるよ」

「え？ 置きっぱなしなの？ あのまま？」

「だって、あんな重たいものどうしろっていうのよ？」

これ以上の会話は不毛と判断し、私はしゃべるのをやめた。

「あ、心配いらないのよ、アキちゃん。仕事はたくさんあるからね。ほら、これなんかどう？ 立て続けに親戚が八人死んじやって何かの呪いじゃないかって依頼人が…」

その依頼人を逮捕するように警察に言ってください。しゃべり続けるソニコさんを残して、詰所のドアを閉めた。

秋の風が冷たい。

コートの襟を立てて舗道を歩く。もうすっかり陽も暮れて、街行く人は皆、物憂げだ。

トリック・オア・トリートなどと呟いてみたが、誰がお菓子をくれるわけでもない。

「あら、アナタ」

声のほうを向いて驚いた。

黒貂のロングコート、おそらくフェイクではない、に身を包んだ婦人、しかも縦ロール。

レイカ様だ。

「何しているの？　こんなところで」

突然のことに声も出せずにいると、レイカ様が続けて問うた。

「暇なの？」

こくこくと頷く。

「そう、それならちょうどいいわ」レイカ様はくるりと踵を返す「ついてらっしゃい、飲みにいくわよ」

え？　え？　え？

5歩、歩いたところでレイカ様が振り返る「何しているの？ 来ないのなら、置いていくわよ」

レイカ様の片眉があがっている。これはマズイ。

一も二も無くレイカ様を追って走り出す。

「急にどうされたんですか？」

「新装開店で呼ばれたのよ。一人じゃ馬鹿みたいだし、行く気はなかったんだけど。お供でもいるのなら、まあ良いかしら、と思って」レイカ様は私の首から下へ視線を滑らす「地味だけど、まあ、それなりの格好してるし、ドレスコードにはひっかからないでしょう」

え？ ドレスコード？

スーツじゃなくてワンピースだったのが良かったのかな。低いけどヒールで良かった。

「ここよ、ここの地下」

一瞬、立ち止まったかに見えたレイカ様は、そのまま狭い階段を降りていく。

階段の前には手製のウェルカムボードがあった。さっと目を通して愕然とする。

「ちょ、ちょっと、レイカ様」入口のドアに手をかけんとするレイカ様を押しとどめる。

「どうかして?」

「どうかして? って、ここホストクラブじゃないですか」

「そうだけど、だからどうしたの?」

「私、こんなトコ入ったことありません」

「あら、そう、良かったじゃない。お店も新装開店だし、アナタも初めてなら、初めて同士でぴったりね」

レイカ様がドアを開けると、まばゆいばかりのシャンデリアの燐きと、野太いくせに上ずった、いらっしやいませ、の連呼が私を襲った。

第五話 精霊が降る聖夜（1）（後書き）

術師たち（表）シリーズ第五作目です。

形式的に第四話と続きの話になっています。というか、もともとひとつの話だったのが、長くなりすぎたので二つに分割したというのが、真相です。前話が尻切れトンボと言われてもしょうがないですね。トホホ。

第五話 精霊が降る聖夜（2）

「わー、はははは、レイカ様あ、ちゃんと、飲んでるうう？」

「飲んでるわよ。あ、ちょっと、アナタ、それアタクシのコート…」

「あったかいのお、ふかふかあ」

「あたりまえでしょ、それ鞆すのにどれだけ手間がかかったと…」

「…はい、ターキー１８年でございまーす、もちろん、ストレイ
トウ、おまつたせしましたあ。」

「おおお、きたー、ニワトリさん」

「七面鳥でしょうが…、って、かえしなさいよ、コートツ」

「…すてきでしゅう、このコートオ…、でもさ、レイカ様ってさあ、
他の趣味はいいのに、なんで男はあんな趣味わるいのおお」

「男…って、何よ、アナタ。あああ、やめなさい、ウイスキーこ
ぼすなあ」

「ぷっはあ、やっぱ、女はバーボンっすよねーえ。っていうかあ、
趣味悪いでしょ、いったい、キョージユのどこがいいの？」

「…え？ ダーリン、…の、こと？」

「そ、そ、そ、ダーリン、だーりん、それぞれ。どこがいいんですか、あんなの？」

「だって、…光ってる…し…」

「え〜？ なに〜？」

「だから、光ってるの」

「ひかっている？ ピカピカ？」

「そうよ、光ってる殿方なんて、ダーリンが初めてだったんですもの…」

「へえええ、そおかあ、そういう風に見えるんだあ。性格悪いのになあ…」

「え？ ダーリン、て性格よろしくないの？」

「よろしくない、なんてもんじゃないっすよあ。あんな根性の捻じ曲がったヤツ見たことないしい」

「…そ、…そんなに？」

「話したことないんですか？」

「…え、だって、そんな…、いつも遠巻きに見てるだけだし…」

「いかん、いかなあつ、レイカ様。趣味悪いのはともかく、そんな内気でどーする、あ、おかわりい」

「――かーしこまりましたあつ、こちらターキー、エイティーンイヤーズ、ワンモア」

「めんどくさいから、ボトルもってきてえ」

「――あーりがとうございまーす。ノーグラス、ボトルワンツ

「ちょっと、アナタ、いいかげんにしなさいよ……」

「だからあ、もっとどうどうと声かければいいじゃないっすかあ。あ、あたりめちよーだい」

「――しょうちいたしましたあつ、カトルフィッシュジャーキー、プリーズ」

「そんな……、声だなんて、そんな近くまで行ったりして……」

「行ったりして、ほれほれ、どうすんのあ?」

「無理よ……」

「なんでえ?」

「だって、そんな、そんなことして、もし……」

「えー、もし?、もし、つてなに?」

「もし……、ダメ、万が一アタクシの力が無くなってしまったら……」

「え？」

「ダーリンの力でアタクシが無力になったら」

「何言ってるんですかぁ。そんなことさせませんよぉ。こっ首をキュッ、と」

「おだまりなさい。アナタにはわからないのよ。アタクシに予知能力がなくなったら…」

「いや、だから大丈夫ですってば」

「何が大丈夫よ、いい加減なこといわないで…。私から予知能力がなくなったら、この美貌以外になんの取柄もない女になり下がるのよ。アナタに何が…」

「あ…、ちよと…、レイカ様、あの…」

「ヒドイなあ、お嬢ちゃん、レイカ様泣かしたりして」

「あれ？ カゲしゃん、なんでいるの？」

「なんでって、それはこっちのセリフだけど。ま、なんにせよ来てくれてうれしいよ。それにしてもレイカ様が来てくれるんなら、もっと早く来るんだった」

「フン、アナタに頼まれたから来たわけではなくてよ。この娘と話してみるのも一興かと思っただけ」

「つれないなあ。ま、オレの店にレイカ様が来てくれるなんて、め

ったにないことだから、お嬢ちゃんに感謝しなくちゃな」

「じゃ、お酒ちょーだい」

「え？」

「え？」

「お酒だいすきー」

「このお嬢ちゃん、かなりヤバいんじゃない？」

「アタクシだってこんなになるとは思わなかったわよ」

「…どうして…」

「アタクシ、自分に関係することは見ないようにしているもの」

「わあ、あやしいぞお、なにコソコソ内緒話してるのぉ」

「あ、いやいや…、そろそろイベント始まるから、お嬢ちゃん、ステージのほう…」

「え？ あのイベント？ アタクシあれは…」

「ま、そう言わずに、いちおう名物イベントなんだから」

「…たいへん、なつがらく、おまたせいたしましたあつ」

「…ただいまからあ、フォーリン・スピリッツ、スペーシャルイベ

ントオ、ドンペリプールのお時間でございます

・ ・ お客様もふるってご参加ください

・ ・ あ、それ、ド・ン・ペ・リ

・ ・ ド・ン・ペ・リ

・ ・ ド・ン・ペ・リ

・ ・ ド・ン・ペ・リ

・ ・ ド・ン・ペ・リ

「何アレ？」

「ビニールプールにドン・ペリニヨン注いで、そこに飛び込むって
いう、悪趣味なイベント。ほんとにもう」

「ドン・ペリニヨン？ ドンペリ？ お酒…？」

「本物使ってるんだから、その点ぐらいは認めてほしいなあ」

「どうせ従業員しか飛び込まないのに…、無駄の最たるものよ」

「ドンペリ…、お酒？」

「…あ、ああ、もちろん、シャンパンだよ」

「いちばんっ、アキハ、いきまーしゅ」

「え？ わ？ ちょっと、お嬢ちゃん」

「とつげきーっ」

「おやめなさい。やめてー。せめて、コート脱ぎなさいーい」

第五話 精霊が降る聖夜（3）

目覚めたのはベッドの中。

しかも見知らぬ部屋だった。

部屋が猛烈な勢いでななめに回る。立ち上がるにも壁に手をつく必要があった。

頭を少し揺らすだけで、脳内に釘をばらまいたかのような激痛が走る。

頭痛は歯をくいしばって耐えた。しかし…、

よろよろとドアに向かうも、立てては歩けない。四つんばいでにじり寄る。

自分の部屋でないのは、もう、わかっている。喉の上蓋までこみ上げてくるものがあるが、ここでぶちまけるわけにはいかない。

ドアから廊下に這い出る、突き当たりに階段が見えた。

二階？

階段を降りるのは…、とても、間に合いそうにない。

が、

階段の手前、他のドアと違う引戸が見える。

あれなら…、

己が頭部に刺激を与えぬよう、細心の注意を払いながら引戸にじり寄る。

手掛かりまで手を伸ばすのももどかしく、すき間に指を入れ、引戸をこじ開けた。

あつた。

便器を見つけてこれほど嬉しかったことはない。

頭を突っ込んで、思いきり吐いた。

ひとしきり吐いた。

便器を抱いてまどろみつゝ、ときどき思い出したように吐いた。

胃液しか出なくなった。

胃袋をひっくりかえすほどに吐いて、小休止の均衡を得、手すりに捕まりながら階段の上をずりずりと尻を滑らせて降りた。

どこの誰の家かは知らないが、階段に手すりがついているのはありがたかった。バリアフリーって健常者にも必要だと思った。

キッチンで水をたらふく飲んで、そのまま一階のトイレで吐いた。

飲んで吐き、吐いて飲んで、吐いた。

キッチン幅広く豪華だったが、あまり料理に使用しているようには見えなかった。

気がつくとき、かなり広い家なのだが、あまり生活臭がない。というか、さっきからバタバタしているわけだが、家人の一人も出てこない。

着ているのがデカイパジャマなのに気づいた。男物だ。いろいろ考えたほうが良いのかもしれないが、頭が働かない。

飲んで吐き、を繰り返していると、窓の外が勝手に光の向きを変えていった。長い西日を浴びながら、水を飲んで吐いていると、やがてその日も落ちた。

知らない人の家だったが、灯りつけるくらいはいいか、と思ってスイッチを入れた。

ダイニングテーブルにつき、椅子に座ってテーブルに頬をのせた。ひんやりと冷たさがつたわり、とろとろと微睡んだ。

「おい、…ルヒコお、いいサケが…」

リビングの入口に顔を向けると、変な爺さんがいた。

「おや、ハルさん」じじいは言った「何でこんなところに？」

白髪を短く刈り込んだ爺さんは、オレンジのポロシャツにコールテンのパンツといういでたちだった。右手に買物袋を下げている。

どっかで見たことあるな、この爺さん。何でだろ？

「いやあ、ハルさん」爺さんは買物袋をテーブルに置いた。ムツとする生臭さが袋から漂う「久しぶりだなあ。ハルヒコのところに住たのなら、もっと早く連絡くれればいいのに」

「…ハ…ル…？」

「どうした？ ハルさん？」

「ワタシ…、アキハ…」

「え？ アキ？」

再び、嘔吐がこみ上げてきて、トイレに駆け込んだ。

洗面所で顔を洗って、軽く身なりを整える。おずおずとリビングに戻った。

良く考えてみると、いま私は男物のパジャマを着ている。このお爺さん、素性は定かではないが、たぶんこの家の主人の知合いだろう。

どう考えても、この状況はヤバイ。

誤解される。

「そうかあ、アキさんかあ」爺さんは一人で納得している。「もう季節が変わつとるのだな。いつもそれでハルヒコに怒られるのだが…、しかもナツを通り越して…、アキか…、歳とるとどうしようもないなあ」

「あの…」

「ん？」

「…すみません、…ハル…ヒコ、さん…って？」

「あ、ああ、あ、ああ、すまん、すまん」老人は大げさな身ぶりで謝つてみせた。「アイツ、ハルヒコのヤツは皆にはそう呼ばせておらんのだな。いまだき名縛りでもあるまいに…、どうも、ああいうところは古くさくて好きになれんのだが…、なんだっけな…、うーん…、あ、そうそう…」

老人の次の言葉に私は驚愕した。

「…キョージュ」

「…え？」

「キョージュ、とか呼ばせているのだよな。自分のことを。それほど学があるわけでもないのに、何を考えているのやら…」

…キョージュ？ キョージュ、って…

ここ、キョージュの家？

だぶだぶの、手のひらが半分かくれるパジャマを見る…

これ、これ、って、もしかして、キョージユのパジャマああ???

いままでにないぐらいの速度でリビング全体が回りだした。これは二日酔いのせいでは、…絶対ない。

「まあ、何にせよハルさ…いや、アキさんか、アキさんがいてくれるなら安心だよ。ハルヒコ一人じゃなあ、どうにも不安で」

「ち、ちが…」

「ん、どうした、アキさん？」

「違うんです。ぜんっぜん、ちが…、とにかく、違うんです」

「違う…って、何が」

そう言って笑う、老人の顔が、私の記憶の中の一人の人物と重なった。

術師会創始者にして、日本の、いや世界の秘術者の羨望と嫉妬をその一身に集める異能者。生ける魔神とまで称された男。

賀茂萬山。

萬山の術師としての逸話数あれど、最たるものはその養子。

賀茂家のリーサル・ウェポンと呼ばれたその子は、他のどんな呪術の影響を受けることもなく、瞬時に相手の術師を粉碎するという。

一説には、その子は人から生まれた者でなく、萬山が手ずから創り出したとも云われている。

その名を、賀茂晴比古。

って、この爺さん、キョージユのお養父さんなわけええ。

「あ、ちょ、アキさん……。アキさんっ」

もう一度、リビングが揺れ、床が急速に左頬に近づいた。

テーブルの上の買物袋から、とびっきりの生臭さが鼻へと流れ込む。

いまわかった。

袋の中身は鮭だ。

第五話 精霊が降る聖夜（4）

「本当にすみません、アキハさん、まさか親父があそこまでマヌケとは、面目次第ありません」

キョージユは焼き鮭の切り身を頬張りながら謝ってきた。土下座でもしていればまだしも、まるきり説得力というものがない。

「オマエがサケ持って来いっていつから……」養父は不満気に口ごもる。

「お手伝いさんを廻してと頼んだんですよ？」キョージユの語尾が危険に上がる。「具合の悪い友人を家で寝かせているが、どうしても出かけなければならぬ用ができたから、介抱できるお手伝いさんを一人廻してください、と言ったのに、何であなたが来るんですか？ あなたなんか来たって何の役にも立たないでしょうが」

「サケ持って来いって言っただろ？」

「そりゃ、何か足りない物無いか、って聞かれたから、お酒がもうありませんと言いましたが、だからって鮭持つてくるって……ボケたんですか？」

「酒の飲みすぎは良くないぞ」

「よりによって、あなたに言われたくはないですね」

「オカワリ、アリマス。サケ オイシイ」そう言っでご飯茶碗を

突き出す外人。で、いったい誰なんだよ、コイツは？

「あ、いいよ、シモン。僕がよそうから」キョージユは外人から茶碗をひったくってキッチンに向かった。まあ、それぐらいはして当然だろう。

キョージユの養父の来訪直後に倒れた私は、その後、帰ってきたキョージユに針を刺されて気がついたらしい。おかげで二日酔いはそれなりに軽くなったが、キョージユの連れてきたこの外人が、腹が減ったと騒ぎ出した。しかたがないので、まだ残る吐き気を我慢しつつ、鮭をさばいて、冷蔵庫のあり合わせで夕食を作ったのだ。給仕くらいしてもらって当然だろう。

「アギーさん、アリガト、トテモオイシイ」

「シモン。アギー、じゃなくて、アキハ、さんです」

「アキハさん、アリガト、トテモオイシイ」

お粗末さまです、と返した。シモンは本当においしそうに食べる。焼き鮭や味噌汁はもちろん、ニコニコしながら、おひたしと酢の物まで平らげた。外国の人にはちよつと無理かな、とも思ったが、少し腹も立っていたので、和風の献立にしたのだが、彼には難ではなかったらしい。こんなにきれいに食べてくれれば、作ったほうだつてうれしくなる。

問題は残りの二人だ。

「オマエ、ちゃんとおひたし食えよ。せつかくアキさんが作ってくれたのに」

「アナタこそ、酢の物には手もつけてないじゃないですか、シモンだって全部食べてるのに、ホヤが苦手、とか子供みたいなこと言わないでください」

「味噌汁の小松菜も食べ。味噌汁、つてのは汁だけ飲めばいいってもんじゃないんだぞ」

「ちゃんと食べますよ、おひたしと一緒に。子供の頃から、最後にまとめて食べるのが習慣なんです」

「大人になってまで、そんなことするなよ」

「だいたいアナタは、魚の食べかたが汚すぎるんです。身もボロボロで半分も食べてないじゃないですか。その箸使い、本当に日本人なんですか？」

あんまりうるさいのでキッチンに避難して、コーヒーを淹れる。

シモンがやってきた。コーヒーの香りに惹かれて来たのだろう。ダイニングの二人は、まだ低レベルの争いを続けている。

「アキ八さん、アリガト、トテモ、カンシャシテマス」

いや、あの程度の食事で、そこまで言われても、かえって恥ずかしい。

たいしたことないですよ、と答えたのだが、シモンは首を振る。

「ナイ、ナイ。チガイマス。アキ八さん、パーデレ タスケテクレ

タ」

「パーデレ？」

問い返した私に、シモンは困ったような顔をする。

「パーデレ ニホンゴ ナニトイウカ？ ハルヒコ キイテクル」

テーブルにとって返したシモンは、キョージユと異国の言葉で何か話している。そしてキョージユを引き連れて帰ってきた。

「シモンはアキハさんにとっても感謝してるんです」とキョージユは言う。

「それは何度も聞きましたけど、そんなに感謝されるほど、たいした料理作ってないし」

私の答えに二人はブンブンと音を立てて左右に首を振る。また二言三言、言葉を交わして、もう一度キョージユが言う。

「シモンは、アキハさんにお父さんを助けて貰ったので感謝している。お礼がしたいと言っているんです」

「お父さん？」訳がわからないので問い返した。

「お父さんです」キョージユが繰り返す「マツツアリーノ枢機系、この間、ザラスシュトラの鏡から一番最後に出てきた人」

あゝあ、思わず叫んでシモンの顔を指さす。どこかで見たと思ったら、そのお父さんが出てくる前に、アワセカガミと一緒に出てき

た外国の人ではないか。

「ソウデス。アキハさん。カンシャシテマス。タベマシヨウ。タベマシヨウ」

え？ まだ食べるの？ いま、ご飯三膳もおかわりしたばかりなのに。

「違う、違う、シモン」キョージユがあわてて取り消す「そう言うときは、食べましよう、じゃなくて、ご馳走します、って言うの」

「ゴチソシマス？」

「そう、ご馳走します」

「アキハさん。ゴチソシマス」

ここに来たときから、ずっと、タベマシヨウ、と言ってたので、てつきりお腹がすいているのだばかり思っていたのだが、そういうことだったのか。

「あ、ありがとう、シモン」

私の答えを聞いて、やっと二人は安堵したらしい。顔を見合わせ、またよくわからない言葉で会話する。

「シモンが言うには」キョージユがおずおずと問ってくる「フレンチでいいか聞いてくれ、と言うんですが、アキハさん、フランス料理は大丈夫ですか？」

「え？」

「いや、フレンチのフルコース、道玄坂に良い店があるって、シモンが言うんだけれど、もしフランス料理が苦手だったら、別でも…」

「苦手ない、食べるっ」思わず叫んだ。フレンチが苦手な女性がいるとかいう発想は、いったいどこから出てくるんだ、この男は本当に。「行くっ？ いま行くっ？」

「いや、さすがに今日はもう…」キョージユはシモンと相談している。「もし、アキハさんの都合さえつけば、明日でどうですか？ シモンもあまり長くは日本にいられないそうなんで」

「わかった。明日ね」そしてシモンのほうを向いてにこやかに微笑んだ。「ありがとう、シモン」

シモンは、とても良い顔をした。よく見るとアジアンテイストな顔立ちだ。どこことなく名前はヨーロッパ風なのに、何故だろう。

ま、いいか、明日はフレンチだし。

第五話 精霊が降る聖夜（5）

まばゆい光を放つシャンデリアの下、私の目の前には形良く立ち上がったナプキンが置いてあり、その左右には行儀良く、ナイフ、フォーク、スプーンが並べられている。コース料理の前の、この融和と緊張の適度にミックスしたひとときが、私は好きだ。

私の右隣にはシモンが座っている。世話になった礼に夕食をご馳走してくれると言う、見上げた心根の持ち主だ。礼節を軽んじる日本人が増えた昨今、洋の東西を問わずこのような人とつき合えるのは喜ばしい。

左隣にはオマケで付いてきたキョージュがいる。この件でキョージュがこの席につく理由は私には思い当たらないのだが、シモンのたつての希望とあれば、まあ、これぐらいは目をつぶろう。

「ママ、フレンチは久しぶりだね」

「そうだったけ？ あたし、仕事絡みで最近立て続けだったから…、ま、週一くらいなら飽きるってこともないし、ここはおいしいから」

「ふーん、そんな食べてるんだ、いいなあ」

「あー…、ソンコさん？」無駄だとは思うが問うてみる。

「なあに、アキちゃん？」ソンコさんは微笑んだ。

「何で、ここにいますか？」

「シモーネ・マツツアリーノさんが、マツツアリーノ枢機卿を助けたお礼にご馳走してくれるんですって、素敵よね」

「素敵よね」

当然のように言っただけのけた母娘はちよこんと軽く、シモンに頭を下げる。シモンも会釈した。ずいぶん日本馴れしてるな、シモン。

「棒手裏剣で穴ボコだらけにしたお礼？」これで引き下がるのもシヤクなので、少しチクリと。

「やだ、アキちゃん。アレ、霊針っていうのよ。棒手裏剣なんか、練習の時以外に、持ち歩いたりしないわよ。かさ張るし重いし」

「刺さっても、痕残らないんだよ、アキハ。死ぬ程痛いけど」

やはり効かない、悔しい。

「シヌ、イタイ、タイヘン」

そうだ、もっと言ってやれ、シモン。

「デモ、イタクテ、メサメタ、トウサンアエタ、ウレシイ、カンシヤシテマス」

まあ、と母娘は声を上げて感動している。カンシヤなんかするなよシモン。こいつら図に乗るぞ。

銀彫の軸をあしらったシェリーグラスに琥珀色の液体が注がれる。

何ですか？ と問うと、三十年モノの梅酒です、と答えが返る。

「ねえ、ママ、飲んでいい？」

「食前酒だしね。それぐらいはいいんじゃない？」

ああ、爽やかな芳香。梅酒でも三十年かければこうなるのか、いまから作っても呑み頃にはすっかり婆さんだな。

食前酒を堪能しているうちに前菜が来た。あわててナプキンを膝にひろげる。

白くてちっちゃい何かが皿の上に乗っている。ちいちゃいのに三段重ねだ。

「あ、これ…」

「ヤン、おいしい」

そうなのだ、半分に切って、口に運んで驚いた。

一段目が何かよくわからない生の貝柱、こりこりと食感が楽しい、それと最下段の平目であんきもを挟んでいる。酸味の効いたソースとともに舌の上で踊るようだ。平目はきちんと昆布でしめてある。

「平目だけならこの間の寿司屋のほうがおいしいけど、これはスゴイ」

「そうねえ、梅酒もいいけど、日本酒が欲しくなるね」

いちいち気に障るな、この母娘は。

「シモン、て、あんまりイタリア人ぽくないね」

「ナンデスカ？」

シヨミが突然、発した問いにシモンが瞬きした。

「イタリア人、と、シモンの顔、違う」

「アア、ワカッタ、ワカッタ」シモンはさも可笑しそうに笑う、この辺はイタリア人ぽいのだが「トウサン、ニセモノ、トウサン、イタリアジン、ワタシ、カルカッタ ウマレタ」

ニセモノ？ みんなで顔を見合わせる。

「トウサン、ニセモノダヨ。ハルヒコ、オナジ」

「シモンはマツツアリーノ枢機卿の養子なんですよ」キョージユが説明を入れた「生まれはインドだからインド人」

「ソウ、ソレ、ワタシ、インドジン」

なるほど、それで顔つきがアジアっぽいんだ。キョージユと同じ養子だって意味ね。親子関係はシモンのほうが良さそうだけど。

シモンのブローケンな日本語は、慣れるとあまり苦にならない。途中からはキョージユの通訳なしで普通に話せた。

養父のマツアリーノ枢機卿がザラスシュトラの鏡に閉じ込められたのは、とある悪魔払いの真最中だったらしい。

「トウサン、いんへるの、イッタ、オモッタ、カナシカッタ」

そう言うシモンに私たち三人は思わず涙ぐんだ。

「悪魔は？」

「ハルヒコ、ケシタ」

「ああ、まあ、それぐらいはしないとね」

キョージユが隣でむせている。

その後、件の鏡は行方不明となり、マツアリーノ枢機卿の消息も途絶えた。ハルヒコの所為ではないと皆に諭されたが、やはり恨んでしまった、と。

いや、シモン、キョージユなんか恨んで当然だよ。詳しい事情は知らないが、お養父さんが鏡に吸い込まれたのだって、絶対、キョージユのせいなんだから。

「デモ、キノウ、トウサン、ヒカリミエタ、ぱらでいそ、イッタ、ウレシイ」

私たち三人は、また涙した。

「あ、もついいんで、下げてください」ウエイターにキョージユが言った。

「ちょっと、それ、ほとんど手つけてないじゃないですか、もったいない、牛フィレですよ」横から皿をかつさらってキョージユを叱る。

「あ、ああ」

キョージユの気のない返事に、ますますイライラがつのる。

「だいたい、さっきから、どの皿もはしっこ噛じるだけで口クに食べないで下げさせる。勝手にブレンダー頼んで飲んで。せっかくシモンさんがご馳走してくれてるのに、何ですかその態度は」

「あ、ああ、ごめんなさい」

「もう、いいです。食べないのなら、これ私が食べますから」

「え？」

「何？」

「あ、いや…、どうぞ」

実は、牛フィレの赤ワイン蒸し好きなんだ。二人分食べられてラッキー。

食事の間、終始シモンはにこやかだった。積年のつかえがとれたこともあったのだろう。それでも、デザートを食べ終えて、コーヒーがカップに注がれる頃に、一度だけ、寂しげな表情を浮かべた。

「どうしたの？ シモン」

「ウレシイカタノ、アキハさん、トウサン、アエタ」

「うん、よかったね」

「ウン、デモ……」シモンの次の言葉はほとんど聞き取れないぐらいに小さかった「モスコシ、ハナシタカタ」

「お父さんと？」

「ウン、ハナシタカタ」

何かジンと来た。隣を見るとキョージユが呆けた顔でブランデーグラスを傾けている。ムツと来た。

「可哀想だと思わないんですか？」

「え？ あ？ 何？」キョージユが狼狽えている。

「お父さんと話したいんだって、シモンさん」

「あ、ああ、そ、そうなの？ シモン？」

シモンは無言で頷いた。

「そ、そうだね」キョージユはまだドギマギしている「久しぶりだったのに、ほとんど話す時間なかったし」

「呼んであげればどうですか？ この間の猿の手のときみたいに」

「え？ ええっ？」キョージュはブランデーを喉に詰まらせてむせた。

ソンコさんとシヨミもこちらを向いた。

ゲホゲホ、と咳こんで話すのもままならないキョージュ。

「だって、あの時は…、薔薇もあつたし…」

「そんなもったいつけなくても、ちゃちゃ、っと呼んであげれば？」

「えー？」キョージュは言いながら、探るようにソンコさんのほうに視線を投げる。

「アキちゃんと呼べって、言ってるんだから、呼べば？」

「ほらあ」

キョージュは、たぶんイタリア語で、シモンに話した。最初こそニコニコ話を聞いていたシモンだが、途中から、驚きと歓喜と失望を交互に表情に出しつつ、猛烈な勢いで異国の言葉をまくしたてた。それでも埒があかないようで、最後には私の方に日本語で話しかけてきた。

「ダメ、ダメダヨ、アキハさん。ソレ、トテモ、ダメナコトダヨ」

「遠慮しなくていいよ。シモン」私は言った「もう一度、お父さんに会おう」

どうせ、キョージユが何かやるだけだし、私は関係ないから。

第五話 精霊が降る聖夜（6）

朝から本当にバタバタしている。

昨晚、夕食から帰宅した後、キョージユは渾々とシモンを説得しつつ、あちこち電話しまくっていた。いつのまにか電話のほうで忙しくなったらしく、シモンの相手は私が担当することになった。自分の部屋に帰っても、この前買った52インチのテレビが占拠していて寝る場所もないので、着替えだけ取ってきて、私もキョージユの家に居座ることにした。

キョージユはずっと電話でしゃべりっぱなしなので、どうなっているのかシモンに問うてみた。シモンの言うには、死者は復活の日までこの世に戻ってはいけませんが、聖人であれば、万聖節に降臨できる。マツアリーノ枢機卿はまだ聖人ではないが、それに準じた扱いを受けられるだろう、とハルヒコが言っている、そうだ。なんだか、ずいぶんなこじつけだが、シモンが納得しているなら、いいや。

それで、その昨晚からの電話の結果がこれなのだ。朝一番から庶務班がやってきてリビングの模様替えを敢行している。結構な大仕事になっていよう、みなお腹が空いているみたいだ。可哀想なので炊出しまがいのことをしてみた。料理している気配の見えないキッチンのくせに、50センチのフライパンだの、冷蔵庫開ければ有頭海老だのバーナ貝まで出てくる。スパイスもほぼそろっていたので、パエリアを作ることにした。分量にして15人前、どうだつ、という勢いで出したのに昼前には鍋の底が見えていた。

そんなに人いたっけかなあ。

好評だったようだし、どうせ他人の家の冷蔵庫だ。野菜室まるごと天麩羅にしてみたが、これも揚げるそばから消えていく。

ふと菜箸を休めて、リビングを覗いてみると、しきりにもぐもぐしているオジサンがいた。

「やあ」快活に手を上げるタモンさんは、春菊の天麩羅に塩をふつていた「不肖の弟子と師匠が迷惑かけてすみません」

「いえいえ」と術師会会頭にむけて謙虚に会釈した。あなたの嫁と娘にも迷惑かけられてますから「今日は、またどうして？」

「うん、キョージュがね」タモンさんはまいたけを飲み込んでから答えた「面白いモノ見せてくれるっていうから、家族で来たんだ」

家族？　面白いモノ？

庭のガーデンテーブルにソンコさんとシヨミがいた。いつの間に取りつけたのか、パエリアにパクついている。

「面白いモノ、って何ですか？」

「歴代のキリスト教の聖人が大挙して来るらしいじゃない」

「え？　シモンのお養父さん、呼ぶだけでは？」

「いや、一人だけ、っていうのはかえって難しいんだよ。みんな一緒なら単なるハロウィンですむし」

もしもし？ タモンさん？ ハロウインの意味、間違えてませんか？

「タモンさん、コンチワ」

「やあ、シモン、久しぶり、元気そうだなによりだね」

シモンは平静を装っているがかなり興奮しているようだ。鼻の穴が広い。

「トウサン、コレルカナ？」

「ハルヒコのことだから、それは大丈夫だろう。アキ八さんも協力してくれているし」

「アリガトウ、アキ八さん」

「どういたしまして」協力ねえ。タモンさん、そんなお世辞言わなくても、もっと天麩羅揚げてあげるよ。

大道具の用意は終わったようで、庶務班は引き上げていった。部屋の中にはシモン、タモンさん一家とキョージュと私。

「アレ？ 父は」キョージュがタモンさんに問うた。

「見るに忍びないので辞退、だそうだ」

「ふーん」意外そうな顔でキョージュが言う「あの物見高い男が、珍しいこともあるもんだ」

「まあ、いろいろあるんだろう、彼なりに」タモンさんが笑う。

「わあ、でっかい十字架」リビングの真ん中に据えられた木製の十字架にシヨミが感想をもらした。

「キリスト教だしね。あまりこういうところをケチるわけにもいかないよ」タモンさんが娘に諭す「まあ、昨日、キョージユにいきなり電話もらったときには、さすがに驚いたけどね。この前使ったのがあるはずだから、って言うから」

この前使った？

「はい、持ってきたわよ」ソンコさんが錦紗につつまれた竿物をキョージユに差し出す。

「あ、どうも」受け取ったキョージユが後ろ手にサッと隠す。

あれ、どっかで見たな。

「ねえ、アキハ、アキハ」シヨミが来た「この十字架の根元のところ、出っばってるの、何で？」

「乗るんじゃないの？」

「乗る？」

「人がさ、こんな風に」何の気なしに出っばりに乗った「それで、こうやって手を広げると……」

その瞬間。

私の四肢に枷が三本はまって音もなく締まった。

「な、な、な…」

「じゃあ、準備もできたようなので、そろそろ」

錦紗の袋から中身を取り出そうとするキョージユを、思いっきり罵倒した。

「なんのマネだ。こるあ」

「何のまね、って」キョージユはビビリながらも反論してくる「シモンの養父さん呼べ、って言ったのアキ八さんじゃないですか」

「それと私が何の関係があるって言うんだあっ」

「だって、猿の手の時は奥さんが丹精こめた薔薇があったんですよ。何も無いところに呼んだりできませんよ」

「だからって、私は関係ないだろ」とつさにシモンを見た。シモンは困惑している。たぶんキョージユに詳しいことは聞いてないんだ「シモン、シモン、お養父さんの大切なモノ、何かない？」

「タイセツ、モノ？」

「そう、なんかない？ タイセツ、もの」必死でシモンを口説き落とす「お養父さんと呼ぶのに必要なの」

シモンは上着のポケットをこそごそして何かを取り出した。

七宝に手の込んだ銀細工を絡めた十字。

「トウサン、ロザリオ」

「それだっ」私は叫んだ「ちゃんとあるじゃない、それ使おうよ。ね、キョージユ」

シモンはキョージユと私を交互に見比べると、近寄って私の首にロザリオをかけた。

「オネガイ、アキ八さん、アリガト」

違ううううう。

「アキ八さん、ドウシタ？」シモンは私の絶叫に怯えるようにキョージユを見る。

「アキ八さん、頑張る、って」キョージユがシモンに答えた。

「アリガト、アキ八さん」

違うんだああ、シモン。

「えー、世界平和と霊的世界の融和、またヴァチカンと日本の友好のために、術師会全員を代表して感謝します、アキ八さん」

「アキちゃん、頑張るの、シモンとお養父さんの対面はもうすぐよ」

「アキハ、かつこいいー」

「じゃあ、小道具もそろったようなので」キョージユは伝説の宝剣を振りかざす「そろそろ、いきますよぉ」

天叢雲剣は、間延びしたキョージユのかけ声に、呼音をもって応じた。

第五話 精霊が降る聖夜（7）

「あああああああああ」

八条の光が私の胸から唸り伸び、何かが心臓の真上で開いた。

サッカーボール大の光の玉が胸からのぞく。

「っひ、っひっっひう」

こちらを伺うように、一度、二度、膨潤と収縮を繰り返しつつ明滅する。

「いいいやああ、いやあああ」

私の胸から、ボーリングのボールを連ねたような光の数珠が繰り出され、昇天する龍のごとくにとぐろを巻いて部屋の中を駆け巡る。

「いひっ、ひっ、やあああああ」

光の数珠のうちのひとつが切り離され、ゆっくりと床に届くとシモンに寄り添った。

光の玉は、堰を切ったように胸から湧き出る。もう一個ずつ順番になどという体裁もかなぐり捨て、ポップコーンが弾け膨らむように、強烈な光が私の胸の上から踊り出てくる。

「っぐ、ひぐっ、っう、っう」

齒の根があわない。涙が湧いてこぼれそうだ。

部屋の一角には青白い光をまとった三大家族がいて、この有様に見惚れている。

「あれえ？ おかしいな」

「どしたの？ パパ？」

「うん、キョージユがね。カトリックの聖人全員呼ぶ、って言うてたから、最初は冗談だと思ってたんだけど……」

「冗談…、じゃ、ないの？」

「カケモチしている人もいるし、手の空いてない人もいるはずだから、まあ、全員、ってことはないだろうけど…、ほとんど全部じゃない？ これ」

「おい」タモンさんは笑いながら、キョージユに問いかける「どうやったら、こんなことできるんだい？」

「いま忙しいから、あとで」キョージユはにべもない。天叢雲剣は中段くらいまで切先が落ちている「だいたい、師匠が弟子に質問なんかしないでください」

「だって不思議なんだもん」タモンさんは本当に楽しそうだ「教えてくれたっていいじゃない、キミは意外とケチなんだな」

「教えたら、タモンさん、このあとやってくれますか？」

「まさか」と、タモンさん「こんな馬鹿げたこと、ボクなら、頼まれたってやらないよ」

「僕だって、やりたくてやってるわけじゃ、ありません」

「え？ そうなの？」

「あの…、すいませんけど、少し黙っててくれますか…」

光の洪水、としか言いようのない状況の中、眼前で奇跡のように光が割れた。

両脇に光の断崖をつきしたがえ、深遠へと続く無光の道を、一個の光球が緩やかに回転しながら近づいてくる。

「え？ ええ？」

光球は私の眼前で静止した。

どこからともなく、何かよくわからない音が聞こえてくる。

調子を変え、ときどき外国語のようにも聞こえる。断続的に光球は語りつづけ、何かを伝えようとするかのように淡く明滅した。

もやもやとした音とも言葉ともつかないものが、頭の中を流れつづける。それが、突然、クリアな音声になった。

「お目にかかれて光栄です」

あまりに普通の日本語だったので、驚くより先に返答してしまった。

「ど…、どういたし、まして、こちらこそ」

光球は満足気に光を膨らませ、それと同時に部屋中の光が大音響で合唱する。

賛美歌、だろうか。楽曲というには、あまりに音量が大きすぎ、ただ体がその震えを感じられるだけだ。

やがて音は止んで、すべての光が満足したように明滅を止めた。

「は？ あは？」

光は粛々と燐きを鎮め、私の胸へと吸い込まれていく。

「い、い、い」

最後にシモンの傍らの光球が、名残惜しそうにシモンの体を一卷すると、胸のロザリオに帰った。

キョージュは剣を大上段に、また気絶している。

三人親子は、パチパチと拍手していた。

磔刑台から降ろしてくれたのはシモンだった。

「アリガト、アキハさん、ホント、アリガト」

シモンの眼にはうつすら涙が浮かんでいた。どう返答したものか迷った私は、さっきの光球に言ったのと同じ言葉を繰り返した。

「ど…、どういたし、まして、こちらこそ」

第五話 精霊が降る聖夜（8）

シモンのヴァチカンへの帰還は延期になった。というより、どうも無期限で日本に滞在することになったらしい。

事情はよくわからない。

シモンは、部屋が見つかるまで、キョージユの家に居候することになった。

私はというと、賀茂萬山さんに泣きつかれて、キョージユの食事の面倒を見ることになった。術師会から貰っている月額とほぼ同額の手当てに、食費は使い放題だということで、断る理由を思いつくのが難しかったのだ。とりあえず手当ての三ヶ月分を前払いにしてもらって、借金は返せた。

変形7畳の私の部屋をいっぱいにしていた52インチテレビは、しょうがないので、キョージユの家のリビングに運ばせた。リビングに据え付けてみたら、部屋が広いせいか思ったより迫力にかける、悔しくなつて65インチのものに替えた。差額はキョージユが払った。

第42回紅白歌合戦のハイビジョン映像を堪能していると、シモンがやってきて尋ねた。

「コノヒト、ダレ？」

「八代亜紀」

「ヤシロ、アキ」

「そう」

「コノヒトモ、アキさん」

「うん、そうだよ」

「ウタ、ウマイネー」

「でしょ、でしょ。私、この人大好きなの」

「ウタ、ナニ？」

「何？」

「ナニトイウ、ウタデスカ？」

「ああ、舟唄だよ」

「フナ、ウタ、サカナ、ウタデス」

「違う違う、フネ、シップのうた、シップソング」

「オオウ、シップ、フネ、シップソング、イイウタネ」

「でしょ、でもね、これ二回目なの、紅白で歌ったのは、最初に紅白で聞いたのはもっとよかったな」

「ニカイメ、コウハク？」

「あ、ごめんごめん、難しかったね。でもNHKホールで生で聞いたんだ、紅白のオトリでね。あ、これもわからないか。父さんと行ったんだ、とっても楽しかった」

「アキハさん、トウサン、ウタスキ」

「そうそう、トウサンと一緒に聞いたの、この人の歌。とっても楽しかった」

「トウサントイツシヨ、ヨカッタデスネ」

「うん、とても楽しかった」NHKホールのずっと奥の席で、歌手の人の顔なんかよくわからないくらいだったけど、あの時は、本当に楽しかった。隣には父さんがいて、舟唄と一緒に聞いてたんだ。

「アキさんエライネ」

「偉いでしょ、アキさん、素敵よね」

「チガウ、アキさん、エライ、アキハさん」

「え？ 私？」突然何だろう、シモンは意外に真剣な面持ちだ。

「ばらでいそトウサン、アキハさんエライ、イッタ」

「え？ シモンのお養父さんが…、まあ、うれしいけど…、私、そんなに偉くないよ。誤解だよ」

「チガウ、ニセモノトウサン、チガウ、ばらでいそトウサン」

「え？ お養父さん天国行ったんでしょ。ばらでいそ」

うーん、とシモンは唸ってしまった。どうも話が通じていないらしい。

「ばらでいそトウサン。サンニンイッショ。ワカラナイ？」

左右に手を広げてワカラナイのポーズをしてみせる。シモンはそれでもいろいろ言ってくるが、どうもよくわからない。

「ア、ハルヒコ、キタ。オーイ、ハルヒコ」

二階から降りてきたキョージュに駆け寄って、イタリア語で話した。キョージュはちらちらこっちに視線を向ける。どうやらキョージュも困っているみたいだ。

しだいに興奮してくるシモンを宥めて、椅子に座らせると、キョージュがこっちにやってきた。コホンとひとつ咳払いをして、小声で話しはじめる。

「あの…、この間の件なんです…」

「この間、って？」

「シモンのお養父さん呼んだとき」

「ああ」

「何かありました？」

何かあったなんてもんじゃないよ、コノヤロウ。と思ったが、よく考えたらキョージユにはアレは見えないのだった。

「タモンさんにも聞いたほうが早いんじゃないですか？」

「いや、もう聞きましたけど、最後のところが良くわからなかったらしいんですよ。シモンもそのところにこだわってるみたいで……」

「最後って？」キョージユに問うた。私だって、よくわからない。

「何でも光の球がアキハさんと話してた、って言うんだけど」

「ああ」やっと合点がいった「あのこと」

「やっぱり何かあったんですね」

「たいしたことじゃないですよ」実際、たいしたことじゃないし「お目にかかれてうれしい、って言われたから、こちらこそ、って返事しただけです」

え？　と言ったきりキョージユが絶句した。しばらく何事かを反芻していたが、シモンを気遣いながら声を潜めて問うてきた

「あの、アキハさん、って、古代ヘブライ語とか、どこかで習ったことあります？」

「何、わけのわからないこと言ってるんですか？　頭大丈夫？」

「やっぱり…」キョージユは眉間に皺を寄せて、再度問うた「じゃあ、その、お目にかかれて云々、っていうの日本語だったんですね」

「当たり前じゃないですか」

「…わかりました」キョージユはがつくりと肩を落とした「だいたいの事情はわかりました。あの、お願いなんですけど…、いまの話、シモンにはしないでくださいね。シモンには僕から適当に言っておきますから」

「あの…、全然、意味わからないんですけど？」

キョージユはちよつとだけ困った顔をした「説明して欲しいですか？」

もちろん、と言いかけて、これはかなりヤバいのかも、と思い直した。たぶん、キョージユの口ぶりからすると、ここで説明さえ聞かなければ私は何かを知らんぷりできるのだ。

「…聞きたくないです」

「どうもありがとう」キョージユはそう言ってシモンのほうに戻るうとしたが、何か思いついたらしく、もう一度問うてきた「たびたびすいません、さっきの光る球が言ったこと、できるだけ正確に話して貰えますか？」

「お目にかかれて光栄です、です」

はあ、とキョージユはため息をついて、それから、ありがとう、と言いきり、シモンのほうに歩いていった。

キョージュとシモンがその後、何を話したのかは知らない。

シモンの私に対する態度はもともと非常に丁重だったのだが、その日を境に丁寧を通り越して、ときどき辟易する程になった、実際、その翌日、シモンは私を命をかけて守る、と宣言したのだが、そのときのシモンの表情は、冗談かなにかで言っているようには見えなかった。

<精霊の降る聖夜 - 了>

第六話 風に乗る封神（1）

「あれ？ アキ？」

「シュンコウさん？」

呼び鈴に応じてドアを開けたら、立っていたのは顔見知りだった。

「何でいるの？」

「何でいるの？」

異口同音に問うた私たちは、キョージユの家の玄関でしばし固まっていた。

シュンコウさんは、私とサンタの元上司である。別の詰所にいたときにシュンコウさんが所長だったのだ。

サンタは詰所を出てキョージユと組み、私はソソコさんの詰所に移った。その後、以前の詰所は統廃合されて、シュンコウさん自身は地方を巡って土地神を封じていると聞いていた。

ひさしぶりに会ったシュンコウさんは、ざんばら髪に鈴懸を羽織っただけという出立だった。せめて手甲脚絆に頭襟でも被っていれば、少しは山伏っぽく見えるのに、これでは行き倒れか何かにしか見えないではないか。

「別にいいんだよ。素人には区別つかないし、それなりに見えてれ

ば」

だから、それなりに見えてないってば。

術師会の用意するホテルは居心地が悪いから、本部によるときは、だいたいキョージユの家に止まることにしてる、んだそうだ。シュンコウさんにとっての居心地の良し悪しというのは、ようするに、酒があるかどうかだけなのだが。

「それにしても」シュンコウさんは言う「キョージユの家に来て、アキが出てきたときは驚いたよ。キョージユの嫁になったのかと思っただ」

ちょうど大根を切っていたので、出刃の切先をシュンコウさんに向けた。シュンコウさんの顔から笑みが消える。こういうことについては、私はいつだって本気だ。

「オキヤクサン、コニチワ」

シモンが来た。シュンコウさんにお辞儀している。

「おおお、外人だあ」

「シモンです。シュンコウさん」礼には礼をつくせよ。あいかわらず恥ずかしいヤツだ「ヴァチカンから来たの」

「へええ、よろしく、シモン」シュンコウさんが右手を出し、シモンが応じて握手した。

「シュンコウさん、シモン、晩ご飯は、鯖の味噌煮とけんちん汁で

良い？」

「サバ、スキ、オイシイ」

「いいよー、何でも。先に風呂もらうわ」

はーい、と返事して大根の皮を剥いていると、リビングから悲鳴が上がった。

何事か、と飛び出してみると、シモンが部屋の隅で丸くなって震えている。

シュンコウさんは鈴懸を脱いで、すっぱんぽんだ。無駄にでかい乳と尻を隠そうともせず、リビングの真ん中で仁王立ちしている。

「どうしたんだ？ あの外人」

「脱ぐんなら脱衣所行ってからにしてください」またか、この女。恥じらいのハの字もない「ヴァチカンから来たって言ったでしょ。カトリックの修道士には目の毒なの」

「えー、いまどき、いくらカトリックだって、そんなのあるかよ」

「あるから怯えてるんでしょう、可哀想に」シモンのそばによって優しくなだめる「大丈夫、あまり害はないから」

この女、無駄に背は高いし、それなりに筋肉もあり、しかも風体が風体だけに、初対面だとまず女性には見えない。性格はガサツの見本のようなもので、この手のトラブルは以前から日常茶飯事だった。

「へへー、でもまあ、逆に言えば、まだまだイケる、ってことか？」
乳を両手で寄せ上げて、おかしなポーズをとったりしている。なまじ顔が整っているだけに、かえって始末が悪い。

「いいから、パンツ履くか、風呂場行くか、どっちかにしろ」

へいへい、と返事して、シュンコウさんは、当然の如く、パンツは履かずに風呂場に向かった。

さて、どうしたものか。

リビングに脱ぎ散らかされた衣服を片付けながら考える。この女もそうだが、術師会っていうのは、性格に問題ありすぎるヤツばかりなのは何故なんだ？

風呂場から、鼻唄が聞こえてくる。その声音に、びくつ、と、シモンが震える。

「アノヒト、コワイ」

「もう大丈夫だよ」 災難だったねえ、シモン。女性恐怖症とかにならないきゃよいけど。

「ダイジョウブナイ」 シモンは首を振り続ける「アノヒト、ハンブ
ンナイヨ」

「半分、無い？」

「ナイヨ、ハンブン」 シモンは私の左手を指さす「コッチ、ハンブ
ンナイ」

ああ、なるほど。

シモンは別にシュンコウさんの裸に驚いたわけではないようだった。

シュンコウさんのような封じ手は、封印を続けるとどうしても穢れが溜ってくる。それをとき被ってやるのだが、ずばらなシュンコウさんは、あまり被いをしたがらない。いまも首下の左半身が穢れで覆いつくされており、それがシモンには左半分が無いように見えたのだろう。こっちは慣れっこだったので、そこまで気が回らなかった。

「大丈夫だよ。シモン、シュンコウさんはお被いに来たんだ。えーとキリスト教だなんて言うんだ？ 洗礼？」

「センレイ？ バツテシモ？」

「うん、なんかそんなヤツ？」

「ソウ、アラウ？ アノヒト、アラウ？」

「そうだ、洗うんだ。洗えばきれいになるよ」

「オフロデ、アラウ？ キレイニナル」

シモンはやっと落ち着いたようだ。でも、あの穢れは風呂くらいじゃどうにもならないなあ。シモンに説明するのも難しい。早くキョージュ帰ってこないかな。

第六話 風に乗る封神（1）（後書き）

アキハとサンタの元上司だったシュンコウがキョージユの家に現れた。地方の土地神を封印しているシュンコウは自身の大袂をキョージユに頼みに来たのだ。穢れが偏っているので袂にくいとキョージユに言われたシュンコウは、それならバランス良く穢れをつけよう、と言い出して…

第六話 風に乗る封神（2）

シュンコウさんは風呂からあがって浴衣を着ている。

髪はポニーテールにまとめているので、ちょっと見、素浪人のようだ。

ぎちぎちに帯を結んでいるので、極端にせりあがった帯の上前と下後の出っぱりが犯罪級にヤバイ。

「まあ、だいたいの事情はわかりましたが」キョージユは、迷惑を顔の全面に張りつけて、応対している「今度はちゃんと右手も使ってたんでしょね？」

「おう、かわりばんこにな、右手と左手」

「嘘ついても、すぐわかりますよ」キョージユは片眉をあげて、シュンコウさんを威嚇し、私の方に向いた「アキ八さん、シュンコウさんはどんな感じですか？」

「アキ、いらんこと言っなよ」

シュンコウさんの言うことなど、聞く必要もない。彼女の左半身がただ事でない状況であることを、それを見たシモンが怯えていることまで加えて、詳細に伝えた。

チッ、とシュンコウさんは舌打ちして、ソップを向いている。

「大袂の前に、潔斎、精進が必要ですな。一ヶ月くらい断酒しますか」

「おい、オマエ、坊主みたいなこと言うなよ」キョージユの言葉にシュンコウさんが噛みつく「そんなことしたら死んじやうだろ」

「死にやしませんよ。むしろ長生きするんじゃないですか？」

「酒飲めないんなら死んだほうがマシだ」シュンコウさんはソファの上で胡座になった。おい、見えてるぞ。頼むからパンツ履いてくれよ「ぐだぐだ言つてないで、早く袂えよ」

「無理だつて言ってるでしょう」キョージユはため息をついた「このままやったら、穢れをおとす前にあなたの右半分が黒焦げになりますよ」

「術の加減もできないとは未熟なヤツだ」

「僕のは術じゃありませんからね。それが嫌ならタモンさんにでも袂ってもらってください」

「タモン使つと、ソンコがぎゃあぎゃあ煩いんだよ」

「あなたが、ところかまわず、裸になるからです」

「飲んでるときだけだろ」

「まるで飲んでないときがあるような口ぶりですが…」

「あのなあ、稼業が稼業だから、身を清めなきゃいけないんだよ。」

お神酒なんだからしかたないだろ」

「僕のマツカランはお神酒じゃありませんけど」キョージユは、シ
ュンコウさんの手から湯飲みを取り上げた「普通なら、飲んでいい
か？　って聞いてから開けるもんでしょう？」

「飲んでいいか？」

「ダメです」

「ケチ！」

湯飲みを取り上げられたシュンコウさんは、ボトルに口をつけて
ラッパ飲みをはじめた。もう、こうなると駄々っ子と同じだ。

キョージユがボトルも取り上げる「ダメです。断酒二ヶ月、これ
が大袈の最低条件です」

「二ヶ月…、って、増えてるじゃないか…、ひとでなし。オマエ、
自分でもできないようなことを他人に強制するな」

「僕は太袈なんて必要ないですから、飲んでいいんです」

「いや、それはどうか」シュンコウさんの肩を持つわけではない
が、気になったので口をはさんだ「キョージユも飲みすぎでしょ。
シュンコウさんと一緒に禁酒したらどうですか？」

「え？　ちよつと、それは、話が…」

「わーい、怒られてやんの、オマエも禁酒だ、禁酒」

「オマエも、ってあなた、僕と一緒に禁酒するんですか？」

「誰がするかっ」

そのとき玄関の戸が開いて、入ってくるものがいた「おい、シンコウが来てるって？」

「おお、ジジイ」シンコウさんがうれしそうに声をあげる「オマエの息子が虐めるんだよ。なんとか言ってくれ。ところで、酒は持ってきたんだろうな」

キョージユの養父、賀茂萬山氏はシンコウさんの師匠でもある。手には小ぶりの樽酒をぶら下げている。良いか悪いかはひとまず置いておくとして、絶妙のタイミングでの登場ではある。

私はキッチンに引っ込んだ。何かツマミでも出してやらないと空酒で飲み出しかねない。とにかく、今日はもう、話合いもなにもあったもんじゃないのは確かだ。

第六話 風に乗る封神（3）

「わー、はははは、ジジイ飲め、シモンも飲め」

シュンコウさんは絶好調である。

「美人に酌されると酒も美味しいな」

「おー、うれしいこと言うじゃないか、ジジイ。もっと飲め」

「オサケ、オイシイネ」

「おお、シモン、日本酒うまいだろ。ほれ飲め、いや、違う違う、ちがあああう、そんな、みみっちい飲み方するんじゃない。日本酒は、こうだ」

シュンコウさんは、シモンにどんぶりを渡して、なみなみと注ぐ「そうだ。そうやって、口つけて、一気にいけ、シモン」

外人におかしなこと教えるなよ。でも、注意したらからまれそうなので、放っておく。だいたい、シモンもシモンだ。さっきまで恐がってたクセに、いまではすっかり慣れて、デレデレとシュンコウさんの胸元を覗き込んでいる。

「シュンコさん、オッパイオオキイネ」

「お、これか」シュンコウさんは右の片袖を抜くと、肩からがっとはだ脱ぎした。夏蜜柑ほどの乳房が、ぽん、と出る。

おお、と男二人から、喚声と拍手があがった。ああ、シモン、お前もか、お前もなのか？　なんでえ、男なんて、ちよいと乳が出たくらいで大騒ぎしやがって。

「あの…」キョージユはプラントンの入ったグラスを両手で抱え、おずおずと言った「僕は小粒でも形の良いアキ八さんのほうが好きですけど…」

そんなことは聞いてないだろ。

「ください」空のグラスをキョージユの眼前に突き出す。

「え…」

「く・だ・さ・い」

「あ…、はい…」

キョージユがグラスに注いだウイスキーを一気に飲み干す。

「あの…、もう少し、味わって飲んだほうが…」

「おかわり」

「…はい」

むこうではシュンコウさんが樽を逆さにして振っている。最後の一滴がどんぶりに落ちたのを確認して、三人の視線が、いつせいにこちらを向く。

「酒なんかありませんよ」キョージユが冷たく言った。

「オマエの飲nderのは何だ」

「バーボンウイスキーというものです」シュンコウさんの問いに、キョージユが答える「バーボン造りの名人、アルバート・ブラントンの愛弟子が造ったウイスキーで、師の名前を冠した最上級のバーボン……」

三人は、キョージユの口上を無視して、こそこそ相談している。

「よし、シモン、酒買ってこい」

「クライヨ、シュンコさん、オミセナイ」

「心配すんな。日本にはコンビニっていう凄いモンがあつて、24時間、酒を売っているんだ」

確かにそうだが、コンビニは酒を売るためだけにあるんじゃないぞ。

「スゴイネ、デモ、オカネナイ」

「よし、ジジイ、金を出せ」

ほろ酔いの萬山氏は、財布から諭吉さん三人を取り出して、シモンに渡す。どうも、この爺さん、金銭感覚に欠けるようである。はやく禁治産扱いにして財産保全をしたほうが良いと思うが、そんなのはキョージユの仕事だし、私は関係ないや。

シモンを玄関まで壮行した二人はリビングに戻ってきた。

「おーい、ハルさ…、あ、違った…、…アキさん、何かツマミないか？」

「腹減った、アキ、なんかくれ」

キョージュは苦虫を噛みつぶしたような顔をしていたが、私にとつては、いちおう雇い主と元上司なので、キッチンに出向く。冷凍庫にソーセージの詰め合わせがあった。解凍するのも面倒だし、鍋に湯を沸かしてサツとゆでる。大皿に盛ってマスタードとレタスを添えて出した。

「おお、これこれ」シュンコウさんは手づかみでソーセージを食べている。ちゃんとフォークつけたのに。

小皿にとりわけたソーセージをキョージュのところに持っていた。キョージュは水割りを作ってくれていた。

「あの、キョージュ…」

「はい？」

「ハルさんて、誰ですか？」私はこの間からの疑問をキョージュに問うてみた。キョージュのお養父さんが私とよく間違える人だ。

「ハルさん…？ ああ。…あの、ボケ親父…」キョージュは舌打ちをした「ごめんなさい、ハルさんのことはよく知らないんです。何でも父の師匠だった人の奥さんだ、とは聞いたことがあるんですが

…」

「はあ…」

「いや、ハルさんのことは、良く知らないんですが、父がしょっちゅうナツさんのことを、ハルさん、ハルさん、と呼び間違えていたので、たぶん同じではないかと…」

「ナツさん？」また新しいのが出てきた。いろいろ複雑だなキョージユん家は。

「ナツさんは僕を育ててくれた人です」気のせいかなキョージユの顔が、ぱあーっ、と明るくなった「僕が小さい頃、家に一緒に住んでいて…、でもお手伝いさんでもなさそうだったし…」

「お養父さんの奥さんですか？」

私の問いにキョージユが首を振る「それは、有り得ません。あの人が父を氣に入る理由がありませんし」

いや、昔は、そういう組み合わせも多かったらしいよ。キョージユ。

「とにかく、そういうのじゃなかったんですよ。それならナツさんのこと、お母さん、て呼んでたはずだし…」

それはキミが、そのナツさんとやらの煙たがられていたからではないかね？

「じゃあ、ナツさんは、いま、お養父さんと一緒に住んでいるんで

すか？」

キョージユは悲しそうに首を振る「いいえ、僕が十二歳のときにいなくなつて…、それから会っていません」

「何でいなくなつたの？」

「よくわかりません」そしてキョージユは吐き捨てるように言った
「たぶん、父が悪いんです」

まあ、その可能性は五分五分かな。

「じゃあ、そのナツさんて人と私が似てるんですか？」

「え？」キョージユは、まじまじと私の顔を見つめた「どうだろう。ナツさんは、もっとこう、なんていうか、大人の包容力というか、優しさがあつて、いつも淑やかで静かに笑っている、天使のような人で…」

「…」

「あ、そういう意味じゃないんです。…もちろん、アキハさんは一人の女性として素晴らしい人で、だから、比較してどうかそういう話では…」

「…」

「…ごめんなさい」

謝るなよ。泣くぞ、コノヤロウ。

「カッテキタ、カッテキタ」

玄関から声が聞こえる、シモンだ。コンビニの袋を両手にぶら下げて、それでも足りずに首からかけている。

「カッテキタ」

袋から出してリビングに並べていく、カップ酒、一升瓶、紙パツク…。どうやら本当に三万円分買ってきたらしい。

「ようし、でかした、シモン」シュンコウさんは、もろはだ脱いで、浴衣は腰蓑状態である。カップ酒を開けて両手に一個ずつ掲げ、シモンに抱きついた。

「少なくとも、ナツさんは、ああいう風ではなかったです」指さしこそしなかったが、キョージユはそう言って琥珀色の液体をあおった。

うん、その点だけは納得してあげるよ。キョージユ。

第六話 風に乗る封神（4）

朝風呂からあがったシュンコウさんは、私が昨日、洗濯した鈴懸を頭から被る。ボロ雑巾みたいな袋を肩からかけて、玄関で草履を突っかけると、思い出したように私に声をかけた。

「おい、アキ、サンタのところに行くぞ」

え？ 私も行くの？

シュンコウさんと並んで歩くと、露骨に酒臭い。私まで酔っ払いと思われるのは迷惑なので、少し離れてついていく。

「あ、シュンコウさん、ここ、ここですよ。サンタの店」

私の言葉には耳も貸さず、シュンコウさんは、ファントム・シヨップ・サンタの前を素通りして行く。

サンタのところに行く、って言ってなかったか、シュンコウさん。

店の裏手に回って道路を渡る、シュンコウさん。あれ、もしかして、サンタのところって…。

病院の玄関から病棟の廊下へ向かう。やっぱり、そうだ。

5階の例の部屋、ここまできたら帰るわけにもいかないし、ええい、しょうがない。

シュンコウさんの後ろについて、部屋に入った。

「よ、ひさしぶり」シュンコウさんは、袋から干物みたいなものを取り出して、サンタの彼女に手渡した。

「あら、どうも」

サンタの彼女は、パイプ椅子から立ち上がって、シュンコウさんに椅子を勧めた。

「いや、いい、すぐ帰るから」

「あら、あなた」サンタの彼女は、私のほうを見て笑った「この前、来てた方ね」

「げ、気づかれてたのか。ちょっと狼狽えてしまい、ごにょごにとわけのわからない返事をしてしまった。」

「すまないけど、時間無いんだ、単刀直入で言わせてもらおう」シュンコウさんが切り出した「あんたがサンタにやっているアレ、やめてもらえないか？」

ふふ、と彼女はわらった「やっぱりバレてたのね。サンタがそう言え、って？」

「いや、そうじゃない」驚いたことにシュンコウさんは真面目だった「あんたがどう思ってるかは知らないが、アレは、サンタにとっではあまりよくないんだ。おそらく……」シュンコウさんは少しためらっていたが、どうやら思い切ったらしく、彼女に言った「サンタが目覚めないのは、アレのせいだと思う」

「そうなの？」初めて彼女は動揺を見せ、ベッドに横たわる植物状態のサンタに視線を落とした「私は、サンタを助けようと思ったのに……」

「いや、普通はそうなんだ、そうなんだが……」シュンコウさんの声が大きくなる、横から脇腹をこづいてやって、やっと声のトーンが下がった「サンタはいま極めて特殊な状態なので外側から霊力補給すると、極端にバランスが悪くなるんだよ。なんというか、うまく説明できないが、わかってくれ」

「わかった」彼女は肯いた「私、ジャマだったんだね」

「いや、だから、そうじゃないんだよ、その……」シュンコウさんは早口で続けた「見舞いだけなら、いままでどおりで。そのほうがサンタにも良いと思う。あと、サンタが来るときに無視するのやめてくれないかな。その……サンタには、もう別れ話しないように言っておくから……、それが嫌で知らないフリしてたんだろ」

「ここで、ぷつ、と彼女が吹き出した「それもバレてたの？ うまく、やってた、と思ってたんだけど」

「サンタは鈍いから気づいてないと思います」私はやっとそれだけ言えた。

「じゃ、サンタよろしく」そう言って、シュンコウさんは右手をあげると、去ってしまった。

私に、さっきの話をサンタに言え、ってか？

そのために付き添わせたんだな。

でも、何でシュンコウさんは、サンタを避けてるんだろ。

成り行き上、しかたないので、ファントム・ショップ・サンタに寄る。

店に入るとすぐにシヨミが駆け寄ってきた。

「アキハ」何故かシヨミの瞳が潤んでいる「キョージユに金で買われたって、ホント？」

「な、な、な」

なんですとー。

「いったい誰が、そんなことを」

「じゃ、違うの？」

「違うに決まってるでしょーが」怒りが沸点を超えて、爆発しそうになったところで、視界にサンタの顔が入った「どういうことよ。サンタ」

「知らないよお」サンタはいいかわらずだ「みんな言ってるよ」

「みんな、って、具体的に、誰だ？」事と次第によっては血の雨降らずぞ。

「みんなは、みんなだよ」サンタが言う「それ以上、どう言えって
いうのさ」

「名前を言え、名前を」

「名前え」サンタはかつたるくてしょうがない、という風に指折り
数え始めた「この界限だと、まず、タモンさんだろ、ソニコさん、
レイカとカゲもそんなこと言ってたな、萬山のジイサンなんか、わ
ざわざうちの店まで来て吹聴していったし…」

「アタシもママから聞いた」

な、な、な、なんだとお。

「アキハ、正直に言つて」シヨミが私の両肩をつかみ、目をまっす
ぐに覗き込んだ「昨日の晩はどこにいたの？」

「どこつて、そりゃ、キョージユの家」

ああ、とシヨミがため息をついて、サンタと目でやりとりする。

「違う、違う、誤解だつてば」あわてて説明する「昨日は、いきな
りシユンコウさんが来て、それでキョージユのお養父さんも来て、
シモンも混ざつて酒盛りになつちゃつてそれで…」

「じゃあ、聞くけど」シヨミが重ねて問う「ここ一週間でどれくら
いキョージユの家に泊まつたの？」

「ええ」なんだよう、なんか私、不利じゃん「一週間、つていつ

たつて、昨日はまず酒盛りでしょ。その前の日は、キョージユの帰りが遅かったから、晚ご飯温め直して食べさせてたら十二時まわっちゃったんで。それでその前はDVD見てて遅くなっただけで、物騒だから泊まっていけって言われて。それでその前の日はキョージユもシモンも外出だから留守番で。それでその前がBS昭和の歌で八代亜紀が出てくるまで粘ってたら遅くなって。その前が…」

「もう、いい…」シヨミがうなだれて悲しそうに言った「アキハ…、信じてたのに…」

「だから、違うんだよお」なんか、涙が出そうになった「キョージユにご飯作ってるのはお仕事で、それで、テレビが部屋に入らなくて、キョージユん家に移したから、キョージユん家じゃないと、テレビ見れなくて、それで、食事の支度とテレビだけだと暇だから、掃除と洗濯して、だから、だから、だからあ…」

「なんちゃってえ」シヨミが顔をあげて舌を出し、両手をほつぺたの横で広げてみせた「みんな知ってるよーん。アキハ、ってからかうとおもしろーい。ほんと、カワイイんだからあ」

「な、な、な」

舌がもつれて言い返せないでいると、サンタが、ぼそつ、と言った。

「世間じゃ、そういうの、金で買われた、って言うんだけどな。覚えておいたほうがいいよ、アキ姉さん」

「な、な、な」

「そう言えば、シュンコウの婆さん、来てるって?」

「あ、ああ、来てるけど」サンタ、いくら何でも、婆さんはいんじゃないか? 「そう言えばシュンコウさんから、サンタにことづけが…」

「知ってる」皆まで言わず、サンタが告げた「さっき聞いてたから」

「聞いてた?」

「ほら、例のとんぼ玉」

「ああ」言われてペンダントの鎖をひっぱり、サンタにもらった護符を取り出す。

「わあ、キレイ」覗き込んでシヨミが言う。

この護符はサンタの霊体を飛ばすときの目標になる。盗聴器代りに使えるとは知らなかった。ま、サンタに聞かれて困ることなんかないけどさ。

「あれ? デザイン変えたんだ?」護符を見たサンタが言う。

「あ、うん」

「ちょっと見せて」サンタは鎖の先についた護符をしげしげと見つめる「稀介のこけし針じゃない、どうして?」

「キョージユに貰ったんだよ」実は、サンタに貰ったとんぼ玉と、

父さんのこけし針を合わせて遊んでいるうちに、はずれなくなってしまったのだ。とんぼ玉はともかく、こけし針は身につけていたかったので、ペンダントにして首から下げることにした。

「へえ、俺が何度頼んでも、絶対くれなかったのに、アキ姉さんにはあげるんだなあ」

「あたりまえじゃん」とシヨミが言う「サンタなんて、全然かわいくないけど、アキハかわいいモン」

なんか、いろいろうやむやになってしまった気がするけど。彼女の件をサンタに説明せずにすんだので、まあ、良しとしておこう。

第六話 風に乗る封神（5）

「シュンコウが来てるって？」詰所に寄ったら、いきなりソンコさんが尋ねてきた。「いま、どこにいるの？ キョージュのトコ？」

「ああ、さっきまで一緒にいましたけど」

「どんな様子だった？」

「どうって、いつもどおりでしたが」

「また左だけ？」

「はあ」

あのバカ、とソンコさんが愚痴る「悪いんだけど、見かけたら、本部でもこの詰所でもいいんで、連れてきてくれる。詰所まで引張って来てくれれば、あたしが首に縄つけて本部まで引っ張ってくから」

「あの人、私の言うことなんか、聞きやしませんけど」

「じゃあ、足止めして連絡ちょうだい。別に五体満足じゃなくてもいいから、脚の一本も折つといて」

まあ、折れって言われれば折るけどさ「そんなに緊急なんですか？」

「緊急っていうか、ねえ」ソンコさんは珍しく深刻そうである「大袂、二回もすっぱかしてるのよ。あのバカ女。その間も仕事続けるから、普通なら動くことさえできないはずなんだけど……」

「ええっ」思わず声が出る「そんな状態だったんですか、シュンコウさん。まだ、キョージユン家にいるかもしれないから、行ってきます」

「頼むわ。こっちも、まさかキョージユのトコにいきなり行くとは思わなかったから、たぶん騙して袂わせる気だったんだろっけど」

「騙すって？」

「キョージユ見えないでしょ」ソンコさんは携帯のボタンを押しながら言う「適当なこと言って、穢れを吹きとばさせるつもりだったのよ、きつと」

「大丈夫なんですか？ そんなことして」

「大丈夫なわけないでしょ。前もそれで死にかけてんのに、バカ女……」電話がつながったらしい「あ、あたしよ、あたし、いまドコ？ え？ サンタのトコ？ また、そんなところに入り浸って……、まあ、いいわ、迎えにいくから、そこにいなさい」

電話を切ったソンコさんはコートを羽織る。

「シヨミちゃん、ですか？」

「うん、まあ、念のためね。じゃ、キョージユの家のほうは頼んだわよ」

やれやれ、大変なことになった。

しかし、そんな状態でよく動けるな。酒で感覚が麻痺してんのかな。

それにしても、キョージユは無理としても、萬山さんは何故、何も言ってくれなかったんだろう。あの人がシュンコウさんの状態を見抜けないはずはないのだが。

キョージユん家の玄関を開けたら、三和土にその萬山さんが立っていた。

「やられたよ」キョージユのお養父さんは、頭をかきながら話だした。「結界を張っておいたんだが、ヤツめ、アキさんを盾に結界を抜けおった」

「え？ ヤツ？」

「シュンコウさ」出し抜かれたにしては、まんざらでもなさそうな口ぶりである。「昨日、来たときに、シュンコウがこの家から出られないように結界を張った。それを今朝アキさんと一緒に出ることでやぶったんだ。おまけにこつちを閉じ込めていきおった。いまやつとアキさんに玄関を開けてもらえて出られた。お恥ずかしい話だ」

玄関で急に私を呼んで連れていったのはそういう訳だったのか。

「じゃあ、シュンコウさんは？」

「いちおう糸はつけてあるが…」お養父さんは難しい顔をしている
「切ろうと思えば切れるだろうし、糸の先にまだシュンコウがついているかどうか、自信はない」

「心当たりはないんですか？ シュンコウさんの行き先」

萬山さんは、一枚の紙を差し出した。

前略、

右にも憑けてくる。これで大丈夫だ。すぐ戻る。

早々

最後に「瞬光」と結んである。妙なところだけしつかりしている。

「右にも憑けるって、そんな都合良く封じるものがあるんですか？」

「問題はそこなんだが…」老人は腕を組んで考え込んだ「小物ではあの左半身とはとてもつり合わん、かと言って、シュンコウの性格からして、封を重ねてバランスを取るなどという面倒な事はしないだろう」

「すると狙いは？」

「一発、大物だろうな」

「その大物の心当たりは？」

「ない」

「え？」役に立たん爺さんだな。

「ない、というより、あるにはあるが、普通はそんなものを封じることがはない」

「どういうこと？」

「いま、あれだけのものと同じものを憑けるとすれば、この近所だと、浅草寺の本尊を無理矢理叩き起こして、もう一度封じるとか、そんなことでもない限りは無理だ」

「それ、無茶すぎますが…」

「シュンコウだって、それほどの無茶はしないと思うが、なんとも、ヤツの考えていることはわからんからなあ」

「どっちかっていうと、シュンコウさんを封じるのが一番良いような気がします」

「それをやったのさ」萬山さんは苦笑した「それで破られた、面目ない」

まあ、そういうことになるのか。魔物を解き放つ手伝いをしたみたいで、なんだか私も気分が良くない。

第六話 風に乗る封神（6）

「こっちです。アキハさん」

「はい」ロードスターの助手席に滑り込む。狭いなあ。もっとデカイ車に乗ればいいのに、キョージユ。

車を発進させるなり、キョージユは聞いてきた「シヨミさん、何て言っていました？」

「常陸の風神」キョージユにそう言えばわかる、とシヨミは言っていた。

「ええっ？」

「ちょっと、ハンドルから手を離さないでください」

「大丈夫ですよ、少しぐらい」そういう問題か？ 違っただろ？ 私の忠告など無視して、キョージユがしゃべりだす「父の話ともだいたい合ってます。そうすると茨城県かあ。ちよっとしたドライブになりますね」

「私も行かなくちゃいけないんですかね？」

「あ、ええ、まあ、その…」

「前向いて運転しろ」キョージユの頭を手で押さえて前方に向ける「前だ、前。こっちは見なくていい」

「大丈夫です、つてば、ほんとにアキ八さん心配性なんだから…」

オマエの大丈夫、が、大丈夫だった例なんかないじゃないか。

私が行くべき理由、というのは、いちおうキョージユのお養父さんから聞いている。私がシュンコウさんの結界破りを手伝ってしまったので、私でないとシュンコウさんを捕まえ難いのだそうだ。あまり納得できない気もするが、若干、後ろめたいところもあるので、渋々引き受けた。

それにしても茨城県とは。

「シュンコウさん、何しに茨城まで？」

「風神山というのがあるんですが」キョージユが言う「頂上に、風神と雷神を奉つてあるんですよね」

「それで？」

「たぶん、推測なんですが…」キョージユは何故か言葉をにこす「その…、風神を封じに行つたのではないかと…」

バカか、あの女。

土地神、と言えば神秘的に聞こえるが、要は人の怨念が凝つたものである。シュンコウさんの封じていたのはそういうモノなのだ。いくら邪念がこもっていようと、所詮、もとは人間なのである。それに対して、風神は、風の神、気象現象である。竹槍で台風に向かうようなもので、そんなものは封じるとか、そもそもが、そう

いうレベルの話ではないのだ。

「風神、怒ってるんですか？」

「え？ 風神が？ いや、そんなことはないと思いますけど」キョージユは言う「だって、ハエが顔の前に飛んできたら払うけど、いつまでもハエを怒ったりしないでしょ」

うむ、シュンコウさんはハエか、納得できる。

「まったく、親父のヤツ」キョージユはブツブツ言っている「アキハさんの看病頼んでもあだし、今度はシュンコウさん逃すし、僕の頼みごとをことごとく駄目にするって…。耄碌したんなら、そろそろ施設とか考えたほうがいいんだろうか…。普通の人間じゃないから普通の施設は無理だし、ああいうのはいったいどこに預けたら…」

「まあ、ほら、お養父さんも、シュンコウさんが結界破って出ていくとは思わなかったんでしょうし」いちおう励ましてみる。

「そもそも、家の中に結界が効かない人間が三人もいるのに、結界張ろう、とか考える時点で耄碌してるんです」

「三人、て誰？」

「僕とアキハさんとシモンです」キョージユは間髪入れずに答えた「ほんとにもう、までよ…。もしかしてワザとやってるのかな？」

へえ、キョージユはそうかも、とは思ってたが、シモンもなんだ。

「シモンも結界効かないんですか？」

「ええ、昨日の晩、お酒買いに外に出たじゃないですか」

「あ、そうか」と一度は納得したがよく考えるとおかしい「何でシモンには結界効かないの？」

「彼は無垢ですから」キョージユは当たり前のように言う「シモンのお養父さん、マツツアリーノ枢機卿が見出して育てあげました。彼にはほとんどの術が効きません」

「キョージユと同じなの？」

「いいえ」キョージユは首を振った「僕とは違います」

よくわからないが、キョージユが違うと言えば違うんだろうな。

「シュンコウさんは一目で見抜いてたみたいですけどね。だからお酒買いにいかせたんでしょう」キョージユが言い、そしてまた愚痴になる「それだつてのに、あの親父は…、結界張るなんて姑息なことしないで、脚の一本も折っておけば良かったんです」

やつぱり折るのかあ、どうもその意見が主流だなあ。

「あ、次のSAで休憩しましょう」

「別にいいですよ。シュンコウさん探さなきゃ、急ぐんでしょう？」

「それは、そうなんですが」キョージユは大きくハンドルを切って駐車場に入る「下手すると、長期戦になる可能性もあるので、いま

のうちに何かお腹に入れておいたほうが良いですよ。次、いつ食事できるかわからないですし」

「風神山でシュンコウさん拾えばいいんじゃないの？」

「そう簡単には…」キョージュは車のエンジンを切った「彼女、文字どおり、飛ばされてる最中ですから」

「飛ばされてるって、どこに？」

「それがわかれば楽なんですけどね」キョージュはため息をついた「パンとかスナックとか簡単に食べられるものも買いましょう。できれば陽が落ちる前になんとかしたいところですが、難しいかもしれません」

車外に出て身震いする。思わず、天を仰いだ。抜けるような青空。時刻は十二時を少し回ったところ。

昼間でこんななのに、夜とか、山中で一泊とか、絶対イヤだ。修行じゃないんだから。

第六話 風に乗る封神（7）

「車ではここまです。山頂までは普通のハイキングコースですよ」

本当か？ キョージユを見る目つきもついつい険しくなる。いままで、この手で何度も騙されて来たのだし、そうやすやすと信じるわけにはいかない。

「神峰山は風神山の近くでもっとも高い山のひとつです」尋ねもしないのにキョージユが説明した。「標高はとなりの高鈴山のほうが少しだけ高いのですが、高鈴山は気象観測所や展望台なんかが建っていてやり難いんです。神峰山のほうは山頂に神社もあって、こちらのほうが網を張りやすい」

「網？」

「シュンコウさんを捕まえる網です」キョージユは、網、と繰り返した。ロードスターのトランクから荷物を取り出している「まあ、実際に網を張るわけじゃないけど、似たようなものです。かすみ網かなにかだと思ってください」

こんどはかすみ網か。シュンコウさんの扱いはスズメ並である。

荷物は当然、キョージユが担ぐ。

「頂上までは小一時間でとこです。今日は天気もいいし、絶好のハイキングびよりですね」

何、暢気なこと言ってんだよ。私はオマエとハイキングなんかまっぴらごめんだよ。

「ほんとにこの山でいいんですか？」

「大丈夫です」キョージユは自信満々だ「下に飛ばされているのなら、もうシヨミさんか父が見つけているでしょう。見つけれないのは上に飛ばされたんです」

「上って？」

「上は上ですよ、アキハさん」

これ以上聞くとヤバそうだから聞かない。シュンコウさんがいまどうなっているのが気にしないことにする。

ハイキングコースよりはちょっとキツめだったが一時間はかからなかった。

山頂の神社は小ぶりだがなかなかのものだ。

形ばかりだが、二拝二拍手一拝で挨拶をすませると、裏手に回ってキョージユがあれこれ見立てをはじめた。

「あー、アキハさん、ちょっと、こつち」キョージユに手招きされるままに杉の古木の下に行く「この木、登ってもらえますか」

何？

「このあたりだと、この木がいちばん高いみたいですから、てっぺんとは言いませんが、なるべく高いところまで登ってください」

「いやです」

「え？」

「登りたくありません」

「下のほう枝打ちしてあるので、登りにくそうですけど、ほら、隣の木から、こう移ればですね…」

「こつも、ああも、移りませんし、登りませんから」こんなものは徹底して否だ。何が悲しゅうて、こんなへんぴな山で木登りせにやいかんのじゃ」どうしても登らないといけないのなら、あなたが登ってください」

「わかりました。僕が登ります」

おや？ ずいぶん素直だな。気味が悪いくらいだ。

「じゃあ、僕が登りますので、アキハさんはこの孔雀明王陀羅尼を…」

「は？」

「孔雀明王陀羅尼です」キョージュは一枚の紙片を取り出して言う「そのまま使つとシユンコウさんが調伏されてしまうので、一部変えてあります。僕が木に登っている間、これを唱謡しつづけてくだ

さい」

「これ梵字ですが」

「そうですよ」

「読めません」

「じゃあ、僕が読むので後を追って覚えてください。では、最初から。のうもぼたや、のうもたらまや、のうもそつきや……」

「……いいです」なんて卑劣なヤツだ。私が登るといふまであれこれ嫌がらせする気なんだ「登りますから」

「ありがとうございます」キョージュは、うれしそうに、荷物袋の中をぐそぐそかき回している「あ、ロープあるんだけど使います?」

「いりません」くそー、バカにしゃがつて、子供の頃は、木登りアキちゃん、て呼ばれてたんだ。舐めるな。

手近の枝に飛びついて逆あがりで枝に乗る。幹に手を伸ばし、枝から枝へ渡ると、目的の木に移った。

「おお、すごい」下でキョージュが喚声を上げている。どんなもんだ。

ここまで来れば、後は枝を伝って上に行くだけだ。

ほどなく、体重を支えられる、ぎりぎりの太さぐらいの枝までよじ登った。

「もうこれ以上は無理」下に向かって叫ぶ。

「十分です。ありがとう」キョージユが答える。

「あとは、どうすればいいの」

「僕がさっきの陀羅尼を唱えるので」キョージユが口に両手をメガホンのようにあてて叫んでいる「それでシュンコウさんが寄ってくると思いますから、近くに來たら捕まえてくださーい」

なんだとお？

そんなことできるわけないだろうが。常識で考えろ、常識で。

「じゃあ、はじめますので」

「無理だつてば」声の限りに叫ぶ「そんなことできるわけないでしょ」

「できますよ」キョージユも叫ぶ「アキハさんなら大丈夫ですよ」

もう降りる。こんな馬鹿共とつき合っていられない。

下の枝に移ろうと幹に体を委ねた時、一陣の風が私の横を通り過ぎた。

「あれえ、アキ」風が私に呼びかける「何でこんなところに？」

…シュンコウ、さん。

キョージユの方法は正しかったようだし、場所も正しかった。

しかし、これは。

神の峯の頂のそのまた上から見下ろす関東平野。山頂に針のように立つ古木にしがみついている私。

その私のまわりを、風にかめ取られたシュンコウさんが、まるで遊んでいるかのように回っている。

第六話 風に乗る封神（8）

シュンコウさんは、私の横をすり抜けては、いったん遠くに飛んでいって、振り子のように戻ってくる。

「おい、アキー」シュンコウさんの声が、のほほん、とやってくる「オマエもこっち来いよ。面白いぞお」

遊んでるように見えるだけだと思ってたら、本当に遊んでるのか、このバカ。

「もう少し、シュンコウさんのスピード、落とせませんか？」どうせ、シュンコウさんには何を言っても無駄だろうから、下のキョージユに向かって叫ぶ。

「無理です」声が下から帰ってくる。この無能め。

気がつくと、シュンコウさんが遠くに小さくなっている。すれ違う時も距離が遠い。陀羅尼の唱謡が止まると、シュンコウさんが遠くに行ってしまうようだ。

「唱えるのやめないで」下に叫んだ「もっと早口でやって」

これが当たりだった。シュンコウさんがぐんぐん近づいてくる。

あと少しで手が触れそうになった時、さっ、とシュンコウさんが身をかわした。

「何するんですかつ」

「やだ、もう少し飛んでる」

駄々っ子か？ お前は？

「じゃあ、いつまでもそうしてなさい」本気で怒ったぞ「もう一生、お酒飲めませんよ」

「ちえ」シュンコウさんはつまらなそうに手を差し出した。

片手を木の幹に、もう一方の手をシュンコウさんに伸ばし、出された手をつかんだ。

「つかんだよ」。うわ「突風に体をさらわれ、たまらずシュンコウさんに両手でしがみつく」わ、うわぁ」

足の下に枝がない。シュンコウさんにぶら下がる格好で浮いている。

「あ、あああ」二人の体が徐々に昇っていく。

「アキ、意外と軽いんだなあ」シュンコウさんは暢気なことを言っている「二人なら、そのまま落ちると思ったんだけど」

もう一陣、風が来たら飛ばされそうだ「キョージュ」

下をのぞくと、キョージュが棒みたいなものを大上段に振り被っている。あれは…、

天叢雲劍。

「アキハさ〜ん」キョージユが叫ぶ「シュンコウさんの右に〜」

とつさにシュンコウさんの首にしがみつき、右半身を覆う。

「シュンコウさ〜ん、少し我慢してください〜い」

「おう、遠慮しないで、さっさとやれ」

いきまーす、キョージユのかけ声とともに、シュンコウさんの左半身に憑いた穢れが焼けだした。いくら私の体で覆っても体の大きいシュンコウさんの右半身は隠しきれない。隙間からもれるキョージユの力は、たぶんシュンコウさん自身も焼いている。平気そうな顔をくずしてはいないが、背中から鈴懸を通して冷たい汗が滲みでている。

キョージユは徐々に焼いていく。薄皮をはがすように穢れが焼け落ちるたび、じりっ、じりっ、と私たち二人は降下していく。

あと残り三メートルぐらい、と思ったとき。

風が凧いだ。

「うわっ」落ちた場所は枯葉の上だった、それでも痛い。

「おい、ちゃんと最後までやれよ」シュンコウさんは強がっているが、肩で息しているのがバレバレだ「ジジイの灸より、ちよっときつい程度だ」

あ、そうだ。

思い出したことがある。

「シュンコウさん、立って」

「何だよ。アキ」

立ち上がったシュンコウさんの前に出て、振り向きざまに下段廻し蹴り。

私の踵がシュンコウさんの脛に当たった瞬間に、思い切り踏み抜く。

手応えあり。

これは、いったな。

もんどりうつて倒れたシュンコウさんは、右足を押さえてのたうちまわっている。

「ア、アキ、てめえ、何しやるう」

「アキ八さん、なんてことするんですか」キョージユが大声で私を叱った「こんなところで折ったら、この人担いで山を降りなきゃいけないじゃないですか」

「あ」

「どうせ折るなら、駐車場まで降りてから、折ってくれば良かった」

たのに」

「ごめん、キョージユ」

「てめえら、ひとの足なんだと思って…」

「おーい、アキハ」

え？

下から昇ってくる人影が見える。声はシヨミだ。ソソコさん、萬山さん、シモンまでいる。

「シヨミちゃんが、そろそろ終わるから行こうと言い出して」萬山さんが言う「それで、みんなで来た」

えらいぞ、シヨミ、あんた、たいしたもんだ。

「あらあ、シュンコウ、どしたの？」ソソコさんは、ニマニマしながら、シュンコウさんに近づいていく「そんなとこ寝ところがないで、こっちに来なさいよ」

シュンコウさんは口を真一文字に結んで一音も発しない。唇が紫色だ。

「シュンコウさんは立てませんよ」キョージユが言う「アキハさんが足刀で脚をへし折りました」

「まあ」振り向いたソソコさんの瞳に星が飛んだ「アキちゃん、なんて凄いの。アキちゃんは、やればできる子」そしてもう一度シュ

ンコウさんのほうを向くと、足に飛びついた。

「わあ、ソンコ、何する、ぎゃあああ」

ソンコさんは、シュンコウさんの折れた脚に膝をのせてぐりぐりと押し潰した。シュンコウさんは声もあげられず悶絶している。

「だってえ」ソンコさんは、はちきれんばかりの笑顔でシナをつくってみせる。「下手にくつついたら困るし、しばらく動けないように、こついうことはちゃんとしておくべきだと思うの」

シモンも来たし、担いで降ろすのに人手は足りてるみたいだから、存分にやってください。

第六話 風に乗る封神（9）

シュンコウさんの足は、全治八週間だった。

たぶん、私がやった分は二週間くらいだと思う。

後でグチグチ言われるのも嫌なので、見舞いに行った。

病室に行くと、何故か、サンタの彼女がいた。まあ、同じ病院だし、それほどおかしくはないのかもしれないが。

「こんにちは、アキハさん」サンタの彼女が挨拶した。シュンコウさんは寝ていた。

「あ、どうも」

「ちょうどよかったわ」彼女は言った「サンタ呼んでくれる？ 今日はまだ来てないの」

事情がわからず、ぽかん、としていると、彼女が微笑みながら付け足した。

「あら、ごめんなさい。アキハさんはまだ聞いてなかったのね。この人の左半身、サンタの担当になったの。私が呼びに行ってもいいんだけど、時々逃げられるから…」

「あ、そう」そういう話になったのか「じゃ、呼んできます」言われるまま、サンタを呼ぼうと病室を出ようとする。

「あら？」彼女は首をかしげた「アキ八さんなら、ここからでも呼べるんでしょ？」

彼女の言葉に一瞬、え？　と思っただが、すぐに例のトンぼ玉を思い出した。鎖をひっぱって取り出そうとしたが、サンタに貰ったものだということもあって、少し躊躇していると、それを察して彼女が言った。

「気にしないでいいのよ、アキ八さん」彼女は笑う「あなたがいろんな人から守られてるのは知ってる。サンタもその一人。それはサンタのお仕事だし、その護符は仕事に必要なものだから」

「あ、はあ」なんだかよくわからないが、彼女がいいと言ってるんだからいいんだろう。取り出した護符に向かって念を込める。

「あんまりこういう使いかたは感心しないけどなあ」ブックサ言いながらサンタが現れた。

「あなたが逃げなければ、アキ八さんに頼んだりしないわよ」彼女が言う「もう逃げない、って約束する？」

「逃げたことなんかないよ」

「嘘ばかり」

こんな顔のサンタをみたのは久しぶりだ。彼女の前でないと、この顔はしないんだな。

サンタは寝ているシュンコウさんの左に立ち、手をかざした。サ

ンタの手が、ぼうつ、と緑色に光る。

視線に気づいたらしいサンタが、私のほうを向いて言う「まさか青でやるわけにもいかないだろ。ルミが見てるのに。赤じゃ治療にならないし、これぐらいが調度いいんだ」

そうだ、思い出した。サンタの彼女の名はルミだった。

「私は気にしないよ」ルミが笑う「サンタが誰を好きでも」

青は愛情、赤は憎悪、そして緑は尊敬だ。

ベッドに横たわるシュンコウさんの穢れを、サンタが緑の手で浄化していく。この人を尊敬しなければならぬとは、サンタの努力を思うと涙が出てくる。

ちょっと気になったのでルミに問うてみた「そう言えば、この病室で何してたんですか？　あまりお見舞いにも見えなかったけど」

「ああ、アレ？」ルミはまた笑う「そうねえ、どう説明したらいいかな……。私ね、嫌いな人からいろいろ取って、好きな人にあげられるの。ずっとサンタにあげてただけど、それはダメだって、この人に言われたでしょ。だからそれはやめたんだけど、吸い取ったものため込むのはあまり良くないから、この人に引き取ってもらうことにしたの。まんざら知らない仲でもないしね」

「ため込むとどうなるの？」

「太るのよ」ルミは言った「ね、こまるでしょ。だから、私にとつては、いちばんお手軽なダイエットなの。この人なら少しぐらい太

ってもかまわないかな？　　と思つて」

まあ、こんだけデカいからなあ。病院じゃ酒も飲めないだろうし、調度いいんじゃないかな。

「はい、今日の分はおしまい」サンタが言った「じゃ、俺、帰るか」

「ゆつくりしていきなよ」サンタを引き止める「私が帰るよ。後はお二人さん、仲良くね」

「こんな婆さんと一緒じゃ嫌だ」サンタがシュンコウさんを指して言う。

「じゃあ、自分の病室行けば？」

「あんな変な死体みたいなのが寝てる部屋は、もっと嫌だ」サンタが言う。

ま、それもそうか。

「いいよ歸つて」ルミが言う「私がサンタの店に行くわ。もう逃げないって、約束したし」

サンタは、チェシャ猫のように、笑みだけ残して消えた。

「じゃあ、私も行くわ。あなたなら、まかせても大丈夫そうだし」ルミはそう言い残して病室を出た。

サンタとルミがいなくなった病室、シュンコウさんをじっと見つ

める。

「がばつ、とシュンコウさんが上体を起こした「行っただか？」

「ええ、まあ」あいまいに返事する。

「どうも、あの女は苦手だ」ぼりぼりと腋の下をかきはじめるシュンコウさん、だからね、アンタ：「アイツ、ここの看護師でな、夜勤専属みたいに仕事してて、昼間はサンタの病室で寝てるんだよ。なんか、婦長に抱き込まれて、ここにきて監視まがいのこと始めやがって、本当に、もう」

監視されなきゃいけないようなこと、アンタがやってるからだろ
うが。

「で？」とシュンコウさんが小声でうながす「持ってきたか？」

無言で、カップ酒、三本をバッグから出して、シュンコウさんに
差し出した。

「おお、これこれ」

「ほんとに大丈夫なんですか、こんなところで？」

「何にも知らないんだなあ、アキは」シュンコウさんが飽きた顔
をして諭す「いいか、いま入院してるのは、整形外科なんだ。足が
折れてる以外は健常者と変わらないんだ。病院暮らしってのはスト
レスも多くてな、医者がストレス解消に飲酒を奨めてるくらいなん
だぞ」

まあ、好きなように言ってくださいよ。私は、もう知らん。

「じゃ、帰りますんで、これで」

「おお、また、よろしくな」

次はないよ。

帰りしなに、ナースステーションによって、受付にいる看護師さんに話しかける。

「すみません、三田高彦さんの病室はどちらでしょうか？」

「三田さん？」看護師さんは怪訝そうな顔する「ちよっとお待ちください」

そう言った彼女は端末を操作して、二度、三度、タッチペンを動かすと、納得して、答えた。

「ああ、その人、五階の患者さんですよ。ここは整形外科なんです。階が違いますね」

「あ、そうなんですか」私はすまなそうに返した「六階だって聞いてたものですから、間違えちゃった、すみません」

「いえいえ、よくあることですから」

「あのー」ここで、わざとらしく声を潜めて、看護師さんにむかってつぶやく「話は変わるんですが、ここの病院って、病室でお酒飲んでもかまわないんですか？」

「え？」看護師さんの表情が一気に曇る。

「私、病室のぞきながら三田さん探してたんですけど、ベッドに座ってお酒飲んでる人がいて」

「どこの部屋かわかります？」看護師さんが顔を近づけて耳許でささやく。私は黙ってシュンコウさんの病室を指さした。

「また602号室ね」看護師さんは憤怒の形相で立ち上がった。「抗生剤投与中は、飲酒厳禁ってあれほと言ってるのに」

廊下が揺れるかと思う程の足取りで、看護師さんは602号室に向かう。

まあ、医者が奨めてるって言うくらいなんだから、看護師さんの説得なんて、朝飯前ですよ。シュンコウさん。

第六話 風に乗る封神（10）

「いったきまーす」

今回もシヨミにはずいぶん世話になったので、ご褒美はタカノフルーツパーラーのスペシャルパフェということになった。

シヨミはマンゴーパフェを、私は定番の苺パフェを頼んだ。

当然、払いはキョージユである。

「結局、シュンコウさんは風神に何をしに行っただんですか？」興味があつたのでキョージユに問うてみた。

「何をしに？ と言われてもですね」キョージユが珍しく困っている。「風神を封じることなんかできないわけですからねえ。本人に聞くしかないんじゃないですか？」

「聞いたけど、誤魔化して答えてくれないんですよ」やっと苺を半分平らげ、ブリュレまでスプーンが通るようになった「穢れの状態も、家出たときと変わってなかったし」

「練習だよ」シヨミがスプーンを口に運ぶのを止めて答えた。

「練習？」

「そ」シヨミはすでにマンゴーをあらかじめ食べつくしている「神か、それに似たようなものを封じる練習。十分に力が使えない状態で練

習しに行っ たんだと思う」

私とキョージュは顔を見合わせた。

「何でそんな、力を制限して練習しに行くのよ」シヨミに問うてみた。

「だって、間違つて封じたら困るんじゃないの？」シヨミは、スプーンで器用に、パフエグラスの壁からクリームをはぎ取っていく。「封じるのは大変だけど、封を解くのだって大変なんですよ。もともと風神を封じる必要はないわけだし」

「まるで、シュンコウさんの体調が万全なら神を封じられる、みたいに聞こえるんだけど」

「そこまでは知らないよ」

「そんなことできるものなの？ キョージュは？」今度はキョージュに問うた。

「僕がですか？」キョージュは驚いて首を振る。「神を封じるなんてそんなことできませんよ。もともと封じるのは苦手だし…、僕ができるのは、せいぜい、消す、ぐらいですね」

神様消す、って、そっちのほうか物騒じゃないか？

「じゃあ、失敗して、風神に飛ばされた、と？」

「失敗したと言うより」キョージュが答える。「何かする前に、向こうから先に飛ばされた、というところでしょうね。風神にしたら、

シュンコウさんに憑いている穢れを吹きとばしたただけだと思うんですよ。実際、少し穢れを削ぎ落としただけで落ちてきましたからね」

「飛ばされたのは穢れのほうで、シュンコウさんはおまけ、ってこと？」

「それに近い感じだと思うよ」シヨミの口から出てくるスプーンにはクリームがまったくついていない。ピカピカである「たぶん、風神は、人間飛ばしたと思ってないよ。知らなきゃ、とても人間には見えないしね」

シュンコウさん、散々な言われようである。

「シュンコウさんのことはもういいじゃないですか」キョージュはハーブティーに口をつけ、カップをテーブルに戻した「もっと楽しい話しようよ」

「楽しい話？」

「ほら神峰山までのドライブとか」キョージュがニコニコしながら言う「楽しかったですよねえ」

いや、それほどでも「まあ、天気は良かったですね」

「また、どこかに行きませんか？ 今度は夜景のきれいなところとか」

「あの車狭いし」

「え？」

「窮屈だと思いませんか？ 長い間乗つてると」キョージユの顔をマジ見して言う「ドライブなら、もっと大きい車がいいな」

「はあ…」

シヨミが、ふふ、と鼻で笑っている「苺もおいしそうだな」シヨミは空になったパフェグラスを持ち上げた「ね、おかわりしたい？ 次は苺で」

それから十日ほどたって、キョージユの家に行くと、ガレージに見慣れない銀色の車があった。

シエルビー・コブラ。

確かに大きい車が良いっていったけど、広い車って意味だぞ、エンジンでかくしてどうするんだよ。しかも2シーター。

たぶん私が、うん、って言うまでドライブ誘ってくるんだろっな。

光輝くシルバーボディを見ながら、憂鬱になった。

<風に乗る封神 - 了>

第七話 小鬼の棲む白塔（1）

キョージユの晩ご飯を温め直していたら、シモンが二階から降りてきた。

「アキハさん、オナカヘッタヨ」

えゝ、二時間前に食べたばかりじゃない。しょうがないなあ。

インド生まれのイタリア人、シモーネ・マツツアリーノはカレーとパスタが好物だ。めんどくさいので、スパゲッティを茹でて、冷凍ジェノベーゼソースを温めてかけてやる。

「オイシイネ、オイシイ、アキハさん、オイシイ」

よかったね、シモン。

パスタの大皿にキョージユが手を伸ばそうとするので、睨む。

「キョージユは、ニンジンとゴボウの煮付けを食べなさい」

「あの、それは、後で食べますので」

「いいから、食べ」

呼び鈴が鳴ったので、玄関に出る。

ドアを開けた途端、ソンコさんが雪崩込んできた。

「アキちゃーん」ソンコさんは泣きながら私にしがみつく「シヨミが、シヨミがいなくなっちゃった」

え？ シヨミ、ついに、母親に愛想つかして、家出？

とりあえずリビングに連れて行って、ソファに座らせる。

「アキちゃーん」ソンコさんは涙と鼻水でぐちゃぐちゃだ「シヨミが、シヨミが…」

うん、わかってるよ。ソンコさん「それで、シヨミちゃん、おかしな様子はなかったですか、あと、書き置きとか」

「書き置き？」

書き置きは、さすがにまずいか。あまり刺激しちやいかな「いや、そうじゃなくて、出ていく前に、喧嘩したとか、思い当たることは？」

「思い当たるって、何よ」ソンコさんは、突如、怒りだした「シヨミは誘拐されたのよ。きつと、そうよ、ああ、あんなにかわいいから、きつと、それで…」

母親、って、こういう時、自分が悪いとは思わないんだよな。とにかく落ち着かせないと「そう、誘拐、かもしれないけど。とにかくどんな風にいなくなっただんですか？」

キョージユはどこかに電話している。シモンはオロオロしている。役に立たないヤツラだ。

「学校出てから音沙汰がないの」「ソニコさんが言う」「もう普段なら帰ってる時間なのに、携帯も圏外だし」

ありゃあ、携帯の電源も切ってるのか。こりゃ、本格的だな。

「いったい何したんですか、ソニコさん」ついつい口調もきつくなる「本当に心当たりはないんですか？ うっかり、シヨミちゃん傷つけるようなこと言ったりとか」

「だから、心当たりって何よ？ さっきから」「ソニコさんは激昂しだした」「本部の人間使ってもわからないっていうし、護符の系も追えないし、もう、なんだかわからない」

え？ 護符の系が追えない？ 本部の人使ってもだめ？ だんだん話がおかしくなってきたぞ。

「落ち着いてください、ソニコさん」なんとかして落ち着かせなきゃ「護符の系、追えなくても、切れてはいないんでしょ」

「切れてはいないけど」「ソニコさんは、やっと少し落ち着いてきた」「手応えがわずかでたどれない」

「本部の誰に探してもらったんですか？」

「イリユウと、コブと、ナラサキ」

げ、一流どころじゃん、それだけ使って見つからないって、どう

なってるの？

いや、待てよ、これで見つからない、ってことは、やっぱりシヨミが自分で姿消した可能性のほうが高いんでは？ いやいや、シヨミは隠形はそれほど得意じゃないハズだし、いや、私たちに隠してるだけで、実はその辺もモノスゴイとか。

うゝむ、わからん。

「今朝も普段と変わらずに学校行つたのに、ちゃんと見送つたのに、どうして帰ってこないの？」

玄関のベルが鳴る。誰だよ、いま取り込み中だ。

キョージユが出ていって対応している。

「タカちゃん」キョージユが連れてきたのは、タモンさんだった。「どうしたの？ そんなに泣いて？」

「シヨウちゃん」ソンコさんは、泣きながら、タモンさんの胸に飛び込んだ。「あの子が、あの子が、いなくなっちゃったのゝ」

「ほらほら、泣かない、泣かない」タモンさんは、ソンコさんをなだめながら、言う。「ボクらの初美に悪いことなんか起こるわけないよ。ちゃんと元気に帰ってくるさ。ね、そうだろう」

「何言ってるの？ほんとよ、ほんとに……あつ」ソンコさんは、タモンさんの瞳を見つめ、何かを感じとったらしく、急におとなしくなった。「そうよ、シヨウちゃんの言うとおり、あたしたちの初美に悪いことなんか起きないわ。ちゃんと元気に帰ってくる」

「というわけで」タモンさんがキョージユに言った「ボクらはこれで、事が終わるまで動けなくなった。あとはよろしく頼むよ」

「はい、わかりました」キョージユが答えた「シモン、この人たちを守ってあげて、アキ八さん行きますよ」

「ワカッタ、マモルヨ、チャント、マモルヨ」

「アキ八さん、早く」キョージユが私の手を引っ張る。

「ちょ、ちょっと、待って」私は、それだけ言うのが精一杯だった「何がどうなっているんですか？」

「タモンさんが力を使いました。ソンコさんもです」キョージユはそれだけ言うと、私の手をひいて玄関へ向かう「詳しいことは説明しながら行きますので、シヨミさんを探しに行きましょう」

ガレージまで来て、コブラに乗ろうとするキョージユを押しとどめた。「私が車を出します」

「え？」不可解な表情で、キョージユが固まっている。

「シヨミちゃん、探すんでしょう？」私は自分の車のドアを開けながら、キョージユに言った「そんな二人乗りの車で行って、見つけた後どうする気ですか。シヨミちゃん乗せて、私が歩いて帰るなんて嫌ですよ」

がっかりした顔のキョージユ。私はカローラのエンジンを入れ、顎でキョージユをうながした。

第七話 小鬼の棲む白塔（1）（後書き）

術師たち（表）シリーズ第七作目です。

あまりにもシヨミの失物探しが便利すぎて、最近頼りっぱなしでした。一度封印してみたらどうなるのかな？ と思い、今回はシヨミに拐われてもらいました。まだ、オチが見えていないので、七話は難産になるかもしれません。連載遅れがちになったらごめんなさい。

第七話 小鬼の棲む白塔（2）

「で、どこに行けばいいんですか？」

助手席に座ったキョージユに行き先を問う。

「いや、どこと言われても」キョージユが腑抜けた答えを返す「勢いで出てきちゃったもので、まだアテはないんですが」

「はあ？」車内は寒い。エアコンの出力をMAXにする。

「ほらあ、タモンさんとソンコさんが、術使っちゃたじゃないですか」キョージユは、これで言い訳しているつもりらしい「なんとなく、あの場に居づらくて。後は頼むって言われちゃったし」

何が、ほらあ、だよ。この抜け作が「あの二人、いったい何したんですか？」

「タモンさんの能力ですよ」キョージユは、さも、当然のように言う「一言主です。実際に見るのは本当に久しぶりで」

「何ですか、一言主って？」

「え？ 知らないんですか？」キョージユが驚いて問い返す。知らないよ、タモンさんの能力なんて。

「言ったことが、何でもそのとおりになるんですよ」

なにい？ まじまじとキョージユの顔を見返す。何を言ってるんだ、コイツ。そんな都合の良い力なんてあつてたまるかよ。

「いや、まあ、初めて聞いたのなら、疑う気持ちもわからないではないですが」オマエが言ってるから、なおさら嘘にしか聞こえないんだが「僕も詳細は知りませんし、いろいろ制限はあるみたいないんだけど、タモンさんがあの力を使ったときは、いままで全部、タモンさんの言ったとおりになってます」

「何でも？」

「何でも」

「ほんとに？」

「ほんとに」

「マジで？」

「マジで」

まあ、キョージユが言うんだし、そうだと言うんなら、そうなんだろう。

すると、タモンさんが、シヨミが元気に帰ってくる、と言った以上はシヨミは無事ということか？

「それが、本当なら、シヨミちゃんは無事に帰ってくるんでしょ、私たちが慌てて出ていくことないじゃないですか？」

「いや、それが…」キョージュは言葉をにこす「シヨミさんについては、そのとおりなんですが…、と言うか、そこがタモンさんの力の厄介なところなんですけど、シヨミさんの無事は確定しましたが、それ以外がどうなるかはわからないんですよ。あの力は」

「当たり前でしょ」

「それが当たり前じゃないんです」キョージュの声のトーンがあがる「たとえばですよ。あくまで、たとえばの話ですが、シヨミさんを拐ったのがどこかの国の諜報機関だったとして…」

「何ですか、そりゃ？」

「あくまで、たとえばの話です」キョージュはもどかしそうに唇を噛む「それで、その諜報機関の工作員がシヨミさんに危害を加えようとした場合、その国自体が無くなります」

「はあ？」

「何言ってるんだ、こいつは？」

「国が無くなるって、どういうことです？」

「文字どおり、無くなります」

「じゃあ、その国がアメリカだしたら」こっちもイライラしてきたので、ついつい口調もつっけんどんになる「アメリカが無くなるわけ？」

「そうです」

「もういつかい聞くけど」あまりに平然とキョージユが返すので、こっちがキレそうだ「神様がシヨミちゃん消そうとしたら、先に神様が消されちゃうとか、そういうことですか？」

「そのとおりです」

「…」

「いやあ、アキハさんが、物分かりよくて、良かったです」

勘弁してくれよ。タモンさんて、そんな、とんでもない人だったの？

「じゃあ、私たちがしなければならぬことっていうのは」なんかもう、どうでもよくなってきた「シヨミちゃんから、シヨミちゃんに危害を加えようとする相手を守る、いや、そうじゃないか、シヨミちゃんに誰にも手出しさせないようにする、相手が危険だから、そういうことですか？」

「はい、そういうことです」キョージユはうれしそうに答える「もう、一言主が発動しちゃってるんで、急がなきゃいけないんですけど。タモンさんもソソコさんも術の反動で、シヨミさんが帰ってくるまで動けないから、他の人がなんとかしないといけないんですよ」

「ソソコさんも、なの？」タモンさんのほうは、嫌々ながらも納得したが、ソソコさんのほうがよくわからない「ソソコさんも一言主なの？」

「彼女は木霊です」キョージユが答えた「ソソコさんは他人が使っ

た能力を、その場で、そのまま使えます。だから今回は一言主の重ねがけで間違いないです」

「ねえ、キョージユ」もう毒気を抜かれたので、問いかけも我ながらおとなしい「さっきの、アメリカがなくなる、って、ただのたえ話ですよ」

「ええ、まあ、そうですね」キョージユはちよつと困った顔した「以前の例から考えると、あながち誇張でもないような…」

「何人も死んだ、とか…」

キョージユは首を振る。

ああ、良かった「じゃあ、死人が出たとかではないんですね」

キョージユは首を降り続ける。表情が暗い。

「え？　じゃあ」嫌な感じがする「何百人とか…、もしかして…、何千人？」

「…」

「何万…」

「残念ですが」キョージユが言った「まだ桁が違います」

アクセルを踏んで車を出す。

「アキハさん」キョージユが問うた「何かあてでもあるんですか？」

「あてって、ほどじゃないけど」私は答えた「霊峰友愛、関東支部に行ってみます」

「レイカさんは、この件、たぶん関係ないですよ」

「私もそう思います」まあ、レイカ様、ってことはありえないよね
「でも、確かめたいことがあるんです」

時刻は午前十一時、普通なら支部のオフィスにレイカ様のいる時間ではない。

けれど、私には、レイカ様が絶対にそこにいるという確信があった。

第七話 小鬼の棲む白塔（3）

「遅いよ。お嬢ちゃん」

「カゲさん、いたんですか」

霊峰友愛の支部に入った途端、カゲさんが文句を言ってきた「当たり前じゃない、レイカ様だけ残しておくわけにいかないだろ。まったく」

「ごめんなさい」

カゲさんは笑った「ああ、キョージユに会ったら、お嬢ちゃんのこの間の飲み代は、ぜったい受け取らないから、って言うとして」

ひつ、顔から血の気が引いた。あの晩のことはまったく記憶が無いのだ「すみません、すみません、それは、私が必ず払いますから」

「ええ」カゲさんは口をとがらせた「なんでだよ。ウチの店はもうお嬢ちゃんはタダでいいから、って言ったじゃない。また来てよね」

「でも、ぜったい、必ず、払います」

「早く行って」カゲさんは聞く耳を持たない「レイカ様、待ってるよ」

カゲさんにうながされて入った部屋。レイカ様は巨大な木製のデ

スクについていた。

「ウチは関係ないわよ」開口一番、レイカ様はおっしゃった。

「もちろん、それは、わかってます」私は即答した「お聞きしたいのは別のことです」

「あら、そう」レイカ様は、フフン、と顎を上げて立ち上がった「まあ、あなたが馬鹿でなくなによりだわ」デスクを廻り、私の前に立つ「アタクシ馬鹿は嫌いな」

褒められた、ということにしておこう「最初にお会いした時です。あのとき、ソンコさんは何をしたんですか？」

「最初に会ったとき？」レイカ様の眉根が上がった「ああ、あのときのこと。何、あなた、ソンコの木霊のこと知らなかったの？」

「はい…」何かバツが悪い気がして、おずおずと返事する。

「内緒にされてたつてこと？ まあ、あの女の考えそんなことね。あいかわらず姑息だわ」レイカ様は言った「あの女、あなたの未来を覗いてたわ。アタクシの力を使ってね」

「ソンコさんは、私のどんな未来を覗いていたんでしょうか？」

「知らないわ」レイカ様は首をすくめて見せた「未来予知、っていうのは、これでもなかなか骨が折れるものなのよ。たまたま予知能力を持っていたとしても、まず普通は未確定の未来と確定した未来の区別がつかないわ」

「未確定、と、確定？」はじめて聞いた

「そうよ」レイカ様はとくとくと語る「未確定の未来に振り回されて、本当の確定した未来を見逃してしまう。ソニコは時々、アタクシの力を勝手に使うけど、そうそう練習できるものじゃないから、いいところ、何かの答えを得る、ぐらいでしょうね」

「何かの答えを得る？」

「託宣よ」

「託宣？」

「あらかじめ想定した問いに、イエスかノーかで答える」レイカ様はちよつとだけ口元を歪めて、笑った「まあ、そのくらいが関の山ね」

「じゃあ、今回の件が起こることを、やっぱり、ソニコさんは知らなかったんですね」

「ああ、あなた、そんなこと考えてたの」レイカ様は、ほほ、と笑った「今回の件を予知できるのは、アタクシぐらいのものよ。ま、いろいろと頭をめぐらすのは悪いことじゃないとは思っけど」

「シヨミちゃんは、どこにいらっしゃるのでしょうか？」

「ソニコの娘がどこにいるかなんて、アタクシは知らなくてよ」レイカ様は、それについては、まるきり興味なさそうに言った「そういうのが得意なのは、あの子のほうでしょう？　まあ、母親ほど馬鹿じゃないみたいだし、あの子なら自分のことは自分で探すでしょ

う」

「自分で探す？」

「お行きなさい」レイカ様は、もうおしまい、という顔で会話を打ち切った「もう必要なことは話したわ。あの夫婦がおかしなことを始めたのだから、手遅れにならないうちに早くなさい。とぼっちは御免だわ」

「あの…、レイカ様…」帰りしな、レイカ様に声をかけた。

「何？」

「玄関前にキョージユ待たせてあるんですけど…」

「え？ ダーリンが」レイカ様、あきらかに動揺している「そ、それが、どうかして？」

「いや、車の中にいるんで、もう帰られるんでしたら、すれ違ったりするのかなあ、とか」

「そ、そんなの、あたりまえでしょう」レイカ様の頬が真っ赤になった「出入口はあそこだけなんだから、あなたたちがぐずぐずしたら、横通るのは普通じゃない。そこしか道はないんだから」

カゲさんに、さよなら、を言って車に乗り込んだ。ルームランプを点ける。

「用はすみましたか？」

「まあ、すんだような、すまないような」キョージユの問いに答える「レイカ様は、シヨミちゃんなら自分のことは自分で探すはず、だとか言われるし……」

「それだつ」キョージユがいきなり叫んだ「それですよ。シヨミさんは探してるハズです」

「探すって何を？」

「何でもです」キョージユは嬉々として説明する「だって考えてみてください。シヨミさんの失物探しはものすごく強力なんです。あまりに強力過ぎて、探している相手に気どられずに探すなんてことはできないくらいです」

「そりゃそうだけど」

「アキハさん、何か感じませんか？」

「え？」

「いつもと違う感じが、しませんか？」

言われてみると、さっきから何か特定の方向に引っ張られるような感覚が「あつちに引っ張られてる感じがする」

私の指さす方向にキョージユが向いた「北ですね。シヨミさんは北にいます」

「シヨミちゃんが私を探しているんですね」レイカ様の言ったのは、そういうことか。ありがとう、レイカ様。

見ると、玄関のドアが細く開いていて、その後ろにほっそりとした人影が見える。

「キョージユ、玄関に向かって挨拶して」

「え？ 何で？」

「いいから、するの」

キョージユが玄関に手を振ってお辞儀すると、いきなりドアが、ボタン、と閉まった。

「さ、キョージユ行きますよ」

とりあえず、方角だけはわかった。この先どうなるかわからないが、とにかく北に行ってみよう。

第七話 小鬼の棲む白塔（4）

方角しかわからない、というのは思ったよりもキツかった。

北を目指したのだが、もう少し正確には北西の方向だった。道なりに進んで行くも、一向にたどり着く気配が無い。熊谷を越えたあたりで、関越道を使わなかったことを激しく後悔した。

いちばんひどかったのは、途中でキョージユに運転を代わったときで、こっちの指示とはあさっての方向にばかり車を向けるので、だいぶ時間をロスした。

「とりあえず藤岡までこのまま下道を行きましょう」キョージユに言った「そこから関越道に入るか、あるいは上信越か、まだもう少しありそうです」

「どちらの可能性が高いですか？」

「このままだと、上信越かな」

「妙義山ですか、うーん」

キョージユは助手席でさっきからずっとあちこちに電話している。途中で携帯の電池が無くなりかけたので、充電コードをつなぎっぱなしで、電話している始末だ。

「そっちは、何かわかりました？」

「うーん、まあ、まだ憶測の段階ですが」キョージユはようやく通話を切った「相手は素人の可能性が高いですね」

「この業界の人間じゃないってこと？」

「そう」

「どうして、そう思うんです？」

「一言主の木霊重ねだから、霊的にはもう核爆弾が炸裂したクラスに近いので」キョージユは少しあくび混じりに話す。無理もない、三時まわってるし、こっちもかなり疲れてきた「起きた瞬間に、それなりの人間抱えてるところは感知して、いつせいに動き出したようなんです、こっちで追いかけるのが、僕とアキ八さんだつてことが、どこからか漏れたらしくて、それから…」

「それとこれと、何の関係があるんですか？」

「いや、一時間くらい前からですかね。本部の電話が鳴りっぱなしらしくて」

「クレームですか？」

「いや、命乞いらしいです」

何だよ、それ。

「自分のところは関係ない。少しでも何かわかったら連絡する。いや、草の根分けてもお嬢さんは探す。だから、とにかく、あの二人をよこすのだけは勘弁してくれ、だそうです」キョージユはため息

をついた「大幅に誤解されてますね」

こっちだって、ため息が出る。何なんだよ、いったい。

「とにかく、こちら側の人間だと、これだけのことになる可能性は十分にわかってるわけで、シヨミさんを誘拐しようなんて考える人間は、ちよつと見当たらぬ、ということです」

「でも、現にシヨミちゃんはいなくなってるし、シヨミちゃんが私を探してる、ってことは、助けを求めてるってことですよ。違います?」

「うん、それも、根拠のひとつ」

「どういうこと?」

「シヨミさん、ってあれでけっこう強いんですよ」キョージユは遠慮がちに言った「一言主は除いても、まず彼女にかけてある護法が並大抵のものじゃないんです。その上、見たでしょう。シモンを含め、ヴァチカンの人間を蜂の巣にしたの」

「ああ、あれ」キョージユの言わんとしていることは、なんとなくわかる。

「十年程度の修行しか積んでいないのであれば、まず瞬殺されるのがオチです。それが今回、無抵抗で捕まっていることを考えると」

「シヨミちゃんが手加減してる、ってことですか」

「というより、相手が素人だったので、面食らったのではないかと、

アキハさんだつて、素人相手だとやり難いでしょう？」

そうかな？ 私だつたら、相手が素人だろうが、おかまいなしだけどな。

シヨミが私を探る感触が変わってきている。強くなった、という感じではない。何かくすぐるような、遊んでいるような。

「だいぶ近づいてきた感じですね。こっちで間違いないみたい。上信越です」

「それは朗報」

「シヨミちゃんが手を抜いてる、っていうのは、なんとなくわかる気はします。さしあたっての命の危険はないみたい」

「ああ、そんな感じがしますか」

「でも、シヨミちゃん的能力、素人さんには理解できないでしょう？ 犯人が素人だとして、そのへんはどうなんですか？」

「そこなんですよねえ」キョージユが腕を組んで思案している「これが金目当ての誘拐とかだつたら、シヨミさん、とうの昔に見切りつけて帰ってきてると思うんですよ。それが、ここまでつき合つてるとなると」

「何か、それっぽいことに巻き込まれてる？」

「半可通が素人をそそのかしているパターンですかね」

「最悪ですね。そのパターン」

「僕もそう思います」

高速に入ってから早かった。

妙義山を越え、碓氷軽井沢インターを降りたあたりで、キョージユの携帯の呼出音が鳴った。

「ああ、そう、わかった」キョージユが携帯を切るのももどかしく私に言った「軽井沢です。間違いありません」

「ええ、そうですね」私は答えた「もうここから見えますから」

山道のトンネルを抜け、見上げた天空にそれは居た。

逆巻く炎雲を従えて、踊り狂う二対の龍。

紫色に輝くつがいの龍は、足下に虹をたたせ、自分達の愛娘を加護していた。

第七話 小鬼の棲む白塔（5）

龍に誘われるまま、別荘に入る。

日の出前に着けたのは幸いだった。もつとも、ここまで来たら、天上に龍が張りついていなくともわかったかもしれない。

午前五時だというのに、その別荘は煌々と灯りが漏れだしていた。悪事を働くやつらは、闇が恐くてしかたないのだ。

「見たとこ、三人ですかね」灌木に潜んで邸内をうかがいながら、キョージユに言う「部屋の中には、もう少しいるかもしれないんですけど、出てこなければ関係ないでしょう」

「シヨミさんは？」キョージユが問う。

「ここから右手の奥の部屋」キョージユの耳許で囁く「裏からまわって窓でも割りますか？」

「正面からでいいでしょう」キョージユは答えた「別に、こっちは悪いことしてるわけじゃないし」

キョージユは、無造作に、玄関に立つとノブをまわした。この男に、鍵というものは用を為さない。

廊下に男がいた。

二歩飛んで後ろにまわり、裸締めの大要領で男の首を90度捻じる。

無言で崩折れた男を見て、キョージユが問うた「死にました？」

「んー、たぶん」私は小声で答えた「手応えはあったから、少なくともしばらくは息をしないと思う」

「それなら安心です」

奥の部屋の扉をキョージユが開けると同時に、突進した。

最初の一步が、そのまま踏み込み脚になり、半身を捻って、片方の見張りのみぞおちに右肘を食い込ませる。

前にキョージユに躲された技だ。

気を練ったわけでもないのに、あっけなく見張りは壁にすっ飛んでいった。

普通は、こうだよなあ。

残った見張りは、驚く余裕もないらしく、啞然としていた。挟み込み二段蹴、プロレス技でいうところのフランケンシュタイナーを喰らわせると、ゴキツと、首に鈍い音を残して床に突っ伏した。

「アキハあ」制服のシヨミが飛びついてきた「ひどいよあ、遅いじゃない、お腹減っちゃったあ」

あ、ああ、そうだね、シヨミちゃん。私もお腹すいたよ

「じゃあ、帰りますか」気の抜けた顔でキョージユが言う。

「あ、そうだ」シヨミが言った「隣の部屋に変なものあるよ。金庫の中」

シヨミが言うんだし、しょうがない。

キョージユに部屋のドアを開けさせると、前も見ずに飛び込んだ。

まわし蹴り一旋。

男は壁に頭からあたり、血糊を残してずり落ちた。

「金庫つて、これ？」キョージユが指さす。

「そうだよ」

シヨミが答えた途端、金庫の前のデジタル表示窓が怪しく数字を変え、その後、扉が勝手に開いた。

「ノーム・イン・ザ・クォーツかあ」キョージユは金庫の中身を一瞥すると、ハズレを引いたような顔で言った「もう小鬼の力はほとんどないみたいですね。破器する必要もないでしょう」

高さ五十センチほどの天然水晶の中に、小さな影が揺らめいている。水晶の中の小鬼。持ち主の願いを何でも叶えるという例のアレだ。

「持つてく？」シヨミが問うた。

「いや、そこまでしなくても」

私たちは、車の真上に龍を侍らせたまま、帰途についた。

バックシートでシヨミとくつついて寝た。運転はキョージユにさせた。うとうとしていると、寝物語にシヨミが事の顛末を話した。

下校途中、両脇から腕を掴まれ、車に連れ込まれそうになったので、とりあえず捕まれた腕を捻って折ったのだそう。

「二人とも？」

「二人とも」

そこで残りの一人にネットガンを打たれて、捕獲ネットをかけられたんだそう。どうする気だろうと思って、ネットを被ったまま、ぼーっ、としていたら、手を折られた二人が、シヨミを車に運び込もうと無事な手でシヨミを抱えようとしたらしい。

「あんまり必死だからさあ」あくびまじりにシヨミが言う「なんか、かわいそうになっちゃって」

「見ている人とかいなかったの？」

「たまたま、人通りがとぎれてたみたい」シヨミが鼻をすりつけてくる「悲鳴でもあげれば、良かったんだろうけどさあ。おかしくてね、笑っちゃったんだよ」

別荘に来てからは、外には出られなかったが、比較的自由にさせてもらっていたらしい。

「見張りが近くに来たときに構えをとると、ビクッ、てするんだ。おもしろかった」

食事が出たらしい、レトルトっぽいフルコースだったそうだ。

「スパイ映画のシーンでも狙ってたのかな。007とか。でも、おいくしくなかったんだよね」

食事が終わると、爺さんが来たんだそうだ。

「だらだらしゃべってたけど、短くすると、息子を探せって言うてたみたい」

「で、探したの？」

「まあね。死んでたけど」

爺さんには、死んだとは言っていない、とシヨミは言った。適当にはぐらかしたそうだ。まあ、正解だな。

シヨミの頭が私の肩にのる。いい匂い。若い子っていいな。

朝日を車窓に感じながら、シヨミと私は眠りにおちた。

第七話 小鬼の棲む白塔（6）

「嫌です」キョージユの目をまっすぐに睨みつけながら、言った。

「うん、そうだと思うんですよね。でも、またシヨミさんを拐おうとするかもしれないし、そうだったら、シヨミさんも今度は黙って拐わせるようなことはしないと思うんですけど。それにしたって用心にこしたことはないわけですし、やはりここは、アキ八さんの力を借りてでも、早めに決着をつけるべきだと……」

「絶対、行きませんから」絶対、を、ものすごく強調して言った。

「なるほど、アキ八さんの気持ちも、わからないでもないです。でも、相手には常識なんかないんです。いきなり白昼の往来で女子中学生を拐おうとするような奴らなんです。そのところをよく考えてですね。シヨミさんのためにも、アキ八さんが一肌脱ぐべきだと僕はそう思うんですよ」

「他の人をあたってください」ここで、ひるんだら、負けだ「シヨミちゃんを助けるのには、そのほうがいいと思います」

「いやいやいや、アキ八さんじゃないとダメなんですよ。死者を呼び出すというのは、これでなかなか骨の折れるもので、そもそも、ちゃんと当人を呼び出すというのが大変で。死んでる人はたくさんいますからね。ですから、ここは死霊を呼び出すスペシャリストとしてのアキ八さんに、どうしても力を貸していただかないと……」

いつ、私が、死霊を呼び出すスペシャリストになったんだ？ 何

時、何分、何秒？「だいたい、その爺さんの息子なんか呼び出す必要ないでしょう。私は嫌なんです」

はあ、とキョージユがため息をついた「あの、もしかして、アキハさん」キョージユは醒めた目で見ている「前から気になってたんですけど、まさか、その、オバケが怖いとか、そういうことはないですよ」

「恐いですよっ」こわくて悪いかよ、オバケこわいだろ、みんな、こわいだろ、オバケ。苦手なものは苦手なんだっ。

「なるほど、よくわかりました」キョージユは居ずまいを正して、私に正面から向き直った「まあ、それはそれとして、こちらに置いておくことにしましょう。で、やはりシヨミさんの件は……」

「置いておくなよ。こちら、って、どこだよ。行かない、って言うたら、絶対に、行かない」

「アキハさん、アキハさん」シモンが横から口を出す「ナイナイノ、オマジナイ、シテアゲル。オバケ、ナイナイ。ナイナイ、ネ」

カトリックの修道士がオマジナイとかすんなっ。

「アキちゃん、無理にとは言わないけど」いつになく殊勝なソンコさんが瞳を潤ませながら訴える「どうにかならないかしら、シヨミのためだと思って」

「無理です」その程度で引き下がるもんか。

「いや、アキハさんの心配はわかりますよ」キョージユが言う「で

も、今回は呼び出すの一人だから、いつもほどたいしたことないんじゃないかと…」

「保証はあるの？」

「保証？」

「恐い目にあわないっていう保証はあるの？」

「アキ、って思ったより冷たいんだなあ」「シュンコウさん？　いつのまに？」「ちよつと恐いぐらい、シヨミのために我慢してやればいいのに」

「いつ退院したんですか？」

「いやあ、そのうち、退院できるだろ。あとはもうギブスはすすだけだし」

また病院抜け出てきたのか、チクってやる。

「もういいよ、みんな」そう叫んだのはシヨミだった。「アキハはアシを助けてくれたし、もう十分だよ」「シヨミは私を囲む人垣を避けてそばにやってきた」「ごめんね。アキハ」

シヨミちゃん…。

「そうだな」タモンさんが重い口を開いた。「シヨミがこうして帰ってきたのは、アキハさんのおかげだ。これ以上、迷惑かけるわけにはいかないよ」

「そうね、そうだね」ソノコさんも夫の言葉に従った「アキちゃん、無理言ってごめんなさい。それと、シヨミを助けてくれてありがとう」

タモンさん一家は、ではこれで、と立ち上がった。

「…あの」

「何でしょう、アキハさん」

「恐くない、ってホント？」

「ええ、一人だけですし、今度は場も強いので、余計な人は呼ばなくていいと思います」

「…っても、…いですよ」

「え？」

「行っても、いいです」

「ありがとう、アキハさん」キョージユが高らかに叫んだ「みなさん、アキハさん、行ってくれるそうですよ」

「え？ほんと」意外にも真っ先に飛んできたのはシヨミだ「ねえ、パパ、ママ、アタシも一緒に行きたい」

「そうだなあ」なぜかタモンさんがシヨミの後押しをする「キョージユとアキハさんが一緒なら、そのほうが安全だね。事が片付くまで、学校は休ませればいいし、ねえママ」

「そうね」ソンコさんは当然のようにタモンさんの言葉にしたがう
「じゃあ、悪いけど、アキちゃん、しばらくシヨミをよろしくね」

「わーい」

ま、いいけどさ、別にシヨミは手のかかる子じゃないし。

「ナイナイノ、オマジナイ、シテアゲル、イコウ、アキハさん」

え？ シモンも来るの？ 別にいいけど。

「しかたねえな。ついてってやるよ」

シュンコウさん、あなたは病院に帰りなさい。

「富士までだと、三時間もあれば着きますね。途中で昼食取っても
余裕です」

「富士？ 何でそんなところまで行くの」

「いや、件の息子さんが最後に消息を断ったのが、青木ヶ原樹海だ
そうなんで」

なにい？ そんな話は聞いてないぞ。

「ちょ、ちょちょ、ちょっと」

「青木ヶ原、いっぺん行ってみたかったんだあ」

「待て、ちょっと、シヨミちゃん」「シヨミに喰ってかかる」「青木ケ原なんて、聞いてない」

「あれえ?」「シヨミはすつとぼけた顔で答えた」「車で話したじゃん、アキハ、寝てた?」

「よし、シモン、車出せ」

「シュンコさん、ウシロ、シヨミさん、ノセル」

「じゃあ、アキハさんは僕と」

「いやああああ」

第七話 小鬼の棲む白塔（7）

そのまま青木ヶ原に直行すればいいものを、途中、河口湖によってハーブ館でハーブティー飲みたい、とか言い出したヤツがいたおかげで、大幅に遅れた。

絶対、ワザとだろ。シュンコウさん。ハーブとかいうガラか、あんた。

シヨミはニコニコしている。ラベンダーソフトクリームを三個も食べたので機嫌が悪いわけがない。確かにソフトクリームはおいしかったけど、それでまた遅れた。

河口湖を出ようとしたら、シモンがいない。ほうぼう探したら、天然石を売っている店にはまっていた。また遅れた。

西湖の湖面を西陽が照らし、陽光がさざなみに跳ねた。

「夕日がきれいですねえ」キョージユが暢気な事を言い出すので、首を絞めた。私に出来ることと言ったら、コイツの首を絞めることくらいだ。

なんだかんだで、樹海の入口についた時には、すっかり日が暮れていた。

「もう、今日は一泊して、明日にしません？」

「でも、キャンプ道具持ってきてないし」誰が野宿するって言った

よ。

なぜか、仕事をすませてから温泉に入ろつという話になる。

暗いから明日にしようという私の提案は無視された。

シヨミを先頭に、みんな、どんどん樹海に分け入っていく。特にギプスしたままのシユンコウさんが進む速度は異常だ。どうやって歩いてるんだ。

こんなところで、ひとりぼっちになるわけにはいかない。必死でみんなの後を着いていく。

「あ、ここだよ、ここ」シヨミが叫んだ「アキハ、こっち来て、こっち」

シヨミに言われるまま、巨木の前に立たされた。

「じゃあ、そろそろ始めますので」

「え？ いきなり？ ちょっと、まだ心の準備が…」

「アキハ、こっちじゃないよ、ちゃんと前見て」

「前見ろつて、何を…、…ひっ」

木の根元、もたれかかって座り込んでいる者がいる。擦り切れた衣服を何かが来てるけど、これって…

「あ、ああ、あの…、元気…、です、か…」

声が震える。元気な、わけ、ない、な……。手足も細いし、という
か白いし、顔には肉ついてないし。

白骨死体に語りかけると、黄色い光が、ぼう、と湧いた。

「やひ」

「アキ八つてさあ、生きてる人間にとどめさすのは平気なのに、
どうしてこんなのが恐いのかなあ。」

「知らん。アキは昔っからこういうの苦手で、お化け屋敷なんて
前通るだけで、失神しそうになるんだよ。男の玉蹴りつぶしたりす
るのは嬉々としてやるくせに。」

嬉々としてやったことはないぞ。やむをえずだ、あれは。

「あの…、すみません、ちょ、ちょっとお話いい、ですか？」

語りかけると、光はためらうように明滅をくりかえしたが、やが
て落ち着き、オレンジ色になって安定した。

光の話は、とりとめがなく、ときどき、こちらの問いとは見当違
いの話を延々と繰り返したが、辛抱強く相手をする事で、どうや
ら、おおよその事態は飲み込めた。

この光の生前の名は広畑浩一というらしい。事の始まりは、広畑
浩一の父、広畑卓の事業が傾きかけたことだ、とオレンジの光は語
った。

広畑卓は、辣腕でならした経営者で、その強引な手法は、卓の会社にならぬ利益をもたらしたが、かなりの数の敵も作る原因となった。それでも景気の良いうちは、たいした影響はなかったが、経営状態が悪化すると、一転、そのライバルたちは卓を攻撃しだし、あわや倒産寸前まで追い込まれたのだという。

その時に倒産していれば良かった、と光が言った。もし肉体があったなら、浩一は、自嘲ともとれる笑みをこぼしていただろう。

しかし、広畑商事は倒産しなかった。卓がおかしな水晶を見つけてきたのだ。奇妙な影が巣食う、その水晶のために、卓は巨大で頑丈な金庫を買った。

卓の商売敵は皆、変死した。商売のほうは、やることなすことが全て当たった。金が湧き水のように湧いて出た、と光は言った。

浩一自身は、広畑ホールディングスの専務に収まり、形だけの役職の代わりに、膨大な手当で与えられた。いや、俺の仕事はちゃんとあつたんだ、と光は言いながら赤々と明滅した。

ずっと順調だった広畑ホールディングスの経営が、じわじわと縮小をはじめた頃、浩一は父の卓に呼ばれた。卓は、内部で影の踊る水晶を前に、息子の浩一に告げた「小鬼がお前を欲している」と。

浩一は、その瞬間に全てを悟り、父と水晶の前から逃げ出した。

浩一の、広畑ホールディングス専務取締役 広畑浩一の仕事は、水晶の中のモノに喰われることだったのである。

浩一は父の手の者から逃げまくり、各地を転々とした後、この樹

海で事切れた。自殺ではない、と思ってくれ。光は弱々しく言った。ただ、疲れただけなんだ。

最後に、アキハは問うた。

「お父さんをどうして欲しい？」

どうでもいい、と光は言った。父の事はもう何も考えたくない、と。

「あなたのことは、どうして欲しい？」

光は二度、自分の骨のまわりを巡った。埋めてくれないか、日常の良、できれば花のきれいなところがいいな、それ以上の望みはないよ。

光は消え、あたりは漆黒の闇につつまれた。

第七話 小鬼の棲む白塔（8）

「来たよ。来たよ」詰所に出ると、興奮して鼻息も荒いソンコさんが、話しかけてきた「広畑ホールディングスの顧問弁護士から、本部に依頼」

私とキョージユは顔を見合わせる。

「で？」とキョージユが問うた「何て言ってきたんです？」

「軽井沢の別荘に來いってさ」ソンコさんが答える「詳細はそこで話すって、それで…」

ソンコさんは私たちの目を交互にのぞきこむ「行ってくれるよね」

私とキョージユは黙ってうなづいた。

「ありがとう」肩の荷を降ろしたように弛緩するソンコさん「シヨミは家に戻すわ。あたしが見てる」

「いや、ソンコさんが家に来るほうがいいと思います」キョージユはソンコさんの提案を退けた「シモンにも頼んであるし、いちおう父にも来てもらっています。何かの足しにはなるでしょう」

「そうね、そのほうがいいかも」

「いつまで来い、と？」ソンコさんに問うてみた。

「それがね」ソンコさんはイタズラ小僧のように目をくるくる回す
「今日の午後二時」

「何それ」

ちなみに今は午前十時だ。

「でしょ。朝一で依頼してきてきて、今日の午後軽井沢まで来いって。よっぽどこつちを舐めてるのか、真性の馬鹿か、どっちだろうね」

たぶん両方だと思う。

「まあ、いいじゃないですか」キョージユはもうドアに向かっている「こつちとしても、こんなことは早く片付けたいし、願ったり叶ったりですよ。行きましょう。アキハさん」

「来ると思います?」

「え?」

「広畑卓」

「そりゃあ、来ますよ」

オープントップは悪くないのだが、風がきつくて話しづらい。

「小鬼入り水晶なんて、おいそれと他人に見せられるものじゃないし、小鬼の力が弱まっているんだから、相当あせってるんでしょう。必ず来ます」

「小鬼ダメですか」

「ダメですねえ」キョージユ、いつのまにか眼鏡の上にゴーグル着ける。そんなことまでしなくても、ホ口はずさなきやいいだけなのに「その点については、息子さんの話を聞くまでもなかったですね。金庫開けてすぐわかりました。そうでなきゃ、シヨミさんの言うとおりに回収します」

「キョージユ、そういうのわからないんじゃないんですか？」

「いや、力解いてもアキハさん、全然、反応しなかったし、あつ痛っ」

思いつきり二の腕をつねってやった「そういうことは、私に断つてからやれ、って、いつも言ってますよね」

「ごめん、ごめんなさい、ほんと、痛っ、痛い、イタイ、イタイ」

犬でも躡ければ覚えるのに、どうしてオマエは、人の言うことを聞かないんだ。

「痛いなあ、ちょっとうつかりしただけなのに、そんなに怒らなくても」

「ハンドルを離すな。前を向け。ちゃんと運転しろ」

キョージユの両手をつかんでハンドルに固定し、罵声を浴びせる。前にも言っただろ。オマエの頭は幼稚園児以下か？

息が切れそうだ。キョージユを叱ると血圧が上がる。もう場所もわかってるんだし新幹線にすれば良かった、と激しく後悔する。

バツとしてしばらく無視してやったが、何かと話しかけてくるし、よそ見ばかりしてかえって危ないので、しかたなく応対してやる。

「息子さん、小鬼に食べられそうになったとか言ってたんでしたっけ」

「なんか、そのようなこと言っていました」

「おかしいなあ」キョージユは首を傾げている「あ、そうだ。アキハさん、ちょっと本部に問い合わせて貰えます？ 広畑卓がいくらであの水晶買ったのか」

「そんなことわかるんですか？」

「わかりますよ。コブさんなら、すぐだと。お願いします」

「え〜」

「お願いします。大事なことです」

しかたなく、バッグから携帯を取り出して本部に連絡をとる。

「あ、どうも、アキハです。すみませんけど、コブさん、お願いしますか？」

コブさんはすぐ出た。

「あーっ、はっはっはあ、アキちゃん？ あははあ、久し振りの、ご指名なんてうれしいなあ、あはは。何か用？」

電話では、コブさん、いつも笑っているのだが、何でだろう？

コブさんに事情を話して水晶の値段をたずねる。

「五千万円だって、コブさん言ってます」

「その前は？」

「え？」

「前の持ち主はいくらで買ってます」

もう一度コブさんに調べてもらう。

「香港ドルで、30セント、だって」

「オッケー、わかりました」

「うん、ありがとう、コブさん、オーケーだって、またね」

「またねー。あはははは」

コブさんの笑いが止まりそうにないので、先に携帯を切った。

「広畑卓、という人も、哀れな人ですね」

キョージユがぼつり、と言った。

「そうなんですか？」キョージユがそんなことを言い出した理由がわからなかったので、軽く流した。

「いや、哀れというよりは「キョージユは思い直したようだ」「馬鹿ですね。本当の、馬鹿です」

第七話 小鬼の棲む白塔（9）

二時よりはかなり早く着いたのだが、キョージユは例の別荘には向かわず、近くの喫茶店に入った。

「この林檎パイはおいしいんですよ」などと言いながら、動く気配がまったくない。林檎一個がまるごとはいったパイはおいしかったが、いいのかな、と思いつつカモミールティーの二杯目を頼んだ。

もう三時だな、と思うころ、キョージユがすっかり冷えたエスプレッソを飲み干して、立ち上がった。「そろそろ行きますか」

別荘に着くと、玄関の呼び鈴をならし、応答もないのに勝手に入る。

どこから連れてきたのかな、と思うほど、場馴れしていないスーツ姿のお姉さんに案内されて、シヨミの居た隣の部屋、金庫のある部屋に通される。

キョージユの予想通り、広畑卓はそこにいた。

老人、とっていい年齢のはずだったが、広畑氏の皮膚はわざとらしいみずみずしさで顔に張りついており、見ようによっては壮年の実業家と言えなくはなかった。別の表現をすれば、人間というよりはマネキンに見えた。

「急に呼び立ててすまなかったね」広畑氏は言い、右手を差しだし握手を求めた。

「時間もないようですし、用件からお願いします」自分で遅れてきたことには触れず、キョージユは自分の利き手を相手に委ねることもしなかった。

よろしい、そう言って広畑氏は金庫の前に立ち、番号をインプットすると照合機に右手の中指を当てた。

金庫の扉を開け、中身を取り出す。

「どう思つかね」広畑氏は手に水晶の塊を持って、問うた。

「ガラクタですな」キョージユがそっけなく言う。

突然、広畑氏は笑いだした。「術師会で最高の男と聞いていたのに」哀れむような顔つきでキョージユを見下す。「とんだマヌケだ。この水晶の価値もわからんとは」

「ガラクタはガラクタです」キョージユは怯まない。「もつとも、あなたが購入される寸前までは、ある程度の力がありました」

「何だと」

「あなたは金銭については、ある種のこだわりをお持ちのようです。ものには相応の金額を払うべきだ、とね。それはあなたの信条でしょうし、私がとやかく言うことではない。しかし、一方で、ノーム・イン・ザ・クォーツの取引にはルールがある」

キョージユが水晶の名を正確に言い当てたことで、広畑氏の顔に動揺が走った。キョージユはかまわず言葉を続ける。

「五千万円は高すぎました。もし本当にノーム・イン・ザ・クォーツを手に入れたのであれば、あなたは30セントより多い額を払うべきではなかった」

「これは本物だ」

「そう、本物でした。あなたの手に入った途端に小鬼は逃げた」

「嘘だ」広畑氏は叫んだ「これは俺に富をもたらした。本物だ」

「錯覚ですよ」キョージユは淡々と語る「その水晶を手に入れる前に、あなたの事業は傾きかけた。当然でしょう。あなたは商売に自分のルールを持ち込んで決して曲げなかった。だが、そんなやりかたは長くは続かない。迷いが生じるんですよ、普通の人間は、間違ったことを長く続けることができないんだ。だからあなたは小鬼を買った。五千万円というのは、あなたの良心の値段です。だから、低い額をつけることができなかった」

「しかし、俺を負かそうとした奴らはみな死んだ」

「当たり前です。あなたが殺したんだから」キョージユは、そう言い切った「そして、それを小鬼のせいにしただけです。あなたの会社を持ち直し、それが大きくなったのも、あなたがもとのあなたに戻ったから、それが良いことだったかどうかまではわかりませんが」

「俺は、浩一に全てを譲るつもりだった」広畑卓はからっぽの水晶を抱きしめる。体が震えている「この水晶さえあれば、幸せになれる、だからこれを浩一に」

「浩一さんは亡くなりましたよ」そう言ったときだけ、キョージユは少し悲しそうに見えた「あなたに望むことは、とくに無いそうです」

絶叫とも咆哮ともとれぬ、長い悲鳴が響いた。それでも広畑卓は水晶を抱きしめ、離さなかった。

その時。

「よし、そこまでだ」

扉が開け放たれ、現れた者がいる。

シュンコウ、さん？

「話は聞かせてもらった」

ギプスで固めた脚を、まるで長靴でも履いているごとくに扱って、ドスドスと歩いて部屋に入り、諸肌脱ぎになった。

え？ 珍しくサラシ巻いてる？

部屋中の人間が、呆気にとられて見まもる中、シュンコウさんは、まっすぐ右手を繰り出した。

右手？

前方の空間がねじまがり、広田卓と水晶を包み込むように回転をはじめた。

シュンコウさんが雄叫びをあげる。

空間は次第に速く、小さく回転し、球形の燃えさかる光になった。

「喝っ」

かけ声もろとも、光は飛び散って、後には水晶だけが残った。

「よし、よし」シュンコウさん上機嫌である「生きてる人間封じたのは、ひさしぶりだなあ、まだまだいけるよな」

「何するんですか、シュンコウさん」叫んだのはキョージユである「ただの水晶に人間なんか封じたら、呪物になってしまっじゃありませんか」

「え？ ええ」シュンコウさんが狼狽えている「この男、封じれば良かったんじゃないの？」

何が、話は聞かせてもらった、だ。全然、聞いてないじゃないか、あいかわらずだなあ。

廊下から猫のように忍び込む影、広畑卓を封じた水晶を抱き抱えると、そのまま窓にダイブし、ガラスを割って逃げだした。

さっき案内してくれたお姉さん。

「アキハさん、追って」キョージユの声に我に返った。

「僕じゃ、わからない、呪物になったアレを追えるのは、アキハさんだけです」

机を蹴って、ガラスの無くなった窓を抜け、水晶を抱いた女を追う。

第七話 小鬼の棲む白塔（10）

庭に出た途端、響くエンジンとタイヤの擦れる音。

しまった、車だ。

「アキハさん、これ」

窓から半身を乗り出したキョージユが、小さく光るものを投げてよこした。

車のキー。

「早く、僕も行きますから」

コブラの運転席に飛び乗ってキーを差し込む。

フォードSOHC V8エンジン、400馬力オーバーの振動が地を轟かす。

「どれぐらい離されても大丈夫ですか」助手席にヒラリと舞い降りたキョージユが問う。

「あんまり強くないけど」ハンドルを回して私道に出る「シユンコウさんのクセが残ってるから、2キロぐらいはいけるかな」

「十分です。付かず離れずでお願いします」

追跡は思ったより楽だった。

信号にかかるとキョージユが片っ端から青にしていくので、信号待ちのストレスもない。

「これってどうやるんですか」キョージユに問う。

「え？ どうやるって言われても」キョージユは言葉をにごす「僕、封じるのは苦手なんですけど、開封系は得意なんです」

どうやらキョージユ本人にも、どうやっているのか詳しいことはわからないらしい。変なヤツ。

一度、他の車をはさまずに後ろにつけたら、泡をくって、はじかれたようにスピードを上げた。

おい、お姉さん、そんなスピード出したら捕まるぞ。

「追っかけますか？」いちおうキョージユに聞いてみる。

「煽るのはやめてください」

ああ、そうですか。

気配のたどれるぎりぎりまで距離を開ける。こちらの車影が見えなくなつて安心したのか、向こうの車はスピードを落とした。

「東京に逆戻りですか。この線だと」

「あるいは、その先かも」

不吉なこと言つなよ、キョージユ。

「ん、ああ、冗談ですよ」私の表情に気づいたらしいキョージユが、あわててとりなす「向こうも車で来てるんだし、その程度の距離です。行っても東京まででしょう」

「キョージユ」

「はい」

さつきから気になっていたことをキョージユに問うてみる。

「あの、広畑、って人が水晶の中に閉じ込められたから、呪物になったっていうのはわかるんですけど、こんな一生懸命追わないといけないものなんですか？ アレ、呪物としてはたいしたことないですよね」

「おっしゃるとおりですが」キョージユが暗い顔で答える「逆に言えば、まったく力の無い空っぽの水晶ですら、広畑氏の思い込みで、こんなことにまでなったわけです。まして、微力とはいえ、本物の呪物になったのなら、もっと面倒を引き起こすとは思いませんか？」

「ああ」

「現にこうして奪い去ろうとまでする輩もいるわけですし」

「あれは、最初から狙ってたんですか。その、ノーム・イン・ザ・クォーツを」

「かも、知れませんが」キョージユは言ったが、あまり自信はなさげだった。「広畑氏が誰かに漏らした話に尾ひれがついたか、あるいは聞きかじりの知識から、広畑氏に目をつけたものか。いずれにしろ、あの水晶に力が無いらしいのは気づいていたようなので、どうにかして力が戻った後に奪おう、そんな感じですかね」

「じゃあ、シヨミちゃんの件は、あのお姉さんの雇主が黒幕？」

「うーん、そんなとこですかねえ」キョージユは渋い顔だ。「シヨミさんのことは、少し業界に詳しい人間なら誰でも知ってることですが、バックがアレすぎて普通は手なんか出しませんからねえ。黒幕と言ってもその程度ですから、まあ、素人に毛がはえたくらいかと」

「素人、って怖いんですね」

「はい、素人さんは、本当に怖いです」

本当に東京まで戻ってきた。

ここ三日で、東京―軽井沢間2往復。しかも車で、勘弁してほしい。

市街に入っただので、距離を詰める。

横にホテル・ニューオータニを見ながら、車を走らせる。ケーキバイキングおいしかったな。

向こうは車をおりたようだ。移動速度が極端に落ちる。

「着いたみたいですよ。ほら、あそこ」

道沿いに車を走らせながら、塀の向こうの建物を顎で指す。

国会議事堂。

白亜の建物は、陽に赤くそまり、その尖塔を空に向かって突き立てていた。

「じゃあ、帰りますか」キョージユが言う。

「尻尾巻いて逃げるの？」

「まさか」キョージユは笑った「あそこは日本中でいちばんシガラミの多いところなんですよ。言わば因果の大寄所、我々がいちばん手を出しやすい所です」

キョージユは路辺に車をよせさせ、私と運転を交替した「ね、小鬼たちの棲家にふさわしいと思いませんか？ 一匹まぎれこんでも、いや、二、三匹ぐらい居なくっても、誰も何とも思いませんよ」

第七話 小鬼の棲む白塔（11）

小高い丘の上、肌寒さをおぼえるのは透んだ空気のせいだが、それでも陽光さえあたれば柔かい温かさを感じることができる。

キョージュは、熱心に穴を掘っている。この場所が、術師会所轄の墓地公園であると私が知ったのは、ずいぶん後になってからだ。

キョージュの額から汗がしたたる。タオルを渡して、水筒のお茶と缶コーヒーのどちらを渡すか、しばし考える。缶コーヒーがぬるかったので、キョージュに缶コーヒーを差し出した。

「どうもありがとう」キョージュはコーヒーのプルトップを開けて言う「もう少しですから」

キョージュの穴掘りを見てみると、タモンさんが来た。

「やあ、アキハさん」私に挨拶したタモンさんは、持参した紙袋をごそごそやって何か取り出した「はい、これ」

ノーム・イン・ザ・クォーツ。

「どうしたんですか、これ？」

私の問いにタモンさんは、ぼんやりと答えた「んー、知人に呼ばれて世間話したら、帰りにくれた」

「あ、そ、そうですか」

どんな世間話だか、気になるところだ。

「あ、ちょうど良かった。一緒に埋めちゃいましょう」

リュックから骨壺を取り出したキョージユは、いま掘ったばかりの穴に納め、隣に例の水晶を並べて、上から土をかけた。

約束なので、その辺の花を見繕って植えてあげた。墓標の代わりに、白い石を何個か積み重ねた。

「浩一さんの隣にお父さん埋めたら、浩一さん迷惑じゃないですかね」

「多少は迷惑かもしれませんが」キョージユが言う「いろいろ誤解もあったみたいだし、まあ、ゆっくり話し合ってもらったほうがいいと思うんですよ」

「キミも少しお養父さんと話し合って欲しいんだけどね」タモンさんが言う「何かというと、ボクのところに来て、愚痴ばかりいうので、迷惑しているんだ」

キョージユは露骨に嫌な顔する「それ、僕のせいじゃ、ありませんよ。僕がいようがいまいが、あの人は愚痴と思い出話ばかりです」

「年寄りというのは、そういうものだよ」タモンさんはしたり顔で言う「それに、キミが相手してくれれば、少なくとも、ボクのところにはこないわけだからね」

そういわけで、よろしく、そう私に言って、タモンさんは去っていった。どう、よろしく、なのかは、さっぱりわからない。

「でもキョージユ」私は少し落ち着かない「お父さんのほう、広畑卓さんですけど、まだ死んではいないんですよね」

生きていますよね、とは、さすがに聞けなかった。

「ええ、そうですけど」キョージユが怪訝そうな顔で問い返した「それが何か？」

「あの、その、」ちよつと、しどろもどろになる「そのまま埋めちゃっていいの？」

「え？ でも」キョージユは、ちよつとだけ困った顔をした「シユンコウさんが封じたものを勝手に僕が開封するのもなんだし、それに封を解いてすぐ自殺なんかされても、それはそれで困るし」

「いや、それはそうなんですけど」なんだかこつちも、よくわからなくなってきた「そういう意味じゃなくて、死んだ人と生きてる人一緒に埋めてるじゃないですか。いいのかなあ、と……」

キョージユは腕組みして考えている。何か釈然としない風で、ぶつぶつと呟いた。

「そんなこと言われても……、死んでようが生きてようが、人間に変わりはないじゃないですか。そこまで気にしないといけないものなんですかねえ」

どうもうまく話がかみ合わないし、私のほうでも、じゃあ、どう

する、と開きなおられたら、さして良い案があるわけでもない。

いくら花を飾っても、下にいろいろ埋まっていると思うと、なんとなく気持ちが悪い。

「え、と、だから、別のところ行きましょう。何か下に埋まっているところで、お弁当とか嫌だし」

「ああ、そういうこと」キョージュの顔が、ぱあっ、と輝いた。「ごめんなさい、気が利かなくて、お弁当はね。あっちの噴水のあるほうがいいですよ。何も埋まってませんから」

キョージュと連れだって丘を降りる。途中一度だけ振り向いてみた。

積み重ねた石が白い塔のように見えた。

おにぎりはおいしかった。卵焼きは少し甘くしすぎたな、と思った。

キョージュはおひたし以外は全部食べた。注意しようかと思ったが、今日ぐらいいいか、と思った。

< 小鬼の棲む白塔 - 了 >

第八話 靈魂の籠る壺（1）

「アキちゃん」

ソンコさんが呼んでいる。

「お仕事よ、お仕事なのよ」

ソンコさんは私の上司であるから、仕事のことで呼ばれるのは当然といえば当然なのだが。

「ね、ね、すごいでしょ。これ、これ、本物の」

はあ、とため息をついて、ソンコさんのデスクに置かれたモノを見つめる。

古い壺だ。素焼きで、何かをかたどった蓋のようなものに乗っているが、あちこち傷んでいて、うっかり触ったら壊れそうだ。

「何が、どう、本物なんですか？」

そんなこと、問うたところで身にはならないとは思っただが、いちおう尋ねてみる。

「ふふふ」ソンコさんはなにやらうれしそうだ「エジプトよ。アキちゃん。エ・ジ・プ・ト。ナイル川を船で遡るディナークルーズ、ね、素敵でしょ」

あらためて机の上の壺を見る。よく見ると、こいつには見覚えがある、とは言っても昔写真で見ただけだが。

「魂の壺、ですか？」

「大当たりい」ソンコさんはワザとらしく両手を広げて見せた「さすが、アキちゃん、飲み込みが早いわ。もう航空券は手配してあるし、着いてすぐのホテルも予約してあるから、もちろん三つ星よ。三つ星。そこで一泊してもらって次の日はもう船」

「お断りします」

「船もねえ、ほとんど貸切みたいなものだから、気分は女王様よ。クレオパトラよ。さあ、アタシにかしずきなさい、てなもんよ」

「行きませんから」

「食事もお酒もよりどりみどりよ。ナイルの岸边を眺めつつ籐のソファに寝そべって、のんびり川を上っていくのかわ」

「行かない、って言ってるでしょ。そんなにナイルの船旅が気に入ってるんなら、ソンコさんが行ってください」

「イヤよ」ソンコさんは真顔で答えた「あそこの料理は口に合わないし、何より埃っぽいうえに日差しがきつすぎてシミできちゃうもの」

「じゃあ、私もイヤです」

「そんなこと言わないの」ソンコさんは私のおでこを人差し指でツ

ンツンした「もう、アキちゃんてば、わがまま言わないの。お仕事だつて言ってるでしょ」

「だから、嫌なんだつてば」とうとう私は声を荒げた「仕事、つてことは、これ、入ってるんですよ。中身」

「あ、あああ、入ってるわよ」ソンコさんは、ふふんと鼻でうそぶいた「だつて、仕事なんだから、入ってるの当たり前でしょ」

何をいまさら、という顔で挑発的な眼差しを私に向けるソンコさん。こいつ、開き直りやがったな。

「キョージユに行かせればいいじゃないですか、キョージユに」

「だめよ、キョージユなんかにはやせたら、この場で中身ごと壺消しちゃうでしょ」

「それで、何の問題があるんですか？」

「ねえ、アキちゃん、ちょっと考えてみてくれる？」ソンコさんは一見しおらしく語りだした「来世を夢見て三千年の長い眠りについたというのに、こんな最果ての異国の地に拐われて朽ち果てるなんて、無念だと思わない？ 可哀想だと思わない？」

この壺の中身は、自ら進んでこんな壺に入ってたわけだし、自業自得だと思うが。だいたい、壺だけならまだしも、欲ばって財宝まで一緒に埋めるから盗掘にあつたりするんじゃないか。

「ね、かわいそうでしょ。壺の中身だつて、きっと故郷に帰りたいわ。そうに違いないわ。だからあんなことが…」

「あんなことつて、どんなことですか？」

「あら、たいしたことじゃないのよ」ソンコさんは、しれつと言う。わざとなのか天然なのか判断がつかない。「この壺の持ち主とか関係者とかが原因不明の病気とか不慮の事故で死んでるだけ、よくあることですよ。こういうのは」

「確かによくあることですけど、なおさら嫌です」

「ねええ、アキちゃん、よく考えて」ソンコさんは、こびつ、とシナをつくった。まあ、男には効くかもしれないが、私には無意味だぞ「もし、キョージユがこの壺、浄化しちゃったら、『私たちのなんとか』みたいなのでアタシたちにもとばっちり来るかもしれないじゃない」

「たち、つてのは何だ？ アタシたち、つてのは？ まるで私が関係者みたいじゃない？」

「だからあ」諭すような口調でソンコさんは言った「関係者なの、アキちゃんは。この壺、術師会が買ったんだから」

「何？」

「そうしないと前の持ち主から障りが移らないでしょ。形式上、アキちゃんのボーナスから特費で引いたから、今の持ち主はアキちゃんなの。ああ、お金は来年のボーナスに特別手当加算付きで戻すから心配しなくていいよ」

「こらあ、そういう問題じゃないだろ。何勝手に他人のボーナスか

ら金抜いてこんな得体のしれないもの買ったよおお」

「だってええ、買う前に言ったら、アキちゃん怒るじゃない」

「あたりまえだあああ」

そのとき、詰所のドアが開いて一人の男性が現れた。

「タカちゃーん」

「シヨウちゃーん」

中年の夫婦は向き合つと、互いの瞳を見つめ、彫像のように抱きあつた。

術師会会頭、タモンさんは、ソンコさんのご主人である。術師界隈ではいろいろ言われている二人らしいが、私に言わせれば、ただのバカップルだ。

たつぷりとお互いのぬくもりを確かめあつたあと、おもむろにタモンさんが私の方を向いた。

「アキハさん、ありがとう」タモンさんは言った「こんな難しい仕事を引き受けてくれて、感謝の言葉ありません」

我に返つた私は、全力で首を左右に振つたが、タモンさんの目には入らないらしい。

「ほんとにありがとう、アキちゃん」

違うぞ。絶対に違う。

「じゃ、アタシたち、これからデートだから、あとはよろしく」

言い残したソンコさんがタモンさんと一緒に消え、同時に詰所のドアが閉じた。

声も出せずにたたずむ私に、壺がぼおつと輝いた。

壺に同情されるようじゃ、おしまいかも、そんなことをぼんやりと考えていた。

第八話 靈魂の籠る壺（1）（後書き）

諸般の事情で半年ほど休んでおりましたが、ぼちぼち再開しようかと。

どの程度のペースでいけるか（そもそも続けられるのか？）微妙なところではありますが、いちおうがんばってみます。

第八話 靈魂の籠る壺（2）

壺は箱に入って、私のとなり、ビジネスクラスのシートに専用の器具で固定されている。

私のもらった航空券はペアチケットで、最初はキョージユと二人かと、ぞつ、としたのだが、片方が壺の分だと知って安心した。

まあ、仕事とは言え、海外旅行だしなあ。海外はタイに格安旅行で一度行っただけだし、飛行機でこんなゆったりした席に座るのなんて初めてだ。カイロにはパリ経由で入るのに、シャルル・ドゴール空港から一步も出られないというのは嫌がらせ以外の何物でもないと思うが、宿泊先がヒルトンだということで許してやることにする。

窓の外を見てみた。

雲海の上に陽の光りがきらきらと反射している。雲がなければ海だろうが、正直飽きるな。まだ離陸直後のほうが面白かった。着陸のころに、また眺めればいいか。

壺は思ったよりおとなしい。いわくつき、みたいなことをソンコさん言っただけ、気のせいじゃないのかなあ。

「何だ、仕事押し付けられてぶすくれている、って聞いてたのに、意外とごきげんじゃん」

口をあんぐりと開けて思わず声を上げそうになった私に向かって、サントは自分の唇に指を当てて見せた。

「さわぐなよ、アキ姉さん。壺が乗っけてあるだけの座席に話しかけたりしてたら、まわりの人にイロイロ心配されるよ」

生霊のサンタは半透明の体で壺の固定されたシートに腰掛けていた。あぐあぐと声も出せずに口だけ動かす私に、サンタは、その通り、といわんばかりに肯きつつ語りかける。

「そうそう、その調子。やればできるじゃん」

いきなり上から目線のサンタに、不本意ながら声をひそめて、短く問うた。

「何しにきたのよ？」

そう、それなんだよねえ、と、サンタは他人ごとみたいに笑いながら話す。「ソニコさんさあ、ロクに説明もしないで、アキ姉さんに壺押し付けて飛行機乗せたでしょ。そんなんでも引き受けるアキ姉さんも、それはそれでどうかと思うけどねえ。まあ、それは置いといて、と。ぶっちゃけた話、向こう着いてからどうしたらいいかわからないでしょ」

うむ、確かにそうだ。壺とサンタは同時に見据えつつ、サンタの話聞く。

この壺をエジプトに持っていくトコまでは聞いているが、その後どうしたらいいのか、まったくわからない。

「アキ姉さん、アラビア語、話せる？」

全力で首を真横に振る。

「古代エジプト語、は…、聞くまでもないとして、英語は？」

「ハウ、マツチと、サイトシーイングと、リコンファーム、マイ、フライト」

「そりゃ、素敵だ…。術師会のほうでガイド用意したんで、現地着いたらガイドの指示に従って」

「ガイドって、通訳？」

「それもコミコミで、目的地までちゃんと案内してくれるから。ま、俺もちよくちよく顔出すから安心していいよ」

サンタ、あんたのドコを見て、私は安心すればいいんだよ。

「じゃあ、そのガイドさんにはサンタが引き合わせてくれるんだね」

「何で？」サンタは、うすぼんやりと霞がかかったような表情で、訳がわからないという顔をしてみせた「そこまで面倒見れないってば、ここまで飛んでくるのだって、けっこう疲れるんだよね。気が向いたときに顔見せてあげるから、それで勘弁してよ」

「だからあ」私は思わず声を荒げてしまった。ななめ前のオジサンが、びくつとしたのであわてて声のトーンを落とす「ガイドってどうやって探すのよ。こっちは顔も知らないのに」

え？ とサンタが間抜けな顔で、まじまじと私を見返した「知ってるだろ、相手の顔は」

知ってるって、何？ 当然、そつたずねようと思った瞬間に、サ
ンタの姿はかき消えた。

サンタはいつだってこうなのだ。

空になった座席で、壺が、るる、と歌った。

サンタも壺も、いけすかない。

第八話 靈魂の籠る壺（3）

カイロ空港についた。

壺の入った箱とスーツケースをガラガラと引きながら通関する。

ちょっとは止められるかと内心ドキドキしていたのだが、パスポートをチラ見した審査官が「ジャパニーズ？」と問うたのに反応して首肯くと、アゴをしゃくって出口の方を指された。

割といいかげんだなあ、と思つて、他のレーンを見ると、いろいろ細かくやりとりしてるみたいだ。

ふーん、日本人ていうのは、意外と信用あるのかな？

ゲートを突っ切つて、きよろきよろあたりを見回しながら歩いていたら、「AKIHASUE Welcome」というボードをかざしたおじさんがいた。

スーツを着こんだ赤ら顔のおじさんは人待ち顔である。パスポートを開いておじさんの目の前に突き出すと、写真と私の顔を交互にせわしなく見つめたおじさんが、得心したように破顔した。何か異国の言葉を早口でまくし立てて、私についてこいと手振りで合図する。

どうやら正解らしい。私はアルカニックスマイルを顔から消さないように極力気をつけて、おじさんの後ろに付き従った。

おじさんは早々に私の手から荷物を取つて、ずんずん先に進んで

いく。空港の玄関を抜けてロータリーのすみに駐めてあるリムジンの後ろにつくと、慣れた手つきでトランクを開けた。おじさんが荷物を積みこみ、私に向かってうやうやしく後部座席のドアを開けた、ちょうどその時である。

聞き覚えのある声が私を呼んだ。

「アキハさん、アキハさん、ヨカッタ、アキハさん、ホンモノ、アエタ、ウレシイ」

「シモン」

本当にびっくりした。何でいるの？ シモン？

シモンは、どこの国のものともわからない言葉でおじさんに語りかける、途中、何度も私の方を指差しながら。しょうがないので、私もへらへら笑いを浮かべながら、適当に肯き続けた。最後におじさんが、やや不審気な顔で、私に問うた。

「イズ ヒー ユア フレンド？」

イエス、と答えて、大きく首を縦に降ると、ようやくおじさんは納得したようで、リムジンの運転席に乗り込んだ。

「ヨカッタ、ヨカッタ、アキハさん、ミツカッタ、トテモヨカッタ。シモン、シアワセ」

リムジンのリアシートに私と一緒に腰掛けたシモンは安堵のため息をついた。あのね、シモン、そんな風にされても困るんだけどさ。だから…

「何があつたの？ シモン？」

いろいろ聞きたいことはあるが、要約したらこうなった。

「シュンコさん、タイヘン、アクマだよ、シュンコさん、アクマトリツカレタ」

何いいい？ シュンコウさん？

シモンだけでも、びっくりなのに、シュンコウさん、て何だよ？

「落ち着いて、シモン。シュンコウさんがどうしたの？ アクマ、ってどういうこと？」

まあ、あの糞オンナがアクマだっていうのは確かだが、それにしてもどういうことなんだ？

いちおうシモンとの会話は片言ではあるが日本語である。運転手のおじさんに日本語がわかるとは思えないし、少し騒いだぐらいなら、たいしたことはないだろう。

「シュンコさん、アクマニナッタ」シモンは打ちひしがれている「ハシノウエノボツテオリテコナイ」

シモン…。

気が動転しているのはわかるんだけど、できればもう少しわかりやすく説明してくれないかなあ。

「や、災難だったな」

「サンタ！」

思わず声を上げてしまったが、サンタがシモンと私の間に降ってわいた。

「サンタさん、コンニチハ」サンタの突然の出現にも、シモンは驚きもしない「サイナンは、シュンコウさん」

「そのとおりだよ、シモン」なぜかサンタはシモンに優しい「あれは動き回る災難だからな。それでね、アキ姉さん」

急にサンタは私に話をふる。

「ホテルつく前に、シモンに言つて、どこかで革袋買ってくれる？もしあつたら、ひょうたんのほうがいいかなあ。実は何でもいいんだ。遠目に酒が入って見えるようなものならなんでもいい」

「何よ、それ？」

「だから、何でもいいんだよ。それっぽく見えれば。シモン、アキ姉さんをよろしくな」

「ヒキウケマシタ」

「何がよろしくなんだ、あ、こら待て、サンタ」

サンタは言いたいことだけ言つと、現れたときと同じように忽然と消えた。サンタはいつだってこうだ。

正直、なんだかよくわからなかったが、シモンからおじさんに通訳してもらって、適当な雑貨屋の前で降ろしてもらった。サンタの説明で、シモンはだいたいの見当がついたらしく、あれこれ品定めしていたが、豚の子供が入るのじゃないかと思うほどに大きな、吸い口付き革袋を購入した。店の人にたのんで水を入れてもらっている。

再びリムジンに乗り込んで、しばらく市街を流してラムセス・ヒルトンの玄関前についたとき、車から降りた私の手をシモンが引いた。

「チガウ、アキハさん、コッチ、コッチ」

「え、でも…、ホテルは…」

カイロ・ラムセス・ヒルトン。エジプト中でも屈指の高級ホテルと賞賛される理由は、近代的な高層建築としての優美さもさることながら、ナイル川の辺りに屹立するその立地の良さも見逃せない。

世界三大大河を冠するナイル、その河口にかかる高架橋に、今日は何故か一群の人ばかりがあった。

橋の欄干に儲けられた照明によじ登って奇声を発する者がいたのである。

「こらあ、酒持ってこんかあ、酒だあ」

鈴懸をもろ肌脱いで乳ほり出した女が欄干の照明灯の上で大声を上げている。

珍しくパンツはいてるのが不幸中の幸いだ。

一瞬で、すべてを察した私は、シモンに向かって右手を差し出した。

「シモン」

「ハイ、アキハさん」

シモンはさつき買ったばかりの水入り革袋を私に差し出した。それを高々と掲げて頭上の脅威に語りかける。

「シュンコウさん、持ってきましたよー」

おお、と声があがり、照明灯のそれはすると猿のように私の目の前に降りてきた。

「アキ、いい子だなあ。お前は」

そう言って微笑むシュンコウさんは、革袋を渡すと、ひしと抱きとめて頬ずりした。

シュンコウさんは欄干に腰掛けたままだったので、両の手で思いきり胸を押した。

彼女の体は、かき消すように私の視界の外に出て、数秒後、はるか下の方で水のはねる音がした。

そして、

一連の顛末を見守っていた群集の中から、人知れず喝采が沸き起こったのである。

第八話 靈魂の籠る壺（4）

「オテンキイデスネ。 ヨカッタネ。 アキ八さん」

「そうだね。 シモン」

シモンから小玉スイカぐらいありそうなフルーツパンチ入りのグラスを受け取る。大きな麦わら帽をかぶっていてもエジプトの日差しはそこそこきつい。籐の椅子に寝そべってドリンクに口をつけている横で。女性が二人、大きなうちわで風を送ってくれている。

ナイル河を一船借りきつてクルーズ、というソンコさんの言葉にとりあえず嘘はなかった。

たゆとうナイルの水は船底を静かに叩き、川岸の風景は写真のように動きを止めつつも、乾いた奥行きでもって悠久の時間を示している。

そこそこ大きめのクルーズ船なのだが、乗客は本当に私たちだけで、文字通りつきっきりのサービスを受けている。シモンにも私にも常に二、三人がついていてあれこれ世話を焼いてくれる。そうは言っても自分でその人たちにオーダーを出すことはしない。シモンがいろいろ気を利かせて、先回りして付き人に指示してくれるのである。

女王様、とソンコさんは言っていたが、まあ、そんな感じではある。

驚いたことに、「壺」にもちゃんと人が付いている。付き人、と言っても何をするわけではなく、傍に侍しているだけだが、壺を持ち歩く必要がなくなったのは有難い。壺の方も何か凜として、台座の上に鎮座している。

だが、しかし。

この船が完全貸切になった理由は、おそらく、本部が私や「壺」を気遣ってくれたからではない。

シュンコウさんは、甲板の中央で酒樽を抱きしめ、坐したまま静止している。

ときおり思い出したように木製のコップを樽に沈めてビールをくみ取り、そのまま口につけると逆さにあおって咽の中に流し込んでいる。

サービススタッフがたまに声をかけると、にへら、と薄気味悪い笑いを浮かべて、黙ってビールを飲み続ける。

こんなモノを他の一般客のいる船には乗せられないだろう。

それにしても、

人として、とか、その他もろもろ、いろんなものが終わってるな、この女。

シュンコウさんがこの有様なので、大筋はシモンとサンタに聞いた。とは言っても、サンタはいつも通りだし、シモンはシモンで難しい話には日本語の語彙が不足しているらしく、なかなか話がわ

かりづらい。

機上でサンタがガイドと言っていたのは、シュンコウさんのことらしい。「あとは、ばあさんに聞いて」と言い残してそれきりサンタが出てこないの、たぶんそういうことだろう。何でシモンが来ているのかよくわからないが、通訳ということかもしれない。実際シモンは、英語以外、としか私にわからない言葉でスタッフたちや現地の人と話している。

で、まあ。

問題というのは、あの甲板の上でビール樽にへばりついている物体に、話を聞いた方がいいかどうか、ということである。

乗船はランチの前だったが、エジプトの熱い太陽が地平線に姿を消して、辺りが闇のしじまに包まれるまで、私たちは甲板の上のそれをそのままにしていた。赤道下の直射日光を一日中浴びることはそれには特に苦痛ではないらしかった。酔いで神経が麻痺しているのかもしれない。デイナーは何故かイタリアンで、パスタと小羊に舌鼓を打ったが、その間もそれは樽を抱いていた。夜半に何か大声で吠えたので、スタッフたちが空の樽を中身の入ったものに換えた。おとなしくなった。

朝、カリッと香ばしく焼けたトーストをかじりながら、甲板の上を見やると、それはまだ樽にしがみついていた。

放っておこう、心の底からそう思った。それ以外の対処の仕方をまったく思いつかない。

シュンコウさんは素面の時はあまり役に立たない。酒を飲んでいないときは、どうやって酒を飲もうかとそればかり考えているからだ。じゃあ、飲んでいるときはまともなのかというと、これはテンでお話にならない。控えめに言っても酒乱である。ありていに言ったらカタカナ四文字である。

そんなシュンコウさんにも比較的話の通じる状態があつて、それは二日酔いを迎え酒で紛らわしている時だ。毒で毒を中和しているようなものだが、頭骸骨を真つ二つに割つて中身を出したい、という衝動をかるうじて酒の酔いで抑え込んでいるときだけは、襲い来る苦痛と倦怠感から逃れるために、人の話でも聞いてみようか、という気分になるらしい。

まったく理解できないが、そうなのだそうだ。

当然のことながら、そんなときのシュンコウさんはすこぶる機嫌が悪い。

「だからあ、ナイルを遡るんだよ。始源まで」

シュンコウさんは、片手のコップに半分入ったビールを煽るが、勢いが無い。

「だから、始源ってどこですか、って聞いてるんです」

こちらでも声を張り上げる、こんな女に乳の大きさ以外の要素で負ける云われはない。

「それがわかってたら、こんな船乗ってねえ」

「このやろつ。」

「なら、おりなさい」私はシュンコウさんの襟首をつかんで船縁まで引きずっていく「おりなさい、いますぐ、ほら、いま、ここでお
りろお」

「わあ、まて、こら、コラ、短気起すな、落ち着け、オチツケ、つ
てば、アキ」

オマエが落ち着け、このクソ女。

シモンが声も出せずにオロオロうろたえている。サービススタッ
フたちも心配そうな顔つきで遠巻きに私たちを見つめている。

シュンコウさんが土下座して謝ったので、とりあえず納めた。

「始源って言ってもたくさんあるでしょう」土下座するシュンコウ
さんの背中に問うた。顔が見えないぶん、むかつき度は減る「河口
は一つだけど、支流は遡るほど二股になって増えていくんだから」

「だから、そのどれかだよ」顔をあげたシュンコウさんが仏頂面で
言った「こつちだって知らないんだ。壺に聞くしかない」

壺に聞く？

振り向いて壺を見ると、ほのかにぼおつと輝いた。

「そう、そういうこと」シュンコウさんが壺を指さす「目的地知っ
てんのはアイツだけなんだから、アイツの言う通りに進むしかない。

いまのところは順調らしい」

「じゃあ、何でシュンコウさんがガイドなんですか？ 目的地も知らないのに」

「ガイドじゃない、護衛だ」シュンコウさんは残りのビールを飲みほした「ソンコから聞いてなかったのか？ アイツのまわりでいろいろ起きてるって」

「え？ 祟りのこと」私は少し面食らった「でも、この壺はそんなに悪い子じゃないですよ。祟りとか思いすぎじゃないんですか？」

「壺から守るんじゃない、壺を守るんだ。厄介なこと起してるのは壺じゃない。壺を始末したい連中だ」

「なにそれ？ じゃあ、何人が死んでるって言うのは…」

「おおかた、巻き添え食って殺されたんだろうなあ」

ソンコさん、どうして、毎回毎回、ああもわかりにくい説明するの。

それにしても…

説明終わり、とばかりに甲板に大の字にひっくり返ったシュンコウさんを見つめる。ガイドはともかく、護衛って、こんなんでシュンコウさん、何かの役にたつのかなあ。

それ以上シュンコウさんを見ていたくなかったので、視線を壺のほうに向けた。見られたのに気づいたのか、壺が、ぽっ、と小さく

輝
いた。

第八話 靈魂の籠る壺（5）

不吉なものが甲板の樽から離れないので気分もめいる。

日中は日差しもきついので、個室に戻ってくつろぐことにした。昼食をとって部屋に帰ると、何故かサービスタッフもぞろぞろ後をついてくる。

どうやらこの人たち、寝るとき以外は、ずっと、ついてくるものらしい。船旅に浮かれていたのではほとんどの時間を甲板で費やしていたのでいままで気がつかなかった。

まあ、そんなもんなんだろう、と思っていたら、別の二人にうやうやしく担がれて壺も来た。

部屋は広いので、壺や、お付きの人の五、六人いたところで、どうということはないのだが、

これは、いったいどういうことだろう？

にこにこしながら風を送ってくれる初老のおばちゃんに聞いても、たぶんだめだろう。そもそも私は言葉もわからないし。しかたがないのでシモンを呼んで問うてみた。

「カンヌシさん、デスカラネー、マモツテマス」

これがまた、よくわからない。シモンにはいちおう状況はわかっているらしいのだが、日本語では説明しづらいらしいのだ。

「ア、カンヌシさん、チガウヨ、ミコさんデス。オンナノヒトデシタ」

たしかに女の人ですけど。

すげー、嫌だったけど。ラチがあかないので、甲板に戻って樽にへばりついてるものに問うた。

「そりゃ、しょうがないだろう。むこうは仕事なんだから」

こっちを見もせずに、こう答えやがったので、むっとした。それぐらいはわかってるよ。

「そうかもしれないけど、ずいぶん、サービスいいんだなあ、と思っただけです」

「別にサービスでやってるわけじゃないだろ。あの人たちの本来の仕事なんだ。生きてる間に、まさか、本当に仕事がまわってくるとは思ってたかっただろうから、張りきってるんだろうさ」

「生きてる間？ なにそれ？」

「いま、この船に乗ってるの、全員、アマルナの司祭の末裔なんだよ」

アマルナ？ なんじゃそりゃ？

「ツタンカーメンは知ってるな？」 シュンコウさんは面倒くさそうに問うた。

ごくごくとうなずく。私の首肯を確認し、シュンコウさんは続けた。

「そいつの親父のアメンホテプ4世がアトン神という神様を拝みだしたのさ。都をアマルナつてとこに移して唯一絶対神としてアトン神を崇拜させたので、アマルナ信仰って言われてる」

「いくなーとん？」

「何だ知ってるんじゃないか。、そうだよ、アメンホテプ4世は『アトンに愛されし子』という名のイクナートンに改名したんだ。で、この船に乗ってるのはそのアマルナにいたアトンの司祭の末裔」

「何でそんな人たちが乗ってるの？ あ、もしかして、あの壺、中身がその、アトン神とか？」

「違う。あの壺は、アメント」

「アメント？」

また、よくわからないのが出てきたぞ。

「その当時、エジプトでもっとも崇拜されてたのがアメン神、その女性形がアメント神」

「アメン、と、アメント？」

「そ、アメンとアメント…、あつ」

それまで焦点も合わずに虚空を泳いでいたシュンコウさんの瞳が大きく見開かれ、川面を凝視した。

さっきまでのぼろくずみたいな雰囲気とはうってかわって、おもむろに立ち上がると船縁に駆け寄る。何事かと、私もシュンコウさんの後を追った。

「わあ、ワニだ」

思わず叫んでしまったが、いつのまにか、船の両舷を埋め尽くしてワニの大群が船と平行に泳いでいる。岸まではゆうに数百メートルはあると思うのだが、ワニの背がびつしりと並び、水面がほとんど見えない。さすがエジプトだな。ナイルワニという名は聞いていたけど、こんなにたくさんいるものなんだ。

しばらくワニを凝視していたシュンコウさんだったが、いつのまにか傍らに侍っていた中年のおばちゃんに何語かで話しはじめた。おばちゃんも真剣な表情で私の知らない言葉を返している。ふと、我に返ってあたりを見回すと、船内スタッフのほとんどが甲板に出ていて私とシュンコウさんのまわりを囲んでいた。壺も来ていた。

やがてシュンコウさんは、たぶんアラビア語で、甲板上の全員に呼びかけ、それを聞いた皆は、ようやく緊張の面持ちを解いた。

「おい、アキ」シュンコウさんに呼ばれたので側による「あのワニ、ここらへんでいちばんでかいの。あれ、見えるか」

まあ、見えますけど、と言って水面を見たら、ワニと目が合ってしまった。なんとなく気まずくて、そのままにらめっこ状態を続けていたら、むこうが、ぷい、と視線を逸らして行ってしまった。そ

の大物ワニが踵を返すと他のワニも従った。

おお、と甲板上にどよめきが漏れ、その後、どういう事情か、皆が私にむかってひれ伏した。

「あのお」ものすごい気まずさの中、私はシュンコウさんにむかって問うた「いったい、どうなってるんですか？ これって？」

「精霊はカーを触媒として現出する。こちらが最大級のカーを擁している以上、むこうからは下手な手出しはできないということだが、それにしても……」

去りゆくワニたちの背をしばらく見守っていたシュンコウさんだったが、ふと視線を戻すと、私の顔をまじまじと見据えた。

「アキ、お前って、本当に、オバケ以外には怖いものないんだなあ」

第八話 靈魂の籠る壺（6）

川のぼりの旅であるから、船の横幅より川幅が狭くなれば必然的にクルーズはおしまいである。

クルーズがおしまいということは、上げ膳据え膳、昼寝の時の団扇からそよ風も無し、ということである。余計な酔っ払いがついてきたことを除けば、総じて快適な船旅だっただけにやや残念ではある。

ま、どうせ本部の用意した話だし、こんなもんだろうとは思っていた。後はあの酔っ払いと壺をかついでナイルの始源探しということだ。

私たちが船を降りる時は、少しばかり大変だった。いろいろ事情があるらしい『壺』との別れをスタッフたちが惜しむのはわからないでもないのだが、どういうわけか、私にもすがってくるスタッフが多かったのには驚いた。遠巻きに拝んでいるらしい人もいて、どうにも座りが悪い。シモンにどういふことなのか問うてみたのだが、なんとも要領を得ない話しぶりで、なんだかやりとりをしてみても諦めた。私にはアラビア語なんかわからないから直接話するわけにはいかないし。シュンコウさんには、ぜったい聞きたくなかったし。

ほろ付きのジープの後部座席に壺とシュンコウさんを置いて、助手席に座る。運転はシモンをお願いした。

「運転してやるって言うてるのに」後ろでシュンコウさんがぶつくさ言っている。

「シュンコウさんが運転したら、飲酒運転になるじゃないですか」

「ほんとと、世間知らずだよなあ、アキは」シュンコウさんが壺をなでながら声を張り上げる「エジプトには飲酒運転をとりしめる法律なんかないぞ」

そのかわり、運転しなくても、お酒飲んだだけで鞭打ちだけどねどこから見てもあからさまに異教徒だから大目に見てもらってるだけなのに、調子に乗りやがって。本当に、イスラムの教義とか関係なしでも、こいつは縛り首にしてほしい。

シュンコウさんはヒマそうだ。壺に何かを語りつつ、ときどき思いついたようにこっちに話をふる。酔っ払いが壺に語りかけていたするのは、ごくごく普通のことなので無視すればいいのだが、こっちまで巻き込まれるのは非常に迷惑だ。

「アメントも故郷に帰ってきてうれしいよなあ、なあ、アキもそう思うだろう？」

壺の気持なんかわかりませんが。

「もうすぐアメンにも会えるしなあ」

アメンというのを聞いた壺がほんのり輝きだし、それは長く淡い青色の光を保って続いた。やっぱり、うれしいんだろうか？

それにしても、

船のクルーやサービススタッフがアマルナの末裔でアトン崇拜だ

とすると、どうしてアメン神や、アメント神を崇めるのだろう？

アメンホテプ4世、イクナートンはアメン神を崇拜するのを禁じて、石碑のアメン神の名前まで削り落とさせたハズだが…

「なぜ、アメントをアマルナの神官が奉るのか不思議か？」

こちらの心を見透かしたようにシュンコウさんが問うてきたので、無視した。

「なあ、アキ」シュンコウさんはしつこい「そもそも、アトン神で、いったい何だろうな？」

「太陽神かなにかだという話ですけど？」面倒くさいので適当に流す「イクナートンがアメン神の代わりに、最上神にしたんでしょ？」

「問題はそこさ」シュンコウさんは壺をかき抱いて話し続ける「いままで信仰されていた神様の代わりに、急になんだかよくわからない神様をどこからかひっぱてきて、「今日からこの神を崇めよ」なんて言ったところで、どうにかなるもんだと思うか？」

「どうにもならなかったから、揉めたんじゃないんですか？ イクナートンの死後、またアメン信仰に戻っちゃったんでしょ」

「アメンに戻ったのは、アトン神がいなくなったからだよ」

「何で、神様が急に出てきたり、急にいなくなったりするんですか」

「アトンってのは、いろいろ変ったところがある神様なんだが、特徴のひとつに両性具有ってのがある。まあ、性別のない神様っての

は別に珍しくはないんだが、エジプトでは稀だな」

「あの、話が、あっちゃこっちゃ行っちゃってますが…」

「まあ、聞け、アキ、それでな…」

いいかげんにしてくれないかなあ。シュンコウさんの腕の中の壺はほのかに光を明滅させている。壺も迷惑そうである。

「普通、神様をすぐかえるときはだな。今いる神様よりグレードアップしたやつをもってくるんだよ。そうしないとみんな納得しないからな」

「知りませんよ、そんなこと。神様すぐかえたりしたことありませんし」

「だからあ、黙って聞け、ってば」

はいはい、もう知らん、勝手にしろ。

こつちが、無視してだんまりを決め込むと、シュンコウさんはかさにかかって話し続ける。

「たとえば、だ。太陽神にたいして、月の神様を持ってきたても、見劣りするわな。なんて言っても、太陽と月じゃ、太陽のほうが偉そうだからな。じゃあ、どうするか。太陽と月を合体させて太陽月神を誕生させるわけだ。それで、こつちのほうが太陽神よりエライ、今日からこつちが本当の神様だ、ってやるんだ」

何を言ってるんだ？ この女？ とうとうアルコールで脳細胞が

壊死し始めたか。

「でも、神様をくつつけるなんてのは、なまなかなことじゃできないんだ。アメンホテプ4世てのはかなりの能力者だったんだろうな。まがりなりにも当時最高神とされていたアメンと…」

なんだから、どうでもいいことをだらだらしゃべっている。本当に酔っ払いというのは、もう…。

「で、なあ、アメンは男神だろ…、で、アメント…、はあ…、女…」

なんか、おとなしくなったなあ、と思って、後ろをのぞくと、シユンコウさんは壺を抱いたまま寝息をたてていた。

やれやれ。

「シユンコウさん、寝ちゃった」運転席のシモンに声をかけると、シモンは笑いながらピースサインを出して、ハンドルを大きく右に切った。

「シモン、って目的地知ってるの？」シモンの迷いのないハンドルさばきに、少々不思議な気持ちがして問うてみた。

「シリマセン」

「たいへん、じゃあ、シユンコウさん起こさなきゃ」

「タイヘンナイヨ。ダイジョウブダヨ」シートから身を乗り出して手を伸ばし、シユンコウさんを目覚めさせようとする私を、シモンが止めた「ミチハ、ツボ、オシエテクレル、ヨイツボダカラ」

「壺が？」

「ソウデス」シモンは前方を見据えたまま、大きくうなずいた「ヨイツボ、オシエテクレル。シュンコウさん、ヒミツハナスノヨクナイ。ネムラセマシタ。ダイジョウブデス」

「眠らせたって…、シモンが？」

「シモン、ソナコトシマセン」シモンは首を振りながら私に向かって微笑んだ「ツボハ、ヨイツボダカラ、ミチオシエル、シュンコウさんネムル、ダイジョウブダヨ」

壺は我が意を得たりと輝きを増す。

まあ、確かにそうかな。

眠っているシュンコウさんは、起きているシュンコウさんより何倍も素敵だ。

第八話 靈魂の籠る壺（7）

エジプトだからピラミッドのかなあ、と思っていたら、着いたところは洞窟だった。

「ここ、入るんですか？」

シュンコウさんが黙って首をたてに振る。さっきまで眠らされていたのを、急に壺に叩き起こされたらしく、あからさまに不機嫌だ。

もつとも、こんな大女を寝たまま担いで洞窟に入るなんて正気の沙汰とも思えないので、壺の処置は適切だと思う。

それにしても、エジプトまで来て洞窟とは。

「もう、エジプトじゃねえよ」シュンコウさんがはきすてるように言った「だいぶ前からスーダンに入ってた」

そのへんは、正直、もうどうでもいい感じだ。

シュンコウさんを先頭に、次が私で、後ろからシモンが壺をかついでついてくる。

洞窟の中は、灯火もないのにほんのりと明るい。たぶんシュンコウさんがなにかやってるんだと思うけど、くわしいことはよくわからない。まあ、あんな人でも何かの役に立つことはあるんだな。

洞窟、と言ったが、自然にできたものではない。床も壁も天井もきつちりと石が敷き詰められている。壁には絵が描かれていた。手

と髪が長くて目の大きな、テレビなんかでよく見るエジプト絵画だ。立ち止まって見ている余裕はないので、視界に入る範囲内で鑑賞する。

エジプト絵画というのは平面的で奥行きがないわけだが、とくに描かれた目に生気がなくて不気味である。洞窟の中だから当たり前なのだが、前と後ろ以外からの圧迫感で息がつまりそうだ。

「アキ、あんまり壁の絵は見ない方がいいぞ」

まあ、もつともな話である。シュンコウさんの背を見ながら、ゆらゆら、と進む。

ゆらゆら？

ゆれているのは私の方ではない。前に行く墨染の鈴懸の背中が、ゆらゆら、とゆれている。

「シュンコウさん？」

声に反応はなかった。

私の前に行く背中が壁面からの淡い光に照らされつつ、ゆらめきながら前に行く。

これは、

やられたかな。

足音をひそめ立ち止まってみた。こういつときは進んでも止まっ

てもあまり良いことはないわけだが、むこうが進んでいく以上、いちおう逆らってみないと状況は変わらない。

背中はいかわらず前方でゆらゆらゆれている。後ろから来ているはずのシモンが私にぶつかってくることもない。

一本道であるにもかかわらず、である。

大きく息を吐き、吸気をしばって息吹を響かせ丹田にまわす。両手の力を抜いて、下に垂らした。

いちおうの迎撃体制が整ったところで、耳をこらしてあたりをうかがう。目立った物音は感じ取れない。

さて、と、

当面の問題は正面でゆれている、あの背中をどうするかである。

もし、あれがシュンコウさんなら、それだけでも蹴飛ばす理由として十分すぎるが、おそらく、そうではない。

とすれば、誘うようにゆれる背に蹴りかかるのは剣呑である。

かたり、と小さな音が右のほうで鳴った。

顔を正面に向けたまま、散眼で右手を追うと、ぼんやりと白く光るものがある。

壁、はいつのまにか消えていた。左右ともに、淡いしじまの中に、浮かびあがる、白い…。

囲まれていた。そのこと自体はさして驚きではない、が、いま私を取り囲んでじわじわと包囲をせばめるその一群は…。

「いやああああああ」

自分の絶叫に我に返った。せまる白い影の一群は、全身に包帯をまきつけていたのである。

「いやっ、いやっ、いやあっ、こないでっ、くるなあ」

うつかりしてた、エジプトってミイラの本場じゃないか。めっちゃくちやに腕を振り回して応戦するも、周りを囲まれて逃げ場がない。

くそっ、くそっ、ソンコめ、ミイラのこと思い出したら、絶対、エジプトなんか来なかったのに。ヒルトンとかディナークルーズとかおいしい話ばかりしやがって…。

振り回した手が、迫ってくるミイラに当たりそうになって、思わず引つ込めた。一瞬ひるんだかに見えたミイラだが、また何事もなかったかのように迫ってくる。

「…あ、は、あはは、は」

笑いたくもないのに笑いがこみ上げてきて、避けようとして、下がるとそっちにもミイラ。

「う、うえ、へ…」

思わず体ねじったら、腰のあたりでへんな鈍い音がした。

…何やってんだよ、アキ姉さん…

耳元で聞き覚えのある声が言った「そいつら人間だよ。包帯巻いてるだけ」

気がついたら、眼前の包帯を巻いた顔の眼窩に一本抜き手を差し込んでいた。ぬるっ、とした感触があつて、なあんだ、思ったと同時に手首をひねって眼球をえぐり出す。

耳障りな悲鳴を発した二セミイラ男は顔を抑えて屈み込み、いい位置に倒れこんできたので、思い切り膝をみぞおちに叩き込んだ。

正面のミイラが、すっ飛んで視界から消えたのを確認し、そのまま膝を伸ばして旋風脚を見舞った。一回転したところで三人のミイラの顔を爪先がかすめ、包帯もろとも顔の皮膚がぱっくりと空いて血飛沫があがる。

血を流すのはそこまでで、後は飛びついて首をへし折った。返り血が服に付くのが嫌だったから。

「あゝあ、おばけじゃない、ってわかった途端に容赦ないなあ」

数十体のミイラが、皆、床に寝転んで動かなくなったところ、ようやくサンタが姿を現し、ばやいた。

「だって、怖かったんだもん」私は大声で叫んだ「だって、ほんとに、ほんとに、怖かったんだからあ」

危機？が去って、ようやく人心地ついたせいか、もくもくと涙が

出てきた。自分でもびつくりだ。

「まったく、何やってんだよ、アキい」ぼりぼり頭をかきながらシ
ュンコウさんが出てきた「こんな単純な術に引っかかるなんて」

「だって…」

「アキハさん、ワルクナイヨ、ワルイノコノヒトたち。コワイコワイ、
ヨクナイ」シモンは慰めてくれたけど、さすがにやりすぎたかな、
とも思う。

「そうそ、悪いのはアキ姉さんじゃないよ」めずらしくサントが
かばってくれた「だいたい、術に引っかったのはアキ姉さんって
言うより、バアサンのほうだろ」

…んだとお、シュンコウさんはサントを睨んだが、ぷいと顔をそ
らした。ここで引きさがるところを見ると、心あたりはあるらしい。

「イスラエルでラビのジジいどもとガタガタやりあってから調子悪
いんだ」

「シュンコさん、オツカレサマデス」

「シモン、お前はいいよなー、バチカンホームグラウンドなんだ
から」

「メンドクサカッタデス」

「それだって、まだましなほうだろ、まあ、こっちもキョージユに
比べればマシだけど」

「キョージュ？」

私の言葉にシュンコウさんとシモンが顔を見合わせ、しまった、という顔つきをした。

「んー、まあ、キョージュはねえ」無言の二人をサントが引き継いだ「イスラームはさ、まあ、いろんな事情でひとくりになれやすいけど、そんなもんでもないからねえ。個別に当たってたらキリがないし、かと言って元締めがあるってわけでもないから、やりにくいことはやりにくい」

「それでも、こっちは、いちおうは交渉してきたんだ。キョージュのは、あれは、どう見たって、脅迫だろ」

「ま、そういう見方もあるけどね。それぐらいじゃないと、話が進まないだろ」

「ねえねえ」どうにも話が飲み込めないので間に割って問うてみた「キョージュ、いま、何やってんの？」

シュンコウさん、シモン、サントは同時に私を見つめ、「イロイロと」と異口同音に応じた。

「じゃあ、行くぞ」シュンコウさんが踵を返して歩き出す。

「ちょっと待って、シュンコウさん」私はその場で叫んだ「この先、本物のミイラが出てくるようなら、もう私、行きませんから」

「そんなモン出やしないよ」シュンコウさんは振り向きもせず答

えた「ここは死者の道だ。生者が死者の国へと向かう一方通行で、だから死者がこの道を通ってやってくるなんてことは、ありやあしないのさ」

第八話 靈魂の籠る壺（8）

死者の道、を歩いて出た先は、一面の草原だった。

腰の高さまでに青々と茂る、名も知れぬ草が地平線まで平原を満たし、たおやかに風にそよいでいる。

薄暮と見まごうばかりの薄い日差しの中、風の道に沿って草の穂先がうねり、そのうねりは単純に草の海を想像させる。

ここ、どこ？

ぐるりと見まわすと、遠くに一本、大きく幅広に枝を張った高木が見えた。

「そっちに行くのはかまわんけどな」ふらふらと引きよせられるように、木に向かって歩き出した私に、シュンコウさんが釘を刺す「いくら歩いてもあの木にはたどりつけないぞ」

「たどりつけない、って、どうして？」

「天国だから」

いつのまに、シュンコウさんは手に持った剣であたりの草を薙ぎ、丸く空地をつくった。天叢雲剣の本来の使い方ではあるけれど、どうやって持ち込んだんだ？ こんなもの？

シモンが円空地の中心に壺を供える。

壺はもう光ることをやめていた。しかし、その気はますます強く、秘めやかな内からの高ぶりを隠そうともしない。

「どうなるんですか？」

問うてもせんないこととは知りつつも、問うてみた。

「どうっていったって、アメンが来るまでここを維持するしかないさ。アメントだけでどうするわけにもいかないし」

「アメン？」

シュンコウさんは胡坐になり、壺の前に陣取った。シモン、サンタがその脇に坐す。サンタはともかく、シモン、よく胡坐なんかできるなあ。変なイタリア人、それとも生まれがインドなら大丈夫なのかな。

「何かするんですか？」

壺の前に並んだ三人に問うてみた。

「んー、まあな」シュンコウさんがあくびまじりに答える「一時的にむりやり作ってる場だからなあ。こっちの面子からいってまず心配はないけど、むこうにしたら、たとえ可能性がほぼゼロでも、そのまま圧力けて潰しちまうくらいしか手がないからなあ」

「潰す？」

「うん、この空間ごとな」

「むこうつて？」

「ほれ、ワニけしかけてきたり、ミイラの恰好で襲ってきたり、いただろ？」

ああ、いたな、そういえば。

「誰なんですか？」

さあなあ、シュンコウさんはめんどくさそうに膝を立てて太もものあたりを掻きだした「まあ、そんなことはどうでもいいじゃねえか、アキ。そんなおっかない顔してないで、まあ、座れよ」

どうしたもんかな、とも思ったが、誘われるままに壺の前に坐した。

「そうそう、アキ姉さんはその位置がいいよ」

サンタが言う。いったい何がいいっていうんだ？

ごう、と風が鳴り、つむじが舞った。

少し肩をそびやかした私に、シュンコウさんがニヤツと犬歯をむき出して笑った。

「怖いか、アキ」

その問いには答えず、逆に問い返す。

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫、って言ったら信じるか？」

返事のかわりに、思いっきり首を左右に振った。

シュンコウさんは声をあげて笑う。なんかバカにされてるみたいで悔しい。

「まあ、どのみち、そんな時間はかからないよ」

サンタがのんきな顔で言うので、思わず喧嘩腰で問い返した。

「何で、そんなことわかるのよ？」

だって、ほら、とサンタが指さしたのはさっきの大木だ。

よく目を凝らすとそこだけ草のなびき方が違う。

いや、大木に重なっているのでよく見えなかったのだが、何か来る。

最初、黒い点だったそれは、しだいにマッチ棒のように見えだして、そして手をふってこちらに合図を送っている。

片手をはげしく振りながら駆け寄ってくるスーツ姿の男は、ときおり振る手を止めて眼鏡を抑えている。もう片方の手は何かを抱えているので使えないのだ。

「あっち側から来るとか、どんだけ常識ないんだアイツは」シュン

コウさんがぼやいた。

男は満面に笑みを浮かべて走り寄ってくる、うすうす見当はついていたが、その見なれた顔を確認して、私は絶望した。

「すみませ〜ん、遅くなっちゃってえ」

キョージユは息をはずませながら、私の傍らに立った。私たちの連れてきた壺とよく似た壺を小脇に抱えている。

私は泣きだしそうになった。こんな状況でコイツが来た以上、もう、いろんな意味で、ダメだ。

第八話 靈魂の籠る壺（9）

キョージユは私の傍らに持参した壺を置いた。

「何をする気なんですか？」

「…は？」

「何する気なのか、って聞いてんのっ」

キョージユは一步あとずさって、恐る恐るたずねてきた。

「…あの、…そのお、アキ八さん、…何も聞いてないんです、か？」

聞いてません、と睨みつけた。

キョージユは、シュンコウさん、サンタ、シモンの順に視線をおよがす。

皆、そっぽを向いた。

誰もキョージユに助け船を出そうとはしない。

「あの…、ソンコ、さんは…」

「壺とチケット渡されて放りだされました」

「…ああ」

キョージュは何か考えている風である。どうせロクでもないことに思いをめぐらしているか、考えてるフリをしてるだけだろうが、しばし待ってみた。

「うーん、まあ、いちばん近いのは結婚式かな…」

「はあ？」

私の語尾のキツさにキョージュがビクツと反応する。

「あ、あのですね…、これが…、アメンで、旦那さんのほうです…」
キョージュは置いたばかりの壺を指して言う「それで…、こっちがアメント…」これは私の持ってきたほうの壺「こっちのほうが奥さんです」

「だから？」

「古いエジプトの神様なんですけどね。まあ、いろいろあって離れになってたのが、御対面という、そういうおめでたい話で」

「で？」

「…で？　と言うと、何でしょう？」

とぼけるな、そう言っつてキョージュの首を絞めた。思いっきり絞めた「私は、この壺たちに何の関係があるかって聞いてんのっ」

キョージュは首を捻られる寸前の鶏みたいに暴れたが、容赦なく絞めた。力の限り絞めた。

「…ま、まで、い、言う、ほんとに…、いう…」

「ほんとだな、嘘ついたら、こんどこそ、へし折るぞ」

キョージユは咽を抑えてしばらく、ぜえぜえしてたが、呼気を整え、こちらに向いた。

「いいですか…、アキ八さん、時間もあまりないので、一回しか言いませんから、よく聞いてくださいね」

時間がないってどういうこと？ 問うより先にキョージユがしゃべりだした。

「アメンとアメントは古代エジプトの神様です。アメンホテプ四世、有名なツタンカーメンのお父さんですけど、この人がアメンとアメントをくつつけてアトン神を作ってしまったんです。まあ、普通はそういうこと出来ないんですけど、アメンとアメントは仲良かったりとか、いろいろ他の要素もあって。とにかく二神がくつついて一神になってしまった。で、アメンホテプ四世、イクナートンでもなんでも良いんですけど、彼が生きてるうちはなんとか維持できてたんですけど、死んじゃったから、それで、また二神に戻っちゃったんですけど、ちよつと分離がうまくいなくて、なんというか、アメン、と、アメント、にならなくて、だから、いまはアメンみたいなものー、と、アメントみたいなものー、みたいな感じで、いろいろ問題も多いわけですから…」

「あー、もー、なんだかよくわからない」私は叫んだ「だから、けつきよく、何なのよ」

「だから、だからですね。別れ方が良くなかったから、もう一度ひと固まりにして、きちんと別けようという話になって、でもアメンみたいなものー、は、その後いろいろあって他所の一神教の神様みたいなこともやってたり、その信者の人がいたりでいろいろあってー、面倒なことが、だからー」

「別けるから面倒が起るんなら、そのまま一緒にしておけばいいじゃないですか」

「えー？」キョージユは目をまんまるにして驚きの声をあげた「だって、そんなことしたらアキ八さん困りませんか？」

「何で、そこで私が出てくるんですか？ 関係ないでしょ」

「だって、この二つ、アキ八さんの中で混ぜるんですよ。そのままじゃ困るでしょ？」

ば、ば、ば…、

「ばかなことを言うなー」私は怒鳴った。心底、怒鳴った。瘡のように体が震えた「神様二人とか中に入れて大丈夫なわけないだろうが」

「大丈夫ですよ。アキ八さんなら」

「なわけないだろうーが、お前が入れればいーだろうー、何で私に入れるんだー？」

「僕に入れたら、その瞬間に二人とも消えちゃいますよ」

「じゃあ、じゃあ」私はあせってまわりの連中をぐるりと指さした
「ほら、ここにもいるでしょ、こっちにしてよ」

「無理」

「俺、霊体だし」

「アキハさん、ガンバッテ」

ああああ、ああ、はめやがったなー、みんなしてー。

「とにかく、とにかく…」そうだ、落ち着け深呼吸だ「そんな話聞いてないし、心の準備もできてないから、今回、この二人はこのままにして、また出直しというのは？　ね？」

もちろん、この場をごまかしたら、トンスラする。こんな奴らとつきあってられるもんか。

「でも…」

「なによっ」

横で胡坐をかいてるシュンコウさんが、ボソッ、と言った「アキ、もう、入っちゃってるみたいだぞ」

なに？　あわてて足元を見降ろすと、左右の壺から漏れ出た光がふくらはぎのあたりにまとわりついている。

「ぎゃああああ」

「大丈夫、アキハさん、落ち着いて」

「バカ言わないで、キョージユ。なんとかしてよ」

「あー、でも、僕、よくわからないし」

「なんでもいいから、タスケテ、あー、そっちじゃない、もっと上、あー、左の方が…」

キョージユが私の足を手でぬぐうのだが、光は器用にキョージユの手を避けていく。むこうもキョージユが「見えない」ことを知ってるらしい。私が足をじたばたさせた程度では離れようともしない。

「やだー、もー、消しちゃってよー」

泣きそうな顔で懇願すると、光の動きが、ピタツ、と止まった。

え？

キョージユの顔をマジマジと見た。そうか、キョージユならできるんだ。

「ね、ね、お願い、キョージユ」おもいつきり、媚媚の声を出した
「これ消して、ね？ お願い」

「えー？」キョージユは困惑顔だ「そんなこと言われても…」

「薄情なヤツだなあ」背後からシュンコウさんの間延びした声が響く「アメントとは長旅で苦楽を共にした仲じゃないか、少し我慢してやれよ」

オマエは黙つとれ、そこで見てるだけのくせに。

「お願い、ほんとに、お願い。ね、なんでも言うこと聞いてあげるから、ね」

「え？」キョージユの顔色が変わった「ほんとに僕のお願い聞いてくれるんですか？」

「ばーか、誰が聞くかよ。でも、これはいけるかも。」

「うん、聞いてあげる、だから、ね」目を潤ませてキョージユを見つめる。すごく情けなくてヘドが出そうだけど、背に腹は代えられん、がんばれ私「うん、ほんとよ、なんでも聞いてあげるから、だから……」

さっきまで探るようにまわりついていた光が、意を決したように恐ろしい勢いで二つ同時に侵入してきた。両膝の裏を通して太股を駆け上がってくるのがわかる。

「……いや、やー」もう限界だ「聞く、なんでも聞くから、早くなんとかしろ」

「えー、じゃあ。でも……、どうしようかな、やっぱり……」

「ばかあ、何迷ってんだよ。さっさと消せよ。ばけなすううう。」

螺旋を描いて上ってきた二条の光が腰をぐるりと周り、胸の前で合わさって強烈な光を産む。

その光以外は何も見えなくなつた。

第八話 靈魂の籠る壺（10）

圧倒的な光の氾濫の中。

気がつくと、私の眼下に私が見える。

え？

何これ？

そのとき私は、『私自身』を真上から見ていた。『私』は、両手を差し抱き、ほのかな光をまといつつ、小さく頤を突き出して、恍惚の表情を浮かべていた。

わー、

何だこりゃ。

あわてた私は天井から降りて、キョージュの廻りをくるくるまわった。

キョージュの顔の前で手をふっても気づく気配すらない。

――ねー、キョージュう。

私は必死にキョージュに訴えた。

――私、こつちだよ、ここだよ、ここにいるんだよ。

「まあ、そんな慌てるなよ」シュンコウさんが言った。振り向くと、ぱいっと顔をそむける「すぐすむからさアキ、ちよつとの辛抱だつてば」

オノレはあゝ。

シュンコウさんに突進したら体をかわされた。勢いあまってサンタのほうに突っ込んだら、こっちもするりと逃げる。

――みんな、ひどいいい。

「えー、と」ひとり事情の呑み込めてない風のキョージユが、投げやりな口調で言う「なんか、もう始まっちゃってるみたいなんです…、ここまで来たら、最後までやっちゃったほうが早いんで、やっちゃいますね」

何だあ、その、もののついでみたいな言い草はああ。

キョージユのまわりで、ぶんぶん腕を振るつたが、気づきもしない。くそっ、なんて不便なヤツ。本当に見えてないから始末に悪い。あとの三人は文字通り見て見ぬふりだ。

「ほらよ」だるそうに、シュンコウさんは天叢雲剣をキョージユに投げた。キョージユは片手で無造作に受け取って鞘を払う。

キョージユは抜き身の神刀を大上段に振りかぶった。

天叢雲剣の切っ先から光条がほとばしる。

じりじりと下がる神刀の先はぴたりと私の額に照準を合わせて、分厚い光の束を私の顔めがけてぶちあてた。

- - くらあ。

私は思わず叫んだ。

- - そんなこととして、嫁に行けない顔になったらどうすんだああ。

キョージユに責任とってもらえ、などというシュンコウさんを睨みつける。

剣は上段から中断に落ち、『私』の中の光は、キョージユの振るう天叢雲剣に分断されて、徐々に二つの塊になっていく。

私は、ことの成行きを見守るばかりで、なすすべもない。

やがて、完全に分離した光の片方が、しゅるしゅると丸まって、一方の壺に収まった。

キョージユが下まで降り切った天叢雲剣のを切っ先を返したとき、

『私』の顔半分が、小さくニヤリと笑んだ。

キョージユの動きがぴたりと止まる。

「あのお」とぼけた口調はそのままだったが、キョージユの顔が見たこともないほど青白く照った。「そういうことは許可した覚えはないんですけどね」

『私』の顔半分は、あからさまに狼狽の色を浮かべた。

「出っけていってくれませんか？ アキハさんから」

『私』の半身が、がたがたと瘡のように震えだす。

「消しますよ、あなた」キョージユは重ねて言った。神刀の鍔が、かたり、と鳴る。

半身に凝っていた光が、跳ねるように壺に逃げ込んだのと同時に、『私の体』が猛烈な勢いで私を吸い込み始める。

「ほんとにもう」いつのまに剣を鞘に納めたキョージユがあきれ顔でつぶやいた「この人は僕のなんですから、ヘンなことしないでください」

- - 嫌あああ。

漆黒の中に魂ごと吸われつつ、私は叫んだ。あらんかぎりの声なき声で、叫んだ。

- - それだけは、絶対、嫌あああ。

第八話 靈魂の籠る壺（11）

目をあけたとき、眼前にあつたのは、心配そうにのぞきこむ銀縁眼鏡の男の顔。

意識するより先に手が動き、あらん限りの力で、右の正拳を鼻つ柱めがけて叩きこんだ。

なにかが潰れる鈍い音、鼻骨がめり込む感触を手の甲に感じながら、もんどりうって倒れこむキョージユの動きがスローモーションのように見えた。

ベッドからゆっくり上半身を起こす。

両手で顔を覆って床に突つ伏し、小刻みにヒクつくキョージユを見下ろして、ほんの少しだけ気持ちが悪く落ち着いた。

我に返ってあたりを見回すと、どうやらここはホテルの一室らしい。窓からの日差しをさえぎるレースのカーテン越しに、たゆとうナイルの岸部が見えた。

キョージユは床に這いつくばったまま、「ヒドイ、ヒドイ」とすすり泣いている。ウザいことこの上ない。

相手にするのも嫌なので放っておいたら、泣きやむ気配がまったくなくない。いいかげん腹も立ってきたので「とつとと鼻戻して立て」と怒鳴りつけた。

キョージュは、ちら、とのぞき見るようにこちらに視線を泳がせていたが、やがて「ちえ」と軽く舌打ちして立ち上がると、鼻を右手でつまんで形を整えた。ポケットからハンカチを出して口の周りの血糊をぬぐう。

キョージュの鼻を折るのはこれで二度目だし、この程度のことは、コイツにとって、文字通り痛くもかゆくもないらしいことはわかっている。もう、だまされるもんか。

「いきなりヒドイじゃないですかあ」キョージュがしょげた目つきで訴える「僕、なんにもしてないのに……」

したじやないかあ、あゝんなこととか、こゝんなこととかあ、と言いかけたのだが、ここで、ハタと気がついた。いったい私、何されたんだっけ？

じーっとキョージュの目を見る。眼鏡の奥の瞳には何も映ってはいない。不本意ながら、しばし、キョージュと見つめあってしまったのだが、うまく思い出せない。シュンコウさんとサンタとシモンと、一緒にナイルを遡ったあたりは覚えているのだが、その後が、霞がかかったように記憶が曖昧になる。

なんか、ものすごく嫌なことがあったような気がするのだけど。

口をあけて何か言おうとした瞬間に、おながが、ぐう、と鳴った。

一瞬、あつけにとられたキョージュだったが、すぐさま得心した顔になり、うんうん、と一人で勝手にうなづきだした。

「そうですね。ずっと寝てたんだから、おなか減りますよね。そうです。そうです…」

こちらから口をはさむ隙もあたえず、キョージユは、かしわ手を、ぽん、ぽん、とふたつ鳴らす。それを合図に部屋の扉が開いて、スチュワード達が料理の乗ったワゴンを数珠つなぎで押してきた。

「あ、あのね、別に…、そういうわけじゃ…、いや、別に…」

うやむやにされそうで、それは嫌だったから抗弁を試みたのだが、切り分けられたミートローフの香りに心地よく小鼻をくすぐられると、まあ、とりあえず食べてからでも、と思うようになって…

私の真向かいに椅子を動かして坐するキョージユ。私は体を少しずらしてベッドの縁に腰かけるように座った。少し変な感じだし、お行儀が良いとはお世辞にもいえないが、このほうが楽でいい。給仕が巨大なスूपポットから滑らかな淡黄色のスूपを注ぐ。スプーンで一匙、あたたくて濃厚なポタージユが咽喉をとおして胃にしみわたると、だんだん気持ちほぐれてきた。

一品口に入ると、思いのほか空腹だったのがはつきりわかって、クラッシュチーズの風味が効いたサラダ、貝とフォアグラの前菜、煮こごりをふんだんに盛ったパテ、と勧められるままにコースを平らげていくことになってしまった。

鴨のローストの一切れを吞み込んでようやくひとごちついた時、ちらとキョージユを見やると、ブランドーグラスをかたむけながら、意味もなくニコニコしている。

「少し食べたら？」

なんだか私だけ食べてると、意地汚いみたいで嫌だったの、キョージユにも勧めてみた。

「あ、あ、はあ…」

キョージユは私に言われてやっと気付いたのかクラッカーの上にキャビアをよそってもらい、端っこをかじりだした「おいしいですね、これ」

見ていてあんまりおいしそうな顔には見えない、半分ほどかじって、またブランデーに戻してしまう。

「また、お酒ばかりで…、きちんと食べないと体に悪いですよ」

「あ、はあ…」

「ちゃんと聞いている？」

「ん、んぐ…、ちゃんと、聞いてますとも…」少し語尾を上げて聞いたしたら、キョージユは慌てて残りをいっきに呑み込んだ。

まあ、クラッカー一枚くらい食べたところで、なんの足しにもならないと思うけど。

それにしてもキョージユ、どこに行っても外食だとほとんど食べない。家でなら野菜以外ならそこそこ食べるのに。

こいつ、どうやって体力維持してるんだろう？ おなか減らないのかな？

しばし手をとめてキョージユを見つめていると、何をかん違いしたのか私に話しかけてきた。

「エジプトももう少しゆつくりまわれば良いところなんですが、今回はずいぶんあわただしかったですからねえ」

「いや、そんなでもないですよ」オマエが出てくるまではそこそこ良い旅だったよ、少なくとも前半は。後半はなんだか、よくわからなかったけど「アジア以外に出たのは初めてだったから、わりと楽しかったし…」

え？ とキョージユが意外そうな顔をする「アキハさん、ヨーロッパは？ 行ったことは…、ない？」

「行ったことないですよ」あたりまえじゃないか、どこにそんな金があるんだよ。

「ふーん」と、めずらしくキョージユは何か考えている風である「じゃあ、帰りに少し寄ってみますか、すぐそばだし」

え？

「い、いいの？」たぶん、少し声が震えていたと思う。

「ええ、アキハさんさえ、良ければ」キョージユは何のためらいもなく、さらりと言った「パリでも、ミラノでも、ニースでも、ああ、バルセロナとかもいいかな」

「行こう」私はベッドから飛び降りて、キョージユの前に突き進ん

だ。キョージユの両腕をわしづかみにして前後にゆさぶる「そこ行こう、全部行こう」

「ぜ、ぜんぶ…、です、か？」キョージユは怯んで、少し引き気味に私を見つめる。

しまった、焦りすぎたかも。

「い、いや、その…」私はひかえめに微笑んでみせた。なんか笑いがひきつつているのが自分でもわかる「ぜんぶ、でなくても、いいけど…、そのっ」

「あっ、そ、そう…」

「…そう、パリ、とか？」

「…パリ、とか？」

「…そう、パリ、とか…」

「…はは」

「…は、はは」

キョージユと二人、力なく笑った。二人ともに、ひきつった顔で。間が持たないので、あらためて席につく。ここでやっとパジャマのままだったのに気がついた。

もう、なんか料理のほうはどうでも良くなったので、デザートの

プディングをスプーンでひとすくい口にはこんだ。バニラの香りが口いっぱいにひろがる。

パリかぁ、

自然と口許がゆるむ。キョージユも私につられたのかニマニマしだした「パリ、いいですよねぇ。楽しみですねえ」

あれ？ こいつも来るのか？

一瞬、顔に出そうになったが、プディングをほおばってごまかした。

ちらちらと上目づかいにキョージユの顔をのぞき見る。さすがに私だけ、ってわけには、いかないよなあ。歩くお財布とでも思っておけばいいのかな。そもそも、そばにいるだけならほとんど害はないし、それになんて言ったって…

パリだし。

私の視線に気づいたらしいキョージユが微笑み返してきたので、こっちも愛想笑いを返した。

ま、よくわからないけど、なんかかなるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7660i/>

術師たち

2011年10月6日06時06分発行